

アル・ハマザーニー著『マカーマート』(2)

訳注 堀内 勝*

- 第16話 マクフーフィッヤ(盲人)のマカーマ 盲人に成り済まして広場で訴える
第17話 ブハーラのマカーマ 賢い子を出汁^{だし}にして
第18話 カズウィーンのマカーマ 隠れムスリム、身一つで逃れて越境
第19話 サーサーンのマカーマ 物乞い集団に乞われて
第20話 猿のマカーマ 猿回しに身を窺^{やつ}してまでも
第21話 モスルのマカーマ 死人を生き返らせるからと、洪水の流路を変えるからと嘯^{うそぶ}いて
第22話 マディーラのマカーマ うんざりした講釈、食わず終いの挙句の果ての不運
第23話 護符(hirz)のマカーマ 護符にすがってカスピ海の暴風を乗り切る
第24話 病院のマカーマ 狂人に異端思想を咎められて
第25話 飢饉のマカーマ 飢えの中、食べた積もりにさせられて
第26話 訓戒のマカーマ 何たる俗世の執着、来世の忘却、智者への不遜
第27話 アル・アスワドのマカーマ 遊牧民の豪族キナーン族の名士のテントに逃れて
第28話 イラクのマカーマ 謎あり訳あり技ありの16の詩芸
第29話 ハムダーンのマカーマ アラブ馬讃歌 馬の観方54相
第30話 ルサーファのマカーマ 73にわたる詐欺・物盗りの手口
第31話 紡錘^{つむ}(mighzal)のマカーマ 例えて妙の紡錘と櫛
第32話 シーラーズのマカーマ 敬慕していたかつての道連れの成れの果て
第33話 フルワーンのマカーマ アラブ版浮世風呂・浮き世床 さんざんな被害
第34話 ナヒーダ(フレッシュバター)のマカーマ 上等なバターとパン、焼き肉で持て成しを受けると思いきや
第35話 イブリース(悪魔)のマカーマ 詩人に憑くジンとは、創作なのか剽窃なのか

* 中部大学国際関係学部 教授

** アラビア語の転写は原則として『岩波イスラーム辞典』にならうが、サジュウや詩の転写に関しては、語末母音、ターマルブータ、定冠詞アルなどを韻律やリエゾンを明確にする形で転写した。

第16話 マクフーフィッヤ(盲人)のマカーマ 盲人に成り済まして広場で訴える

(原文 M. ‘Abduh 編 pp. 78–81)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、以下のような話しをした：私はアフワーズ州¹⁾のある地点を通過中であった。その頃の旅の目的は二つあって、一つは逃れ行く(=散逸し、消滅してしまう)語彙を狩り集めようと、もう一つは秀逸な語法を(見聞きしたならそれを)身につけようとするのであった。道中はある町の広い空き地に私を導いた。と、そこには人盛りができており、一人の男を囲んで、皆彼の声に聞き入っていた。その人物は地面を杖で一定の律拍で叩いていた。私は読み取った、あの律拍には音韻が伴っているはずだと。そこを遠ざかるわけにはいかなかった、上手くしたら耳に快きもの(=歌、民謡)を得ることができるであろうし、語法上何か有益なことを聞くことが出来るのでは、と思ったからである。そして見物人の中に入って留まると、こちらの方に肩をぶっつけ、あちらの方を押し分けて中に入り、漸くその人物の前に立つことが出来た。そして視線を彼の姿のほうに向けると、当人はカランバー虫²⁾のように(老齢のためか)小さく縮こまっており、視力が妨げられた盲人で、粗末な羊毛の外衣を身につけ、糸巻きのように体を回転させていた。背丈より長いだぶだぶのブルヌス外套³⁾をまとっていた。杖に縋っていたのだが、その杖には小鈴が付いていた。彼はその杖で地面を叩いては快い律拍を刻み、声を震わせ、哀調を帯びた、胸から搾り出すような声で詠っていた⁴⁾；

おお皆様方 この私めは負いし借金 余りに重くわが背骨を折り曲げんばかり

yā qawmu qad athqala daynī zahri

我が妻の婚資⁵⁾の(返済の)求めまた 責めに攻め追い討ちをかける

wa-ṭālabat-nī ṭallātī bi-l-mahri

元を質せば我裕福にして 満ち足りて安住せし身なり

aṣḥaḥtu min ba’di ghinan wa-wafri

されど今は荒地が我が住まい 貧窮にあえぐ哀れ人の仲間となりぬ

sākina qafrin wa-ḥalīfa faqri

おお皆様方 あなたがたの中に 素性正しく奇特な方居りませぬか

yā qawmu hal bayna-kum min ḥurri

俗世の浮き沈み激しき 荒波よりこの我を救い出すお方は

yu’ṭnu-nī ‘alā ṣurūfi d-dahri

おお皆様方 困窮の続く余り 我が忍耐は最早限界を超えてあり

yā qawmu qad ‘iyla li-faqrī ṣabrī

1) アフワーズ州 al-ahwāz: イラン西部、イラクのバスラに隣接する州及び州都。アッバース朝期この町を中心にシュスタルを含めた北部を管轄する州の州都として機能した。第9話注22、第11話注1参照。

2) カランバー虫 qaranbā: khanfasā’ (カプトムシ)の一種で、小さくて縮こまっており、足が長いのが特徴という。

3) ブルヌス外套 burnus: thawb (外套)の一種で、大きなマント状のもの。但し袖は無く、頭巾が付くのが特徴。イスラム初期に敬虔な者、修道者が着用するものであった。マグリブ地方では今でも散見される。ここでは本人の丈にあっていないので、与えられた物が借り物かを示している。

4) ここまでの冒頭段落のサジュウ(句末・文末押韻技法)の単語は下線順に: ajtāz / ahwāz, aṣḥu-hā / astazidu-hā, mujtami’ūna / yastami’ūna, ḥazzan / lafzan, maktūfin / sūfin / (xudhrūfi), ghanijin / hazijin / shajjin / ḥarijin。

5) 婚資 mahri: 結婚に際して新郎側が払うもの。通常は半額が結婚時に支払われ、後の半分は離婚時に支払われる。ここでは、家族を養えない夫に対して妻が離婚を迫り、残りの婚資を要求しているものと思われる。

さらに身を覆う衣の裾擦り切れて 既に己の体さえ隠し切れない始末
 wa-nqashafat ‘annī dhuyūlu s-sitri
 時の悪戯その禍々しき手で 寸寸に切り裂き散らし果てぬ
 wa-faḍḍa dhā d-dahru bi-aydī l-batri
 我が保持ちおりし金銀 あらゆる財産を根こそぎにして
 mā kāna lī min fiḍḍatin wa-tibri
 今や避難して逃れ行くは 一坪も無き⁶⁾ 狭いあばら家
 āwā ilā baytin ka-qaydi shibri
 我が将来の全く先が見えず 生きてゆく焚き釜ますます先細る
 khāmila qadrin wa-ṣaghīra qidri
 アッラーが定める行く末 我がことを善処されるならば
 law khatama llāhu bi-khayri amrī
 阿鼻叫喚の生き地獄より 楽しき安寧のあの世に送り給え
 a‘qaba-nī ‘an ‘usrin bi-yusri
 若き方々 あなたがたの間には居られませぬか 高貴な方で心寛く物惜しみせぬ方が
 hal min fatan fī-kum karīmi n-najri
 我を助けることにより神の加護 大なる褒賞来世にあるべきに
 muḥtasibin fiyya ‘aẓīmi l-ajri
 例えその施しの行為 本人の目からは 感謝する程のものでないとせも
 in lam yakun mughtaniman li-sh-shukri

(ラジャズ rajaz 調 rā’iyya r 脚韻詩)

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：ワッラーヒ（アッラーに誓って申し上げるが）、私の心は彼への同情で一杯になった、私の目は彼への憐憫で涙が溢れ出た。そこで私は所持していたディーナール金貨を手渡した。（この金貨を目にするや）彼は時をおかずこう詠んで返礼をしてきた⁷⁾：

おお何と美しきものかな 山吹色弥が上にも⁸⁾ たち優る
 yā ḥusna-hā fāqi‘atun ṣafrā‘u
 ほっそりとして刻印され 円形に製せられたものよ！
 mamshūqatun manqūshatun qawrā‘u
 その純なものの故煌めき増し 水滴の滴り落ちるほどぞ⁹⁾
 yakādu an yaqtura min-ha l-mā‘u
 然り その水滴実らせるは 高貴な者の配慮映えあらばこそ
 qad athmarat-hā himmatun ‘alyā‘u

- 6) ka-qaydi shibri：「シブルほどの大きさの」。シブルとは身体尺の一つで、「親指と小指を広げた長さ・幅」。わが国の「咫・あた」に当る（「八咫＝八咫の鳥」のごとく）。西欧のspanは「親指と中指を広げた長さ・幅」。
- 7) ここまでは僅か三つの文章段落でのサジュウにかんする技法導入としては厳密には存在しないが、順ずるものとして下線順に：qalbī / ‘aynī / ma‘īが挙げられよう。
- 8) 弥が上にも fāqi‘atun；fāqi’の女性形。ファーキウはaṣfar（黄色の）の色の濃さを示す強調形、「まっ黄色」。同様な色彩強調形式は15話注5を参照。
- 9) この辺りで詠われている「金貨」の美点・利点については、おそらくアル・ハマザーニーのマカーマを読み込んだ後継者アル・ハリリーが「金貨」の持つ反面、いわば醜点・害点のほうも含めて「3話 金銭の美麗」の中で素晴らしい分析を披露している。訳者解説参照。

かくなる気持ち持つ御仁とは 心広く物惜しみなどせぬ方

nafsu fātan yamliku-hu s-sakhā'u

心動かされれば意のままに 惜しみなく振る舞い散財す

yaṣrifu-hu fī-hi kamā yashā'u

おお我が詩で名指されし者よ 賛意表するに十分値する者よ

yā dhā lladhī ya'nī-hi dha th-thanā'u

汝が資質いかに褒めそやそうにも 褒め足りぬこと無からまし

mā yataqaṣṣā qadra-ka l-iṭrā'u

されば願わん汝が許に 神の褒賞の多くあらんことを！

amḍi ila llāhi la-ka l-jazā'u

（ラジャズ rajaz 調 hamziyya hamza=' 脚韻詩）

（こう詠じてから普通の口調に戻って布施をさらに求めた）「（金貨一枚では片割れ）似た物があれば対として結わえるほうが、また姉があればその妹と仲良くさせる（＝金貨もう一枚を一緒にすれば）が、神の慈悲があらうというものではありませんか！」。

（広場に取り巻いて聞き入っていた）人々からは、あらん限りの差し出せるものを、この人物に与えたのであった。（有り難く受け取ってから）やがて彼はこの広場を後にした。私は彼の後に付いて行くことにした、と言うのも私は感付いていたのだ、差し出された物がディーナール金貨だと彼が気付いたその速さときたら、（視力で解かったのであり）盲人を装っているのだと。そして隠遁所が我々を囲ったとき（＝他人の目がなく我々二人きりになったとき）、私は右手を彼の左手の腕に伸ばして、声を掛けた、「ワッラーヒ（誓って申し上げます）、あなたのまやかしを曝け出してくれませんか、さもないとがあなたの覆いを取り払って見せることになりますよ」。すると何と彼はアーモンドの双子（＝両目）を開いたではないか！私は彼の顔からリサーム（覆面）を取り去った。そこに顕わとなったのはワッラーヒ（何と驚くことに）、我らが師アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフであったのだ。「あなたはアブ・ル・ファトフ師ではありませんか！」との私の声に、彼は「いいえ」と応えて、次のように詠じながら去って行った¹⁰⁾：

さ^{あら}非ずして我はアブーカラムーン¹¹⁾

anā abū qalamūnin

どんな色だとして変幻自在なり

fī kullī lawnin akūnu

稼ぎ得ること可能なら世が世なれば

ikhṭar minā l-kasbī dūnan

如何に卑しくとも選び取るべし

fa-inna dahra-ka dūnu

時の悪運に^{あらが}抗うが当然ぞ 例え愚かしき手段用いようとも

zajji z-zamāna bi-ḥumqin

10) ここまでのサジュウの単語は僅か一箇所である。下線順に：sirra-ka / sitra-ka。

11) アブーカラムーン Abū Qalamūn；ここでは環境により体色を自由に変える「カメレオン」とされる。他に太陽に当たると羽毛が様々な色（例えば瑠璃色）に変化して見える「鳥」、また縦糸横糸に様々な色糸を用いて編みこんだ「ビザンツ風外着 thawb rūmī」などの説がある。これらから転じて状況によって変わる人間の「気紛れ、変りやすい人、気分屋」などの意味にも用いられた。

世知^{せち}辛^{がら}き世の中例えるなら 乳強^{ねだ}請る児に授乳拒む母¹²⁾の如

inna z-zamāna zabūnu

決して^{たふら}誑かされることなかれ 頭脳^{あたま}働かせて対処すべし

lā tukdhabanna bi-‘aqlin

今の時^{とき}世理性あるというは ただに狂気あるを言う故なれば

ma l-‘aqlu illa l-junūnu

(ムジュタッス mujtathth 調 nūniyya n 脚韻詩)

第16話 マクフーフイッヤ(盲人)のマカーマ 盲人に成り済まして広場で訴える 完

第16話 訳者解説

著者アル・ハマザーニーにしては珍しく、短篇の本マカーマではありながら、長めの詩を3篇編んで作品を締めている。いずれも主人公アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフの作として詠じさせている。1・2篇は本舞台であり、3篇目は裏舞台での設定となっている。1篇は困苦の訴えどころであり、9詩行を捻り出している。2篇目は貰った金貨と布施者を称える5詩行であり、これにより聞き入った人々から金品を受けている。3篇目は4詩行であり、正体がばれ、その正当化に費やされる。詩行の挿入に関してはマカーマ文学の形式として順当な配置である。しかも3篇目の詩の入り方は斬新である、[彼は「いいえ」と応えて、次のように詠じながら去って行った: さ非ずして我はアブーカラムーン……。大分訳者は補筆をしている。直訳は[彼は言った「いいえ」と]。以下唐突に[さ非ずして我はアブーカラムーン……。]と詩行に入って、何の説明も無くこの一話を終結させてしまっている。

とはいえ「お涙頂戴」の主題としては、1篇目の詩の内容に苦情を呈しておこう、またそれは本話全体の問題点でもあるのだが。本話の表題もそうであるように「盲人」がもう少し題材とされ、中心モチーフとされてもよかったのではないかな。主人公は盲人であり、擦り切れ衣に身を窺して登場しているのに、訴えどころの詩行の中には盲人故の困苦を描いた内容のものが一詩行も無い。本話全体を通していても盲人に関しての記述は、語り手と二人きりになって、「彼はアーモンドの双子(=両目)を開いた」の部分のみである。このことは筋の集中性への配慮の欠けたことと言わざるを得ない。広場の現場に行くまでの俄か^{にわ}盲の僅かな体験だとして詩中に詠えないことはあるまい。金貨を叙した「おお何と美しきものかな 山吹色^{いや}弥が上にもたち優る……」、盲人としては描き得ないものを詠じたことも、金貨を受け取った仕草^{いや}とあいまって、主人公が偽盲人と見破られた理由の中に数えられよう。

本マカーマの詩行の多さは、恐らくはそれに知的労力を使い果たしたのであろうか、他の要素を台無しにしてしまっている。マカーマ文学の形式として必須のサジュウ(押韻散文)への配慮の欠けていることである。本話の中のサジュウのすべては注4、7、10で記してある。後半に行くほどサジュウが見られなくなり、マカーマ文学の体をなしているのか疑問詞が打たれるところである。

なお貰った金貨を謳い上げるモチーフは、アル・ハリリーのマカーマにも生かされている。第

12) 乳強^{ねだ}請る児に授乳拒む母 zabūn; この行為主体は<雌駱駝 nāqa>であり、「乳が欲しく近寄る児駱駝を足で蹴って近寄せない母駱駝」のこと。普通は離乳期が来た、または近付いた児駱駝に見せる行為である。離乳期が来ころは、母駱駝は多くの場合次の胎児を宿しており、その成長があるため二重苦となっている。zabūnの動詞zabanaとは「母駱駝が自分の子の乳を飲むのを蹴って妨げる」である。

3話「ディナール金貨の美醜のマカーマ」であって、そこでは語り手の要求に従って、金貨の長所・美点を謳い上げて一枚、その短所・醜点を叙して一枚を主人公が得る設定となっている。長く詠われるものであるがその一部を紹介しよう：「おお何と高貴なるかな黄金色をしたものよ、その呈する色には 何の不純もあるまじ。地域の境なく何処とも旅ゆく。その旅の行程は 計り知れぬ程遠く。その名を聞かば 誰も心を動かされ、名声の届かぬ 所とてなし。その隊列が整えられ 勢揃いする段となれば、そはまさに証拠なる 富裕なる者との。その隊の進むところ何処なりとも 労する者の報酬と結びつくは必定。 きらめき輝くかんばせを目にすれば 世上の人間なれば好まぬはなし。 その鉱石はあたかも世の人の心を魅惑して後 溶かし去るが如し。そを己が財布に収めし者誰であれ、その威力に助けられ大胆になるが常……」、「また煩惱持ちし者の如何程多くが その攻撃にあいて逃走せられたことか。満月の顔持ちし者の如何程多くが その巨大な額で敵対者を貶めたことか。そこに恨み持ちし者の如何程多くが その憎悪の炎を燄の赤熱と化したことか。 されどそを恨みし者も そが秘密に語りかくれば瞬時にして己の怒り 治まり柔和にならん。そに取り憑かれし亡者の 如何程多くが己が家族を妄執の犠牲とせしめたことか。そが手渡さるれば なくなる者の救いとなり 満面に浮かぶぞ 喜色そのものなる。我らが創造主の真実にかけて そが創造物の一つなるは幸いなるかな。その絶大なる力 もし神の天慮なかりせば 何ものにも増して人の宿命を決める故。……」拙訳第1巻129-135

写本の異同についてであるが、本話は Fatih 版では第13話に、Sofya 版では同じ第16話に、Paris 版では第5話にそれぞれ配せられている。

第17話 ブハー¹⁾のマカーマ 賢い子を出汁^{だし}にして

(原文 M. 'Abduh 編 pp. 82-85)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、以下のような話をした：ある日のことブハーラのジャーミウ（大モスク）に降り立ったことがあった。それまで組んでいた隊商仲間は友情厚くその繋がり（＝スバルの七つ星）のごとくであった。折しもジャーミウは祝祭で人々でごった返していた。と、我々の前に上も下も襦袢着を纏った男が現れたのだ。彼は（空の）巾着を肩越しに投げ上げており、後ろには裸同然の幼児を連れていた。その子ときたらあまりに体力が蝕^{むしば}まれており、底冷えの寒さに襲われたら一溜まりもなく持って逝^ゆかれてしまう程であった。着ている物も己の素肌がブルダ（＝外套）と言った態で、ぶるぶると震えることで済ますことが己の寒さの防衛策であった²⁾。

その男は立ち止まり、声を張り上げた、「誰もこの子をまともには直視はできないでしょう、アッラーが御慈悲を垂れ給う方々を除いては！誰もこの子の惨状^{あわれみ}に同情はできないでしょう、直接あのような目に会った体験を持つ者でなければ！おお恵まれた物持ちの方々よ、由緒正しき祖先持ち、ティラーズ（刺しゅう）された立派な外套を着こなされ、小高き邸に、聳えるお城に住まわれる方々よ！あなた方だとて不慮の出来事に会わないで済むわけではありません、跡継ぎが欠ける事態もありえましょう。それ故にこそ出来る時には先を争うように善行をなすべきではありませんか、時運が向いているならばそれなりのことを社会に奉仕すべきではありませんか。わし達とて元とは言え、ワッラーヒ（アッラーに誓って）、シクバージュ³⁾の馳走を食べては、ヒムラージュ⁴⁾のラクダを乗り回し、ディーバージュ⁵⁾の絹衣で身を飾っていたものです。夜ともなれば厚く詰まれた敷物で横になれたものでした⁶⁾。

しかし我々がそれと気付く前に、時運がその裏切りの突風を吹きつけ、その（守るべき）鎧をひっくり返して背を向けたのです。乗るヒムラージュは動き遅い駄馬に成り変ってしまい、着るディーバージュは襦袢羊毛に取って代わってしまったのです。ことほど左様で、ほれこの通り皆さんがご覧になっている無様でお粗末な服装でなっていました。こうして私たちは運に見放され不妊^{うぶ}のラクダ⁷⁾の乳房を搾乳る破目に、貧しさの余り素性も知れないラクダの背に乗ることになってしま

- 1) ブハーラ bukhāra：中央アジア、現ウズベキスタンの主要都市。歴史は古く紀元前五世紀には要塞が存在していた。イスラム化は709年ホラーサーン総督クタイバによってなされ、アッバース朝期にはマー・ワラーア・ンナフル（河向う領地＝アムダリア河以遠の地）の州都とされ、更にサーマーン朝（873-999）の首都として繁栄した。以降ハディース学者ブハーリーを出すなど学都としても機能した。
- 2) ここまでのサジュウ（押韻）語は下線順に：siwānan / 'uryānan, us'u-hu / yada'u-hu, burdat / ri'dat。
- 3) シクバージュ sikbāj；肉を酢で煮込んだ肉料理。ペルシャ起源の高級料理。アル・ハリール『マカーマート』第19話注36、及び第38話訳者解説を参照。
- 4) ヒムラージュ himlāj；乗用ラクダの中でも走力がずば抜けて優れたもの。すごい速度を出せるのにも係わらず、乗り心地もまた素晴らしい。この派生形にハムラージュ hamlāj があり、ラクダの歩態別特称12種のうち、ワフド wakhd「全速力駆け足＝襲歩」に次ぐ速さの歩態の名称となっている。拙稿「遊牧民の思考法——ラクダの名称とその分類」『月刊シルクロード』第5巻4号（1997年5月）32-38。を参照。
- 5) ディーバージュ dībāj；ペルシャから伝わった絹製衣類。dībay とか dībāh とかの原語が語尾変化してアラビア語になったもの。
- 6) ここまでのサジュウ（押韻）語は下線順に：taffāla-hu / mithla-hu, mafrūzati / mafrūzati, munajjadati / mushayyadati, hādithan / wārithan, amkana / ahsana, sikbāja / himlāja / dībāja, hashāyā / 'ashāyā。
- 7) 不妊のラクダ 'aqīm；妊娠しないラクダ、不妊ラクダ、従って乳も出ない。同義語に ābiya, hā'il がある。人間の女性にも石女^{うづつめ}の意味で適用される。ラクダの場合、乗用特性が優れたナーク（雌ラクダ）は妊娠可能であっても、わざわざ「乳枯れラクダ」にして、専用に用途立てることも慣行化した。なおアラブは「孕みラクダの時期別名称」を持っていた。その詳細は拙稿「遊牧民の思考法」『月刊シルクロード』第5巻4号（1979年4月）32-38を参照。

いました。他人を見るにもただただ^{みなしこ}孤児の目つきとなり、布施求め差出す手つきも借金取りのそれに代わってしまったのです。どなたか奇々な方はおられませぬか、このどん底の真っ暗闇から救い出してくれるお方は、この不幸攻めの切っ先を鈍らにしてください方は！」⁸⁾。

それからこの人物は座り込み、肘に寄りかかって、子供のほうに声をかけた、「さあ、今度はお前が話す番だよ」と。すると子供は、「私に何が話せましょう？あなたが話したことは、髪の毛に向ければ（^{もつ}纏れ毛を）^す梳き分けたことになりますし、岩に向かえばそれを切り砕いたことになります。またどんな人でも、たとえ半煮え（にしか理解ができない）人だって、あなたが話したことは、心が^{うれ}熟煮えになった（=解された）はずです。あなた方が耳にしたことは、ああお集まりの皆様、今日に至るまで聞いたことが無いのではありませんか？さあそれならばお集まりのどなた様も、施しの手を差し出して頂けないでしょうか、将来のことも、また私の場合のように、（あなた様方の）お子さんのためにも思いを馳せながら！私のために思って下さい、そうすれば私もあなた方のために配慮を致しましょう⁹⁾。私にお恵みくださいませ、あなた方に感謝を捧げます！」¹⁰⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：その当時私は独り身であって持ち合わせて（私から子供への施しの）慰みとなるのは、ただ（鎖付きの）指輪だけであった。それだから、（その指輪を外し）この子の小指に^は嵌めてあげたのだ。この子は嵌めてもらうと、小指の指輪を（見つめて）詠じ始めたのである。叙するに：

おおそれ自体が丸きものよ 何と美しきものかな

wa-mumantaqin min nafsi-hi

ふたご座¹¹⁾ がイメージされる 頸飾りがそれに付随して

bi-qilādati l-jawzā'i ḥusnā

指輪の両端の形状表わすは 離されていた恋人同士か

ka-mutayyamin laqiya l-ḥabība

再会して抱き合う 激しくもまた切なくも¹²⁾

fā-damma-hu shaghafān wa-ḥuznā

愛情捧ぐ相手をば 自ら属す氏族からで無く

muta'allifin min ghayri usrati-hi

当時の時流に逆らいて 心許せる者を^も条件に選ぶ

'ala l-ayyāmi khidnā

何物にも増して貴重な物 その価値の何と高さものか

'ilqun saniyyun qadru-hu

されどもっと高く^た称揚えらるべきは それを^あ贈与えし高貴なる御仁

lākinna man ahdā-hu asnā

8) ここまでのサジュウ（押韻）語は下線順に：ghadri-hi / zahri-hi, qaṭūfan / ṣūfan, 'aqīmin / bahīmin, yaṭīmi / gharīmi, bu'ūsi / nuḥūsi

9) 私のために思って下さい、そうすれば私もあなた方のために配慮を致しましょう udhkurū-nī adhkur-kum：『クルアーン』第2章第152節からの、有名な聖句。私＝アッラー、あなた方＝信者たち。

10) ここまでのサジュウ（押韻）語は下線順に：ḥalaqa-hu / falaqa-hu, qawm / yawm, yada-hu / walada-hu

11) ふたご座 al-jawzā'：ふたご座の長く連なる12（または13）個の星のつながりは、アラブでは古来「頸飾り qilāda」に例えられた。また別の有力説はふたご座の原語 jawzā' は jawz の女性形で、「砂漠の真ただ中」を意味し、転じて「天空の真ただ中＝真ん中」を表わしており、夜空の中心に位置していることの認識から由来していると説く。もっと雄大な説はオリオン座と組んで、一つの星座群 al-jabbār（巨人）座の一部となす説がある。

12) この辺りの恋愛描写は、同性愛の意味合いが濃い。

我誓いて申し上げる 寛大にして高貴なるその言葉を

aqsamtu law kāna l-warā

地で行く人ありとせば まことあなたこそその体现者！

fi l-majdi lafẓan kunta ma'nā

(カーミル kāmīl 調 nūniyya n 脚韻詩)

イーサー・イブン・ヒシャームは語りをさらに続けた：(見事な詩をもやってのけたこの子に対して)我々は当座持ち合わせのものを(父親に)褒美として与えたものだった。彼は我々に謝意の言葉を述べつつ、背を向けて去って行った。私は彼の後を追った。誰もいないところに来ると彼は顔を露わにした。なんと彼は、我らが長老アレクサンドリアのアブ・ル・ファトフ師ではないか！そしてこの小鹿は彼の実子であったのだ。私は思わず詠じた；

おおアブ・ル・ファトフ師よ年齢重ねましたな そしてあの子がこれ程成長しようとは

aba l-faṭḥi shibṭa wa-shabba l-ghulāmu

されど如何なされました知人への挨拶 それに会話交えようとなさらぬは？

fa-aina s-salāmu wa-ayna l-kalāmu

すると長老はすぐに応じた；

我は見知らぬ人に成り済ます 会う場所が往来である限り

gharīban idhā jama'at-na ṭ-ṭarīqu

されど知己として^{おう}対応しよう 閉じられたテントの中なれば

alīfan idhā nazzamat-na l-khayāmu

(上の二詩行いずれも詩型 ムタカーリブ mutaḳārib 調 mīmiyyah m 脚韻詩)

私は感じ取った、師は私との会話を今は避けたいのだと。そこで私のほうから足を止め、別の方角に去ることにした¹³⁾。

第 17 話 ブハーラのマカーマ 賢い子を出汁^{だし}にして 完

17 話 ブハーラのマカーマ解説

今回のマカーマは余りに短いために、一話の量として感応する十分な状況を演出しているかは疑問が残る。しかしサジュウ文体は十分ではないものの、マカーマの定型は踏んでいる。語り手が話の筋を進め、主人公が稼ぎを行う。また稼ぎの場と正体暴露の場も別設定されている。前者はモスクの中であり、後者は人目のない空き地である。久しぶりに再会したはずにも拘らず、別れはあっさりとしているのは、マカーマにはよく見られる設定ではある。本話ではその理由を韻文で説明もしているところは読者には内容理解として親切といえよう。

今回のマカーマは物乞い(kudyah)のジャンルにはいるものであろうが、新趣向は、子連れであって、しかもそれが主人公の才気あふれる実の子を伴っての設定で、子供を出汁に使っている点である。父親が裸同然な、哀れな姿をさせ、語りで聴衆の哀れさを誘ったところで、その子が親に負けない教養を披露させるところにあらう。親が身の上を語り、子が無心を訴える。元は由緒あり優雅

13) 注 10 以降、ここまでのサジュウ(押韻)語の技法は見られない。散文よりも韻文の方が長いこと、散文も数行で終わって、その配慮の余地がなかったことが考えられる。

に暮らしていた子であるだけに、教養あるところを披露している。子はさらに詩才を発揮する。布施で得た価値高い指輪を、そして最後には指輪の持ち主をもっと価値高いと、謳い上げる。主人公の資質が、そのまま子に乗り移ったような見事な捌きで、並み居る聴衆を唸らせる。与えられた物を即座に対応して謳い上げる。この辺りはファダーイル論 (faḍā'il 長所・美点、おらが話) であり、マハースィン・マサーウィー (maḥāsin・masāwī 長所・短所、美醜話) で言えば、マハースィンに当たるものとなろう。

子どもを仕掛けの＜相棒＞と見立てる設定は、後輩のアル・ハリリー^{いそ}の知的戦略の息のかかったいくつかの作品が思い当たる。このモチーフの最も近いものは、マカーマ第41話「ティニースのマカーマ」であり、「モスクで親が説教し、息子が布施を集める」の副題がそれを物語ろう；筋建ては、序で人生の前半、若かりし頃を振り返り、白髪が出る中年に至り反省して過ごす日々を送ることが叙される。そして本舞台がエジプトはティニースの語り手が入ったモスクで展開される。そこでは主人公アブー・ザイドが仕掛けを行い、彼の息子がそれを引き取って成果を得るストーリーが展開される。ここでは主人公が説教師として人を集めている。浮き世に流され金儲けに翻弄されるを警醒し、来世を意識しそれに備えるよう、善行に勤しみ、布施を為して来世への蓄財こそすべきことを訴える。訴えどころで韻文に換え、貧者への救済を説く。この説教が終わるや否や、待ち構えていた彼の息子が裸同然の露わな、同情を誘う哀れな身なりを見せて、立ち上がって、聴衆にその実行を迫る。親子の掛け合いは聴衆の布施する気持ちを高揚させ、見事その成果を得る。その辺りの叙述はいかにも乾燥した世界の言い回しである。「掘った井戸は水が溢れ、その枯れた大地は緑草で覆われた」など。他にも第34話「ザビードのマカーマ」であり、副題を「奴隷を買えども不法とされて」と付しておいたが、稼ぎの仕掛け人、主役アブー・ザイドは覆面をして顔を隠している。そして脇役として息子を登場させている。本話同様、息子は語り手が知っていたころははまだ子供であったが、今や若者に成長している。しかもヨセフにまごうばかりの美男子で、聡明さ・狡猾さを兼ね備えた人物として描かれる。この息子は語り手アル・ハリスと市場で、また裁判所で堂々と論じ合っているのである。これと関連して語り手アル・ハリスが主人公アブー・ザイドを知るのは人伝てであることに技法の新鮮さが見られる。いつもならばその場で、現場で主人公を見破っていたアル・ハリスも、覆面をしていた人物をアブー・ザイドと見分けられなかった。そのアル・ハリスは裁判官から若者の父親がアブー・ザイドであることを聞いて驚愕する。しかも主人公は今日の訴訟沙汰になることを見越して、前日裁判官の許を訪れ、息子のことをそれとなく告げていった、というのであるから。プロットとしても念には念を入れの、なかなかの出来栄の作品となっている。第23話の息子の才気煥発ぶりも興味深い。

写本の異同であるが、Fatih 版では第15話に、Sofya 版では第18話に、Paris 版では第6話に配されている。

第18話 カズウィーン¹⁾のマカーマ 隠れムスリム、身一つで逃れて越境

(原文 M. ‘Abduh 編 pp. 86-91)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、以下のような話をした：75年²⁾のこと、私はカズウィーンの前線で（イスラムの軍事）遠征に参加したことがあった、同行の戦士達は征服意欲に熱心であった。行軍はでこぼこした荒地の道を選ばず、低い方の行進しやすい道をもっぱら採った。こうして遂に我らの行進はある村に行き当たった。太陽光線の昼日中の直射は、そこに茂るタマリスク（＝御柳）の茂みの木陰に我々を避難させた。幸いその中ほどに泉があった、灯すローソクの舌（＝炎）の如く（きらきらと）輝かしく、流す涙ほどに清らか³⁾で、岩の間を忙しなく動き回る蛇の如く蛇行して流れていた。そこで我々は（休息に入り）とりあえず手に出来る食べ物を口に運んだ。それが終わるとそれぞれ木陰を頼って午睡をとることにした⁴⁾。

眠りが我々を支配した丁度そのときであった。ロバの鳴き声よりもっと素っ頓狂な人声が鳴り響いたのである。また仔ラクダ⁵⁾の足音よりも微かな蹄音が聞こえてきた。それらの人声と蹄音に和合するように太鼓の音が響いて来た。それは恰もライオンの両顎から吠えてくるようであった。また一団の人々から眠りの先導者を追い出す（＝寝入り端を襲われ眠気を吹き飛ばされた）が如くであった。私は双子（＝両目蓋）を開いてそちらの方を見遣った。茂みがその人物の前に立ち塞がって（視界を邪魔して）いた。すると彼のほうから声を掛けてきて、我々は受け身の聞かされる破目になった。彼は太鼓を打ちそのリズムに乗って、次のように詠じたのである⁶⁾：

アッラーに祈り願います だれぞ答えられる御仁おられますや

ad‘ū ila llāhi fa-hal min mujībīn

余裕ある避難所と肥えた牧場 提供したいと申し出る奇特新な御仁は

ilā dharan raḥbīn wa-mar‘an khaṣīb

小高きところに庭園ありて 木の実つぎつぎに熟れていつも

wa-jannatin ‘āliyatīn mā tanī

摘むに適した果実手近にあり 見渡せば視界から消えること努めあらじ

quṭūfu-hā dāniyatan mā taghīb

- 1) カズウィーン Qazwīn：イラン西北部、著者の故郷ハマザーンと北東ラッイ、北西タブリーズとを結ぶ三角形の真ん中の主邑。首都テヘランからエルブルズ山脈南麓に沿って西北西へ92マイル（147km）行った地点に在る。この地から宇宙・博物誌に関する書、および独自の体系で地理辞典を編んだカズウィーニー（1203-83）が出ている。
- 2) 75年 sanata khamsin wa-sab‘īna：イスラム暦75年は西暦694-95年に当る。この頃イスラム世界は内乱続きであったが、ウマイヤ朝第5代カリフ・アブドルマリク（在位686-705）によって再統一され、体制を充実させた。それと共に、征服活動を再開した頃であった。この想定に立つての年号設定であろう。704年には中央アジアの軍事遠征が始まる。アル・ハマザーニーのマカーマでは語り手が著者と同時代を語るのが一般的である。しかしその当時ではなく、7話ガイラーンのマカーマもそうであったが、過去の歴史の中に入り込んでしまっ、物語を展開するのは珍しいことではない。なお75年を著者の生存していた頃として375年とする説もあるが、遠征であるのでダール・ル・ハルブ（異教の非イスラム世界）と受け取っておいた方が良さだろう。
- 3) 涙ほどに清らか asfā min al-dam‘a：人の流す涙は純粋なもの、清らかなもの、癒すものと考えられていた。この概念の反映から、アラブ世界には「涙壺」があり、人々の流す涙が壺の中に集められ、御利益あるものとして治癒にも用いられた。
- 4) 冒頭段落のサジュウ（押韻技法）の単語は下線順に：sab‘īna / qazwīna, ḥaznan / baṭnan, sham‘ati / dam‘ati, raḍrāḍi / naḍnāḍi, nilnā / qīlnā。
- 5) 仔ラクダ ḥuwār：授乳期の子ラクダ。身の軽い仔ラクダであるから重い音ではなく、軽快な蹄音である。ラクダに関して、アラブは成長段階別特称および年齢別特称を持っているほど身近で重要な家畜であった。離乳期の子ラクダはファスィール faṣīl 以下、拙著『ラクダの文化誌』、第8章「ラクダが生きる 成長段階」、第9章「ラクダが年とる 年齢階梯」を参照。
- 6) ここまでのサジュウ（押韻単語）はルーズさが目立つが、下線順に：ḥimār / ḥuwār?, ṭablin / asadin?, qawmi / nawmi, ilay-h / dūna-h?, yaqūl / ṭubūl。

おお武士^{もののふ}の皆様がた聞いて給^たも 我悔い改めるところありはるばると
 yā qawmu innī rajulun tā'ibun
 異教の地より越境して来し者なり 皆様^{おどろ}がたよりも驚異くべき体験せし者ぞ
 min baladi l-kufri wa-amrī 'ajīb
 ああ早くイスラムの信者となりおおせていたなら！ それ以前の何と多くの夜を過ごせしことか
 in aku āmantu fa-kam laylatin
 我が主への信心^{かた}を頑なに拒絶して いかがわしき神々に奉仕^{つか}えていたことか
 jaḥadtu rabbī wa-ataytu l-murīb
 ああなんと多くの豚肉を その軟骨を喰らいついて来しことか
 yā rubba khinzīrin tamashshashtu-hu
 また飲酒の風も人並み以上に 我が分け前として趣向^{たし}なみしことか
 wa-muskirin aḥraztu min-hu n-naṣīb
 されどアッラー立ち直る機会を 与え給^たいまた我を救い出し給^たう
 thumma hadā-ni llāhu wa-ntashā-nī
 卑賤に満ちた異教の世界より 正しき道に励むよう促したり
 min dhillati l-kufri jtiḥādu l-muṣīb
 抜け出す前までは我が信仰 身内の者までに只管^{ひたすら}隠し通し
 fa-zaltu akhfī d-dīna fī usratī
 我が心の中では悔い改め^{あらた}を更新に アッラーへの信仰を守り貫^ぬきたり
 wa-a'budu llāha bi-qalbi munīb
 見かけはアッラート女神⁷⁾ 信奉しはすれ 信心の敵の目を用心する要あるため
 asjudu li-llāti ḥidhāra l-'idā
 カアバの方を向く⁸⁾ ことさえ可能^{あた}わず 監視者の目の厳しきがゆえに
 wa-lā ara l-ka'bata khawfa r-raqīb
 夜に至りその闇が我が行為^{とばり}を その帳で紛らわしてくれる段になると
 wa-as'alu llāha idhā jannana-nī
 衷心よりアッラーに祈念を捧げること頻り 悔いの残る一日をまた呵責^{あた}労費^{らつ}けりと
 laylun wa-aḥnāniya yawmun 'aṣīb
 おお主よ異教の地におりし我を 汝救い与え給^たう その如くに
 rabbi ka-mā anna-ka anqadhta-nī
 また我を守護したてまつれ 信仰実践するも心の中
 異教^{あつ}信者^{まり}の中にありては仲間なき我ただに外来者^{よそもの}ぞ
 fa-najji-nī innanī fī-him gharīb
 かくて決行せりイスラームの地へと 夜の暗闇を乗り物として逃れ来たる
 thumma ttakhadhtu l-layla lī markaban

7) アッラート女神 allāt: イスラム化以前のアラビア半島で信じられていた神々の中でも主要な神の一人。女神で、他のウッザー、マナートと共に三女神の一つ。アッラーの由来の起源とも説かれ、その関係が指摘されている。特にターイフ地方のサキーフ族の信仰が篤かった。

8) カアバの方を向く ara l-ka'bata: ムスリムは礼拝に際してはカアバの方を向かねばならない。この礼拝の顔を向ける方向をキブラ qibla という。本話のカズウィーン方面だと西南西の方向がキブラになり、そちらを向いて礼拝することになる。

乗り換えラクダ⁹⁾とて無くただに急ぐ 乗り換えするとせば我が固き決意をこそ
 wa-mā siwa l-‘azmi amāmī janīb
 敵地からの旅如何なものかご存知のはず 一寸先も見えぬ暗き夜間の突進行を
 fa-qad-ka min sayriya fī laylatin
 その恐怖に怯える余り白髪^{しらが}となる たとえ成長盛りの子供の頭髮といえども
 yakādu ra’su ṭ-ṭifli fī-hā yashīb
 かくて危険なる敵の領土^{のりこ}を越境えて 漸く^{ようや}のこと信仰の同志住まう地に至りて
 ḥattā idhā juztu bilāda l-‘idā
 身の安全が保障されたを知りしとき 衣より埃払う如くに心晴れたり
 ilā ḥima d-dīni nafaḏtu l-wajīb
 信仰の導きの印眼にしかと見えし時 安堵して我心より声を上げたり
 fa-qultu idh lāḥa shi‘āru l-hudā
 助けの手アッラーより差し伸ばされたり されば勝利またすぐ近くにある¹⁰⁾と
 naṣrun mina llāhi wa-faḥṣun qarīb

(サリーウ sarī 調 bā’iyya b 脚韻詩)

声の主はこの詩行まで詠じた時、普通の口調に戻って我々に呼び掛けてきた、「おお武士の皆さん、私はあなたがたのダール¹¹⁾(=平安の地)にようやく足を踏み入れることが出来ました、この決意たるやお察してください、絡んだ欲が仕向けたものでも、貧窮が導いたものでもありません。我が背中の後ろに残してきたものといえ、(擲^{なげう}ってきたものといえ、所有していた)いくつかの庭園やぶどう園、うら若く胸張った同年代の侍女達、血統高き名馬たち、貯めこんだ財宝、調度品、奉公人、乗用動物、奴隷達……！。(未練を断って)我が邸を後にしたのです、蛇がその穴からそつと抜け出る¹²⁾ように、鳥がその巢から急いで飛び立つように。世俗のことに執着するより、信仰の心の方を尊^{たつと}ばんとするあまりのことで御座います。右手を左手と一緒にして¹³⁾、昼旅に夜旅を続けて¹⁴⁾ ひたすらに抜け出して来た者で御座ります¹⁵⁾。

9) 乗り換えラクダ janīb; ジャニーブ、直義「横・脇のもの」。余裕ある旅、急ぎ旅、長旅の場合、不測の事態に備えて、代わりとなるラクダをすぐ後ろに引き具した、これがジャニーブである。この節の直訳は「決心以外に私の前にはジャニーブは無い」であり、ジャニーブの語義を生かすとしたら、「私の前には amāmī」より「私の横には jānībī」の方がふさわしかろう。

10) 助けの手アッラーより差し伸ばされたり されば勝利またすぐ近くにある naṣrun mina llāhi wa-faḥṣun qarībun: この句は『クルアーン』61章13節の有名な唱句で、直訳は、「神の助けありて勝利近し」、「神の助けあらば勝利近からん」。最初期のイスラム軍の関の声として採用されていた。

11) あなたがたのダール dāru-kum: イスラム統治論では、この世界(ダール)はイスラムに統一されて平安の世の中になる、と考えられている。既にイスラムが主流となっている世界はダール サラーム dār al-salām (平安が実現されている領土)であり、そうでない世界はダール ハルブ dār al-harb (戦、諍いの絶えない領土)であり、いずれイスラムが齎されて、ダール サラームに替わるであろう、とされる。

12) 蛇がその穴からそつと抜け出る khurūja al-hayyati min juḥri-hi: 蛇は hayyati と女性形なのに、それを受けるその穴は juḥri-hi と「彼の穴」となっており、男性形にすり替わっている。逸脱であるが、この hayyati の tā' は女性表示 (ta'nīth) ではなく、集合名詞の単数化 (li-l-wahdah) と説明されている ('Abduh p. 89, n. 6)

13) 右手を左手と一緒にして jāmi'an yumnā-ya ilā yusrā-ya: この解釈として三説あり、いずれも尤もである。1) 両手を空にして、両手に何も持たず、取るものも取り合えず、2) 両手を握り締め、固い決意をして、3) 「右足を左足と一緒にして」と解して、両足が一緒になるほど急ぎに急いで。

14) 昼旅に夜旅を続けて wāṣilan sayrī bi-surā-ya: アラブでは夜旅の慣行もごく普通に行なわれ、それに伴う慣習も残されている、旅の用語の中に「夜旅」surā という特称があることもその好例であろう。これと対置して sayr は「昼旅」の意味となる。

15) ここまでのサジュウは下線順に: shāqa-hu / sāqa-hu, a'nāban / atrāban, 'adīdan / 'abīdan, juḥri-hi / wakri-hi, dunyā-ya / yusrā-ya / surā-ya。

皆さんには是非戦いの火の狼煙^{のろし}を炎一杯に上げて、ビザンチン軍の中に石の弾丸を（投石器で）投げ込んで頂きたいもの。彼らを襲撃することで私を助けたまえ、皆さん味方同士助け合い、支え支えられて挑んで頂きたい。けれども誰も度を越えてはなりません、誰にも限度というものがあるものです。そう、私への布施も手持ちの限度に応じてで結構です。千両箱¹⁶⁾を、などと大それたことは求めません、せめて鑢銭^{びたせに}なりとも、一粒のナツメヤシなりともお恵み下されば！お恵み下さる皆さんそれぞれに、私は二つの矢を用意します。一つは来るべき（最後の審判の）時の臨む^{そなえ}準備のためにその人の矢先を鋭く（＝前世での善行の積み重ねを分かりやすく）しておくことです。もう一つはドゥアー（神への祈願）の（回数の矢の）刻み目を入れておくのです。そうした祈願の（言葉の）矢を深夜のドゥアーの弓で天の諸門に向かって放つ¹⁷⁾のです¹⁸⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語り継いだ：彼の語りっぷりの見事さに私は全く感服してしまった。そこで睡眠用の上掛けジルバープ（覆い、外套）を肩から外して（渡そうと思い）、急ぎ人だかりのできていた中に分け入っていった。そして（近づいて見ると）、ワッラーヒ（なんと驚くことに！）、我が長老アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師ではないか！師は剣を抜き身のままで持ち、変装したままの出で立ちであった。長老は私を目ざとく見つけると、目で合図を送ってきた。それから言うには、「アッラーが御慈悲を垂れ給いますよう、その恩恵の裾で我らを援助される方に、その糧の一部を分け与えられる方に！」。それから（人だかりから施しを）受け取るだけ受け取っていた。私は彼を脇に連れて行き、言葉を掛けた、「あなた様はナバティヤ人¹⁹⁾の子孫で？」。すると彼は詠じて答えたのである²⁰⁾：

我は時と共に我が状況を変えるもの

anā hālī mina z-zamāni

誇り高き系譜だと同じことよ

ka-hālī ma'a n-nasab

我が家系また時の手のまに委ねられる

nasabī fī yadī z-zamāni

それ上手く効果発揮せぬならば身が変わるだけのこと

idhā sāma-hu nqalab

夕方にはナバティヤ人に成り済まそうとも

anā amsī mina n-nabīti

朝ともなれば誇り持つ^{れっき}歴としたアラブぞ

wa-aḥḥā mina l-'arab

（ハフィーフ khafīf 調 bā'iyyah b 脚韻詩）

16) 千両箱 badra；大金を入れる袋のこと。その額は千ディナールとも1万ディナール金貨とも言われる。日本語としても千両箱が訳語として相応しかろう。箱と袋の違いがあるが。

17) そうした矢を深夜のドゥアーの弓で天の諸門に向かって放つ arshuqu bi-hi abwāba s-samā'i 'an qawsi z-zamā'i；寝静まった深夜のドゥアーは、神が天の最下層まで降臨して聞き耳を澄ませるといわれ、祈願の中でも最も効力があると信じられた。矢を放つ＝祈願の言葉を発する。

18) ここまでのサジュウは下線順に：sharari-hā / hijāri-hā, is'ādan / irfādan, qudrati-hi / tharwati-hi, badrata / dharata / tamrata, liqā'i / du'a'i / samā'i / zalmā'i。

19) ナバティヤ人 Nabīti；アラビア半島北西部ペトラを中心に BC3 世紀頃から栄えた隊商国家を形成。イスラム化された後も長らくアラム語を話していたために、アラブとは見做されず、職業としても遊牧や軍役には就かず、商業に従事、中には門付け業やいかかわしい流れ者となっていた。アラブは彼らを軽蔑し、本文のような言い回しがされる。

20) ここまでのサジュウは下線順に：nawmi / qawmi, shahara-hu / nakkara-hu, dhayli-hi / nayli-hi。

第18話 カズウィーンのマカーマ 隠れムスリム、身一つで逃れて越境 完

第18話 訳者解説

本マカーマには、稼ぎの場所設定と、稼ぎの対象、即ちカモと、それに主人公の設定にバディーウ（新奇さ）が見られる。稼ぎ場所は、その地を越えると以降は異教徒の支配するイスラム世界最前線である、しかも人里はなれた木陰の休憩地。カモは、これから敵地に遠征に向かう軍人達、熱心な信者もいようし、一皮剥けば戦利品を得て一旗上げたい俗物もいよう。そして語り手自身も遠征軍の兵士の一人となり紛れ込んでいる。そうした状況下に主人公の登場。異教の敵地から信仰を守るゆえに、一族郎党、家族、財産すべてを^{なげう}擲って、身一つで逃走してきた設定である。見事なプロットである。太鼓でリズムを作って詩を詠ずることになっているが、旋律よりも調子を強調した詠じ方だったのだろう。その太鼓であるが、自ら持参したものというより、兵士のものを借りたと解釈した方が良からう。

しかしこれから戦いに向かう兵士からどれ程のものをせしめることが出来るのだろうか。武器や軍用品を持ち運ぶのが精一杯で、所持金や身の回り品は最小限に抑えているはずである。「睡眠用のジルバープ（覆い、外套）を肩から外して、急ぎ人だからのできていた中に分け入って……」と本文にもあるが、これから寒い北へ向かう遠征軍であればジルバープも必需品、いつもの稼ぎの常套句の手法がそこに出てしまった感がある。こうした兵士に対しては、商いにしても、床屋にしても風呂屋にしても、後払いで貸し付ける慣行もあった。遠征の帰り、戦利品を当てにするわけである。技術が至らず普段は客の不入りの店など、軍人相手に代金は遠征帰りでよい条件で客集めするやりかたなどよく聞かれる話である。凱旋して意気揚々と戦利品を持参した兵士達に向かったの担保とした、と解釈も出来ようが。定着した戦場ならそれも可能であろう。しかしその場その時が、いまここが、稼ぎとなる主人公ではそれは不可能である。この意味でもさして多くを獲物として得たわけではなかろう。著者アル・ハマザーニーにしては主人公に身一つで越境してきた経緯を述べさせた後、詠わせる長い詩行の後半の内容は興味深い。

「……彼らを襲撃することで私を助けたまえ、皆さん味方同士助け合い、支え支えられ挑んで頂きたい。けれども誰も度を越えてはなりません、誰にも限度というものがあるものです。そう私への布施も手持ちの限度に応じて結構です。……」。この説教の内容の持って行き方、すり替えは見事である。イスラムのジハードの教えに馴染みの読者には、そのすり替えの妙が伝わって来る感興を受けよう。と言うのも恐らくは『クルアーン』の一節、敵が攻めてきたら勇敢に戦いなさい、但し激情に駆られて度を越えてはいけません、と言う有名な教えを踏まえている。それを捩って、方向を戦闘（＝聴衆への説教）から、勝利や戦果（＝己への喜捨）の方に持って行っている転換の妙がそこに働いているわけである。

主人公の登場、人物設定、稼ぎの手法、稼ぎの場所、すべてマカーマの文体としての定型を備えている。kadya（乞食）としての稼ぎの場としての本舞台と、ピカレスクであった正体暴露の場としての後舞台は微妙に違わせており、参考になろう。語り手のガーズィー（ghāzī、聖戦参加の兵士）としての設定もバディーウ（斬新）である。語り手として導入部と中入りに顔を出し、体裁を整えている。

主人公の詩については本舞台と後舞台の両方に挿入され、定型にはめ込まれている。本舞台で詠われる作品は、ハマザーニーにしては長大であり、14詩行に上る。訴え所でもあるので当然と言

えようが、作者はむしろ散文の説教で訴える方が好みであったのであろうから、これ程長い詩行は珍しい例と言えよう。

サジュウ文体のことであるが、各段落の終わりに、脚注で示しておいたように相応の技法工夫が見られており、全体への配慮をみてとれる。

写本の異同については、Fatih 版では第3話に、Sofya 版では第26話に、Paris 版では第7話に配されている。興味深いのは Paris 版で、本話のタイトルを Maqāma al-Ghāzī（出征兵のマカーマ）としており、内容を汲んだものを選んでいる。

第19話 サーサーンのマカーマ 物乞い集団に乞われて

(原文 M. ‘Abduh pp. 92-95)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、次のような話をした：ある旅が私をダマスカスに留まらせたことがあった。その折の或る日のこと、私は滞在先の家の門扉の所にいたのだが、一群のサーサーン¹⁾達が突如として眼前に現れた。彼らは布切れで顔を包み隠し、衣類を赤い塗料で塗りたくって(流血のように思わせて)いた。銘々が小石を脇に抱えて、それでもって胸を打つのであった。一団の中に唱導者がいて、彼が声を張り上げると、一同が応じていた。彼が抑揚をつけて呼び掛けると、一団が同じように詠うのであった。そしてその唱導者は私を目にすると、次のように詠じ始めた²⁾；

パンを少々お恵みを

urīdu min-ka raghiifaa

清潔な食卓³⁾の上に乘せ

ya‘lū khuwānan nazīfā

粗き塩をも欲しいもの

urīdu milḥan jarīshā

摘まれたばかりの青菜類も

urīdu baqlan qaṭīfā

新鮮な肉も御無心を

urīdu laḥman gharīdā

度の濃い酢をもお願い申す

urīdu khallan thaṭīfā

乳飲みの子山羊も欲しきもの

urīdu jadyan raḍī‘ā

子羊は弱小なもので結構

urīdu sakḥlan kharūfā

水も氷の入ったものを

urīdu mā’an bi-thaljīn

素敵な容器に一杯満たし

yaghshā inā’an tarīfā

- 1) サーサーン sāṣān；物乞い、乞食、門付け、遊業集団、放浪者の総称。徒党を組み互助的に組織された一団もあった。また多くの符籙 (luḡha al-shahhādh) を持っていたことも知られる。第1話、及び第30話の訳者解説を参照。なおより詳しくはアル・ハリリー作『マカーマート』の方にもたびたび登場しており、そちらの解説第2話注8には由来をも記しておいた。アル・ハリリーの方は他にも第30話注19、第49話注3を参照。第30話の挿絵(第2巻363頁)にも注目されたい。
- 2) ここまでのサジュウ(押韻単語)は下線順に；asfārī / dārī, ru’ūsa-hum / labūsa-hum、(yurāsīlūna-hu / yujāwībūna-hu)。
- 3) 食卓 khuwān；アラブは「食卓」を二種に分類している。一つはこのフワーンであり、我々が普通イメージする食事用テーブルであり、その上に料理が順次運ばれてきて乗せられるものである。もう一つは『クルアーン』第3章で名高いマイーダ mā’idaである。後者は食事そのものが既に乗っており、それが運ばれてきて一座に据え置かれる、そういう類の食卓のことである。饗宴のシーンなどでは、よく羊一頭が丸々乗せられたゴージャスなこのマイーダが二・三人の召使いに運ばれる風景を目にする。

酒樽一つお願いいたす

urīdu danna mudāmin

それで酔狂になりたき故に

aqūmu ‘an-hu nazīfā

気の利く酌人付けたまえ

wa-sāqīyan mustahashshā

呑む者の心軽快やかに導く

‘ala l-qulūbi khafīfā

それに相応しき着物もお願い申す

urīdu min-ka qamīṣā

外套にターバンも加えればさらに⁴⁾

wa-jubbatan wa-naṣīfā

皮厚きサンダルの履物も

urīdu na‘lan kathīfā

それで便所に行けるようにとの

bi-hā azūru l-kanīfā

櫛と剃刀も御無心致す

urīdu mishtān wa-mūsā

風呂用バケツにヘチマもまた

urīdu satlan wa-līfā

素晴しきかな、我 客人となり

yā ḥabbadhā anā ḡayfā

汝 我らがホストとなれるは

la-kum wa-anta muḡīfā

些細なこの頼みで満足ぞ

raqītu min-ka bi-hādhā

これ以上は望外と心得ます故に

wa-lam urid an ahīfā⁵⁾

（ムジュタッス mujtathth 調 fā’iyya f脚韻詩）

イーサー・イブン・ヒシャームは語り継いだ：（この詩と和唱に甚く感動して）私はこの唱導者に（取り合えずはと）ディルハム銀貨一枚を渡して、声を掛けた、「私は宣言致します、後日あなた方を招待しますと！いずれ早期に準備に取り掛かり、お呼び致しましょう！出来るだけのことを致して、寛大さをお見せしましょう！この約束は今後のあなたにとっては権利、私にとっては義務となりましょう。このディルハム銀貨はあなたにとっては記念品（＝証拠物）となりましょうから、

4) それに相応しき着物もお願い申す / 外套にターバンも加えればさらに：宴席は清潔感が何よりも求められる。以下にそれらの無心が続くことになる。宴会場にはさらに以下に叙される他に、豪華であればあるほど香ないしは香草と鮮やかな花類、そして音曲が添えられる。それでここではせめても「それに相応しき着物」を、と先ず要求しているわけである。「外套にターバンも加えればさらに」との付けたりはサーサーンならではの要求である。

5) 半詩行がほとんど3語で成り立ち、歩脚数が少ない全12詩行である。驚くべきはそうした中であって、urīdu（我望むらくは）で始まるのは、7、11、12詩行目以外はすべてであり、また前半詩行も殆どが同一脚韻を踏んでいる、すなわち前半・後半詩行とも同一韻を踏むラジャズ形式に則った詩品となっている。

見分け品として取って置いてください。約束を楽しみにお待ちください。すると唱導者は(リーダーと思しき)別の人物の所に行き、私と話したそのままをその人物に伝えている模様であった。そしてこの人物が声を掛けてきた、朗詠したのである⁶⁾；

おお徳篤き人よ かくなる御人現れようとは

yā fāḍilan qad tabaddā

木で言えば枝を広げ頼りになるお人かな

ka-anna-hu l-ghuṣnu qaddā

我が歯頻繁りと求める肉食べたしと

qadi shtaha l-laḥma ḍirsī

されば肉をパン皮で包み与えよ

fa-jlid-hu bi-l-khubzi jaldā

後でと言わず何であれ直ぐに与え給え

wa-mnun ‘alayya bi-shay’in

時間無ければ現金なりともお構いはせぬ

wa-j‘al-hu li-l-waḡti naqdā

いざ腰にある汝が手自由に移して

aṭliq mina l-yadi khaṣrā

汝が巾着の結び目を解いてはいかが

wa-ḥlil mina l-kiysi ‘aqdā

我がために思いて汝が両手を合わせて⁷⁾

wa-ḍmum yaday-ka li-ajlī

懐に入れ懇ろに引き出して欲しきもの

ilā janāḥi-ka ‘amdā

(ムジュタッス mujtathth 調 dāliyya d 脚韻詩)

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：この詠唱が彼から発せられ我が耳を劈いた時、言葉の背後にえも言われぬ秀逸さを感じ取った。(私が財布を差し出すと、彼は有り難く受け取り、仲間を引き連れて我が許を去っていった。)私は彼の後をそっと付いていった。辿ってゆくと彼は定宿の母(＝隠れ家)に着いた。私は、彼から私が見えず、私からは彼が見える場所を探し、そこに立って様子を窺った。一同はリサーム(＝顔覆い)を取り去った。と、如何だろう、何とあの頭領はアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師ではないか！私は(彼の見える所まで行き)、視線を送って、声を掛けた、「こんな策略だったとは、ワイハカ(呪われてあれ)！」。すると長老は答えるに詩でもって応じた⁸⁾；

今のご時世の運回り余りに悪し

hādhā z-zamānu mashuwmu

6) こままでのサジュウは下線順に：sanu‘iddu / nasta‘iddu, najtahidu / najiddu, wa‘du / ba‘du, manqūda / maw‘ūda。

7) 汝が両手を合わせて wa-ḍmum yaday-ka；巾着(kiys)を取り出すのに何故「両手」を用いるのか。一つには金貨や銀貨の大金の入った巾着は。それを狙った「巾着切り」にすぐ盗られないように奥に忍ばせてあるので両手で取り出さねばならない。二つには巾着の紐は体に結わえてあったり、しっかり締めてあるので取り出したり、結び目をほぐくに両手が必要である。三つ目に左右のどちらの懐に収めてあるか他人には分からない様にして、両手を入れて懐の中でどちらから外に出すようにするため、両手を刺し込む習慣があること。小銭は別にしてすぐ取り出せる帯や懐の浅い場所に入れてある。

8) こままでのサジュウは一箇所のみ下線順に：mathwā-hu / arā-hu。

汝も知るが如く不公平^{はびこ}蔓延る世の中ぞ

ka-mā tarā-hu ghashuwmu

この世にありて愚かさのみが持て囃され

al-ḥumqu fī-hi maliyḥun

理知あるが利点とならずただ非難されるとは

wa-l-‘aqlu ‘aybun waluwmu

資財あるも現実^{うつつ}ならず徒^{ただ}に夢の中の幻

wa-l-mālu ṭayfun wa-lākin

可惜^{あたら}衆愚の周りを飛び交うだけのこと！

ḥawla l-li‘āmi yaḥuwmu

（ムジュタッス mujtathth 調 mīmiyya m 脚韻詩）

第19話 サーサーンのマカーマ 物乞い集団に乞われて 完

第19話 訳者解説

マカーマの内容は物乞い＝クドゥヤ（kudya）に分類される。これといったトリックを使ったり、騙しのテクニックを用いているわけでは無い。集団で現れ、詞章を和唱しながら、特異な風体で振る舞う。特異な遊行、門付け、バガボンド集団であるサーサーンはマカーマの主題とされやすく、アル・ハマザーニーの後継者であるアル・ハリリー作『マカーマート』の方でも幾つかテーマとなっている。本話では集団で行進している様子が描かれている；「彼らは布切れで顔を包み隠し」、とあるように集団全体が覆面をしていた。一団の中に唱導者がいて、彼が声を張り上げると、一同が応じていた。彼が抑揚をつけて呼び掛けると、一団が同じように詠うのであった。卑しいがために顔を覆う、多くの乞食はこうした風であったことが分かる。しかし卑しくなくとも対面・品位を保つために、顔を覆うことも日常化していた。また「衣類を赤い塗料で塗りたくっていた。銘々が小石を脇に抱えて、それでもって胸を打つのであった」と言う記述は、何の説明も無いが誰か聖人の殉教を悼んでの行進であったのであろう。赤い塗料とは流された血を表わし、小石で胸を打つとは、自ら殉教の痛みを共有しようと言う表出行動なのであろう。

こうした例は、シーア派教徒のムハッラム月10日のアーシューラー（‘āshūrā’）の祭事を思い起こさせる。信徒が胸を打ち行進する様、中には鎖状の棒を左右に打ち付け流血しながら一心不乱の者もいて、観る者の胸を打つ光景である。著者の故郷及びペルシャ世界はシーア派教徒であり、アーシューラーに前後して40日間催されるタズィヤ（ta‘ziya ホセイン殉教劇）も盛んなはずである。しかし舞台はシリアのダマスカス。シーア派衆は殆んど居らず、そのためアーシューラーであっても町の雰囲気もそれらしいことは何も感じられなかったかもしれない。実際スンニー派の地域ではムハッラム月10日に取り立てた行事を行なうわけではない。訳者もエジプトに長らく住んでいたが、パキスタンのシーア派地域で現地調査をしていた折だった。たまたまムハッラム月に当地に滞在して、10日目の盛大な追悼行進の胸打ちと血塗られた馬に乗ったフセイニ一行の行列と熱狂を目の辺りにして、宗派間の儀礼・祭礼の違いに驚かされた記憶がある。本マカーマでは著者もその辺りは心得ていたのであろう。サーサーン衆の訴えた文言は、シーア派の宗派的性格のものは一切出していない。みずからのパフォーマンスと詩の朗誦とを手段にして、相手を讃え、お布施を

乞う kadya の内容である。彼らの頭領の台詞^{せりふ}にしても全く同様で、布施を直ちに実行せよと迫る内容となっている。しかしこれとて行進の過程で語り手を見かけ、富裕者と踏んで、個人をターゲットにして語りかけてきた唱句に過ぎないとも採れよう。なぜなら彼らの文言と往來の行進で石で胸を打つ行為との関連性が全く無いからである。

物語としては随分と短絡的で、訳文においても大分カッコで補ってはいいるが、ストーリーを成り立たせるには補わねばならぬ部分がまだ多い作品である。特に「この詠唱が彼から発せられ我が耳^{みみ}を劈いた時、言葉の背後にえも言われぬ秀逸さを感じ取った。(私が財布を差し出すと、彼は有り難く受け取り、仲間を引き連れて我が許を去っていった。) 私は彼の後をそっと付いていった。」この部分がいわば稼ぎの現場となるところである。そして正体暴露へ繋がって行く場面である。訳で補った括弧の部分を除いて読んでいただきたい。これが原文であり、このままでマカーマが成立するのだろうか？無心を訴えたサーサーン衆の2篇の詩こそ本話の盛り上げ部分であり、その対価報奨^{はしよ}があってこそマカーマが成り立ったものである。つまり状況作りはしっかりしていたのに、その結果が端折られて、欠如していることになる。正体暴露の箇所も「私は彼から私が見えず私からは彼が見える場所を探し、そこに立って様子を窺った。一同はリサーム(=顔覆い)を取り去った。と、如何だろう、何とあの頭領はアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師ではないか！私は(彼に見える所まで行き、)視線を送って、声を掛けた、「こんな策略だったとは、ワイハカ(呪われてあれ)！」。二人の位置関係、離れ具合から、(彼に見える所まで行き、)を補わないと余りに状況設定がいい加減なことになる。アル・ハリリーに比して、アル・ハマザーニーの作品はこうした設定・状況作りの記述が短絡で不足している部分、作品の完成度のゆらぎが目立つ。

3篇ある詩の挿入であるが、短篇ながらこれだけマカーマを詩で固めて筋の展開を見せる手法も珍しい。最初の12詩行のは同一の出だしが殆んどであって、ローマナイズでそれを示した通り平易なものである。2番目、3番目の詩もさほどではないものの、さすがに主人公と思わせる技風ではある。2番目の5詩行は、即金での布施の懇願も半ば要求に近く、布施への動作まで誘導している。裏舞台での正体暴露と3番目の3詩行は自分をこう仕向けているのは正直者や知者が馬鹿を見る衆愚の世の中が悪いからだと巧みな弁明である。こうした詩が多用されたのも、前世紀10世紀の漂泊の詩人 Abū Dulaf の残した詩品 Qaṣīda Sāsāniyya の影響であろう。マカーマの題名もそこから採られた可能性があり、後世のアル・ハリリーにも本話注1で述べた通り、その延長線に位置付けられよう。

語り手の筋立て、主人公の活躍と正体暴露、各段落のサジュウへの配慮も見せていると言えるだろう。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では第18話に、Sofya 版では第13話に、そして Paris 版では第10話に配されている。

第20話 猿のマカーマ 猿回しに身を褒^{やっ}してまでも

(原文 M. 'Abduh pp. 96-97)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、以下のような話しをした：私が平安の都¹⁾に滞在していた折のことだった。(巡礼をして)神聖なる領域(=メッカ)より帰ってきて、ゆったりとした足取りでチグリス河を散歩していた。あれこれの珍しい光景を思案しながら眺め、また美術工芸の粋をじっくりと目に焼きつけたものであった。そうこうしていると一団の人々の群がっている所に出くわしたのである。聴衆の首はその愉快さからか、皆同方向にあっちを向きこっちを向いては、どっと笑って頬^{ほこら}を綻びさせていた。私も好奇心に駆られて、何が人々を引き付けているのか人垣の中に分け入って行った。そしてようやくその人物の声は聞こえる所まで入り込めたが、(中に入りたい余り人垣を分け入って)強引にわが身を急^せき立てたため、また余りの雑踏であったために、その顔は見えなかった²⁾。

そして分かったことは何とその人物がカッラード(猿回し)であったのである。この猿回しは、子飼いの猿を躍らせては、周りの人たちを笑わせていた。(それが分かった途端私はそれを見たさに居た溜^たまれずさらに近づくこと)解き放たれた獵犬³⁾の跳躍の一飛びで、蹠^{ちんぽ}の早足で掻き分け、人の首の上を跨^くぐ⁴⁾様に前へのめり込んで行った。(人ごみの)こちらに肩をぶつけあちらに臍(=お腹)を寄せて割り込んだ。そしてようやく二人分のリフヤ(顎鬚^{あごひげ})のスペースを作り出して、擦^すった揉^もんだの労苦の末に坐ることが出来た。(ところがいざその場に居合わせてみるとただただ)羞恥心⁵⁾がその涎を(大量に)流し窒息させるほどであったし、この場を占めたことがその窮屈さ故に身を攻めるばかりであった。ようやくのこと猿回しが演技を終え、その場から見物人が退いていった。私も立ち上がったが、その頃には当惑ぶりもその衣で私を包み隠し(=収まっ)ていた。私は立ち止まって猿回しの面相をじっと見やった。何と彼は、ワッラーヒ(全く驚いたことに)アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師だったのだ！私は叫んだ、「何と見下げたことを⁵⁾、ワイハカ(酷^{ひど}いものだ)！」。すると師は切り返してきて詠じた⁶⁾：

罪を問わば日々に聞け、我に非ず

adh-dhanbu li-l-ayyāmi lā lī

夜々の移ろいをこそ詰問^{なん}ずるべし

fa-'tab 'alā šarfī l-layālī

1) 平安の都 *madīna al-salām*：バグダードのこと。アッバース朝時代、第2代カリフ・マンスールによって新たに造営された新都。ササーン朝の古都クテシフォンに近いチグリス河西岸に当初は円城として出発したがすぐに城外にカルフ地区などが広がり、またチグリス河東岸にも発展した。

2) ここまでの冒頭部のサジュウ(押韻単語)は下線順に：*salāmi* / *ḥarāmi*, *rijlati* / *dijlati*, *tarā'ifa* / *zakhārifā*, *a'nāqa-hum* / *ashdāqa-hum* / *sāqa-hum*, *hajmati* / *zahmati*。

3) 獵犬 *muḥarraj*：「ヒルジュ *hirj* が首に巻かれたもの」が直義。ヒルジュとは「子安貝が施された首輪」であり、ヒルジュの語自体ワダア *wada'ah* が総称する「子安貝」の意味をも共有する。この「子安貝首輪」ヒルジュ、これは特権の象徴であり、調教済の獵犬のみに許された首輪であった。アラブの獵犬として姿形の優美なサルキー *salūqī* が知られるが、その中でも一部の犬のみに許されたものであった。

4) 人の首の上を跨ぐ：前の方の観衆は座っているために、肩越しに前の方に出なければならない。それを「人の首の上を跨ぐ」と表現しているわけである。

5) 何と見下げたことを *mā hādhihi d-danā'atu*：猿回しは、他の *bahlawān* (曲芸師) 同様、賤業と看做されていた。詳しくは以下の解説参照。

6) ここまでの段落のサジュウは下線順に：*qirda-hu* / *'inda-hu*, *muḥarrajī* / *a'raji*, *rajalayni* / *ayni*, *rīqi-hi* / *ḍīqi-hi*, *shughli-hi* / *ahli-hi*, *ḥallata-hu* / *šūrata-hu*。

卑しく愚かな職業^{わど}でしか我が糧^{たつき}食^{あたわ}得る出来ず

bi-l-ḥumqī adraktu l-munā

美しい衣装の裾^{はもと}広げて誇らかに歩けるは⁷⁾

wa-rafaltu fī ḥulālī l-jamālī

(カーミル kāmīl 調 lāmiyya 1 脚韻詩)

第 20 話 猿のマカーマ 完

第 20 話 猿のマカーマ 訳者解説

今回のマカーマは翻訳するのが楽しみであった。というのも猿及び猿回しがテーマであったから、往時のアラブ・イスラム世界のその分野の民俗事情が知れると期待していたからである。しかし、短すぎるのが気に掛かったが、案の定というところか、猿回しの情報の記述は「聴衆の首はその愉快さからか、皆同方向にあちを向きこちを向いては、どっと笑って頬を綻^{はこ}びさせていた」、「この猿回しは、子飼いの猿を躍らせては、周りの人たちを笑わせていた」の僅か 2 箇所のみであった。これだけでは事情は何も読み取れない。M. ‘Abduh の注釈書にも何の情報が無い。取り敢えずは 10 世紀ごろにはアラブ・イスラム世界には<猿回し>の文化が存在していたことのみ明らかとなった。そしてこの職業が、「何と見下げたことを！」と語り手に言わしめるほどに賤業であったことも。

マカーマ文学としてみた場合、筋立ては主人公、語り手共に登場していること、主人公が猿回しとして稼ぎ、語り手が観衆の一人として参入してそれを語る、稼ぎの場と正体暴露の場の設定、後者の場での詩の導入までは不十分とはいえその条件を満たしている。しかし盛り上がりを見せる見せ場での記述はどうかといえ、期待を裏切るほどに短絡であり、本舞台での然るべき詩の挿入も欠けている。本話の猿回しの主題は、前話のストーリー化の過程の中でヒント・構想が練られていたものと思われる。というのも遊芸のバガボンド集団サーサーンの中には、曲芸師や猿回し、熊使い、また軽業師なども入っており、話をサーサーンの多様な職域集団の構成の中から、個として猿回しを選んでマカーマのストーリー化をしたのだと、解しえよう。

猿回しはアラブ世界ではカッラード qarrād と言う。キルド qird (猿) から由来しており「猿を使うに巧みな者」の意味である。猿はアラビア語では、単数は qird だけなのに、複数形は 5 種ある。① qurūd、② aqrād、③ qirad、④ qiradah、⑤ qaridah であり、③以降は稀用で、②、④、⑤は少数複数形、①、③は多数複数形である。カッラード qarrād「猿回し」は古来から存在していたようであるが、オスマン朝以降トルコ語の影響から、カッラーダーティー qarrādātī と、また別にハンカッラド Hanqarrad と称するようにもなった。筆者の現地体験から見たエジプト（およびマシユリク＝東アラブ地域）の猿回しのサルは、普通の猿 (monkey, ape) ではなく、口吻の突き出た狒々 (baboon) の方である。もっともモロッコの方にはニホンザルと似た猿がおり、現今猿回しにも使われているが。この猿回しの狒々であるが、首輪を嵌められ、細い鎖で繋がれ、猿回しの傍らを歩いたり、肩に乗っていたりする。囁む危険性がある場合口輪を嵌められている。猿回しはコントロールするための鞭状^{むち}の杖と、タンバリンを持ち歩く。

7) 美しい衣装の裾広げて誇らかに歩けるは rafaltu fī ḥulālī l-jamālī：直訳は「美しい衣装に身を包んでその裾を引き摺って誇らかに歩いた」。rafala「衣の裾を引き摺って歩く」とは<富裕者・金持ち・成功者>の換喩であって、「たっぷりとして裾が地面を引き摺るほどの衣を着てふんぞり返って歩く」こと。



Aḥmad Amīn: Qāmūs al-‘Ādāt wa-al-Taḳālīd al-Miṣriyya, Cairo, 1953 卷末挿絵より

このダッフと呼ばれる太鼓を兼ねた片面を革張りにしたタンバリンは、なるほどと思わせるほどに多用途に有効的に用いられている。通路や十字路、広場の適当な場所を見つけると、タンバリンを鳴らし、猿回しの到来の合図を送る。ある程度の観衆が集まると、猿を操って曲芸を始める。人の動作の真似や小道具を使つての小技を見せて、また卑猥な仕草も真似させて観衆の感動や笑いを誘う。猿回しは声を掛けたり、鞭杖を巧みに操って猿の動作を導く。さらにタンバリンの音とリズムを利用して踊りや宙返りも見せる。時として小型ロバも同行させて両方に演技をさせたり、ロバの背上でさまざまな演技もさせる。猿回しは聴衆の一定の感嘆ないし反応を得たと思った所で、タンバリンを回す。観衆はその中に小銭を入れるわけである。

マカーマの形式は、語り手の出だしの定型の口上はあるが、後舞台への導入での顔出しが無い。猿回しが演技を終え、観衆が立ち去った後、すなわち「猿回しが演技を終え、その場から見物人が退いていった。私も立ち上がったが、その頃には……」の部分で中入りの口上は出来たはずだ。主人公の遊芸としてのカッラードの技芸も見たかったものだ。もう少し描写があってくれたら、民俗資料にもなってくれたらうに、惜しまれる。詩の導入は本舞台には欠けており、後舞台に二行の申し開きのものが入っている。文体のサジュウもほどほどに配慮されている。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では早い方の第7話に、Sofya 版では第21話に、そして Paris 版では第14話に配されており、主題も Maqāma al-Qarrād (猿回しのマカーマ) となっている。

第 21 話 モスルのマカーマ 死人を生き返らせるからと、洪水の流路を変えるからと嘯^{うそぶ}いて

(原文 M. ‘Abduh pp. 92–95)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、以下のような話しをした：我々はモスル¹⁾を發つて、故郷を目指して帰るところであった。ところが我々のキャラヴァンは一団の盜賊に襲われてしまった。旅荷もラーヒラ（旅用ラクダ）も奪われてしまったのである。私は残された最後のもの（＝身体）を引き摺って、ようやくモスル郊外のある村に辿り着いた。同行していたのはアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師であった。私は声を掛けた、「何処に我々の策路があるのですか（＝如何したものでしょうか）？」。長老が答えるには、「アッラーが満足を与えてくれよう（＝ま、何とかなさ）！」。我々は（村に入つて行き）大きな邸に行き当たった。そこでは邸の主人が亡くなったところで、泣き女達²⁾が泣き喚^{わめ}いていた。男達は既に集まっており、彼らの心は悲しみで焼灼され（＝うち拉^ひがれ）て、悲痛な激情が着物の襟首を引き裂いていた³⁾。女達は女達で髪の毛を振り乱し、胸をこぶしで打ちつけ、身に着けていた首飾り（などの装飾品）を剥ぎ取っては、頬^ほを平手で打ち叩いていた⁴⁾。

アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師は言い放った、「しめた、この黒山（＝人だかり）の中にナフラ（棗椰子＝収獲・獲物）があるぞ、この一群れの中にサフラ（子羊）がいるわい！」。こうして長老は屋敷の中に入つて行った。師は死人に目を留めた、死体は既に顎がしっかり結われ⁵⁾、運び出される前であった。湯が炊かれ沐浴される場所であった。棺が用意され運び入れられる場所であった。経帷子が縫い合わされ包み込まれる場所であった。墓穴が掘られ埋葬される場所であった。師は死人を観察し、その咽^{のど}動脈に触れ、頸動脈を触診した。そして会衆に言い放った、「皆さん、イッタク・ツラーハ（神を恐れ奉りなさい）！この方を埋葬してはなりません。この方は生きておられますぞ！意識を失っているだけです、發作に襲われただけなのです⁶⁾！私がおの方を正常に戻し両目を開かせて御覧に入れましょう、二日の後には」。会衆者は尋ねた、「如何してそんなことがお分かりになったのですか？」。師が答えるには「人間は死ぬと、腋の下が冷たく

1) モスル al-Mawṣil；イラク北部チグリス河右岸にあり、アッシリア時代の大都ニネヴェに隣接する。その廢墟の故「廢墟」というものは神によってその民の奢りと背徳のゆえに滅ばされたと言われている）であろうか、モスル人は「悪徳」な性として知られる。イスラム時代、934 年から始まるハムターン王朝がここを首都に文化の華を開いた。「ピサの斜塔」ならぬ有名な「モスルの斜塔」があり、見る者の驚愕の眼を引いている。大モスクの巨大なミナレット（尖塔）が目立つぐらに傾いているのである。

2) 泣き女達 nawādīb；単数形は nādība。半職業的であつて、死者の出た家からすぐに呼ばれ、金切り声の合唱を行なつて死者の出たことを近隣に知らせる。その後は調子や音程を落として、死者の名、生前の徳を讃えながら、泣き喚いて、葬儀の雰囲気盛り上げる。多くの場合、葬送にも先導して加わることが多い。謹厳な家では雇わない場合もある。ハリーリーの第 11 話に墓地の情景があり、細密画も描かれ、そこに泣き女三人がいろいろなポーズで悲嘆を表わしている（拙訳第 1 巻 324 頁の挿絵を参照）

3) 着物の襟首を引き裂いていた shaqqatī l-fajrī‘atu juyūba-hum；死者を悼むために、普段は抑えていた感情を動作に表わすことが許されていたし、習慣化していた。特に遺族の場合、こぞつて行い近隣の悼みを誘った。第 12 話「こう言いながら急いで手を己のスイダル胴着に伸ばして、それを破ろうとし（て悲嘆の素振りを見せ）た」の部分、及びその注 7 を参照。以下の女性の異常行動もそうである。

4) ここまでの段落のサジュウ（押韻単語）は下線順に；mawṣili / manzili, qāfilatu / rāhilatu, ṣāhibu-hā / nawādibu-hā, qulūba-hum / juyūba-hum, shu‘ūra-hunna / ṣudūra-hunna, ‘uqūda-hunna / khudūda-hunna。

5) 顎がしっかり結われ shuddat ‘iṣābatu-hu；死人が口を開いている様は醜態と考えられていた。そのため死体はすぐに下顎から頭の方に包帯を掛けて固く結ばれる風習があつた。アラブの呪術的側面を言うと、「死人が口を開いて何か物言う」のを恐れたからである。

6) 意識を失っているだけです、發作に襲われただけなのです；この部分サジュウのことであるが、本『マカーマート』(2) 訳出後、付説でサジュウ論を述べておいた。その技法の中でもワズン型では⑤ムラッサウであり、タクフィヤでは①のムジャッラダと呼ばれる見事な対句技法である；‘arat-hu bahtatun
‘alat-hu saktatun

なるものです。この方は、私が触診したところ、まだ生きておられることが分かったのです」。すると会衆者も手を死者の腋の下に差し伸べて、口々に言うのであった、「本当だ、あの方の^{おっしや}仰るとおりだ！あの方のお命じになることを実行していきましょうよ！」⁷⁾。

そこでアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師は立ち上がって、再び死体の前に進み、経帷子を脱がせ、生前のターバンを(頭に)巻きつけてあげた。その後で死体の上にタマーイム(護符)を掛けると、オリーブオイル⁸⁾をその口に舐めさせた(=塗りたくった)。それから死者を部屋に一人きりにするよう、言葉を発した、「あの方をそのままにさせて上げるのです。様子見の必要はありませんぞ。たとえあの方がうめき声を発したとしても、あなたがたはそれに反応してはなりません⁹⁾！」。こうして師はその場所を離れ出た¹⁰⁾。

さあこの情報はたちまち流れ出て、近隣に広がった。死人が^{いきかえ}蘇生させられた、と言うのだから！師のこの有難い振る舞いに対しては家々から贈り物が届けられ、近隣からは感謝の品が送られてきた。遂には我々の巾着は金貨や銀貨で一杯になった。我々の旅用鞆はアキト¹¹⁾(ラクダチーズ)とタムル(デーツ=なつめやしの実)で満たされた。我々は抜け出す機会を窺うべく努めてみたが、なかなか見出すことが出来なかった。そして遂には期限の限られた期日が来てしまい、偽りの約束の執行が要求された¹²⁾。

そこでアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師が言った、「この病人から何かかすかな声を聞かれましたかな、病状の変化の兆し^{いさ}が読み取れましたかな？」。一同が答えるには、「いえ、何も！」。師は、「私が離れた後、病人が何の声も上げていないのじゃな、それではまだその時^いが来ていないのじゃ。明日までそのままにさせて置きなされ。そして病人が何か^い声を上げたなら、死んではいらないと信ずるのですぞ¹³⁾。すぐに私を呼んで下さい、その後の手当てに移ることにしますから。体の組成の患部を治癒して進ぜよう」。すると一同は、「明日まで延ばすなんてとても！」と苦情を述べると、師は、「なに待てぬと！明日といっても朝の前歯が微笑んで見える(=曙光が現れる)、大気の地平線に光の翼が広がるその時までのこと。その時こそ、あの「その時人々列を成して彼の許へ来たる、女性達は^い対を成して¹⁴⁾」との如く(の勝利もたらされよう！)。一同が訴えるに、「私共は病人を治して頂きたいんで、あれこれの口の出任せはご遠慮願いたいんで！」¹⁵⁾。

7) ここまでの段落のサジュウは下線順に：nakhlatun / sakhlaturun, li-yunqala / li-yughsala / li-yuhmala / li-yukaffana / li-yudfana, ḥalqa-hu / 'irqa-hu, bahtatun / saktatun, 'aynayni / yawmayni, dhakara / amara。

8) オリーブオイル zayt: これを塗ることによって、死体を滑らかにしてその硬直、および乾燥化を防ぐ。と同時に死体から漂ってくる死臭を防ぐという役目があった。「舐めさせる」とは「口の周りに(もっとも身体の広範囲に)オイルを塗る」と解する。

9) たとえあの方がうめき声を発したとしても、あなたがたはそれに反応してはなりません：護符(tamā'im)の威力によるもので、下手に動くとその威力・効力が無くなるから。

10) ここまでの段落のサジュウは下線順に：'amā'ima / tamā'ima, zayta / bayta, da'ū-hu / tarda'ū-hu。

11) アキト aqit: 'Abduhの本文では aqt と読ませている。普通のチーズは jubn と言い、アキトはラクダチーズのことを言い、ラクダ乳は脂肪・蛋白分が少ないため、貴重な食料であった。しかし jubn と同義にも用いられた。アキトについては拙稿「アラブ社会のラクダ乳文化」79ページ以降、『乳利用の民族誌』を参照。

12) ここまでのサジュウは下線順に：intashara / nushira, dārin / jārin, tibran / tamran, maḍrūbu / makdhūbu。

13) 死んではいらないと信ずるのですぞ amintum mawta-hu; このままだと「彼の死を信ずる」ことになり、文脈的にも明らかに「死んではいらない」のであるから、否定詞が入らねばならない。字面を生かすとしたら「lā」を文頭に持っていく他はない。ここはサジュウのカリナ技法に拘泥しており、否定詞を入れ忘れたものと思われる。次のようになる：idhā samī'tum ṣawta-hu

lā amintum mawta-hu

なおこの欠落部については M. 'Abduh には何の言及も無く、また英訳者は何の注釈も無く、「死んではいらない」の訳をしている。

14) 人々列成して彼の許へ来たる、女性達は^い対を成して jā'a r-rijālu afwājan wa-n-nisā'u azwājan; メッカを追い出された預言者が630年そのメッカを征服し凱旋する。その途上の折にラクダ上で降されたと言われる有名な聖句(『クルアーン』110章1-2節を振ったもの)。

15) ここまでのサジュウは下線順に：rikzan / ramzan, fāraqtu-hu / waqtu-hu, ṣawta-hu / mawta-hu, 'ilāji-hi / mizāji-hi、

アレキサンドリア出の長老は、「それでは我々を起こして一緒に病人のところへ連れて行って下され」。(言わせた通りに連れて行かれると)師は徐に病人の手から¹⁶⁾タマーイム(護符)を取り去った。ターバンをその体¹⁷⁾から除いた。それから命ずるに、「仰向けに横たえなさい!」。その体は仰向けにされた。次に師は、「二本足で立たせなさい!」。その体は立たせられた。師はさらに、「両手を伸ばさせなさい!」。しかし(それは不可能であった)硬直して(下に僅かに)落ちるばかりであった。師は口の中で舌打ちをした。そしてこう言い放った、「既に亡くなっておる。どうしてこの私に生き返らせることが出来ましょう?」。たちまち群衆が長老を襲った、掌(のピンタ)が好きなように彼を支配した。ひとつの手が振り上げられると、他の手が彼を襲いかかる有様であった。しかしそれがようやく収まると人々は(余りに遅くなった)死者の葬儀に急いで取り掛かることになった。そのどさくさに紛れて我々は二人して逃げ出したのである¹⁸⁾。

ようやくのことある村に辿り着いた。この村はワジ(涸れ川)の縁にへばり付き、サイル(洪水)に浸食されており、流水に削り取られている様であった。村民は打ちひしがれており、夜になってもおちおち眠れないようであった、そのサイルの余りの怖さによって。そこでアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師は声を掛けた、「村の皆さん、わしがこの水とその害とから救い出してあげましょう、この村から洪水の損害を除いて進ぜよう。ですからわしの言うことに従ってください、わしの許可無しに勝手に振る舞わないで頂きたい!」。村人達が尋ねるに、「あなたさまのご指示とは何で御座いましょう?」。師は答えた、「この水の流水口で一頭の黄色の牝牛¹⁹⁾を犠牲に捧げなさい。私の許に一人まだ処女の娘を寄越しなさい。そして私の後に従って(祈願の)ラクア²⁰⁾(一巡の礼拝所作)を二度行って(祈願する)のです、アッラーにこの水流の方向があなたがたの方からあの砂漠の方向に流路を変えますように、と!それでも水の流れが変わらなかったならば、わしの血を流そうが流すまいがあなたがたにとってハラール²¹⁾(許法)となりましょう」。村人等は応じた、「仰せのように致しますよう!」。彼らは牝牛を一頭犠牲に捧げた。また奴隷娘一人を師に添わせた。それから師は祈祷礼拝に入り二度のラクアを率先して行なう段になった²²⁾。

その礼拝の折、前以って村人等に指示を出して言うには、「いいですか皆さん、肝に銘じてください!キヤーム行²³⁾(立拝=立ったままの念行、ラクアの第一所作)においては、カブウ(ふらつき・よろめき)があつてはなりません。ルクーウ行²⁴⁾(膝に手を当て背を屈めての念行、ラク

dawwi / jawwi (和訳は逆順)、afwājan / azwājan、‘alīla / qīla。

- 16) 病人の手から ‘an yadi-hi: こうあるが護符は頭から吊るして掛けたものであるから、より正確には、「頭より」‘an ra’si-hi とせねばならない。後節の jasadi-hi とのサジュウを合わせるための算段である。
- 17) その体 jasadi-hi: ターバンを巻いたのは頭から頭のはずであり、その体全体ではなかったはずだ。ここでは上注と同じく、サジュウの韻を合わせるための語の選択であった。
- 18) ここまでの段落のサジュウは下線順に: yadi-hi / jasadi-hi、unīma / uqīma、yaday-hi / fī-hi / uḥī-hi、juffu / akaffu。
- 19) 一頭の黄色の牝牛 baqaratan šafrā’; モーゼがシナイ山に籠っている時、一団の人々が旧教に復しようとする異教の「黄金の牛」を作り上げた故事に基づくもの。『クルアーン』では第2章 69 節辺りにその記述がみられ、2 章ぜんたいの章題 Sūra al-Baqara にもなっている。
- 20) ラクア rak’a: イスラームのサラート(礼拝)の定まった所作儀礼、礼拝の所作一巡。ラクアは一連の念行①キヤーム行、②ルクーウ行、③スジュード行、④クウード行からなり、これを何回か繰り返す。詳細はすぐ後の本文を参照。
- 21) ハラール ḥalāl: イスラームの法規定で、禁止事項: 禁止行為はハラーム ḥarām と言うのに対して、許される事項・行為はハラールと言う。非イスラム圏のムスリムに対して、許法の肉が「ハラール」と書かれているのは良く知られている。
- 22) ここまで段落のサジュウは下線順に: yuṭarrifu-hā / yataḥayyafu-hā、layli / sayli、ma’arrata-hu / maḍarrata-hu、safrā’a / ‘adhrā’a、mā’i / šaḥrā’i。
- 23) キヤーム行 qiyām: ラクア(礼拝所作一巡)の第一所作。キヤーム qiyām とは「お互いを立たせること、競い合って立つこと」ことから「立拝=立ったままの念行」と訳される。
- 24) ルクーウ行 rukū’: ラクアの第二所作、膝に手を当て背を屈めての念行。「屈拝」と訳される。ラクアの用語は、この第二所作ルクーウの語と語根を共有している。

アの第二所作)においてはハフウ(先走って、端折って次のスジュード行に移ること)があつてはなりません。スジュード行²⁵⁾(坐ってすぐ頭を地に^つ着けての念行、ラクアの第三所作)においてはサフウ(不注意に先導者より早く頭を上げてしまうこと)があつてはなりません。クウード行²⁶⁾(座ったままの念行、ラクアの第四所作)においてはラグウ(声を出しての不要な発言・失言)があつてはなりません。もし上に述べたことで不注意なことが起これば、せっかくの我々の祈願も成就しないことになりますし、せっかくの我々の行動も無駄になってしまいます。ですから二度のラクア(の祈祷)には精一杯の努力をして、出来るだけ時間をかけて祈ってください²⁷⁾!

こう言い終えると師は第一ラクア(礼拝一巡)のキヤーム行(立拝)に入った。じつと立ち尽くしたままで、微動だにせず恰もナツメヤシの幹の如くであつた。参集者の中にはとうとう肋骨の痛みを訴える者も出るほどになった。師はつぎの(ルクウ行から)スジュード行(伏拝)に移った。(この念行も余りに長く続いたものだから)祈祷者達はその状態で師が居眠り^{ぎよう}をしているのかと思わせるほどであつた。とはいえ誰も(サフウを恐れて)頭を上げる勇氣は無かつた。と、師は最後の(礼拝一巡である)クウード行²⁸⁾に入る合図の声^{うとん}²⁹⁾を送った。それから第二のラクアに入り、スジュード行の段にまで至った。すると師は私に目配せをして、即座に退去しワーディー目指して一目散、スジュード行に没入している村人を後にしたのである。その後彼らがどうなったのかは関与していない³⁰⁾。

一息入れたところでアブ・ル・ファトフ師は意中を詩で次のように詠じた:

例え我が如き者なれど おおアッラーよ疎遠じ召されるな

lā tub‘idi llāhu mithlī

他に我が如き者探そうとでも 何処に居ると言われる 何処に

wa-ayna mithlī aynā

民草の愚直なるは誰のせいぞ ひとえに神の成せる業ならんや

li-llāhi ghafflatu qawmin

許容の範囲と心得ていと簡単しと邪心成せし我

ghanimtu-hā bi-l-huwaynā

民草のさかんなる善意一心に享受するなり

iktaltu khayran ‘alay-him

虚言偽装を秤に掛けて混ぜてはおれど

wa-kiltu zūran wa-maynā

(mujtathth ムジュタツス詩型、nūnīyya n 脚韻詩)

25) スジュード行 *sujūd*: ラクアの第三所作、坐ってすぐ頭を地に^つ着けての念行。「伏拝」と訳される。敬虔な人ほどこのスジュード行が熱心で時間をかけるため、額に青いあざが出来る。これをアッラーマ・ツスジュード ‘allāma al-sujūd と言って、尊ばれる。シーア派では額が地面に当たる位置にトゥルバ Turba (イマーム・フサインの流された血の混じった土で製せられた額づき石)を置く習慣がある。

26) クウード行 *qu‘ūd*: ラクアの第四所作、座ったままの念行。俯いて瞑想の態。己の諸行の反省、神への赦しおよび祈願を念ずる。ラクアの中では最も時間をかける「座拝」である。

27) ここまでの段落のサジュウは下線順に: *kabwun / hafwun / sawhun / laghwun*、‘āṭilan / bāṭilan。

28) クウード行 *julūs*: クウード行の原語を用いずに、ここでは「座拝、即ち坐って念行を行うこと」を意味する代義語を用いている。前節の *ru‘ūs* に韻を合わせるためである。

29) 合図の声 *takbīr*: ラクアの各所作に移行する時、イマーム(導師)が後ろに並ぶ礼拝者達に掛ける唱句。「アッラーフ アクバル(神は至大なり)！」と唱える。大きなモスクでは、遠くの礼拝者達にも聞こえるようにアザーンを唱えるムアッジンが、これを大声で復唱して念行に耽る信者に報せる。「合図の声を送る」動詞がカッバラ *kabbara* である。

30) ここまでのサジュウは下線順に: *jiz‘i / ḡil‘i*、*sajada / hajada*、*ru‘ūsī / julūsī*。

第 21 話 モスルのマカーマ 完

第 21 話 訳者解説

本話は二つのストーリーより展開され、その独創性は以前の作品には無い著者の才能のパディーウ（奇才）の一端を示している。前半は盗賊に会って着のみ着のままとなった主人公と語り手。また「旅」と「盗賊」、この手法でマカーマを進展させる。二人がある村に辿り着くと、死者の出た屋敷に出くわす。主人公アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師は死者に触れて、死んではない、自分が生き返らせよう、と言って名ばかりの護符を用いた処方を行なう。そして二日間はそのままにしておくようにと命令。この死者が蘇えるという報せに村人達は喜び、返礼の金品を山と行なう。逃げ出す機会が無く二日の期限が切れる。護符療法の結果いかに問われると、まだ効果が出ていないからもう一日待ちなさいと言う主人公。これに対しては、もう待てないという最後通牒を突きつけられる。往生した主人公は名ばかりの処方を行なって、既に死んでいるのだから手の施しようが無い、と突き放す。この時既に覚悟は出来ていたのであろう、怒りの拳が雨あられと降り注ぐ。村人達は死後すぐに行うべきであった葬送儀礼に立ち急ぐ。そのどさくさに紛れて、主人公と語り手はその場をすり抜けて難を逃れる。

なんとも呆れた筋立てである。しかし物語としては面白く、表のイスラームとは異なり護符などに頼る埋もれた裏の民衆次元の民間信仰の一端を開示してくれた出来栄えは評価出来よう。その一方で死後の葬制が、表のイスラームもおちよくられた格好でまな板に載せられている。亜熱帯地方に誕生したイスラームは、その気候にマッチした文化を持つものである。死者が出た場合朝ならば午後には埋葬に入るし、午後以降の死者ならば翌朝には埋葬される。即ち、死後の死体処理は速やかであり、そうでないと死体の腐敗が急速に進んでしまうことになる。しかし埋葬に急ぐ余り、死んでもいないのに埋葬されたケースも多々あった。埋葬された死者が息を吹き返し、もがき苦しんだ死体が、次の死者が出て墓穴を掘ったら露となったということもあったのである。実際、この著者アル・ハマザーニー自体そのようにして死後発見されたのだから！……（著者の生涯の項を参照）なんとも縁か罰かが織り成す現実味を帯びた話ではある。

しかしだからと言って〔師が答えるには「人間は死ぬと、腋の下が冷たくなるものです。この方は、私が触診したところ、まだ生きておられることが分かったのです」。すると会衆者も手を死者の腋の下に差し伸べて、口々に言うのであった、「本当だ、あの方の仰るとおっしや……!」〕と言う部分は、実際を考えてみて、どのようにして温めたのであろうか、体温のなくなる死体の最後の温度のある部所と考えて、納得せねばならないのであろうか。死者の冷たさは、親族や知人の死に目に遭った者ならば誰も知っていよう。否、人間だけでは無い、ペットや家畜の死に立ち会ったものならば、「生き物」とは体温の存在を確認させられ、「生」の意味合いを自問自答せられるはずだ。Monroeによれば、この部分 ibt（腋の下）ではなく、ist（尻、肛門）ではないか、その部分ならば体温が計られる部分なのであるから、としている（*The Art of Badi'u 'l-Zaman al-Hamadhani as picaresque narrative*, p. 136）さらには、もう一つ臍に落ちないのは死後三日たった遺体の腐敗状況である。この点は一切の言及が無い。物的処方は最初というか、死後すぐに「オリーブオイルを口に舐めさせた」だけである。それだけで死後三日の間を生者と看做させるのは不可能である。三日後に遺体を立たせたりしている。我が国の落語の「看看踊り」を想起させるここにトリックの発想を生かして、現実味を加味したならば、本マカーマへの評価もさらに上がった

たものとなろう。

後半第2のストーリーは、^は這う這うの体で逃げ延びた先は一寒村であった。アブ・ル・ファトフ師は再び詐術を用いる。これが逆らえぬ性^{きせう}と言うものであろう。しこたま資金をえているのに、ついついいつもの習性が出てしまうのである。この村はサイル（洪水）の恐怖に怯えていたのだ。洪水の流路を砂漠のほうに変えて、削り取られてゆく村を救おう、その手立てはある、と持ち掛ける。「この水の流水口で一頭の黄色の牝牛を犠牲に捧げなさい。私の許に一人まだ処女の娘を寄越しなさい。そして私の後に従って（祈願の）ラクア（礼拝の所作一巡）を二度行うのです、アッラーにこの水流の方向があなたがたの方からあの砂漠の方向に流路を変えますように」。主人公が余ほど聖者に、権威有る者に見えたのであろう、村人達はこの申し出に従った。牛肉と娘一人を主人公は稼ぎ獲ったことになる。娘とは勿論自由の身である者では無い。原文は jāriya とあるから、売り買いの出来る奴隷のことであろう。そしておそらく黒人の若い娘のことであろう。地元を離れたならすぐに売り飛ばす算段であったろう。そしてその後の遁走方法はイスラムの礼拝儀礼を巧みに利用したものである。「師は最初のラクアのキヤーム行^{きやう}に入った。じっと立ち尽くしたままで、微動だにせず恰もナツメヤシの幹の如くであった。参集者の中にはとうとう肋骨の痛みを訴える者も出るほどになった。師はつぎの（ルクーウ行から）スジュード行に移った。（この行も余りに長く続いたものだから）祈祷者達はその状態で師が居眠り^{きみり}をしているのかと思わせるほどであった。とはいえ誰も（サフウを恐れて）頭を上げる勇氣は無かった。と、師は最後のウクード行に入る合図の声を送った。それから第二のラクアに入り、スジュード行の段にまで至った……」。

ここに見られる礼拝所作は、日に5度の義務礼拝ではなく、何か日食とか旱魃とかの特別の祈願のための祈祷である。ここでは洪水の流路を変える祈願のための祈祷である。ラクアも2回が普通で、その所作の一つ一つも十分時間をかけるものであった。上に見た如く集団礼拝にもルールがあり、イマーム（先導者）に従わねばならず、勝手に次の所作に移ってはならないのである。1回目のラクアをたっぷりとして、それで2回目のラクア手順はもっとゆっくりしたものになろうと、参集者に思わせておいての遁走であるから、細工は流々であったわけである。おそらく犠牲となった牛の肉と娘奴隷をどこかに隠^{かく}しておいて、攫^{さら}う様に遁走劇に入って行っただけであろう。Monroue（同上書 p. 137）はこの娘と実際結婚し、その後このシーンに入って「おいてけ堀」を食らわせた、と解釈している。「村人の誰かが娘を嫁がせる」と言う前提に立ったならば、この簡単すぎる記述ではとても済まされまい。Anttila (*Maqama: A History of Genre*, p. 116) はさらに M. ‘Abduh およびそれに準拠した Prendergast のテキストは wa-ftaḍḍa-hā（彼女の真珠に穴を開けた、封印を切った、処女を凌辱した）の語句が省略されている、としている。たしかに M. ‘Abduh は性表現を嫌い、それをテーマとしたマカーマ1篇をこの全集から削除してしまっている。こうしたところを観ると、Anttila のそれも首肯できよう。何よりも「処女＝初物」にはいろいろな民俗学的意味合いがあり、洪水の「流路」を変える意味合いでも相関していることは考えられる。

最後の件で、例によって語り手がこの二つの詐術行為（それらは信心を弄び、軽んずる詐術であった）に対して主人公を批判する断章があるはずであるが、それを端折って、いきなり大団円の主人公の弁明の詩行に移る。自分をこうさせて成功に導いたのは、衆愚のせいで、衆愚にしたのは誰なのかと、才能ある自分はずっと悪事は働くことが出来たが、良心から程ほどに留めた旨が詠われる。ある意味ではイスラムを愚弄する対応ともいえようが、往時のイスラムの寛容性が奈辺にあったか、今も変わらず「背に腹は代えられぬ事態」に陥った場合^{ばう}の対処法の一端を示す事例とも受け取ることが出来よう。細部に至ると現実との乖離があり、檻樓^{ぼろ}がだいふ出ること

なるが、大筋の発想、ストーリーの展開は、著者アル・ハマザーニーの才能を感じさせる一篇となっている。

本マカーマの形式については、語り手も共犯者で、同道しているのであるから、中入り後の口上も欠如するのはやむを得ないところがある。しかし単なる同伴者であって、全くの傍観者とさせているのはどうであろうか。また二場続きの本舞台に詩句の挿入が両方に欠如しており、見せ場での詩への演出による高揚の欠如という点で悔やまれる。後舞台で初めて主人公の申し開きの詩が3行記されて、辛うじて体裁を保っている。サジュウへの配慮は全編貫かれている。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では第8話に、Sofya 版では第20話に、そして Paris 版では第15話に配され、題名も Maqāma al-Mayt (死者のマカーマ) としている。

第22話 マディーラ¹⁾のマカーマ うんざりした講釈、食わず終いの挙句の果ての不運

(原文 M. 'Abduh pp. 104-117)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、以下のような話をした：私がバスラにいた時のことだった、一緒にはあのアレクサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師であった。あの御仁は、それを呼べばそれが彼に答える (tuḡbu-hu)「雄弁 (faṣāḥati)」の人、それを彼が命じればそれが彼に従う (tuḡf'u-hu)「修辭 (balāghati)」の達人であった。ある時のことだった、我々はさる商人の招きに応じて同席した。我々の前にマディーラが運び込まれてきた、ハダーラ²⁾の民にとっては殊の外^{ほか}好まれ、大皿の中で揺れており、健康に良いとお墨付きの (あの食べ物が)。そしてカリフ・ムアーウィア³⁾——アッラーよ彼に慈悲を垂れたまえ！——そのカリフの地位を約束させた食べ物であり、それがカスア (十人用木製) 大椀に入れられ運ばれて来ると視線が釘付けになり、美味さ (の食欲) が掻き立てられる⁴⁾。

マディーラが食卓にその場所を占め、皆の心に食べ始めようという機運が熟した刹那、アブ・ル・ファトフ師が座を立ち、何とマディーラを呪い、その提供者をも誘^{そし}るではないか！マディーラに、またそれを食^{のし}する者に嫌悪を示し、それを罵り、その料理人までを罵倒するではないか！始めは師の冗談かとも我々は思ったが、事態は全く逆^のであって、冗談どころか大真面目であったのだ。師は食卓から身を引くと、同席者の宥めるのも聞かなかった。仕方なくマディーラを下げてもらったのであるが、我々の心は未練がましさが募った。皆の目は恨めしそうにその後を追いかけて、□にはそれを思っ^もて生唾が流れた。唇は思わず舌なめずりを許していた。マディーラに対しては一旦肝臓 (= 食欲) には火が点けられ⁵⁾ たわけであったから、心臓 (= 残念の思い) はただその後を追うだけであった。ともかくも我々は師が退席^のしたことに付き合わねばならなかった。(その場を一旦離れた後で、) すぐにこの事態は一体どうしたことかと師に尋ねた。師が打ち明けるに、「マディーラに纏^{まと}わる我が一件は、そのことで被^{こうむ}った我が不運より長い話になるわい。そなた達にこの顛末を話したら嫌悪感を抱くようになるだろうし、時間の浪費とはこのようなものと感ずるは必定」と。そこで我々はお願ひした、「それは是非お聞かせ願ひたい！」と⁶⁾。

- 1) マディーラ maḏīra:「酸乳肉汁」。舌を刺すぐらいの酢の効いたマディーラ maḏīr (酸乳) を用いる。水は一切用いずマディーラのみで大きな肉塊を煮る。マディーラが煮縮まって足りなくなってきたら、ハリーブ (鮮乳・生乳) を何回も注ぎ入れて肉塊が解れて来るまで煮込む。これに薬味をつけて食べる。元来バダーワ (砂漠) の民ベドウィンのハレの食べ物であったが、肥満を託つハダーラ (定住) の民も滋養とヘルシーとから食べるようになった。肥満で健康を気遣ったカリフ・ムアーウィヤがこれを好んだのも尤もである。預言者の教友アブー・フライラがこれを殊の外好んだことが知られる。マディーラはマディーラ (酸乳) の女性形で、ここではその産物「酸乳肉汁」を表わす。「酸乳」は現在はハーミド ḥamīd と言われ、ハリーブ (鮮乳) ではなく腐敗してしまうので、保存の効く「酸乳」にすることも多い。
- 2) ハダーラ ḥaḏāra: バダーワ baḏāwa (砂漠=遊牧) と対立する概念で、ハダーラとは「移動はせず、定住していること」。baḏāwa (砂漠) のニスバ (形容詞形) がバダウィー baḏawī (砂漠の民) であり、訛ってベドウィンになった。対立概念はハダリー ḥaḏārī (定住の民) で普通は「都市民」を指す。
- 3) カリフ・ムアーウィア Mu'āwīya: ウマイヤ朝の開祖 d. 60/680。父アブー・スフヤーンの後を受け、メッカの名門ウマイヤ家を統率した。ムアーウィアは色好みで無類の大食漢であった。体調保持のこともあって、とくにこのマディーラが好みであったことが知られている。
- 4) ここまでの冒頭段落のサジュウ (脚韻技法) の単語は下線順に: maḏīrat / ḥaḏārat / ghaḏārat / salāmat / imāmat, tarfu / zarfu。
- 5) 肝臓には火が点けられ ittaqadat la-ha l-akbādu: アラブの常識では「肝臓は感性・感情を支配する所、心臓は理性を支配する所」と考えられていた。ここでは肝臓が「食欲」を、心臓が「諦念」を表わそう。
- 6) ここまでの段落のサジュウ (脚韻技法) の単語は下線順に: makāna-hā / awṭāna-hā, (ṣāhiba-hā / ākila-hā / ṭābikha-hā?), ḏiddi / jiddi, khuwāni / ikhwāni, afwā-hu / shifā-hu, akbādu / fu'ādu, hajri-hā / amri-hā, maqt / waqt。

師は次のように語りを切り出した：わしがバグダードに滞在していた折、そこのある商人がマディーラの食宴に招いてくれたことがあった。その商人なのだがしつこく言い寄って来おって、まるで借金取りか、ラキームの人々⁷⁾の犬のように付いて離れないのだよ。仕方なく商人の要請に応じ、連れ立って出かけたわけであるが、その道すがら自分の妻のことを褒めちぎり通してあった。彼が言うに自分の心臓の血を犠牲に捧げても良いという程であった。その家事を切り回す上手さ、料理の腕自慢をあれこれ述べ立ておった。それから言うには、「旦那！旦那に女房をお目にかけたいものだ、前掛けを腰に巻いて、部屋との間をキビキビと立ち回る。焼き釜⁸⁾から煮炊き鍋へ、煮炊き鍋から焼き釜へと、口から息を吹きかけ火を煽ったり、その手で薬味を叩いて潰したり。煙が上がり（咽て）あのきれいな顔を崩したり、滑らかな頬を歪めたりしたところをだんなが御覧になってくれたらなあ！そうすればきっと目が幻惑されるような光景が展開されることだろうな！それに女房が私を愛してくれているように私も女房を愛しております。男の幸せって伴侶の良き協力があってこそですよ、奥方からの助けがあってこそですよ。それにも増して女房が同じ土から出来上がっておるんですもの⁹⁾。姻戚関係で言いますと女房は父方叔父の娘と言うことになります。と言うことは彼女の土は私の土、彼女の生まれた場所は私の生まれた場所、彼女の叔父達は私の叔父達、彼女の根は私の根でもあるわけです。けれども性格は女房のほうが私より心が寛いし、器量も優れておりますね」¹⁰⁾。

こうしていやというほど彼の妻のことを聞かされてから、漸くのこと彼の住む一角に着いたのだよ。そうすると商人はこの住居区の講釈を今度はのたまひ始めたのだ、「旦那、この一帯を御覧ください、バグダードの中では最も見晴らしの良い地域で、選ばれた人たちがここを住居地にと競うほどの所です、名士達が住み替え地にと望むところなんですから。でも住めるのは大商人達だけです！ほんとに人はその隣人に依る¹¹⁾、といますからね。我が家はですね、この一角を首飾りと見たてれば、そのど真ん中にあることになります。この一角を円に見立てればその中心点といえましょう。この辺りの一軒一軒が、旦那、どのくらいの建築費が掛かっているとお思います？およそでいいから言ってみてください、確信はもてなくても結構ですから」。そこでわしは、「それは相当な額だろうな」と答えると、商人の曰く、「スプハーナッラー（神に讃えあれ＝お生憎さま）！その誤りは何と大きいのでしょうか（＝全くの見間違いです）！旦那は相当の額とだけ仰いましたな」。こう言って商人は深い溜め息をついた。そして言うには「何事も知り給う方に讃えあれ！」¹²⁾。

ようやくのこと我々は彼の邸の玄関に辿り着いた。商人はまたもやわしに家のことでも講釈を垂

7) ラキームの人々 *aṣḥāb al-raqīm* : *Ahl al-Kahf* 「洞窟の人々」として知られる伝説で、ローマ時代まだキリスト教が禁教であった頃、隠れキリスト教徒の数名がその弾圧を逃れ山中の洞窟に避難して一夜を過ごす。一夜明けてみたら 300 年たっており、キリスト教が公認されていた。洞窟を降りた彼らは聖人として扱われる話である。この逸話はイスラム世界でも知られており、『クルアーン』にも取り上げられ、第 18 章では「*al-kahf* (洞窟)」の表題のもとに扱われている。ラキームはこの人々に忠実にどこまでも従った犬とされているのが有力説である。著者は洞窟名、または洞窟があった地名と考えていたようだ。近代エジプト作家 T. アル・ハキームも同名の戯曲を書き、時とそれに逆らう生命との葛藤を描いている。

8) 焼き釜 *tannūr* : 現在でも用いられているこの語は、古くアッシリア語テヌラ *tenura* に発し、オリエントの諸語に採り入れられた。古代ペルシャ語では *tanura*、ヘブライ語では *tannūr*、アラビア語にはシリア語を経て借用された。

9) 女房が同じ土から出来上がっておるんですもの：以下の記述から分るように、「同じ血」と同義。アラブの花嫁候補は第一に、父の兄弟の娘 (*bint al-'amm* 小父の娘) であった。すなわちいとこ婚が推奨された。

10) ここまでの段落のサジュウ（脚韻技法）の単語は下線順に：*gharīmi* / *raqīmi*、*zawjati-hi* / *muhjati-hi* / *ṣan'ati-hā* (*tabkhi-hā* / *ra'ayta-hā* / *waṣṭi-hā* ?)、*dūri* / *qudūri* / *tannūri*、*nāra* / *abzāra*、*jamīli* / *ṣaqīli*、(*sa'adat* / *musā'adat* ?)、*za'īnati-hi* / *ṭīnati-hi*、*ṭīnati* / *madīnati*、*'umūmati* / *arūmati*、*khuḷqan* / *khalqan*。

11)ほんとに人はその隣人に依る *innamā l-mar'u bi-l-jāri* : 我が国の「人は隣人を見れば分かる」と同義。直訳は「まこと人は隣人によって」である。

12) ここまでの段落のサジュウ（脚韻技法）の単語は下線順に：*zawjati-hi* / *mahallati-hi*、*nuzūli-hā* / *ḥulūli-hā*、*tujjāri* / *jāri*、*qilādati-hā* / *dā'irati-hā*、*takhmīnan* / *yaqīnan*、*ghalaṭ* / *faqaṭ*、*ṣu'adā'* / *ashyā'*。

れ始めたのだよ、「これが我が家です、旦那、この窓にしたところでどのくらい費やしたとお思いで？ 誓って申しますが、尋常な額¹³⁾では御座いません、貧乏人^{たぐい}にはとても払える額ではありません。この技と形を如何お思いで？ 誓って申しますが、このような類を見たことがおありですか？ ここに凝らされた芸の細かさを御覧ください、この曲がりの見事さを考えてみてください、コンパス¹⁴⁾で描いたようではありませんか。そしてこの扉にしたところで、その技において大工の見せ所を御覧ください。どのくらい（高価な板張り）のものを使ったことか¹⁵⁾。おっしゃってください何処から仕入れたとお思いで？ これは一枚板のチーク材¹⁶⁾ですよ、虫食い（＝傷）や腐食は全くありません。動かせばよく軋み、ノックされれば響きよい音を発します¹⁷⁾。旦那、誰が請け負ったとお思いで、それを請け負ったのはバスラのあのアブー・イスハーク・イブン・ムハンマド¹⁸⁾ですよ。綺麗な衣類を纏い（＝汚れ無き名声を得て）、扉を工作するに目利きであり、やる動作の手の何と軽やかなこと！。その男の乳が一杯なのは神のお蔭なんです（＝その職人のなんと立派なこと）！¹⁹⁾ 我が命に誓って、このような仕事を任せられるのは彼を措いてありません。そしてこのノッカー（*halqa*）ですが、御覧ください、骨董（＝希少品）市のイムラーン骨董屋からムイッズ金貨²⁰⁾ 3枚で私が購入したものです。この円形ノッカーには、旦那、どのくらいの真鍮（*shabah*）が含まれるとお思いで、6ラトル²¹⁾ (3kg) も含まれているんですよ。そのお蔭で留め金（*lawlab*）の中でよく回りますよ、アッラーに誓って、どうぞ回してみてください。それを回して、どのような御覧になってください。我が命に誓って、旦那もノッカーを買うんでしたら、彼以外から買うべきではありません。彼は値打ち物しか売りませんから」²²⁾。

それから商人は扉を叩いた、こうしてわしらはディフリーズ²³⁾（玄関、またはそれに続く間）に入ったのである。彼が言うには、「おお我が屋敷よ、アッラーが汝を永らえますよう！ おお我が壁よ、アッラーが汝を崩しませんよう！ 汝の壁面の何と強固なことか、その作りの何と信頼に足ることか、その基盤の何と力強いものか！ それから屋敷のあの階段のことですが、アッラーに誓って、旦那とくと思ひやってみてください、この屋敷の入り口から出口までとくと確かめてほしいもので

13) 「窓」と「尋常な額」とは共に *tāqa*、同音異義語である。前者は *shubbāk* 「格子窓」と、後者は *istitā'a* 「能力、限度」と同義とされる。

14) コンパス *birkār*；ペルシャ語 *pirkār*、または *pirgār* からの借用語であり、現代ではバイカール *baykār*、またはピーカール *bikār* と呼ばれている（複数形は *bayākīr*, *bawākīr*）。

15) どのくらい（高価な板張り）のものを使ったことか *ittakhadha-hu min kam*；直訳は「彼はそれをどのくらいから取ったことか」で、最後に *haw* と言う疑問詞を出して文を閉じている。*haw* の後を相手に言わそうとしているか、注意を引こうとしている言い回しである。補うと *min kam lawhīn* (*haw many boards*) または *min kam qit'atī lawhīn* (*haw many pieces of boards*) となろう。

16) チーク材 *sāj*；このアラビア語はサンスクリット語の *saka* から借用された。チーク材はもっぱらインド産であった。

17) 動かせばよく軋み、ノックされれば響きよい音を発します；「軋む」の原語 *anna*、「音を発する」の原語 *ṭanna* はいずれも擬音から由来する。わが国では軋む音は「ギー」であろうが、アラブは「アニーン *anīn*」と、そして「音を発する」はここではドア・ノッカーであるので「トントン」となろうが、「タニーン *ṭanīn*」と聞きなす。

18) アブー・イスハーク・イブン・ムハンマド；この人物は当時この辺りで大工として有名であったものか、全くの虚構の人物であろう。何の注釈も無い。後述の「骨董市のイムラーン骨董屋」も同様。

19) その男の乳が一杯なのは神のお蔭なんです *li-llāhi darru dhālika r-rajulī*；（その職人のなんと立派なこと）！ *darru* 乳ラクダが予想以上に乳を出すことを言い当てており、それが感嘆符に繋がった。彼は何と立派な人か！との表現法は、*li-llāhi darru-hu*、即ち「その男の乳が一杯なのは神のお蔭である」となる。

20) ムイッズ金貨 *danānīr mu'izziyya*；ブワイフ朝のスルターン・ムイッズッダウラ（在位 334-56）の発行した金貨（*ḍīnār*）。従来の物より金の純度が高く金貨としては良質のものであった。

21) 6ラトル *sitta artāl*；重さの単位ラトル *ratl* は時代地域により多少の違いがあるが、0.5 リットル、0.5 キログラムとされる。

22) ここまでの段落のサジュウ（脚韻技法）の単語は下線順に；*tāqati / tāqati / fāqati*, *shakla-hā / mithla-hā*, *birkāri / najjārī*, *anna / ṭanna*, *athwābi / abwābi*, *ʿamali / rajulī*, (*tarāʿif / tarāʿifi* ?), *dawwir-hā / absur-hā*, *halaqa / a'lāqa*。

23) ディフリーズ *dihlīz*；玄関から続く通路、またはそれに続く部屋をいう。ペルシャ語の *dālīj* または *dālīz* からの借用語。

す。そうして私に尋ねてみてください、どうやってこんな（豪邸を）を得たのか、どんな策略を以ってそれを自分の所有とできたか、（これから述べる私の説明で）旦那が納得する前に²⁴⁾。

実はですね、私にはかつてクンヤ（尊称）をアブー・スライマーンと称する隣人が居りました。同じこの一角に居を構えておりました。彼には家畜囲いに収容しきれないほどの動産（＝ 畜牧）がありましたし、どのくらいか算定出来ないほどの沈黙物²⁵⁾（＝ 財産）を所有しておりました。しかし彼は程なく亡くなってしまいました——アッラーが彼に慈悲をたれ給わんことを！——。彼の一人息子が後を継いだのですが（これが放蕩息子でして）、財産を酒と音曲に乱費して、さいころや博打に湯水のように使い果たしてしまうのです。私は恐れたものです、こうしたうち続く出費の催促はやがて邸を売り渡すことになるのではないかと、苛立ちが高じて（＝ 背に腹は代えられぬとばかりにどんな値であろうと）実際売り渡すことになるか、あるいは（逆にどうにでもなれと居座って零落したまま）朽ちるにまかせるか。そうなれば思うにあの豪邸を買おうとする私のチャンスの芽を摘んでしまうことになる。それに対する慚愧の念ときたら私の死ぬ日まで延々と続くことになると。そこで（担保とすべく）私は当座は必要としない衣類を選び出して、それらを彼のところへ持って行き、彼に差し出して、それらを「付け」でよいかから買わないかと持ちかけたのです。逆境の男はそれを受け入れて、付けを恵みの品と受け取ったようなんです、後払いとされた債務者は贈り物と思いをしていたようなんです。ついで私は財産をつぎ込んで信用貸しにして彼の金の無心に応じる（一方）証文を求めました。彼も承知して、私に対して証書に認めてくれました。その後暫らくは彼に債務請求するのを猶予していましたが、遂に衣の端が殆んど擦り切れる彼の状態を見るに及んで、（時を逃すまいとばかりに）彼のところへ出かけ、負債を支払うよう催促しました。彼は時間の猶予を求めて来ましたので、しばらくは私も待つことにしました。彼はそれ以外にも更に別な衣類を求めてきました、そこで私のほうも要求に応じました。そして彼の家を私への担保にするよう、私の手への保障となるよう条件を出しますと、彼も承知しました。そこで私の方も段階を追って手続きを執行し家の買収に持ち込み、遂に首尾よく我が持ち家とすることが出来ました、幸運にも助けられ、また己の凄腕をも利かせたわけですがね。全く「坐って居る者に対してどれ程骨を折って働く者がいることか！」²⁶⁾ってこのことですよ。アッラーの御蔭で私は運が良かったんです、このような事例では私は推奨されるべき者ですよ。この一件はこれで良いですね旦那！²⁷⁾

それですね、それから随分経って我が家の住人達と共に就寝していたある夜の事です。玄關の扉を叩く音がしました。私が出て外に声を掛けました、「夜旅の方で御座いますか、順繰りにやって来られる？」。するとどうでしょう、女性が立っているではありませんか、真珠の首飾りを手を持つ

24) ここまでの段落のサジュウ（脚韻技法）の単語は下線順に：dāru / jidāru, hītāna-ki / bunyāna-ki, ma'ārija-hā / khawārija-hā, ḥaṣṣalta-hā / iḥṭalta-hā。

25) 動産 māl でもラクダや羊などの家畜類はナーティク nātiq（声出すもの）と言い、一方金銀や宝石などの貴重品類はサーミト šāmit（沈黙するもの）といて区別している。遊牧アラブの発想もこうした点に反映している。

26) 「坐って居る者に対してどれ程骨を折って働く者がいることか！」rubba sā'in li-qā'idin；この諺を最初に公にしたのはブレ・イスラム期の大詩人ナービガ al-Nābigha al-Dhubyānīだとされている。彼はイラクのラフム朝のヌウマーン王 al-Nu'mān ibn al-Mundhir の王宮に部族代表として派遣された。アブス族の代表にシャキーク Shaqīq なる人物がいたが、途中で急死してしまった。ヌウマーン王はシャキークを憐れんで、使命を果たしたとして他の訪問団のものと同等のヒパーウ (hibā' 外交用外套) を与えたと言う。このヌウマーン王の寛容ぶりとシャキークの無念振りが報われたことに対して、ナービガが「坐って居る者に対してどれ程骨を折って働く者がいることか！」と賛辞を送った。（『諺言集』Maydānī. I 299, 'Askarī I 479, Zamakhsharī II 95）

27) ここまでの段落のサジュウ（脚韻技法）の単語は下線順に：khaznu / waznu, khamri / zamri / qamri, iqtīrārī / dārī, ḡajārī / khaṭārī, arā-hā / shirā-hā, ḥaṣarātī / mamātī, ilay-hi / 'alay-hi, nasiyyatan / 'aṭiyyatan / hadiyyatan, (mālī / li ?), (iqtīdā'i-hi / aḥḍartu-hu ?), (iqtādaytu-hu / anẓartu-hu ?), ladayya / yadayya, sā'idin / musā'idin / sā'idin / qā'idin, majdūdun / maḥmūdun。

て！その真珠の艶肌^{つやはだ}ときたら水滴のようで、その繊細さときたら蜃気楼のような。女性はこの首飾りを売りたいと差し出してきたんです。彼女から奪^ううようにそれを手にとると安い値段で叩いて買付けました。これはやがて明らかな利益が、十分な得^{もうけ}が出るやつですよ、神のお助けがあれば、旦那のお力添えがあれば！こんな話をわざわざ旦那にしますのも商売^{しょうばい}において私の采配が幸運にも恵まれていることをお伝えしたかったんで。ほんと「運が付いていれば石からすら水を得る」²⁸⁾です。アッラーフ・アクバル（有難いことで！）！自分自身ほど本当のことを己に告げているものはありません、また昨日^{きのう}の自分ほど己に身近であるものはありませんですからねえ²⁹⁾。

このハスィール（敷きマット）なんですけどね、ある競りで購入したものなのです。由緒あるフラート家³⁰⁾の屋敷の家財でして、その折の差し押さ^{さしおさ}えと没収時に出たものでしてね。このようなやつを長い間捜し求めていたんですけど容易には手に入りませんでした。「時孕めり、されど何産むか皆目知れず³¹⁾」ですよ。たまたまタークの門³²⁾を通りかかった時スークに陳列されて競りにかけられておりましたので、ディーナール（金貨）でこれこれと値踏みして買い取りました。アッラーに誓って申しますが、このハスィールの精巧さ、柔らかさ、出来の良さ、色調の素晴らしさをとくと御覧ください。評価が高いはずですよ。これに類した物などあったとしても稀でしょう。ハスィーリー（マット職人）であるアブー・イムラーンのことをお聴きして頂いていたらなあ！これは彼の作品ですよ。彼には息子があって、今はその息子が継ぐべく店にありますよ。ハスィールの逸品が見出せるのは彼のところを措いてありません。我が命に懸けてハスィールを購入するのは彼の店を措いてありません！「ムウミン（心からの信仰者）は彼の信仰の友の忠告者である」とは上手く言ったものですな、特に会食で同席を許された者には！³³⁾。

その商人が話しかけて続けるには、「さてマディーラのことに話を戻しましょう、お昼の頃合いも近付いたようですから」。そして召使に命じおった、「これ、タスト（手洗い受け器）と水をこれへ（持ってきたさい）！」。そこでわしは言ってやった、「アッラーフ・アクバル（やれやれ）！それより近付いたのはようやく救出される時のほうのようだ。逃げ出す方がやさしいわい」。と、ところが召使が立ちはだかつてきた。商人は相変わずの口調であった、「この（白人奴隷の）召使を見てください。ルーミー（ギリシャ人）でして、育ったのはイラクです」。「これ召使よ、前へ出て頭から被り物を取りなさい、脛まで裾を上げなさい、そして肘まで手を出して見せなさい。齒も見えるようにしてみなさい。（身体の）前を、ついで後ろも見せなさい」。召使は言われた通り振舞った³⁴⁾。商人はさらに続けた、「アッラーに誓って、この召使いを買入れたのは誰だと思いで？

28) 運が付いていれば石からすら水を得る as-sa'ādātu tunbiṭu l-mā'a mina l-hijārat；石や岩は中の物をがっちりくえ込み、外に出そうとしない。こうしたことから「ケチ・しみつたれ」の代名詞になっている。

29) ここまでの段落のサジュウ（脚韻技法）の単語は下線順に：al-bābu / al-muntābu, la'ālin / ālin, khalsin / bakhsin, zāhirun / wāfirun, tijāratī / hijāratī, nafsi-ka / amsi-ka。

30) フラート家 Āl al-Furāt；一世紀前のバルマク家と同様、カリフの大臣として手腕を発揮した一族。祖父ムーサー、父ムハンマドの後を継いで、四兄弟アブ・ル・アッパース・イーサー、アブ・ル・ハッターブ・ジャアファル、アブー・イーサー・イブラーヒーム、アブ・ル・ハサン・アリーと活躍した。最後のアリーの事例は興亡の極と言って良いだろう。第18代カリフ・ムクタディル（在位908-932）に三度乞われて宰相となり、924年三度目の失職に会う。横領罪で、そのときの財産は現金百万ディーナール（金貨）、土地収入も年額百万ディーナールであったという。息子アブ・ル・マハーシンと共に死罪となる。この折の家のとり潰しの混乱の出来事とひっかけてここで引用したのであろう。

31) 時孕めり、されど何産むか皆目知れず ad-dahru hublā laysa yudrā mā yalid；出産というものは、時が来れば出来するわけであるが、何が如何出て来るのかは予測は不可能である。男か女か、それとも死産か、母体は大丈夫かなど。

32) タークの門 Bāb al-Tāq；バグダードを開く市門の一つ。

33) ここまでの段落のサジュウ（脚韻技法）の単語は下線順に：munādātī？ / furātī / muṣādarātī / ghārātī, ajidu / yalidu, tāqi / aswāqi, qadri / nadri, dukkāni-hi / ikhwāni-hi / khuwāni-hi。

34) この辺りの描写および主人公が逃げ出して殺傷事件を事件を起こして牢獄暮らしに至るまでの件を、J. Hameen-Anttila は『旧約』や『クルアーン』に記される「ヨセフ物語」に類似性を見出している。ホストをボテファルに、

あのアブ・ル・アッパース³⁵⁾が奴隷商から買い入れたものですよ。これ、タスト（水受け）をそこに置いて、イブリーク（首長の水差し）を持って来なさい！」³⁶⁾。

召使は言われた通りそれを持ってきて主人に手渡した。商人は受け取ると、（脇において、先ず手許にあったタストのほうから吟味を始め）それをひっくり返したり回して眺め、叩いて音を確かめていた。それから言うには、「この真鍮を御覧ください、炎の芸術品、或いは黄金と紛うばかりの出来ではありませんか。原料はシリア産の真鍮で、製品はイラク製と言うことになります。決して使い古した逸品と言うわけではありません。王侯の宮廷に備えられ、時には使われたでしょうが。この見事さをとくと御覧あれ、そして私に尋ねてください、“何時お買いなされた？”」と。これを買ったのは、確かあの飢饉の年でしたよ、そうした時を待っていたものですよ³⁷⁾。「これ、イブリークをここへ」。召使がそれを主人の手許に寄せると、それを受け取り、ひっくり返してから言うには、「このイブリークは注ぎ口まで継ぎ目がありませんよ！このイブリークは下のタスト（水受け器）のための特注品ですよ。そしてタストはこのダスト（限られた上座の人々）と共にのみ使われるに相応しい。さらにこのダスト（正客）はこの邸の中にこそ似つかわしいもの。そしてこの邸が飾られるのは他ではないこの御客人さまです！」³⁸⁾。

「これ、お客人に水を注いで差し上げなさい！、既に食事時が来ているようだ。旦那、この水を見てください、何と清らかでしょう、猫の目のように青いではありませんか、水晶棒のように澄んでおりますよ。ユーフラテス河³⁹⁾から汲ませて来たものです。何日か寝かせて、涙の結晶のように澄み切った中に、蠟燭の炎のようになった（うまみの最高の）時点の状態のものをういております。そんじょそこらの水売りの（皮袋からの）ものではありません、イナーウ（水瓶）からのものなんです。清潔さの理由を求めるに、飲み水の清らかさほど真実を語るものはありません⁴⁰⁾。

さてこのマンディール⁴¹⁾（ナブキン）のことですが、これには曰くがあるんで、尋ねてください！原料はジュルジャー⁴²⁾の布地で、アッラジャー⁴³⁾で製したものですよ。偶然に目の触れる機会がありましてね、買い入れたわけですよ。これ幸いと家の妻がその一部をシルワール⁴⁴⁾（下

ホストの妻をズライカに、そして主人公と召使いをヨセフに想定して論を展開している（pp. 112-13）。しかし奴隷を買う前に、健康状態や内面を知るには買い手として当たり前である。

35) アブ・ル・アッパース Abu l-‘Abbās；何の注も無いが、注10の没落したフラート家の一員で四兄弟アブ・ル・アッパースのことと推定される。

36) ここまでの段落のサジュウ（脚韻技法）の単語は下線順に：maḍīrati / zahīrati, faraj / makhraj, ghulām / ghulām, ‘abbāsi / nakhkhāsi。

37) そうした時を待っていたものですよ iddakhartu-hu li-hādhihi al-sā‘at；直義「この時のために私はそれを貯めていた」。そうした時とは、飢饉になって食料が欲しくなり、家財を売って食料を得ることになること。

38) ここまでの段落のサジュウ（脚韻技法）の単語は下線順に：lahabi / dhahabi, ‘irāqi / a‘lāqi, majā‘ati / sā‘ati / ṭasti / dasti。

39) ユーフラテス河 al-furāt；ユーフラテス河とチグリス河はメソポタミアを潤し文明を育んできた。両河の中でも、ユーフラテス河の水は純粹で甘い、即ち美味であるといわれてきた。原語フラート al-Furāt の名前そもそもが「甘い河」である。語根 √f/r/l は「(水が) 甘い」である。バグダードはユーフラテス河ではなくチグリス河に沿っている。したがってユーフラテス河から遠く隔たっており、それをわざわざ飲料にしているわけであるから、贅沢の程が知れよう。但し両河を繋いだ運河も通じていたこともあったようだ。

40) ここまでの段落のサジュウ（脚韻技法）の単語は下線順に：sinnawri / billawri, furāti / bayāti / dam‘ati / sham‘ati, saqā‘i / inā‘i, asbābi-hi / sharābi-hi。

41) マンディール mandīl；ミンディールとも。「タオル、大型のハンカチ、ナブキン」。ラテン語 mantele または mantile からの借用語。食事時などに身嗜みとして携帯してゆくもの。こうした習慣は古くからあった。

42) ジュルジャー jurjān；タバリスターンとホラーサーンの間にある地域。良質な繊維の生産地として知られる。第9話注1を参照。

43) アッラジャー arrajān；イラン西部フージスターンにある町。著者の最初の訪問地ともされている。著者に関しての訳者解説を参照。この町もジュルジャー同様繊維の生産地として知られる。

44) シルワール sirwāl pl. sarāwīl；「下半身の下着、長めのパンツ」。ペルシャ語 shilwār からの借用語。shil（腿）+ wār（接尾語 関するもの）。

半身の下着)の分にとってしまったが、大部分はマンディールにできたわけです。シルワールの分は20ジラーウ⁴⁵⁾(=10メートル)はありましたね。彼女と取り合いになりまして、ようやくこの分を確保したわけです。そしてマンディール用にしてくれるようムタッリズ(刺繍専門の仕立て屋)に誂え、ようやく旦那が今御覧になるように、仕立ててくれ、刺繍も施してくれたわけです。それからスーク(市場)から持ち帰って、櫃の中に収容しておりました。それらは客人の中でも洗練された人に対して特別に使用するようにしています。下賤なアラブにはその手で(拭いて)マンディールを汚されたこともございませぬし、それで女性たちの目の隅を拭いて(邪視を招くようなこと)はありません。どんな逸品にも見所の時期と言うものはありますし、どんな器にもそれに相応しい人物というものがありますからね」⁴⁶⁾。

「これ、フワーン⁴⁷⁾(ここでは木製の小型テーブル)を持って来なさい、大分時間をとってしまったな。その上にカスア⁴⁸⁾(大椀)も。講釈に多くを取られてしまった。さあ食事を! 会話が弾んでしまったからな」。こうして召使がフワーンを運び込んできた。ところがまた商人はそのフワーンをその場でひっくり返すではないか。そして指で弾いて見せ、^{ため}験しに菌で嚙んで見せたのだよ。そして話しかけてくるには、「バグダードが末永からんことを! このフワーンの材質の良さは如何です、この作り手の何と洗練されていることか! このフワーンを良く御覧ください、その盛る台の広いこと、その重さの軽いこと、その材の良質なこと、その形の素晴らしいこと!」。わしはもう堪らなくなって遮った、「それは形(=能書き)ばかりの方のこと、して口に入る食べ物の方は何時になるの?」。商人は「はい只今」と答えて、「これ召使や、急いで食事を!」と声を掛けてから、「でもまあ、フワーンもその一部でありますから、聞いてください!」と言うではないか! ⁴⁹⁾。

アブ・ル・ファトフ師は語りを続けた: わしの精神は煮えたぐった(=怒りで我慢できなくなった)。そこでわしは言ってやった、「まだパン焼きのこと、パンを作る器材のことが残っておる。パンはどうの、その特徴はどうの、パン粉は一体どこから買ったかだの、どうやって運搬に人や動物を使ってここまで運び込んだかだの、どんなラハー(碾き臼)を用いて粉にしたかだの、どんなイッジャーナ(捏ね鉢)を使って捏ねたのか、どんなタンヌール(焼き釜)で熱く焼き上げたか、どんなハッパーズ(パン職人)を雇い入れたか。そうそれには薪のことも残っておるわい。どこで薪を集めたのかだの、何時運び込んだのか、どうやって積み重ねて、乾かしたのか。薪置き場に如何に保管して乾燥するに至ったかだの⁵⁰⁾。

そうさらにハッパーズ(パン焼き職人)のことも残っておる。どんな人物で、徒弟の師匠は誰で、どんな人物かなど。それにパン粉のこと、それがどんなに賞賛に値するかということも。それにハミール(パン種・イースト菌)のこと、その細かな説明などもまた。さらにミルフ(塩)とその風味もな。そう料理品も忘れておった。タッバーフ(料理人)は誰が担当し、如何材料を得たか、材料仕込みは誰がして、誰が調理したのか。そしてハッル(酢)のことも。(その原料である)ブド

45) ジラーウ dhīrā: 身体尺のひとつ。腕尺=肘の先端から中指の先までの長さ。英語の cubit。約 50cm。この下位単位は拳・カブダ qabḍa pl. qabḍāt であり、英語では fist である。1 ジラーウ=6 カブダとされる。

46) ここまでの段落のサジュウ(脚韻技法)の単語は下線順に: Jurjāna / Arrajāna, sarāwīlan / mandīlan, sūqi / šundūqi, adyāf / zirāfi, yawmun / qawmun。

47) フワーン khuwān: 「テーブル、食卓」。『クルアーン』の章題にもなっており、より一般的なマード mā'ida は同じ「テーブル、食卓」であっても、「その上に食事が盛られたテーブル」のこと。

48) カスア qaṣ'a (pl. qīṣā'): 「木製の大椀」。但し非常に大きな物で、<10 人用>といわれる。

49) ここまでの段落のサジュウ(脚韻技法)の単語は下線順に: khuwān/zamān, qīṣā' / muṣā', ta'ām / kalām, khuwāni / makāni / banāni / asnāni, matā'a-hā / šunnā'a-hā, matni-hi / wazni-hi, shaklu / aklu。

50) ここまでの段落のサジュウ(脚韻技法)の単語は下線順に: ālātu-hu / šifātu-hu, aṣlan / ḥamlan, 'ajana / ṭaḥana, sajarah / ista'jara, uḥtuṭiba / juliba, ṣuffīfa / juffīfa, ḥubisa / yabisa。

ウはどのように摘まれたか、あるいは(酢の元が)ルタブ(熟れデーツ)であったならばそれはどう購入されたか、どのようにその濃縮汁(の菌)が種付けをされ⁵¹⁾、酢のエッセンスが抽出されたか、その容器が如何に汚された(=菌がつけられた)か、その樽がどのくらいかけがえの無いものか。そう野菜類も残っておったな、それが摘まれるまでにどのような栽培された工夫があったか。どんな農園で作付けされたか、清潔に収穫されるまでどのような手入れがなされたかなどと。そうまだ(肝心^{かなめ}要の)マディーラも残っておった! その肉はどのように入手したか、その脂肪分はどのように工夫したか、料理鍋は如何したか、火加減はどうか、薬味類の碎かれ方は如何^{どう}の、果ては調理が如何に上手くいったか、そのマラク(肉汁)がいかにうまく調和^{おおぎよう}んだか。全く大仰の話だ、果無し話だ!」⁵²⁾。

(こう言い捨てて) わしは立ち上がった。すると商人が問いかけるに、「どこへお出で?」。そこでわしは、「自然の要求には応ぜずばなるまいて」と言うと、彼は、「旦那、トイレをお望みで、王侯にとってはラビーイー(春の居留地)と、大臣級にとってはハリーフィー(秋の居留地)の中では(野外なので)軽蔑されている⁵³⁾?(自宅のトイレは穴が空いてるだけじゃありません)上部のほうは石膏で塗られ、下の方は生石灰で塗り固められていますよ。天井は平らに架けられ、床は大理石で敷かれているのです。ザッル(小蟻)がその壁から落ちればもう這い上がれません、ズバープ(蠅)が床の上を歩こうにも滑ってしまうだけです。我がトイレには立派な戸口があり、チーク材と象牙とを交互に組んでいる簾状^{すだれ}に出来ており、交互の組み込み方がそれは見事で、客となった方ならばその中で食事をとりたいと思わせるほどのものですから」。わしは言い返してやった、「あんたこそその雪隠^{せっちん}で食べたが良かろう。わしはトイレのことなど考えてはおらぬわ!」⁵⁴⁾。

こう言い置いてわしは玄関の方へ歩いて行き、急いで抜け出ようと、足を急がせた。商人の方はわしの後を追いかけてきて、呼び掛けて叫んでいた、「アブ・ル・ファトフ殿、マディーラを!」。若い召使達⁵⁵⁾はマディーラと言うのが私の綽名だと思っていたらしく⁵⁶⁾、主人の叫びに応じて(マディーラ様! マディーラ様!) 叫びながら飛び出して来て(わしを留めようとかかったのだ)。その一人にわしは腹癒^いせに石を投げつけてしまった。すると(運悪く)別の男がターバンにその石の直撃を受けてしまった。(選りによって) 頭蓋骨^{くわい}にめり込んでしまったのだよ! さあ若い衆は(殺

51) 種付けをされ *shuhrijat*; 原義は「油を塗られる、メッキされる」。この語は稀語であり、普通の辞書には見当たらない。語根に関しては *shihrij*、または *shuharij* (溜池、水槽、貯水池) があるだけ(複数形は *shaharij*) で、ベルシャ語の借用とされている。この動詞も従ってベルシャ人である著者のアラビア語化への造語の可能性がある。注釈者 M. 'Abduh は *ṭalā* と同義としている。

52) ここまでの段落のサジュウ(脚韻技法)の単語は下線順に: *madhu-hu / sharbu-hu, ittakhadha-hā / intaqadha-hā, ista'mala-hā / 'amila-hā, 'inabu-hu / ruṭabu-hu / lubbu-hu / ḥubbu-hu, qutifa / ruṣifa / nuzzifa, laḥmu-hā / shahmu-hā, qidru-hā / nāru-hā / abzāru-hā, yatimmu / yatimmu*。

53) 王侯にとってはラビーイーと大臣級にとってはハリーフィーの中では軽蔑されている *yuzrā bi-rabī'iyi l-amīr wa-kharīfiyyi l-wazīr*: 王宮には夏の宮殿と冬の宮殿があり、王侯は寒い冬には暖かい南方ないし低地の宮殿で過ごし、暑い夏は北方ないし高地の宮殿で過ごした。寒い冬に宮殿に籠もっていた王侯達は、春になると待ちかねていたように野外の広い草原にキャンプを張る。それがラビーイー(春の居留地)であり、快適な草原であっても、注意すべきは目安の目立たないトイレである。それに落ち込んだら災難となり、せっかくの爽快さも台無しになる。このことを踏まえて言っているのであろう。大臣級(*wazīri*)にとっては野外を楽しむのは、暑い夏が終わった後の秋のこと、ハリーフィー(秋の居留地)であり、状況は同じである。

54) ここまでの段落のサジュウ(脚韻技法)の単語は下線順に: *amīri / wazīri, ya'laqu / yazlaqu, sājin / 'ājīn / izdiwājīn, jirābi / ḥisābi*。

55) 若い召使達 *al-ṣubayān*: この語句を「子供たち、悪がき達」として、既に邸を出て往來の出来事としている解釈が多い。しかし非限定の *ṣubayān* ならば、その解釈も当てはまろうが、本文が限定詞が付いているので、文法上でも、意味上でも唐突であろう。ここでは既出の最初に出てきた若い召使いや他の使用人たちと解釈した方が妥当しよう。

56) マディーラと言うのが私の綽名だと思っていたらしく: Antila (p. 108) によれば、食事・料理名は奴隸名や宦官名になっているとして *Sikbāj* や *Harisa* の例を挙げている。こうしたコノテーションは確かに考えられることである。他にも *Marjān* (珊瑚) や *Durra* (真珠) などのように宝石類や貴石類に女奴隷に好んで名付けられているようにこうした慣行はあった。

気付いて）サンダルを脱いでわしを所かまわず殴りつけてきた、平手で加減もせず手荒く引^{ばた}叩いてきたのだよ！挙句の果てはじゃな、わしは牢屋へぶちこまれてしまったのだ。（何と言うこと）そして二年間というものそうした不運の状況の下で牢獄暮らしを強いられてしまったというわけなのだ。（こうした苦い経験があったものだから）そこでわしはつくづく誓ったものさ、金輪際マディーラなる食べ物をお口にはしまい、と。ハマザーンの皆さん、このようにわしが不当に扱われたことの次第をお分かり頂けましたかな？⁵⁷⁾」。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを結んだ：私達はアブ・ル・ファトフ師の申し開きを受け入れた。そして師が誓ったことを私達も誓った。そして「何時頃からかマディーラは上流階級にとっては食べるに害悪であり、下層階級にとっては食べるに良い物になって久しくなりましたな」と、（半ば口惜しそうに）言い合ったものである⁵⁸⁾。

第22話 マディーラのマカーマ 完

第22話 訳者解説

この「マディーラのマカーマ」は著者ハマザーニーの最高傑作の一つに数えられている。多くの文学者や学者がそれを認めており、西欧でも翻訳紹介や作品論が既に出ている。①オリエンタリストの Gabrieli が古く 1949-50 年に注釈をつけてイタリア語訳を発表している。また②ピカレスク文学との比較を行って、最近スペイン・アラブの al-Saraqustī の『マカーマート』*al-Maqāmāt al-Luzūmiyya* を翻訳している J. Monroe によって 1983 年 *The Art of Badī' az-Zamān al-Hamadhānī* を出版してその書中 1 章を割いて分析している（第 11 章 *The Wrath of Iskandariī* pp. 145-160）。また③ジャーヒズ (al-Jāhiz) やハティーブ・バグダーディー al-Khaṭīb al-Baghdādī の諸資料を通して文学研究を行っている F. Maltī-Douglas が *Maqāmāt And Adab: "Al- Maqāma al- Maḍīriyya" of al-Hamadhānī* という詳細な作品論を雑誌 *Journal of the American Oriental Society*, no. 105. 2 (1985) pp. 247-58 で展開している。「けちんぼ」や「ユーモア」など行き届いた、あるいは行き過ぎたほどの分析がある。④北欧の研究者 J. Hameen-Anttila は、2002 年、上記の先行研究を踏まえた上で、更に文章論・語句使用まで細かく分析して一書 *Maqama A History of a Genre* を記し、その 4. 1. 2 (pp. 106-114) の節をこの「マディーラのマカーマ」に充てて分析を行っている。

形式、内容、分量ともにマカーマ文学の代表作とも称しえよう。但し主人公が仕掛け役からカモになってしまっている点、また本舞台・後舞台の間に話し手が顔を出し筋の引き回しはあるものの、詩の挿入が一切無いのが惜まれる。

テーマは「食」にまつわる話であり、それゆえ「バヒール (bakhīl けちん坊) もの」、あるいは「トファイル (ṭufayl 食客) もの」と振り分けも出来ようが、ホストにしたなら「食わせまい」とするバヒール (けちん坊) の詐術としての成功譚、客としたら招かれたからには「何とか料理にありつけるま

57) ハマザーンの皆さん、このようにわしが不当に扱われたことの次第をお分かり頂けましたかな；この節は J. Monroe (p. 158) および Anttila (p. 108) によれば、詩の引用であり、著者の郷里ベルシャのハマザーン Hamadhān では無く、アラブの部族名ハムダーン Hamdān であるとする。原詩は「ある部族襲い来れば何時たれども我逆襲する者ぞ、おおハムダーンの皆の衆、かく行うに我に何の不当たることあるや？」であり、その後半詩行がこの引用部であるとする。しかしいずれも詩人の名、その出所を明記していない。なお、校正の段階で編集者岡本多平氏が語学力と大変な労力を用いて詩作者と出典を探し出して頂いた。出典は *Sharḥ Nahj al-Balāgha*, p. 343 であり、詩人は Ibn Barrāqā である。これに限らず、様々な助言を頂いている。多謝する次第である。

58) ここまでの段落のサジュウ (脚韻技法) の単語は下線順に：bābi / dhahābi, ḍajari / ḥajari, 'imāmati-hi / hāmāti-hi, ḥadutha / khabutha, ḥabsi / nahsi, 'udhra-hu / nadhra-hu, ahrār / akhyār.

で」喰らい付いてゆくトファイル（食客）者の失敗談とよみとれよう。食をテーマにした選択の秀逸性が浮き出た1篇となっている。

舞台はバスラ。主人公と語り手それに何人かの仲間が、ある商人の宴会に招かれる。着座した席に御馳走マディーラが運び込まれる。その途端主人公は血相を変え、席を立とうとする。語り手達もマディーラに手を出せず、未練を残してマディーラが持ち去られるのを見送る。宴席を立ち去り、別席で語り手達が、何故マディーラに対して拒否反応を見せたのか主人公に尋ねる。これに対して主人公はマディーラを金輪際口にはすまいという誓約をした己の苦い体験談を話して聞かせる。ここから劇中劇に入っていく。舞台はバグダード。往来で知り合った豊かそうな商人が、自宅マディーラの招待をしたいとしきりに誘うので、それに付き合うことにした。ここで道行となる。商人は自宅へ向かう道々、己の妻の器量や頭の良さ、家事や料理の上手さなど自慢話を山と聞かせる（アラブのモラルでは妻のことは明かさないものである。ましては褒め称えるのは「邪視」を呼び込む誘因として忌避されるはずである）。商人の自宅の居住区へ入ったところで、今度はこの地域が一等地であって上流階級の住む一角であること、邸宅もある零落した商人から策を弄してその豪邸を入手したものであること、などををあれこれ説明する。ようやく自宅に到着すると、扉、扉のノブ、階段、家具などの講釈を聞かせる。食卓の座に就くや水差しや水受けから今度は裏返ししたり、嚙んでみたりしながら、延々と食器や食材の一つ一つの能書きを始める。嫌気のさしたアブ・ル・ファトフ師は、次はこの講釈で、次は、次はと先を読んで言うてしまう。それから席を立てて出て行くとする。主人の方が追いかけてきて、呼び掛けて叫んだ、「アブ・ル・ファトフ殿、マディーラを！」。この「マディーラ」が命取りになった。召使達は客人の名前が「マディーラ」だと思い込み、引き留めようとした。アブ・ル・ファトフ師はその一人に腹癒せに石を投げつけたが、運悪く召使いの頭部を直撃して大怪我を負わせてしまった。召使どもは殺気立って彼を殴るけるの狼藉。挙句の果てが牢屋へぶちこまれ、二年間牢獄暮らしを強いられた、というのだ。

マカーマの大団円では「ハマザーンの皆さん yā āla Hamadhāna」とある。招かれた一団はハマザーン出身の人々では無く、バスラ在住の御歴々である。註57の解釈とは別にハマザーン（ハマダーン）をコノテーション（共示）として、著者の出身地ハマザーンとしてみよう。著者の紹介の所で触れたように、愚か者として知られるハマザーン人がこの詐術に掛かるのであれば分かる。しかし才気煥発の主人公が嵌られ役のこのごまである。語り手は主人公を冒頭での紹介で、「それを呼べばそれが彼に答える雄弁の人、それを彼が命じればそれが彼に従う修辞の達人」にして、この為体である。しかも果ては散々殴られ、二年の牢屋の臭い飯を食べさせられる破目に。客として招かれたのに、持て成されたのは食の御馳走では無く、ゲップの出るような冗長な講釈である点笑わせる。トファイル（tufayl 食客）がその一面に具有する機知やウィットの披露も無く、面目丸つぶれである。いつもは仕掛け役が主人公、なのに今回は嵌られ役、カモ役で終わる。ホストの話しぶりも客に期待していた料理がすぐにでも出て来そうな話しぶりをして、その直前で焦らされ、はぐらかしをその都度上手く遣って退ける。ホストは主人公以上に機知と詐術に長けた人物に仕上がっている。食の領域であるから、人間の食欲の心理を突いて、さまざまな関係する固定した食器や什器の能書きをしたりしながら、「食にありつける」までを如何に遅らせるか、ひき伸ばすことができるか。こうした展開であり、うんざりした客のじれったさが高じて、怒りの爆発を誘うか、その臨界点までを突き詰めて行く。まさにバヒール（けちん坊）の妙に尽きる。

しかしそうはいつでも著者は主人公にその才能の片りんは見せさせており、やられっぱなしではない。その才能の一端を最後に披露させる。その後の商人の講釈の持って行き方で、先手を打つ。バヒー

ル（けちん坊）の手の内を読み切ったのだ。マディーラの^{もたら}齎される直前で、いや眼前にマディーラが据えられても、このホストは料理の周辺を片っ端から指摘して食べさせないこともあろうと読み切る。材料から製し方、次にはこれの説明、これの説明とするのだらうと、先を取って、ホストをやり返す件である。このあたりトファイル（食客）の要件をも配慮してのはめ込みとも読み取れよう。

料理の「マディーラ」、これは再三名前が出てくるのに、その食べ物に関しては具体的言及は何もない。それが言及される前に、物語は急転直下幕を閉じてしまうのであるから。豪華な、また宮廷風の料理はペルシャ語由来のものが多い中で、マディーラが（*maḍīra*）は砂漠の純粋アラブベドウィンの御馳走である。肉と乳とで作り上げた遊牧民の料理である。「大皿の中で揺れており」とは、ふんだんに酸乳とミルクの混じった肉汁である。それ故、「健康に良いとのお墨付きの」ものなのである。これが都市民となったアラブにも、即ち「ハダーラ（*ḥaḍāra* 定住）の民にとっても^{こと}殊の外^{ほか}好まれる」ことになる。肥満を^{かこ}託っていたウマイヤ朝の開祖であるカリフ・ムアーウィアがマディーラを好物としており、「その地位を約束させた食べ物」との言い回しもむべなるかなと唸らせる。これを御馳走しましょうと言う商人、その馳走名に引きずられて応じて受け身となる主人公。

馳走を差し出すのを遅らせるホストは、バヒール（けちん坊）の性格を見せ隠れさせながらそれと気づかせない詐術に技法を余すことなく駆使しようとする。一方マディールを眼前に描く主人公は遅らされ焦らされ聞かなくともない能書きを聞かされ、質問までもして欲しいとホストに言わせてしまう。その辺りまでは並みのトファイル（食客）であった、乗せられたままのトファイルであったといえよう。

食をテーマにしたマカーマは他に幾つかあり、比較すると面白い。第12話「バグダードのマカーマ」、同じ場所設定、同じトファイルを主題としながら、こちらは^{おこ}奢りに奢った積りで鱈腹食べた後、ドロンを決めて食い逃げをするマカーマとは好対照となる。別な意味でこれまた好対照となるのが第9話「ジュルジャーンのマカーマ」であり、ここではホストの接待が過ぎる余り逃げ出さざるを得なくなる。バヒール（けちん坊）にとっても、またトファイル（食客）にとっても全くの逆手を取ったものとなっている。そして第34話「ナヒーダ（フレッシュバター）のマカーマ」では、反語法や半疑問の修辞を用いて種々の料理名を想起させ創造させながら、最後には焼き肉と上等なバターとパンで持て成しを受けるものと思いきや、それが仮定で終わる趣向を持てきている。本マカーマと同じくバヒールとしてはうまいいき、トファイル（食客）としてはしてやられた趣向である。Anttila (p. 109) は「マディーラのマカーマ」のモチーフについては al-Tanūkhī の作品 *Faraj* (III: 61-66) にあると看している。

その名前を聞いただけで、また一見しただけで、トラウマ状態になり、その場を離れざるを得ない、あるいは忌避せざるを得ないモチーフ。こうしたモチーフを持つ話、これを「懲り懲り話」と名付けてみることにする。このハマザーニーの傑作は、換骨奪胎して後輩ハリリーによって、見事なまでにマカーマ一篇の「懲り懲り話」が出来上がっている。後者の「懲り懲り話」は、第18話「シンジャールのマカーマ」であり、そこでは食べ物カターイフ（蜜滴り菓子）ではなく、それが盛られてきた「ガラス器」を「懲り懲り」と見立てており、それを見た途端主人公アブー・ザイドが婚宴の席を立ちさってしまう。同席の者達も仕方なくその場を後にする。宴席のすぐ脇の別の場でアブー・ザイドが、「ガラス」と言うものは「中身を隠し秘すことも出来ない」裏切りの元凶となるもので懲り懲りだとして仲間に自分の非を詫び訴える。懲り懲り話の顛末を一座の仲間に披露するものである。このマカーマは凝っており、ストーリー性、ストーリーの展開、技法という点において、ハマザーニーの傑作を踏まえているので、それ以上の程度の高い作品となっている。場面設定も①

隊商による砂漠の行進、②シンジャール近郊での宿泊、③シンジャール市内の大商人の邸宅に招かれての祝宴、ここで主人公による杵物語の場面設定、④故郷にある自宅、⑤太守の催し（隣人の密告）、⑥自宅（娘が暴力的に奪われる・隣人との絶交・隣人の詩・哀切者とは同席しない誓い）、となっているが、この杵物語が終わると場面設定は①～③の逆に戻ってゆくという展開である。即ち⑦大商人の祝宴の邸宅（ホストのもてなしとカタールの馳走の土産）、⑧シンジャール郊外の宿营地（アブー・ザイドのテントでのカタール馳走分け）、⑨砂漠の行進（アブー・ザイドの故郷へ向けての旅立ち）、というよく練られた場面設定となっている。主人公にすべて照準があっており、集中性としても見事な出来栄である。ハリリーの方のテーマは「裏切行為」についてである。裏切りとは相手があつてのことであるが、信頼を寄せる人というのは、自分の弱点や他人には話せないことでも打ち明けたり、相談に乗ってもらえる人のことである。これらは二人の間の内密に関わることでもある。アラブ人の「裏切り」とは何よりも、この関係を壊すことである。内密に秘密にしておくべきことを公にしてしまう、世間の光に晒してしまうことである。この故に、ハリリーの方でもその典型として、「ガラス」が出てくるわけである。ガラスの概念としては、われわれとはずいぶん隔たっている。ガラスは中の物を透かして明らかにしてしまい、中身を隠すことができない。中の「内密・秘密」というものが保つことはできない、ガラスは隠すべき内密にしておくべきものを衆目にさらけ出してしまう。アラブの裏切りとは、何よりも他人との間の交際において、お互いがまもる機密、秘密を漏らしてしまうことである、ガラスを典型として。

ハマザーニーの本マカーマではマディーラを食べ損ねているが、ハリリーの方では懲り懲り話はガラス器の方であるから、宴会でもてなしのカタールの馳走はきちんと新たに持ち帰ることになっている。それも宴会のホストが、後舞台でのアブー・ザイドの吟じた詩にいたく感動したその結果である。退席後のことであるから主人公のこの詩の朗詠がなかったならばホストの報酬も、カタールの馳走の持ち帰りもなかったことになる。詩の導入及びその効果と言う点でも此処が両者の大きく異なる点である。

なお訳者はハリリーのこの「第18話シンジャールのマカーマ」及びそのメインである「カタール」を主題にアラブの食文化を論文仕立てで考察しているので参照されたい。

「アラブ・イスラム世界の饗宴（1）結婚披露宴に招かれ、その席でのこと」*VESTA*, No. 64, 2006年11月、pp. 38-41

「アラブ・イスラム世界の饗宴（2）饗宴の招待、婚宴」*VESTA*, No. 65, 2007年2月、pp. 63-65

「アラブ・イスラム世界の饗宴（3）デザートとカタール（前編）」*VESTA*, No. 66, 2007年5月、pp. 56-61

「アラブ・イスラム世界の饗宴（4）デザートとカタール（後編）」*VESTA*, No. 67, 2007年7月、pp. 62-67

なおこの論文中に、画家ワースィティー他によって、その場を描いた細密画数点を加えてキャプションを付している。カタールがもたらされる場面、持ち去られる場面など印象的なものが何点もある。特に主人公がその場を立つところ、同席者が持ち^{くわ}されてゆくカタールに指を口に銜えた人物などの描き方など未だに記憶に新しい。

なお「マディーラのマカーマ」に関しては、一方、J. Monroe や Antilla など研究者が多い中でハリリーの酷似したこの「第18話シンジャールのマカーマ」との関連は一切述べられていない。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では第33話に、Sofya 版では第5話に、そして Paris 版では収録されていない。

第23話 護符 (ḥirz) のマカーマ 護符にすがってカスピ海の暴風を乗り切る

(原文 M. 'Abduh pp. 118–120)

ヒシャームの息子イーサーは我々に語り伝えて、以下のような話をした：

流浪を重ねた果てにとうとう私は、パーブ・ル・アブワーブ¹⁾(門の中の門、最果ての門) まで来てしまった。(ここまで来ての)この骨折りを収穫として帰路に着くことに満足するのみであった。帰路は(カスピ海を船での)海路、呑みこまんばかりの高波が迎えた。この暴君は荒れに荒れ²⁾、舟を乗客もろとも翻弄し航路を大きく外した。それでも私はアッラーに無事の帰還の吉兆を乞い求めた。それも船の中でもあろうことか、最も危険な場所に座って折ったのである。海は我々を支配し、為すがままであって、夜の闇は我々を包み込んで紛れさせた。そんな折一陣の黒雲が我々を襲い、雨粒を篠突く如く叩きつけて来た³⁾。さらにこの黒雲ときたら、霧を送って来ては山となし、風を送って来てはその吹きつけによって大波が二つずつ対になって押し寄せて来るは、土砂降りを一群一群と群れをなして襲って来るは⁴⁾……。我々は破滅の手中にあった、二つの海(上の海=大雨、下の海=大波)のただ中にある状態であったのである。出来る手だてと云ったら、ただひたすらアッラーに無事安全の祈りを捧げるのみであった。救済策とて無くただただ泣き叫ぶのみであった。守護の術はただ希望を持つことに縋るだけであった⁵⁾。

我々は全くあのナービガの一夜⁶⁾を過ごすことになってしまったのである。乗客は誰もお互いに涙を流し、身の不幸をお互いに嘆きあって朝を迎えることになった。だが、こうした渦中であって、顔を湿らすこともなく、また眼を濡らすこともない一人物がいた。胸を緩めて(=心を狭めて苦痛を鎮すわけではなく)、くつろいでいる様子であった。心を快活にして気楽の風であった。この人物の様子を見て、我々はアッラーにかけてすべての驚きを驚いた(=全く仰天するほど驚いた)。そこで彼に尋ねたものである、「こんな難儀の中、何であなたは平然としておられるのですか?」。この人物が答えるには、「わたしには(威力ある)護符があつての、それが持ち主を溺れさせるような

1) パーブ・ル・アブワーブ bāb al-abwāb : カスピ海西岸、現在はロシア領となっているダゲスタンのダルバンド。コーカサス山脈は古代から境界とされており、南北世界を分けていた。中世世界では、イスラム領域の最北端であった。パーブ・ル・アブワーブ bāb al-abwāb とは「諸門の門、主門」の意味で、この山脈を越えたさらに先にあるダルバンドは、いわば前線基地であって、この町までは50マイルに亘る峡谷と周囲には砦を構えた城壁や鉄門、物見の塔も含めた多くの鉄と天然利用の門が存在し、アレクサンダー壁あるいはアレクサンダー門としても知られる。728年イスラム化されて Arrān 州とされるに至った。

2) この暴君は荒れに荒れ waththābun bi-ghāribi-hi : 実際カスピ海は北風、北東風が強く吹き、波が高く荒れることで知られる。著者は海に接したことも、乗船経験も無いと思われる。このカスピ海も、その西岸は訪れてはいないが、東岸は訪れてカスピ海を実際見ている可能性がある。

3) 「雨粒を篠突く如く叩きつけて来た」 tamuddu mina l-amṭāri ḥibālan : 直訳は「雨々 (< maṭar) から綱 (< ḥibāl) を巻き散らした」。降雨の激しい様子を「雨がその綱を伸ばす」と表現する。ここのサジュウ語は「篠」に当ててあるが、本注のごとく「綱」 ḥibāl である。

4) 大波が二つずつ対になって (azwājan) 押し寄せて来るは、土砂降りを一群一群と群れをなして (afwājan) 襲って来るは : 『クルアーン』110章2節からの言い回しを借用。

5) ここまでの冒頭部の段落のサジュウ(押韻単語)は下線順に : abwābi / iyābi, ghāribi-hi / rākibi-hi, fulki / hulki, (baḥru / laylu ?), ḥibālan / jibālan, azwājan / afwājan, ḥayni / baḥrayni, du'ā'u / bukā'u / rajā'u。

6) 「ナービガの一夜」 layla nābighiyya : プレイスラム期の大詩人ナービガ Nābigha al-Dhubyānī の有名な以下の詩行に基づく :

我眠りもやらず一夜過ごしたり、
そは恰も斑入りの毒蛇に襲われ、
その牙にある毒が身中に浸み込むが如し

fa-bittu ka-annī sāwarat-nī ḡa'iylatun

mina-r-raḡshi fī anyābi-ha s-sammu nāqī'u

ナービガに関して、またこの詩行に関しては、拙訳のハリリー作『マカーマート』(平凡社・東洋文庫)第2巻第27話の訳注9を参照されたい。

ことが無く救ってくれることになっておるんでな。もしそなたたちの誰もがそれをお望みならば、分けてやっても好いがの」。こんな際であるから誰もが彼に願い出た、我も我もと彼から護符の入手を求めた。彼が言い渡すには、「じゃがそうする前にしてもらわないとな、先ず皆さんの一人一人から即金で金貨一ディナール支払って下され、次に目的地に無事着いたらもう一ディナール手渡すことを約束して頂きたい。どうじゃな」⁷⁾。

ヒシャームの息子イーサーは語りを続けた：我々は彼の求めた通りの額を支払った、また彼の言いなりのことを約束した。(そう確認した後で) この御人はおもむろに手を懷に差し入れると、絹製の襪ふくさを取り出した。(包まれていたのは) 象牙製の小箱であって、その中にはお札ふだが収まっていた。彼は我々一人一人に、そのお札一つ一つを手渡していった。(するとそれかあらぬか海も鎮まり) 船は無事目的地に安着したのである。港町が我々を迎え入れてくれたのだ。すると彼は乗船者一同に約束したことを果たすよう求めてきた。一同も約束通りの金貨を支払った。順番で私が最後の支払人になった。(こうして二人きりになったわけであるが) この御仁は、「彼からは取らないことにしよう!」というではないか。私が「いや、これはあなたの取り分ですからお受け下さい。その前にあなたの正体を明らかにして頂けませんか?」と尋ねた。この御仁は「わしはアレクサンドリア出の者だがな」と答えてきた。(矢張りそうであったかと合点した) わたしはそこで「どうしてその忍耐強さがあなたを助け、我々一同を救うことが出来たのですか?」と問いかけると、彼は答えるに詩を吟じたのである⁸⁾：

愚かな問いなどすな もし忍耐の無かりせば

way-ka law la ṣ-ṣabru mā

などて巾着に金貨など貯まることあろうぞ

kuntu mala'tu l-kiysa tibrā

降りかかる厄難に胸狭くする者などに

lan yanāla l-majda man dāqa

などて栄光の極みなど勝ち得ること^{あたう}可能ぞ

bi-mā yaghshā-hu ṣadrā

されば現に今我に与えられた物に

thumma mā a'qaba-ni

何の害悪を自身^{こうむ}被^{こうむ}つてはいまい

s-sā'ata mā u'ṭītu ḍarrā

むしろ逆なり それに拠りて我が足腰

bal bi-hi ashtaddu azrā

強められ また^{はこ}綻びも補強されん

wa-bi-hi ajburu kasrā

もしもこの日溺れ死んでいたならば

wa-law inni l-yawma fi l-gharqā

かくなる言い訳の労取ることも無かりしものを

la-mā kulliftu 'udhrā

7) ここまでの段落のサジュウの語は下線順に：natabākā / natashākā, jafnu-hu / 'aynu-hu, munshariḥu-hu / fariḥu-hu, 'ajabi / 'aṭabi, ilay-hi / 'alay-hi。

8) ここまでの段落のサジュウの語は下線順に：ṭalaba / khaṭaba, dībājin / 'ājīn, safinatu / madīnatu, wa'adū-hu / da'ū-hu, dhālika / ḥāli-ka。

第23話 護符のマカーマ 完

訳者解説

語り手イーサーは流れに流れて、イスラーム世界の最北の地デルバンドに辿りついたわけであったが、そこでの成果は何もなく、徒労を成果として南に戻って行く。帰路は船で帰ることにする。しかしカスピ海は世界最大の内陸海、北風が強く、波が高いこと、荒れることで知られていた。語り手の乗り込んだ船も不運にして暴風雨に遭遇してしまう。為すこと無く、うろたえ泣き叫ぶ乗船者の中で、ただ一人平然として余裕を持っている人物がいた。皆驚異に思い、その理由を糺すと、自分は溺れることの無い海難除けの威力ある護符を所持しているからだと答えた。そして欲しければ分けてあげても良いと申し出る。藁にも縋りたい乗客たちは金を払って求める、無事港に着いたら同額支払うようとの約束をも取りつけさせられながら。海がどう鎮まったのかに記述は無いが、船は目的地に辿り着き、下船の段になり、この護符の持ち主に対して約束した額が支払われる。同額であるから2倍の金貨の取り分になる。そして支払う順が最後になった語り手イーサーに対して、その人物からは取らないと声をかけて、二人きりになる。そこでこの人物の正体が主人公アブ・ルフアトゥフ師であることが分り、イーサーに対してこの仕掛けたトリックの言い訳を詩で訴える。運を頼みの成功報酬で、失敗すれば生きて戻れず弁明も不要、として物語は完了する。

余りに簡略過ぎて、飛躍や省略が多い骨格だけの短編である。そのため、訳すにしても補筆したり手直しが必要であった。文意の流れを作るための副詞や接読詞を挿入したり、補いの語句を入れ込んだりしたが、ともかく粗筋だけの一篇と言い得よう。

本マカーマは訳者の考えだが、マカーマ分野の大成者アル・ハリリーがこのストーリーに着想を得て、それを二つのマカーマに換骨脱胎して、血肉化して十分な物語として展開を見せている。アル・ハリリーは、舞台をカスピ海からインド洋に移して船旅と難破をテーマに第39話「オマーンのマカーマ」を仕上げた。アル・ハリリーはバスラで生涯を終えているので、ペルシャ湾に臨み、インド洋航海の基地となっており、船や航海の事情には明るく、全くの内陸の旅人アル・ハマザーニーよりは詳しく描写できた背景がある。さらに船が難破してある島に流れ着き、その領主の妻の難産を呪文で救いそこに居ついてしまう話を後半に持ってきている。そのマカーマの挿絵、ダウ船の航海の様子（これは本マカーマに当て嵌めてることができよう）、流れ着いた楽園のような島の様子、難産に立ち会う様子、の3点は当時の民俗事情を窺う上でも貴重なものとなっている。

アル・ハリリーの他の1篇は、第12話「ダマスカスのマカーマ」では、本話を踏まえて、地理的設定を「海」から「砂漠」に換えた。カスピ海の大海原を、シリア砂漠の砂の海に換えた。「船の乗客」から「ラクダの隊商」に設定した。そしてトリックとして用いたのは、その安全を「お札」からキャラバン隊員に対しては「呪文」に換えた。前者の「お札」の形態も中身の説明が全くないが、後者の「呪文」は宗教的聖句と韻律の効いた格調高い見事な「唱え言」になっている。前者では恐らく肌身離さず、或いは手に握りしめていたことだろう。後者のほうではキャラバンの一行の描写はみごとに明記されている。出立前に全員記憶させられ、出立後はそれを唱え、和し、念じながら砂の海を渡り切る設定である。稼ぎの現場を二度作り上げるのは同じであるが、前者では一度目は荒れ狂う船中であるが、後者の方は、船出する（出立する）前に換えた。後払いはいず

れも到着地に着いたときである。ハリリーの方では、稼いでからの後日談が続き、細密画のシーンともなっている酒場で呑みだくれる有名な件が展開される。

本話の場の設定は、カスピ海上の船中を本舞台として、安着後の港を後舞台にしており、場の設定は定型を踏んでいる。稼ぎは護符を予め用意して、この時とばかりの演技に入ったのであろう。稼ぎの額も乗客一人当たり金貨2枚であるから相当の額に達しよう。トリックスターぶりが如実に反映された所である。人物設定は、主人公アブ・ル・ファトゥフ師と語り手イーサーは同じ乗船者の仲間である。しかし後舞台で明らかなように、イーサーには知己のアブ・ル・ファトゥフ師であるとは名乗られるまでは分からず、一方の主人公には最初から語り手イーサーであることが分かっており、護符代はもらったが、成功報酬の方は受け取らなかった。護符代を貰う時点では名乗らなかったし、名乗ったならばその後の展開も違って来よう。ましては暴風雨の中ではそんな状況でもなかったことになる。語り手イーサーは中段においても、進行役として顔を出しており、定型に沿っている。文体について、本話は4つの段落で構成され、結幕の第4段落目は詩で締めくくられている。本話のサジュウ（押韻技法）については全体に行き届いている。第3段落では *naqadnā-hu mā ṭalaba, wa‘adnā-hu mā khaṭaba* と全文対韻は工夫されている部分もある。詩の引用は後舞台の申し開きのみの一ヶ所である。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では第10話に、Sofya 版では第3話に、そして Paris 版では前マカーマ同様収録されていない。

第 24 話 病院のマカーマ 狂人に異端思想を咎められて

(原文 M. 'Abduh pp. 121-126)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて以下のように話した：バスラの地でのこと、その病院 (māristān)¹⁾に出かけたことがあった。同行したのは神学者のアブー・ダーウード師²⁾であった。中で一人の狂人を見かけた、彼は視線で私を捕え、招いていたのである。そしてこの狂人が問い掛けるには、「鳥占 (al-tayr)³⁾が判断したのが間違っていなければ、あんた達はバスラ人じゃ無い異郷の人だね?」。我々が「仰せの通りです」と答えると、彼は「ではいったい何処の方々です、父上は立派な方でしょうな?」と訊ねてきた。私が「私はイーサー・イブン・ヒシャームと申します。こちらの方は神学者アブー・ダーウード師であられます」と答えた。すると彼は「あのアスカリー出の?」と問うたので、「そうですよ」と私が答えた⁴⁾。

すると、この狂人は突然喚き出したのである、「あの類の人の、その一族みんなの、顔が醜悪になりますように!」⁵⁾人間が自由意思 (al-khīra) を持つなどとの考えなど、神のみが考え及ぶこと、けっしてその僕 (= 信者) がとやかく言えるものではない。諸事万端の決裁は神の御手にあるもので、僕の手になどあらうはずがない。あんた達は我らがウンマ (umma 宗教共同体) においてのマギ (majūs 異端派)⁶⁾ですな。(表面では) 運命に順ずるジャブル (jabr 強制 = 予定) 説 (= 運命論) に現世では生きるであろうが、死ぬまでは (奥に引っ込んで) サブル (ṣabr 耐えていること) ができよう。けれども死後には然るべき所に強制的に連れ出されて行かれることであろう。たとえ家に閉じ籠ってしようとも⁷⁾、そう運命づけられた者は殺戮に駆り出され、行き着く先は (悲惨な) 死の床となるであろう。

あんた達は世間から如何して正当な扱いを受けないのか、もし (自由意思論が) あんた達の述べている通りならば? また「暴虐 (zulam) の創造者は暴虐を働くもの (zālim) だからこそ」とも主張している。それならば、破滅 (halk = 死) を創造したのも破滅するもの (hālik = 死すべき者) となるはずだ、と何故主張せぬのか? あんた達は心底から知るべきである、信心においてまことサタンより邪悪なのはあんた達なのだ、と。サタンは「主よ、あなたが私を惑わせ給いましたので⁸⁾」と。

1) 病院 (māristān) : 11 世紀の著者アル・ハマザーニーの頃にはアラブ・イスラム世界にはマールスターンと呼ばれる病院が既に存在した。この用語自体ペルシャ語のビーマールスターン (bīmāristān) からの借用語であり、最初のマールスターンはアッバース朝第 5 代カリフ・アッラシードが 8 世紀末バグダードに建設した、といわれる。注釈者 M. 'Abduh は「狂人達 (majānīn) の治療を行うところ」としている。

2) アブー・ダーウード師 : 本名 Abū Bakr Muḥammad ibn 'Abdullāh al-'Askarī。8 世紀後半首都バグダードのルサーファ地区で法官として活躍。宿命論を排し、個人の自由意思 (al-khīra) の考えを尊重するムウタジラ派 (al-Mu'tazila) の論客・神学者 (mutakallim) として名をなした。

3) 鳥占 (al-tayr) : 占いの一種で、定めた時に (時には定めた鳥に) 飛行する鳥の飛び方、方向、鳴き声などで吉凶を占う。自分で決断できかねることを占いに託すことは、イスラム教の世界でも日常的に行われていた。鳥占は一日の初め、外出する時などの時に利用されることが多い。鳥占については第 3 話、14 話に既出。

4) ここまでの冒頭段落にはサジュウ (脚韻押韻) の技法の配慮は見られない。

5) 「あの類の人の、その一族みんなの、顔が醜悪になりますように!」: 相手を非難したり、呪ったりする言い回し。

6) マギ (majūs 異端派) : ゴロアスター教の一派で、天体信仰を重んじ特に占星術に詳しかった。ゴロアスター教徒に限らず、イスラム体制内の異端思想の持ち主に対しては「マギ」と呼ぶ風習があった。「多くのムスリムはジャブル (jabr 宿命論) であったのに、一部の思想家や神学者は、人間には「自由に選択する権限はある」イフティヤール ikhtiyār 権は存在するとしてカダル (qadar 自由意思) 派と言われた。「カダル派はこの共同体にとってはマギである」とは有名な神学者アル・アシュアリー (936 年没) の言であり、ここではそれを振って引用している。

7) たとえ家に閉じ籠ってしようとも……行き着く先は死の床となるであろう : この文句は『クルアーン』第 3 章 154 節からの引用である。聖戦ジハードの意味は「お互いに努力し合うこと」であり、ウンマに一旦ことが生じれば、どんなことにも優先して参加しなければならないことを言っている。ジハードの呼び掛けにいろいろ理由をつけて積極的に参加しない者に対してはこうなりますよ、と論している聖句である。

8) あなたが私を惑わせ給いましたので bi-mā aghwayta-nī : 『クルアーン』第 15 章第 39 節からの引用、直後の内容

それは認可されているのに、あんた達は否定しているではないか。サタンは信仰心をもっているのに、あんた達は信仰心を持っておらん。あんた達はこう主張して憚らない、人は自由意志を与えられている、だから選択すればよいのだ、と⁹⁾。

とんでもないことだ！何でも選んで自由に行動できるというならば、己の身体を切り裂いたり、己の眼を抉り取ったり、己の息子を絶壁から放り投げることが出来るとでも？厭世観、あんた達を突き動かしているのはそれだけでは？次々と襲って来る厭世的気分、時には判断する知性が、時には己への^{せめ}闘ぎ合い（自責の念）が追い打ちをかけて。何と恥じ入ることかな、『クルアーン』が心に^{えぐ}憎しみを生むとは、『ハディース』が心に怒りを生むとは！「アッラーが迷誤の道を彷徨わせる者、その者には導き手無からん」¹⁰⁾との聖句を聞けば、文字通りには採らずに^{はばか}曲解して憚らない。「私のために大地が端に追いやられ、その東とその西を開示され給う」¹¹⁾とのハディースを聞くと、有り得ないと否定する。「私に天国の楽園が余りに間近に示されたので、その果実を^も挽ぎ取ろうとしたほどであった。私に地獄の業火が余りに間近に示されたので、その焼熱を避けるべく手を^{かざ}翳したほどであった」¹²⁾と耳にすると、あんた達は首を横に振り、顔を背けるばかり¹³⁾。また「墓の責苦」¹⁴⁾と聞かされると、縁起でもないといふと葬り去る。「(来世に架かる)シラート橋」¹⁵⁾と聞くと、お互い目配せするだけ。「(地獄行きか極楽行きかを計る最後の審判の)天秤」¹⁶⁾のことが話題になると、「計り皿は両方とも空に過ぎん」と言っただけ。聖なる書物(=『クルアーン』)が語られると、「書物とは表も裏も表紙の両側が皮で製せられている物を言う」とはざく始末¹⁷⁾。

おお聖なる書物とハディースに仇なす者達よ、何ゆえの言掛りか？アッラーを、その神兆を、その使徒を何ゆえに^{あざけ}嘲めるのか？¹⁸⁾迷い出た者は迷い出て終わるもの。彼らはただのハディースの不純物に過ぎん¹⁹⁾。その後にあんた達がさらなる迷いの道をさすらっているだけのこと。あんた達

からサタンは神の許可の下、信者を惑わせる任務が与えられる。

- 9) ここまでの二段落のサジュウは下線順に：‘abdi-hi / yadi-hi, jabran / şabran / qahran, tunşifūna / taşifūna, (zālīmūn / hālīkūn ?), yaqīnan / dīnan, ankartum / kafartum。
- 10) 「アッラーが迷誤の道を彷徨わせる者、その者には導き手無からん」；『クルアーン』第7章186節からの引用である。
- 11) 「大地が私のために端に追いやられ、その東とその西を開示され給う」；以下の諸『ハディース』にあり。Abū Dāwūd: Fitan 1, al-Tirmidhī: Fitan 14, Ibn Māja: Fitan 9。
- 12) 「私に天国の楽園が……手を^{かざ}翳したほどであった」；このハディースは Ibn al-Athīr, *Nihāya*, II 82 に記されている。以上の二つのハディースはいずれも預言者ムハンマドがメッカの苦境の時代に、驚異な啓示体験を行ったハディースに基づく。預言者は一夜、天馬ブラークに乗り遠き聖地エルサレムにイスラウ (isrā’ 夜の旅) を行い、岩のドームから天使ガブリエルに導かれ第七天まで昇天して礼拝の啓示を授かってきたというミウラージュ (mi’rāj 昇天) に関わるもの。「イスラウとミウラージュ」伝説として知られる。敬虔な信者の間では、預言者の奇蹟と信じられている。
- 13) 「あんた達は首を横に振り、顔を背けるばかり」；この言い回しは、日本語表現とは逆になっている点、興味を引く。字義通りには「あんた達は頭 (ru’ūs < ra’s) を横に振り、首 (a’nāq < ‘unuq) を背けるばかり」。
- 14) 「墓の責苦」‘adhāb al-qabr；最後の審判の時まで、死者は墓の中で横たわって待つ。その間、善人であろうとも生前の所業を問責され、墓番の天使ムンカルとナキールに詰問を受ける。悪人は拷問にも近い形で責苦を受ける。自由意思の考えを尊重するムウタジャラ派は、これ以降、即ち墓場以降の死人の処遇および来世観についての俗説を理性で持って判断し、多くを退けている。以下で話題とされるのもその類である。
- 15) 「シラート橋」al-sirāt；天国に通ずる剣の刃程に細い橋。天国・地獄共に7層構造になっており、地獄行きの者は橋の途中で落とされ、天国行きの者は瞬間的にその橋を通過するとされている。
- 16) 「天秤」al-miyzān；最後の審判の時、死者に渡される生前の善行と悪行を記した帳簿。いずれの帳簿も、所業は重さとなって記されており、本人の確認を得た上で、その秤の皿の上に乗せられる。生前の善行の帳簿の方が重ければ天国行きが、悪行の方が重ければ地獄行きが決定される。
- 17) ここまでの段落のサジュウは下線順に：batna-hu / bna-hu, ikrahū / tarā-hu, mirrati / dirrati, (baghīḍu-kum / yaghīzu-kum ?), alḥadut / jahadut, (taṭayyartum / taghāmaztum ?), kiffātā-hu / daffātā-hu。
- 18) 「アッラーを、その神兆を、その使徒を何ゆえに嘲めるのか」；『クルアーン』第9章65節からの引用である。
- 19) 「迷い出た者は迷い出て終わるもの。彼らはただのハディースの不純物に過ぎん」；思想信条でイスラム大勢派から逸脱して行ったのは、次注で述べるハワーリジュ派であるが、ここではアブー・ダーウード師が批判されているので、内容的にもムウタジャラ派初期のワスィル Wāṣil ibn ‘Atā’ (748 年没) 一派のことを言っているであろう。多くはハディース学者であった。

もまたただの墮落者の不純物に過ぎんのだ。おおハワーリジュ派²⁰⁾の片割れよ、論争することは(ハワーリジュ派と)同じ、されど(奥に引き込んで)武力に訴えることはしない連中よ。

それにそなた、イブン・ヒシャームよ、ある部分は信じて、ある部分は受け入れようとしな²¹⁾い。わしの聴き及んだところによると、そなたはあの悪魔の連中の一人を妻として己のベッドに引き込んでいるそうじゃな²²⁾。いや高きアッラーは禁じていまいか、我々信者がそのような連中から伴侶を選ぶということを！厭うべきかな、おのが胤を何で善良な者から選ばなかったのか？子孫のことに思いを致さなかったのか？」。こう言い終えると、狂人は祈りの姿勢に入った、「おお神よ、我に与え給え、この者たちの世(此岸＝現世)に代えて、あの連中よりましな世(彼岸)を！汝が天使達と親しく目の辺りにできるところを我に示し給え！」²³⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：私は返答に窮した、アブー・ダーウード師も困惑の態であった。我々は面目を潰されて引き下がざるを得なかった。私にはアブー・ダーウード師の気が沈み込んでいるのが明らかに見えた。それは別れ際まで続いた。その際師が尋ねるには、「イーサー殿、御覧の通りなのだが、そなたの父に誓って(＝是非とも)彼の話で伺っておきたいことがあります。あの悪魔の連中の一人を妻として、とはどんなつもりで彼は言ったのでしょうか？」。私は「さあ分りませんが、一つだけ思い当たることがあります。かつてそうした思想の持ち主に、その娘を貰いたいと思ったことがありました。しかし思っただけで誰かに求婚のことで口外したことはありません。ワッラーヒ(＝誓って申しますが)今後もそうする積りは断じてありません」と答えた。するとアブー・ダーウード師は、「そうしますと、この(心中を読み取る)仕業は悪魔の、ほかならぬ鎖に繋がれた悪魔の仕出かしたことに違いありません」、そう決め付けて断言したのである²⁴⁾。

そこで我々はあの病院の所へ引き返して行っただのである。そしてあの狂人に面会し向き合った。今度は我々の方から質問を行い、疑問の点を尋ねてゆくことにした。彼が口を開くに、「多分お二方はわしの言ったことで納得がゆかぬ点を知りたいということでお戻りじゃな」。私たちは、「あなたは未然に私達の身の上のことをご存知です。現在の我々の心のうちも透視見て見間違うことはありますまい。そこであなたのことを我々に教えて頂けませんか、あなたの秘密を我々に打ち明けて頂けませんか？」と伺いを立てた。彼の答えは韻文で返って来た²⁵⁾：

我こそそろそろの驚異生み出す源泉ぞ

anā yanbū‘u l-‘ajā‘ib

あれこれの^{ばんさく}万策講じて地位保つ身なり

fi l-iḥtiyālī dhū marātib

20) ハワーリジュ派 al-khawārij; イスラム体制が確立する過程の中での初めての分派活動を行った。657年スィフイーンの戦いで、正統カリフ・アリーの仲裁受け入れに対して、異を唱えアリー軍から離脱して行った。以降カリフの資格や罪の問題を神学論争にまで高め、行動する思想集団としての性格を強めて行った。この点が行動を起こさず奥に引き込むムタジラ派と異なった。

21) 「ある部分は信じて、ある部分は受け入れようとしな^い」；イスラムに対してユダヤ人が採った態度。『クルアーン』第2章85節からの引用である。語り手イーサーをムタジラ派信奉者と看做しているために、このような言い回しをしているのであろう。

22) 「そなたはあの悪魔の連中の一人を妻として己のベッドに引き込んでいるそうじゃな」；語り手イーサーは、語り手としての想像人物である。であるからどうストーリーを展開しても良いわけだが、ここではアブー・ダーウード師と縁戚関係と見立てて、異端派ムタジラ派の娘を娶った想定に立っている。

23) ここまでの二段落のサジュウは下線順に：(taṭayyarūna / tastahzi‘ūna?), ḥadīthi / (khabīth, shayṭān?) / baṭānatan。

24) ここまでの段落のサジュウは下線順に：aḥadan / abadan, (shayṭān / ashtān)。

25) ここまでの段落のサジュウは下線順に：ilay-hi / ‘alay-hi, maqālī / su‘ālī, āthartumā / ankartumā (和訳語順は逆)、umūri-nā / ṣudūri-nā, amra-ka / sirra-ka。

げに我は真実語るにはラクダの瘤^{サナーム²⁶⁾}

anā fi l-ḥaqqi sanāmūn

虚言語るにおいてはラクダの鬣^{くび}甲^び (ガーリブ)

anā fi l-bāṭili ghārib

わが故郷は遙けく遠きアレクサンドリア

anā iskandaru dārī

アッラーの地ならば何処なりとも放浪す

fī bilādi lāhi sārīb

あしたに修道院に居らばキリスト教の修道士²⁷⁾

aghtadī fi-d-dayri qissīsan

夕べにマスジドに居らばイスラムの求道者

wa-fi l-masjidi rāhib

(ラマル ramal 調 bā'iyya b 脚韻詩)

第 24 話 病院のマカーマ 完

第 24 話 訳者解説

分量が少なく、その分物語の展開も内容の肉付けや盛り上げも不十分で、あっさりとした作品に仕上がっている。舞台は8世紀末のバスラでの設定。友を伴って病院を訪れた語り手イーサー・イブン・ヒシャーム。二人に入院中の狂人が語り掛けて来る。否、狂人が来訪者二人のうち呼び寄せた方は語り手であったし、また二人に名乗らせる。そのことで、この狂人は語り手とはこの時点で知己の仲であることを確認する。というのも狂人を装ったのは、後舞台の結幕の詩から明らかになり、それが主人公アレクサンドリア出のアブ・ル・ファトフ本人であることが分かる。一方語り手イーサーの方は、最後まで狂人の正体が判別できなかったことになる。外見や面相に覚えが無かったか、また声や素振りに。動きが少なく、物語性と言う点では不十分であり、文学性としての質が問われよう。

しかしこの出会い後の狂人の語り、というより叱責の、この内容の展開は、神学論となって、イスラムの神学の一端が開示される。また一般人の死後や来世観、さらに「預言者のイスラウ(夜の旅)とミウラージ(昇天)」の一部も扱われ、イメージの捕えやすい絵画的に鮮明な庶民の通俗信仰にも触れられて面白い。預言者の天界周りである「預言者のイスラウ(夜の旅)とミウラージ(昇天)」は後世になればなるほど派生話を付加して、マアッリー(1057 歿)の『救しの書簡』として創造も混えた天界めぐりが描かれ、イスラム世界で知れわたった。天国だけでなく地獄回りもして物

26) ラクダの瘤 sanām: ただでさえ背が高いラクダ。その高さの中でも最も高い部位が背中の瘤でサナームとして知られる。それ故 'alw (高さや位置において抜きん出ているもの、最高のもの、頂上、頂点) と喩えられる。「砂丘のサナーム」といえばその稜線を指していうし、「彼は部族のサナームだ」とはその人物の高位性(たとえば族長、有力者、名士など)を示しており、言葉としてもポピュラーで多用される。またサナームは「ラクダの瘤」全体の総称であり、部位はさらに細分されて理解されている。「瘤の上部」はジルワ dhirwa、ナウフ nawf、シャアフ sha'af などがある。「瘤の基部」はカフダ qahda、マフフィド mahfid、カトル katr、その間の側面・傾斜面はガーリブ ghārib などである。最後のガーリブは、馬の鬣甲部に当たる。馬の背中の中では最も高さがある部位である。本話でも例えとされるように、「瘤の部位に次ぐ=最高から2番目のもの」の意味でも用いられる。ラクダの瘤については、拙著『ラクダの文化誌』第6章「ラクダのコブについて」を参照されたい。

27) キリスト教の修道士 qissīs: イスラム誕生以前からアラビア半島に散在して広まっていたキリスト教。その「牧師」のことをカッス (qass pl. qusūs) と言っていた。原義は「知識・経験を積んだ者」→「キリスト教に関する教義や諸知識を兼ね備えた長」である。キッシースの方は修道院生活を送る「修道士」の意味が一般である。

語化や絵画化がされてイスラーム庶民社会の間に流布していった。この伝説と化した話は、ラテン世界にも広まっており、これがダンテの神曲の発想のもとになったとも言われている。

狂人を装う主人公は、語り手イーサーの同行の友人の名を聞く。「あのアスカリー出の？」と問うて、その確認を取ると、この有名なムウタジラ派の思想の持ち主に対して、一挙に捲くし立てる。その自由意志説の不信な、不備な考えを多々上げて非難し、そうした思想に組みしていたら死後の世界はどうなるのかと、再考を促す。ムウタジラ派の思想とは、神の意志のままに、という宿命的、受動的信条・態度を取らず（この立場を採る神学派をジャブル派と言う）、ウマイヤ朝時代にカダル派として出発し、アッバース朝時代にさらにギリシャ思想も組み入れて自由意志を以って表面的・一義的解釈を採らず、クルアーン及び従来の神学的見解を問いただす合理主義思想集団の一派を指す。聡明なカリフ・アル・マアムーン（第7代アッバース朝カリフ、在位813-33）によって設立された「知恵の館」Bayt al-Hikmaを拠点に、ギリシャ思想が翻訳導入され、哲学などの領域が開拓される中で隆盛を迎えた。しかし体制が護持する側に回り、創造性を次第に失って行く中で、衰退して行った。

こうしたムウタジラ派の思想がマカーマの主題として扱われているのである。この狂人の語りがすべてであり、神学論として、後舞台即ち再会の場面でその続きが展開されるか、狂人の超能力が再び披瀝されるかと期待しても、無駄であった。狂人はアラブ世界ではマジュヌーン（majnūn）、即ち「ジン（jinn 精霊）に憑りつかれた者」と呼ばれて、私利私欲を離れたその予知能力は真実を語るものとして評価されていた。この狂人に、研究者 Monroe は、著者自身の己の思想を語らせているとして、アル・ハマザーニーの「自由意思説」に対しての考えを、このマカーマを素材にして分析している。（*Art*, p. 65-75）確かに著者ははるばるイスマイール派の根城であるジュルジャーヌも訪れており、シーア派の、また少数派の信条を理解はしていたはずである。Monroe はアル・ハマザーニーのムウタジラ思想に対しては、その自由意思にある程度許容しているが、余りの思惟を働かせて信仰に立ち入ることに関しては否定的であった、との結論を出している。

狂人に語らせるのは、著者の真の意図を発露させることも出来る一方、その口を借りることによって真意を曖昧にさせることも出来る。道化の役割と似て両義的である。しかし著者は狂人のさらなる予見の記述を拒絶している。再会となる後舞台は、叱責された二人の方の質疑が展開されるはずであった。しかしそれは端折った如くに、定型の正体暴露のシーンとなって、詩行の体裁で大団円に終わっている。場面の設定は、僅かに病院→帰途→病院の場面であり、セリフも殆どが狂人の語りで終わっている。家への帰途およびその後に続く再会での場面の記述も不十分で粗くなっている。詩の挿入の膨らみも、身の上話の4行詩の部分だけであり、あっさりと片付けられており、何か一話として読み終わった充実感が残らない。

文体についてであるが、サジュウ技法に関しては全体的に配慮されている。しかし段落によってバラつきがあり、丁寧に工夫しているところもあれば、ほとんど考慮されていないところもある。引用を多用するなど内容的・形式的に見て工夫の施しようもない文や節など多々あるにはあるのであるが。詩の導入については4行詩があるだけである。それも後舞台となり、正体暴露や申し開きに設定されている最後に入れられており、本舞台の方には全く見られない。本舞台では神学論争を扱っており、意のままにの詩作は難しかろうとは窺わせられる。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では前マカーマに続いて第11話に、Sofya 版も同じく第3話に続く第4話としている。そして Paris 版では第22話以降30話に至るまで欠如して収録されていない。

第25話 飢饉のマカーマ 飢えの中、食べた積もりにさせられて

(原文 M. 'Abduh pp. 127-129)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて言った：飢饉の年¹⁾、私はバグダードに滞在していた。私は（空腹を抱えて）人の集まるところへ出かけた、その集まりは恰もスラッヤー^{すばる}（昴）²⁾の頸飾り糸のように丸く円陣の人垣で囲われていた。彼らから何か食べ物をもらえないかと思ったからである。人垣のなかに一人の若者がいた、舌がうまく回らない、齒が隙間だらけの若者であった。彼は（小声で）私に訊ねてきた、「あなたの目的は何ですか³⁾（＝如何されました）？」「二つの状況に陥って抜け切れないで困っています。一つは貧困、これで飢えに悩まされています。もう一つはこの土地の者でないこと、これで寄る辺なくて故郷へ帰ることも出来ないでいます」。こう私が打ち明けると、若者は「どちらの割れ目（＝困った状況）を先に埋めたい（＝解決したい）と思っておりますか？」と問いかけてきた。「飢えの方です。もう極限にまで達しておりますので」と答えた⁴⁾。

すると、若者は「じゃあ如何です、一切れのパンを召し上がっては、清潔なお盆の上に載せてなど？。一摘みの野菜についてはどうです、きつい酢漬がされたものなど？。風味良いデーツ酒⁵⁾などはいかがですか、刺激の強いアブラナなどを添えて？。串刺しの焼肉⁶⁾などでもいいでしょうな、軽く塩などを塗すなどして？。貴方の許に今すぐ持って来させますが、言われたことを延ばす事がない給仕に、遅れることで客に忍耐を迫ることがないような給仕に？⁷⁾。

その後には黄金の酒盃も続かせては、中にブドウのジュース（＝ワイン）を注いで持って来させましょう！。それってどうでしょう貴方一人が良いですか、それとも包まれた真ん中（＝同席者を交えた会食）がよろしいですか？。なみなみと注がれた酒盃が並ぶなど素晴らしいですな、数々のデザートを揃えたりしまして？。床には絨毯が敷き広げられ、天井には燦燦と輝く灯明がともされたところなどどうです？。技巧^{わざ}巧みな音楽師も配しますかな、その眼や首筋はガゼル鹿を思わすような楽師を？。

もし貴方がこれもお望みでないとしたら、どうですか、（もう少し軽く）新鮮な肉や川魚、それに焼き茄子⁸⁾を沿えるなどするの？。ワインもクトゥルツブル⁹⁾産のものにしましてね、摘

1) 飢饉の年 'am majā'a；ヒジュラ暦 382 年（西暦 992-93 年）のことと思われる。この頃イラク地方は頻繁に飢饉に襲われた。これ以前にも 373 年、376 年、377 年に飢饉の記録がある。

2) スラッヤー al-thurayyā：我が国の昴。牡牛座の腰部にあり、6～7 個の仄かな星群からなる。主星はアルキオーネ。アラブ世界では決して離れること無く、仲睦まじさで知られている。また黄道 28 宿のうち第 3 宿、ナジュム（星）の代名詞になっている。

3) あなたの目的は何ですか mā khaṭbu-ka：「如何されました？」の慣用表現。『クルアーン』20 章 95 節に見られる古くからの言い回し。

4) ここまでの冒頭段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に：majā'at / jamā'at, (thurayyā / shay'an ?), lisāni-hi / asnāni-hi, jū'u / rujū'u。

5) デーツ酒 lawn：禁酒のイスラム世界も、ナビーズ nabīdh と呼ばれるアルコール度の低いデーツ酒はハラール（許法）とされることが多い。このナビーズの同義として用いられている。デーツ酒の原語の lawn は現在は「色・色彩」の代表語となっているが、元来はデーツ（＝ナツメヤシの実）の色付き合いを言ったもので、これを基にした動詞 lawwana とは「デーツが（結実段階で緑、赤、黄色ないし黒と）色づく」ことを表わしている。

6) 串刺しの焼肉 shiwā' šaffīf：現在ではシーシュ・カパーブ shīsh kabāb のこと。今では焼き鳥風の随分サイズが小さくなってしまったが、かつては羊ぐらいの大きさならば胴体丸ごとミシャッカ（mishakka 刺し抜く物、突き通す物＝鉄串）で串刺しにして、火を焚きその上部両端にしっかりと支え棒を配して、その間にミシャッカを置き、ゆっくり回転させながら時間をかけて焼き上げたものもあった。ジャンボな肉料理であった。

7) ここまでの段落のサジュウ技法の語は下線順に：raghīfin / nazīfin / qaṭīfin / thaḡīfin / laṭīfin / hirīfin / šaffīfin / khaṭīfin, (bi-wa'dīn / bi-ṣabīn ?)。

8) 茄子 bādhinjān：英語では egg-plant と現在では言うが、アラビア語から移入された brinjal とも言っている。アラブ圏の茄子は大きなペイナスに近く、色も白いほうが多い。中に具を入れたマハシー mahshī bādhinjān が美味しい。茄子はインド原産であり、サンスクリット語では Banganah と言っていた。ベルシャに伝播して、bādangān といって、それからこの語はアラビア語に入って bādhinjān と言う長たらしい名前となった。エジプト方言では bītingān と言っている。

9) クトゥルツブル Qutrubbul：バグダードと南東チグリス河に面するオクバラの間にある小村であるが、そこはワ

み取られたばかりの林檎も一緒になど?。柔らかく広い座椅子、それも高樓の上などで?。高樓の傍らには流れの速い川が配されており、閃々と噴出^{せんせん}す泉があり、川が幾筋も流入している庭園で、などどうです?」¹⁰⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた: 私は(喜んで) 答えた、「わたしはその三択¹¹⁾の奴隷ですよ (=どれにも従いますよ)」。この若者も嬉しそうに、「この私も喜んでその給仕として仕えさせて頂きます、実現すればの話ですが」と言うではないか! 「なんてこと、アッラーが貴方を祝福しませんように! 貴方は私の食欲をいやがうえにも高めてしまったではありませんか、せつかく絶望がそれを抑え込んでおりましたのに惨いことをする! 貴方ですよ、私に食欲の食味を掴まえさせたのは (=思い出させ取り戻させたのは)! いったい貴方という人はどんな廃墟 (=古巣・出身地) から出て来たんです?」。彼が答えるに(韻文で)¹²⁾;

我アレクサンドリア出の者なり

anā min dhawī liskandariyyah

出自と言えは不純な血など混じらず

min nab‘atīn fī-him zakiyyah

されど時勢も民草もみな軽薄^{あさはか}なもの

sakhafa z-zamānu wa-ahlu-hu

故に我もまた軽薄をわが乗り物として逍遙す

fa-rakibtu min sakhfī maṭiyyah

(カーミル kāmīl 調 yā’iyya y 脚韻詩)

第25話 飢饉のマカーマ 完

第25話 訳者解説

アラブ・イスラーム世界の食生活がこうした形で再現されているのは面白い。以前にも第9話では接待が過ぎて逃げ出す「ジュルジャーヌ (ゴルガーン) のマカーマ」、第12話では奢りに奢ってドロンを決める「バグダードのマカーマ」が扱われているが、本マカーマは新たな食領域の局面を見せてくれている。

主人公、その登場は「集まりのなかに一人の若者がいた、舌がうまく回らない、歯が隙間だらけの若者であった」と描写されている。今回は「若者」として登場している。それも「舌がうまく回らない、歯が隙間だらけ」とあるところから、訳者は言語障害をテーマかモチーフにした舌足らずや、言い間違い、聞き間違いで物語を展開してゆくのでは、と期待したのであるが、見事裏切られた。と言うのも「(舌が) うまく回らない」と訳したルスガ luthghah は「文字発音が上手く出来ない」の意味であるから。ルスガは英語では lisp (舌足らず・舌もつれ) と訳されている。わが国で

インの名産地として知られている。

10) ここまでの二段落のサジュウ (押韻技法) 語は下線順に: dhahabiyyatin / ‘inabiyyatin、(a-dhā-ka / ilay-ka?), mahshuwwatun / mamluwwatun、mu‘addadātun / munaḍḍadātun / mujawwadātun、majīdun / jīdun、ṭariyyin / nahriyyin、maqliyyin / quṭrubbuliyyin、(janiyyin / waṭiyyin / ‘aliyyin?), jarrārin / tharthārin / anhārin。

11) 三択 thālātha; 上の一段目が「食事」中心の①マジュリス・ギザーウ majlis al-ghidhā’ 即ち「(量多く上質の) 食席」、次の段が「飲酒」中心の②マジュリス・シャラーブ・ワ・タラブ majlis al-sharāb wa-l-ṭarab 「音曲を伴った酒席」、そして③三段目が足を延ばして「くつろぎ」中心のマジュリス・ワジュバ・ハフィーファ・ワ・ナウム majlis al-wajba l-khafiifa wa-l-nawm 「軽食の席と仮眠」。

12) ここまでの短い段落のサジュウ (押韻技法) 語は下線順に: amāta-hā / lahāta-hā。

は幼児に見られる /s/ が発音できず /t/ になってしまう「お父たん、お母たん」のような事例のこと。アラビア語のルスガの代表例としては /r/(rā') の子音発音が上手く発音出来ないとされている。レキシコン『リサーン』(VIII 448) にすら、他に意味を持たず、語源も明らかでないルスガ。「r (rā') を正しく発音できないこと」がルスガの語義である。その「r (rā') を正しく発音できないこと」を典型例として、口と舌との連動が未発達のこと、これがルスガである。その lu·th·ghah のスペルが明らかなように子音3文字 /l/ (lām)、/th/ (thā'), /gh/ (ghayn) を並べて造語にしたものである。最初の /l/ および最後の /gh/ の子音であるが、これは /r/ (rā') の子音が関与している。舌が上手く回らないため、前舌音とならずに、重く厚くなってしまう。必然的に舌の奥に行ってしまう、発音できずに /l/ (lām) に、またはさらに咽喉奥音の /gh/ (ghayn) になってしまう。真ん中の /th/ (thā') であるが、これは我が国も同じで、/s/ (sīn) や /sh/ (shīn) は勿論としてそれらの漏れた発音 /th/ (thā') も /t/ (tā') に変わってしまう代表例となっている。この3文字を連ねたものルスガ lu·th·gh (ah) として造語されたものである。さいごの (ah) は名詞化するための付加語尾である。こうした「文字発音が上手く出来ない男の人」のことはアルサグ althagh、女性はラスガーウ lathghā' と称される。

この主人公の描き方「舌がうまく回らない、歯が隙間だらけの若者であった」は、以降の筋の展開と全く関係が無い設定であった。また年齢にしても何故「若者」としたのか。年若い者であるより、経験豊かな中年以降の前提に立った方が以下の内容に対して素直であろう。それとも今回の主人公は「若者」に変装している、と見立てているのであろうか。若者が老人に変装出来るが、老人が若者に果たして変装が出来るだろうか。「舌がうまく回らない」のは何とかなりそうであるが、「歯が隙間だらけの若者」はどうして可能となるのであろうか。アル・ハリリーのマカーマートでは、「若者」を登場させる場合、息子か別の若者を立てて相棒としての役割を負わせ、主人公は老成を思わせる「アブー・ザイド師」としてごく普通に通るのである。ところがハマザーニーの主人公は多くは「アレクサンドリア出の者」といわせてそれと示すだけである。こうした意味でも主人公については年齢に関し、しっかりとした固定像を結ぶことが出来ない。このためにアラブ世界ではシャイフ(老成者)として尊ばれる「師」も付すことが躊躇^{ためら}われる。本話の事例のように「アブ・ル・ファトゥフ師」とも訳しかねる場合が多々あるのである。主人公像が一定して描ききれないため、主人公名が明らかにされない一話の場合、筋の展開からかろうじて類推できるような場合も多い。こうした意味でも一篇として内容に都合よく合わせただけの主人公に過ぎない。その場合わけ・その場しのぎの役割に過ぎない感は否めない。つまりマカーマ文学の創作者の段階では、まだ主人公なる者が必要か、設定したところでその原像を明確化できていない、ないしは順次明確化してゆく段階であったといえよう。一篇一篇を創作してゆく中で、徐々に作り上げて行かれたものではなかったか。

マカーマの内容自体、仕掛けは面白く、コミックであり、ユーモアのリポートリーに分類されよう。しかし分量的に、相変わらずあっさりとした掌編といってよいものである。内容は飢饉が生じている最中、語り手イーサーは空腹を抱えて首都のバグダードの、人の集まるところに出かけ、上に述べた若者に出くわし、それならばこんなご馳走はどうでしょうと誘われる。「貴方の許に今すぐ持って来させましょう、言われたことを延ばす事がない給仕に、遅れることで客を怒らすことがないような給仕に」がこの話のアゲ(盛り上げ)であったことが分る。語り手は三様のメニューを示され、どれにします、との問いに、「わたしはその三択の奴隷ですよ(=どれにも従いますよ)」と期待して答える。すると若者の方もさも嬉しそうに、「この私はその給仕として仕えますが、それが実現すれば」と言う。見事なオチである。抑えていた食欲をいやが上にも焚きつけられた末に、

ガクンと元の飢餓状態に戻される。まさに急転直下の逆転劇に語り手も、まさに「一杯食わせられる」ことになって終わる。

空腹の中でこうした「一杯食わせられる」のは堪^{こた}える。これこれをした積み、で話が進み、メニューが積み上げられてゆく。盛り上がったところで「例えばの話」として蹴落とされる。この「積み」話は「大」話と通ずる喜劇の一つのテーマである。これが「食欲」と関わってくることにより、単なる所有欲や物欲とは異なることになる。「食欲」は生死にかかわる生理現象である。「積み」になって進む話の結末は、充足・不充足とは物凄い落差となって作用する。飢餓を抱えた者に対しての食欲のそそり話では、それが「積み話」ではその気になっていた者にどれほどの落胆を伴う落差は大きいことか。その期待感（アゲ）と裏切られた（サゲ）との落差は絶望にも似た失意の深刻さを増すことになる。「一杯食わせられる」だけでは済まされない生理現象となろう。アラブでは「空腹飢餓の果ては飢え死ぬ。飢え死ぬ、そこに至る前に体中が焼け付くような火照りがある」、とされている。そうした状況を「積み話」は一挙に作り出すことになろう。

料理を眼前に想像して食べた積みになる「積み話」、これは我が国の落語にもあるはなしである。「長屋の花見」だと思うが、経済的に余裕の無い長屋暮らしの連中が花見に出かける。宴を敷くのであるが、元より何の贅沢も出来ない。お茶が「酒」として、沢庵が「卵焼き」として振る舞われ、それらの安上がりの代替物を周りの宴会の手前、おいしそうに食べねばならない、ユーモア話である。しかしアラブ世界はもっとべつな高等な食領域の「積み話」の分野を持っている。本マカーマのように、単に「積み」で料理を連想したり、食べている場面を想像裏に描くだけではない。主客が食卓を囲んで言行も伴う「積み話」になっているのだ。

「私は答えた、「わたしはその三択の奴隷ですよ」と主人公が述べているように、三択とは正式の持て成し、会食、饗宴、祝宴においては、①「食席」マジュリス・ギザーウ majlis al-ghidhā、②「酒席」マジュリス・シャラーブ・ワ・タラブ majlis al-sharāb wa al-ṭarab、そして③「寛ぎの席」マジュリス・ワジュバ・ハフィーファ・ワ・ナウム majlis al-wajba al-khafifa wa al-nawm である。正式には三者が揃い、この順で席が進むのであるが、状況によってそのどれかの場合も多い。そしてそれぞれの席に臨む三者とも、メニューもおおよそが決められており、そうした順で食卓に運ばれてくる。こうした文化的背景から、例え「積み」であっても、架空の状況に言行を伴わなければならない。出されて来る料理は大体想定できるので、その仕様によって手や口をそれに応じて動かす。さらにその料理に相応しく添えられた香草を摘まんだり、それに必要なスパイス類も振り掛けたり、注文したりするような食行為、すべてをそれらしく振る舞い・仕草で行うのだ。こうした行為に加え、雰囲気醸し出す適宜の会話も要求される。四方山の話の交換や、出される料理一品一品への品評や関連事も言葉を交えながら、食事を続けて行く設定である。「食べた積みになり切る」のである。即ち当人は「食べる者になり切る、成り済ます」ことが前提となる。

アッバース朝の宰相たちを輩出したバルマク家。彼等には妙な性癖があり、客に対して「積み」を積もらせて楽しむ風があった。こうした風はもちろん彼等に限られたことではないが、有名にしたのは彼等である。来客に対して饗宴を張る。舞台は整っており、順次料理皿が運ばれて来るのに、皿の中には料理が乗せられていない。しかしホストは委細構わず「さあ何々料理が出ましたよ」と言うと、その空の大皿を前に自ら食べる仕草を始め客たちにも進める。こうして次の料理、次の料理と運ばれて来るのであるが、皿や鉢はすべて空である。しかしホストは楽しそうに食べるジェスチャーを行い、客に話し掛け問い掛け楽しげである。客の空腹感がもう耐えられないと言う頃合いを見計らって、いままで「積み」で食べていた料理がホストの既に語らって描写されたそのままに、

前に運ばれてきて、ようやく実際の饗宴に入っていくのである。このエピソードは「バルマク家の饗宴」Barmacide feastとして西欧でも知られ、「見せ掛けの饗宴」などと訳されている。『千夜一夜物語』にも取り込まれて有名となった。時代の新しい『千夜一夜物語』の成立以前に、こうした高踏的「積り話」が生まれる以前に、アラブ・イスラム世界には本マカーマをはじめとして、様々な「積り話」が集積した形の結実の一つが「バルマク家の饗宴」であり、その素材の一つの本マカーマであると言えよう。もっとも本マカーマの「積り話」のモチーフが著者の独創であったのかは、アラブの文化の深淵を探らねばなるまい。訳者は、「アラブ・イスラム世界にみられる饗宴について」7回にわたって論じたことがある(VESTA, nos. 64-70)。第1回から第4回は饗宴、祝宴における「食席」マジユリス・ギザーウを、とくにその最後に出されるデザート、これをアラブはウクバとかナクルと呼んでいるのであるが菓子カターイフについて論じた。この種たる資料はアル・ハリリーーの第18話「シンジャールのマカーマ——ガラス器が元凶の裏切り話」の中に登場するカターイフであったが、第3回(no. 66, p. 56f.)では「バルマク家の饗宴」をも引き合いに出して論じているので参照されたい。

本話の詩の導入は、帰結となる最後部、申し開きの2詩行のみである。主人公が積り話を披歴したのは良いが、「語り」が「騙り」に結びついていない。カモはうまく嵌めても、肝心な稼ぎがあったのかどうか不問である。むしろ相手が(銭無しの)空腹な語り手であったから、稼ぎは無かったものと思える。サジュウ技法への配慮は全体として行き届いている、各段落の終わりに注として記しておいた。

本マカーマの異同であるが、Fatih版では前マカーマに続いて第31話に、Sofya版及びParis版では欠如して収録されていない。

第26話 訓戒のマカーマ 何たる俗世の執着、来世の忘却、智者への不遜

(原文 M. 'Abduh pp. 130-137)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて以下のような話をした：私はバスラの町に滞在した折のこと。胸を張って堂々と散策していたのだが、進んで行った先にある広場があった。一群の人々が立っている人物を取り囲んでいた。立っている人は周りの群集に訓戒を垂れているのであった。彼が言って聞かすには：

お集まりの皆さん、この世に人生を与えられているのは、自由気ままに¹⁾、と言うわけではありません。今日を生きてこそ、明日もまたあるのです²⁾。しかし皆さん、あなた方は深い穴倉（＝墓）に一步一步向かっているのを忘れてはなりません。ですからそれに対して対処せねばなりません、出来る限りの力を發揮して。この世の生活を終えた後では、その報酬（＝最後の審判）が待っていますぞ。ですからその備え³⁾をしておかねばなりません。（最後の審判においては）言い訳は決して、決して、通るものではありませんぞ、誰にとっても（善悪の）疑いを差し挟むことのない明らかな（天国か地獄かの）道が示されるからです。神からの御徴⁴⁾はあなた方に伝えられていたはず、天からは啓示によって、地にあっては例示によって⁵⁾。

違いますか、（アダム⁶⁾の創造を含めて）天地創造を全知にして創始なされた御方、その御方は（同時に）朽ち果てた遺骸を蘇生らせ給いますこと。そうではありませんか、現世は修練の家であり、渡らねばならない橋であること。その橋を渡りきった人は救われ、蓄財込んだ人は悔恨⁷⁾の事となる。違いますか、あなた方の前には（誘惑の）罫が仕掛けられ、あなた方に対して（邪悪の）種が振り撒かれていること。ですから、それ（＝誘惑の罫）に手を出せば、罫に掛かることになり、それ（邪悪な種）を拾い上げれば邪悪に落ちたことになります。そうではありませんか、清貧こそあなた方の預言者の外着であったこと。ならば、さあそれを着ようではありませんか。金満こそ神への反逆の外着であること、ならば、さあそれを着るのを止めようではありませんか。余念は逸脱者を誑かすもの、彼らは信心を拒み、『クルアーン』を曲解めるもの⁸⁾。まこと浮世の背後は墓場ですぞ！あなた方は悪戯⁹⁾に（現世に）創造されたものではありません。ですから（来たるべき来世の地獄の）業火の熱暑に気を引き締めなされ。永遠の住処が報酬となる（準備）に急ぎ対処なされ！⁵⁾

違いますか、知識（持つ）とは（何事にも代えがたい）より良いものであること、仮令いくらか

1) 自由気ままに sudan；元来は「ラクダの群れ (ibil) が、番人 (rā'i) も要らず、自由気ままに放牧地で草を食むこと」を言う。muhmala と同義である。ここでは信者がラクダ達、見守るのが神、という構図になり、「迷える羊＝信者、導く牧者・牧師が神」、というキリスト教観の対比が見られて興味深い。この節は『クルアーン』第75章36節「人間は自由気ままに放任されていると思っているのですか」から引いたもの。

2) 今日を生きてこそ、明日もまたあるのです；ma'a l-yawmi ghadun 直訳は「今日と共に明日が」。アラブの諺より。（'Ask. II, 284 他）。

3) ここまでの冒頭段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に：sudan / ghadan, huwwatin / quwwatin, ma'ādan / zādan, mahajjatu / hujjatu, khabari / 'ibari。

4) 余念は逸脱者を誑かすもの、彼らは信心を拒み、『クルアーン』を曲解めるもの；この部分、神学一派で、『クルアーン』を字義通りに採らず、秘義、奥義、別義、内義で解釈しようとしたパーティン派のことを述べている。「『クルアーン』を曲解めるもの」の部分は『クルアーン』15章91節からの引用である。なお第24話「病院のマカーマ——狂人に異端思想を責められて」も参照のこと。

5) この二文はサジュウ（脚韻）nāri / dāri ばかりではなく、頭韻も踏んでいる。「気を引き締めなされ、原義は注意しなされ (hadhāri)」、「急ぎ対処なされ (badāri)」。

いずれも名詞型命令形 fa'ali で、限られた語しか認められていない稀な例である。
ここまでの段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に：'alīman / ramīman, jihāzin / jawāzin, salīma / nadīma, yarta' / yaqa', yalquṭ / yasquṭ, fa-ktasū-hā / talbasū-hā, mulhīdīna / ad-dīna / 'idīna, jadathan / 'abathan, nāri / dāri, ḥadhāri / badāri。

の欠点があるにせよ。一方無知はいかなる場合にも醜悪いものであること。あなた達は天がその影を作って覆ってしまう（＝見放す）最も哀れな人々となりましょう、もしもあなた方によって学者達が見下げられているのならば。人々は彼らのターバンを師と仰ぐはずですし、また彼らの手綱によって導かれ、彼らの庇護の許に避難るもののはずだからです。

（真の）人間とは二様に分かれるものと言えましょう。牧する（＝導かんとする）学者、努め究めんとする学徒、この二種です。残りの者たちは見放されたダチョウか、当て所無く彷徨う畜生に過ぎないのです。呪われたことかな、高位なる者が卑俗なる者に見下されている様子！学識ある人が（成金の類の）無知な者に付き従う様子！わしはかつてフサイン様の御子アリー⁶⁾（イブン・アービディーン）様の人々を前にして立ち上がり、訓戒を垂れ給うたのを聞いたことがございます。アリー様は次のように言っておられました⁷⁾：

おお我が魂よ、何時まで生きていることに、この現世に執着しようというのか？この建物（＝浮世）に留まろうとするのか？あれらの人々の遺訓を己が戒めとしていないのか、去り逝きし汝が先祖たちの、大地が土塊として覆っている汝が友達⁸⁾の、不慮の死に至った汝が兄弟の、そして滅びの館に運び去られた汝が好敵手達の？⁹⁾：

[ここでアリーの説教は韻文に変じて3詩行を吟ずる。以下このスタイルが採られている]

彼の人々 地上に現れて後 今や大地の腹の中にあり

fa-hum fī buṭūni l-arḍi ba'da ḡuhūri-hā

如何に善行・美徳積めど 経年と風化と共に埋もれ果つ

maḥāsinu-hum fī-hā bawālin dawāthiru

住みおりし豪邸今は廃墟れ 囲壁また境すら見分け定まらず

khalat dūru-hum min-hum wa-aqwat 'irāṣu-hum

彼の人々を導いたは天命 死への確実の一步一步の果て

wa-sāqat-hum naḥwa l-manāya l-maqādiru

俗世^{しがらみ}の柵貯め集めし俗物 すべて無に帰して

wa-khallaw 'ani d-dunyā wa-mā jama'ū la-hā

彼らが遺体土塊の下に墓穴に抱かれてあり

wa-ḡammat-humu taḥta t-turābi l-ḡafā'iru

（タウィール ṭawīl 調 rā'iyya r 脚韻詩）

どのくらい死滅の手が奪い去っていったことか、幾世代、幾世紀にわたって、！多くの災害によってどれ位世の中が変わったことか。またどのくらい多くの人士が土と化していったことか！¹⁰⁾

6) フサイン様の御子アリー；アリー・イブン・フサイン 'Alī ibn Husayn (AH. 94/AD. 712-3 没)。第4代正統カリフ・アリーの孫。父フサインはウマイヤ朝に抗してカリフ権を争うが、カルバラーの戦い（680年）で殺害される。唯一生存を許されたその息子アリーは、ザイヌ・ル・アービディーン (Zayn al-'Abidīn 敬虔者たちの至宝) の名で親しまれ、メディナで敬虔な人生を送る。本文はそうしたアリーの現世の処し方を説法した一つであろう。シーア派では第4代イマーム（教主）として尊崇されている。

7) ここまでの二段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に；'illāti-hi / ḡālāti-hi, samā'u / 'ulamā'u, a'immati-him / azimmati-him / dhimmati-him, yar'ā / yas'ā, na'āmin / an'āmin, sāfilī-hi / jāhili-hi。

8) 汝が友達 alāfi-ki；友達 alāfの単数は ilf という。註釈者 M. 'Abduh (p. 132) によれば、ulāfi-ki と読ませる写本があるとのこと。こちらの単数は alif であり、単なる友達では無く「より親しい友、親友」の意味となる。

9) ここまでの段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に；rukūnu-ki / sukūnu-ki, aslāfi-ki / ālāfi-ki, ikhwāni-ki / aqrāni-ki。

10) ここまでの段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に；(manūni / qarūnin?), (bilā-hā / tharā-hā?)

この世俗を（妻と）迎えんと、そなたは執着し競い合わんとするや

wa-anta ‘ala d-dunyā mukibbun munāfisun

他の求婚者と、富と財をひたすら求め積み上げて

li-khuṭṭābi-hā fi-hā ḥarīsun mukāthiru

度が過ぎて破滅に向かい、それすらをも無頓着

‘alā khaṭarin tamshī wa-tuṣbiḥu lāhiyan

如何ほど汝承知か 己の身を破滅に晒しているかを

a-tadrī bi-mādhā law ‘aqalta tukhāṭiru

己の俗世のために奮闘し、身をすり減らす人間

wa-inna mra’an yas‘ā li-dunyā-hu jāhidan

来世のこと念頭に無い人間 これら疑いなく失敗者ぞ

wa-yadhhalu ‘an ukhrā-hu lā shakka khāsiru

（タウィール ṭawīl 調 rā’iyya r 脚韻詩）

しか
確と見ておいでか、今は亡き国々を、潰え去った王朝を。奢りし者も日々が押しつぶし、滅亡が
彼等を跡形なく消し去る。そのかつての遺跡だとして風化に耐えず、残るはただに伝承のみ¹¹⁾；

いにしえ
古の人みな土の中に朽ち果てて顧みられることなく

fa-adḥaw ramīman fi t-turābi wa-aqfarat

つどにぎ
集い賑わいし場所も閑散として囲われし場所定かならず

majālisu min-hum ‘uṭṭilat wa-maqāṣiru

彼らすべて切り離されてあり この世から、集め貯めた俗物から

wa-khallaw ‘ani d-dunyā wa-mā jama‘ū bi-hā

誰一人成功者になれず、ただ忍耐ありし者のみ別にして

wa-mā fāza min-hum ghayru man huwa ṣābiru

後者住むとしたはお互いの付き合いも叶わぬ飯の宿

wa-ḥallū bi-dārin lā tazāwura bayna-hum

されば訪れ合うなど如何してしよう 今は墓地の住人なれば

wa-annā li-sukkāni l-qubūri l-tazāwuru

汝見出すはただ 彼ら横たわる平らな墓土のみぞ

fa-mā in tarā illā rumūsan thawau bi-hā

訪れるはただ その上を粉塵撒き散らす風のみぞ

musatṭaḥatan tasfī ‘alay-ha l-a‘āṣiru

（タウィール ṭawīl 調 rā’iyya r 脚韻詩）

どのくらい汝は見てきたことか 威光と権力を兼備し、軍人と補佐役たちに恵まれた大人物を。
世上のあらん限りを尽くし、望むものすべてを手に入れ、不落な城に居を構え、別荘まで設け、そこには宝物や營兵を囲い込んで¹²⁾；

11) ここまでの段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に；khāliyat / fāniyat, ayyāmu / ḥimāmu, āthāru-hum / akhbāru-hum。

12) ここまでの段落のサジュウ語は下線順に；sultānin / a‘wānin, dunyā-hu / munā-hu, dasākira / ‘asākira。

されど如何な者なれど死がその手差し伸べれば免れる不可能^{まぬが あたわず}

fa-mā šarafat kaffā l-maniyyati idh atat

どれほどの財宝積みめど その人名指しで突然と来れば

mubādiratan tahwī ilay-hi dh-dhakhā'iru

名指された者 いかな城塞を築こうにも守りえず

wa-lā dafā'at 'an-hu l-ḥuṣūnu llatī banā

外に濠を張り巡らし 内に城郭¹³⁾を構えたりと言えども

wa-ḥaffat bi-hā anhāru-hā wa-d-dasākīru

どんな策略巡らせようとも 死別に打ち克つこと出来もせず

wa-lā qāra'at 'an-hu l-maniyyata ḥīlatun

また己の軍勢の主君を守護しようと血気盛んになろうとも

wa-lā ṭami'at fī dh-dhabbi 'an-hu l-'asākīru

(タウィール ṭawīl 調 3 詩行 rā'iyya r 脚韻詩)

さあお集まりの皆さん、気を付け、気を付けなされ (al-ḥadhara al-ḥadhara)！そして一刻も早く、早く立ち退くことです¹⁴⁾ (al-bidāra al-bidāra)、この俗世から、運の有為天変から！死神があなたたちを絡め捕ろうとする罠から！あなた方に対してその煌びやかな一面を見せつけ¹⁵⁾、享楽な一面をその媚を含んだ目線で魅惑しようとする猥雑から！¹⁶⁾；

俗世で辛酸舐めた汝の体験 まだ不十分の少なさとはいえ

wa-fī dūni mā 'āyantu min faja'āti-hā

承知のはず 俗世を捨て、敬虔さに精進すべきことが

ilā rafḍi-hā dā'in wa-bi-z-zuhdi āmiru

されば猛省むべし怠慢るべからず 汝が人生浮世なれば¹⁷⁾

fa-judda wa-lā taghful fa-'ayshu-ka bā'idun

とどのつまり汝が戻り逝く¹⁸⁾は 死の館なるを知れ

wa-anta ilā dāri l-maniyyati šā'iru

俗世に何を求めると言うぞ 俗物を求めるはただに

wa-lā taṭlubi d-dunyā fa-inna ṭilāba-hā

汝にとりて危害なすのみ たとえ欲望の達成されたとして

wa-in nilta min-hā raghbatan la-ka dā'iru

13) 城郭 dasākīr；dasākīr は daskara の複数形。daskara は外来語で、ヘブライ語またはギリシャ語、あるいはペルシャ語起源とされる。多義的に「客を迎え入れる大きな建物」で、この詩行に入る直前の記述では「別荘」と訳しておいたが、酒席を主とした寛ぎのための「宴会場」の意味として用いられている。他にイーワーン (īwān 中庭に面するアーチ広間)、サロン、ワイン・ホールなど。

14) 気を付け、気を付けなされ！そして一刻も早く、早く立ち退くことです；畳語を見事に用いている。al-ḥadhara al-ḥadhara al-bidāra al-bidāra。しかもこれらは fa'āla または fī'āla との語形を取って、動詞の命令形と同じ働きをする名詞語形なのである。上の注 5 も参照。

15) 見せつけ tajallat；註釈者 M. 'Abduh (p. 132) によれば、tahallat と読ませる説もあると紹介している。こちらは「飾り付ける」であるから、違和感はない。ヌクタ (子音点) 在る無しの違いであるが。

16) ここまでの段落のサジユウ (押韻技法) 語は下線順に；al-ḥadhara / al-bidāra, makāyidi-hā / maṣāyidi-hā, zīnati-hā / bahjati-hā。

17) 浮世なれば bā'idun；直義は能動分詞で「止む者、続かない者、消滅するもの、破滅する者」、いかにもこの世の儚さを言い当てている。同義語はもっとポピュラーな zā'il がある。この部分 bā'idun ではなく、zā'ilun としている写本もあるそうである (M. 'Abduh p. 134)。

18) 戻り逝く šā'ir；写本によっては zā'ir (訪問者) の語を採っているそうである (M. 'Abduh p. 134) が、前置詞 ilā は šā'ir の方の必要なので、こちらの方が相応しかろう。

(タウィール *ṭawīl* 調三詩行 *rā'iyya* r 脚韻詩)

賢者であるならば何故に俗世を追い求むことをしなされるのですか？智者であるならば何故にそれに喜びを見出すのですか？そんなものはただに一夜の露に過ぎないものではないでしょうか？死を（絶えず意識して）恐れながら床に就く人に対して、死が訪れてもそれを避けることを望まぬ人に対して、あなた方は驚異の目を向けることはないのですか？¹⁹⁾；

否、否、我らときたら自ら魂を欺いているに過ぎぬ

a-lā lā wa-lākinnā naghurru nufūsa-nā

俗事に急くあまり懸念することあれど内省ることなし

wa-tashghalu-hā alladhātu 'ammā tuḥādhiru

如何にして俗世楽しめるや 審判の存在を確信する者が

wa-kayfa yaladhdhu l-'aysha man huwa muwqinun

心の秘事すべてが暴露される²⁰⁾ 公正な裁き場所の存在を信ずる人が

bi-mawqifi 'adlin ḥaythu tublā s-sarā'iru

我らは恰も復活の存在無きが如き現世のふるまい

ka-anaa narā an lā nashūra wa-anna-nā

我ら見離なされた者か 死後に着くべき所無きが如くに

sudan mā la-nā ba'da l-fanā'i maṣāyiru

(タウィール *ṭawīl* 調3詩行 *rā'iyya* r 脚韻詩)

世俗、それに追ひ捲られた者達のどのくらい多くが、裏切られ変転を味わってきたことか。それに夢中となった者たちのどのくらい多くが一敗地に塗れさせられてきたことか。転んだとしても立ち上がらせようとはしてはくれないし、倒されたとしても手を貸そうとはしてはくれない。傷病に苦しんでも治そうともしてはくれないし、苦痛に悩んでも癒してはくれるところではない²¹⁾；

否むしろ権威と地位を得た後 剥奪し元に引き戻すものぞ

balā awradat-hu ba'da 'izzin wa-ra'fatin

俗世、そは邪悪なる水場 泥濘逃れる手立て無し²²⁾

mawārīda sū'in mā la-hunna maṣādiru

逃れる手立て無しと悟りし時、また誰も助け手無く

fa-lammā ra'ā an lā najāta wa-anna-hu

窮地より救出不能で これぞ死と悟りし時

huwa l-mawtu lā yunji-hi min-hu l-mu'āziru

悔やむこと頻り 悔やみ長引かすこと救いが如くに

tanaddama law aghnā-hu tūlu nadāmatin

19) ここまでの段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に：labībun / arībun、mawta / fatwa。

20) 秘されていた諸念が暴露される tublā s-sarā'iru：「秘されていた諸物が暴露される日」yawma tublā s-sarā'iru、『クルアーン』第86章第9節からの引喩。

21) ここまでの段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に：ilay-hā / 'alay-hā、'athrati-hi / ṣar'ati-hi、saqami-hi / alami-hi。

22) 俗世、そは邪悪なる水場 泥濘逃れる手立て無し：「水場」の原語 mawārid（単数形 mawrid）は「水場」に対してこれから＜向かって行く＞ことを表し、「泥濘逃れる」の原語 maṣādir（単数形 maṣdar）は「水場」に対して水飼いを終えてそこから＜立ち去って行く＞ことを表す。両者はいずれも遊牧の給水用語であって、対義語として、また「水場」を「知識・情報の源泉」の縁語として書物の題名としてもよく用いられる。

泣き暮らすは犯して来し大罪次々と去来す

‘alay-hi wa-abkat-hu dh-dhunūbu l-kabā’iru

(タウィール *ṭawīl* 調三詩行 *rā’iyya* r 脚韻)

彼の嘆くこと憐れ、かつて犯せし罪のあれこれを思い出して。彼の悔いること憐れ、現世に積み重ねし悪行を思い起こして。その時に至っては泣きこそ掻いての言い訳も通用しません、あれこれの弁明も救われることはありません²³⁾；

彼を取り巻くは 悲哀と苦悶のもろもろの層

aḥāṭat bi-hi aḥzānu-hu wa-humūmu-hu

言い訳立たぬを思い知るに至りし時 絶望の襲い來たる²⁴⁾

wa-ablasa lammā a‘jazat-hu l-mu‘ādhiru

彼に対して死への痛み 和らげられる人などゐるわけは無く

fa-laysa la-hu min kurbati l-mawti fārijun

死を避けて通りたくても 手差し出す人などおよそ無し

wa-laysa la-hu mimmā yuḥādhiru nāṣiru

彼の咽喉 死すぐ前にして、喘鳴を引き起こし

wa-qad khasi‘at fawqa l-maniyyati nafsū-hu

口蓋垂及び喉頭部^{のどひこ}そに^{のどまえ}応じて 響き音繰り返すのみぞ

turaddidu-hā min-hu l-luhā wa-l-lanājiru

(タウィール *ṭawīl* 調3詩行 *rā’iyya* r 脚韻)

いったい何時まで、来世のために現世の綻びを取り繕おうとするのですか？そうしている間にも、執着（の馬）に乗っているのですよ。まこと私の見るところ、確信を持てない心弱い方々ばかり。おお低俗を信心に引き上げてくれるお方よ！あなたにとってこの現状がアッラフマーン（慈悲深き神）のお命じになったことなのですか？この有り様があの聖典『クルアーン』が導いてくれていることなのですか？²⁵⁾；

汝の所業 そは残すべきものを破壊し、消滅で良きものを建てる

tukharribu mā yabqā wa-ta‘muru fāniyan

とどのつまりはすべてが半端、残るも半端、消えるも半端

fa-lā dhāka mawfūrun wa-lā dhāka ‘āmiru

汝弁明者持つや 汝の死²⁶⁾ 時期満たせば突如として襲い来る

fa-hal la-ka in wāfā-ka ḥatfu-ka baghtatan

23) ここまでの段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に：khaṭāyā-hu / dunyā-hu, isti‘bāru / i’tidhāru。

24) 絶望の襲い來たる ablasa：この動詞はイブリース iblis の語根とされる。サタンと同義のイブリースは人間を罪惡に誘惑して神の慈悲を「絶望させる」ものである。一説にはこの部分は wa-iblisun としている（M. ‘Abduh p. 135）文脈に即して訳すと「そしてみたことかイブリースの出現」となろう。

25) ここまでの段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に：dunyā-ka / hawā-ka, yaqīni / dīni, al-rahmān / al-qur‘ān。

26) 死 ḥatf：この語は、本文とは意味合いを異にし「突然死」的な意味では用いない。ごく普通には māta ḥatfā anfi-hi 「彼は鼻死の死に方で死んだ」のように使用している。「鼻死の死に方 ḥatf al-anf」とは「自然死、寿命が来て死ぬ」である。アラブの死の観念では、人の魂は息をしている鼻から最後の息が引き取られると同時にその人の魂も鼻から抜け出て行く、と信じられている。即ち、様々な死に方がある中、「鼻死」は「床の上での死」、我が国の言い方をすれば「畳の上で死ぬ」ことである。従って戦死、負傷死などの出血多量で死ぬ場合や、溺死、転落死、焼死、自殺などは「鼻死」とは認められず、「赤死」 mawt aḥmar ほかの死に方で言われる。

されば益するもの何も無く神の御前に立つ、これその時ぞ
wa-lam taktasib khayran ladā llāhi ‘ādhiru
汝これで満足するや 汝が人生只に過ぎて終わり徒勞に帰すを
a-tarqā bi-an taqdi l-ḥayāta wa-tanqaḍī
信心は依然として浅きまま されど資産有り余りしまま！
wa-dīnu-ka manqūṣun wa-mālu-ka wāfiru
(タウィール ṭawīl 調3 詩行 rā’iyya r 脚韻詩)

語り手イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：私は会衆の一人に尋ねた、「いったいあの方はどなたですか？」と。「こちらに來られたばかりの他^よ国の方です、どんな人物かは存じません。ともかくも彼のマカーマ²⁷⁾ (maqāmati-hi 説教) が終わるまで待つことにしましょう。おそらく何か素性を明かしてくれましょうから」、との答えであった。そこで私も待つことにした。説教者は訓戒を続けていた：

知識というものは実践を伴ってこそ己が身の飾りとなるもの。絶対的權威に対しては赦しを実行することで謝意が表されることになるもの。純粋なるものを選び取り、汚濁なるものは捨てなされ。アッラーよ 我に対しても皆さんに対しても赦しを与えられんことを！」。

こう言い終わるとややあってこの人物はその場を離れ去ろうとした。私は彼の後を追うことにした。追いついてから私は声を掛けた、「おおシャイフ (長老) 殿、あなたはどんな方なのでしょう？」。すると彼は「スプハーナッラー (subḥāna llāhi アッラーに讃えあれ) ! そなたは我が (老いた) 外見を看てその変り様に納得出来なかったのか、不審がって本当のところを探ろうとまでしたが、結局は認識出来ずじまいということになってしまったではないか。わしじゃよ、アレクサンドリヤ出のアブ・ル・ファトフじゃよ」。 (気づかされて思わず) わたしは口走った、「ハフィザカッラーフ (ḥafīza-ka llāhu アッラーがあなたを守護^もり給わんことを) ! その白髪はどうしたことでしょう！」と。彼は (詩でもって) 次のように答えた²⁸⁾：

白髪 そは (老いの) 警告者 されど言葉発せぬ沈黙者
nadhīrun wa-lākinna-hu sākitun
そは訪れ人 されど他人の不幸をほくそ笑む者
wa-ḍayfun wa-lākinna-hu shāmitu
そは死の不安呼ぶもの 以降厳として存在す
wa-ishkhāṣu mawtin wa-lākinna-hu
何時まで？ 然り、野辺送りと果てるその時まで
ilā an ushayyi‘a-hu thābitu
(ムタカーリブ mutaḳārib 調2 詩行 tā’iyya t 脚韻詩)

第26話 訓戒のマカーマ 完

27) マカーマ maqāmati-hi；ここでのマカーマの意味は文学ジャンルの「騙るを語る」の意味では無く、「行っていること、立って振る舞っていること」の原義に近く、文脈ではその行為は「説教」、「訓戒」と言うことになろう。

28) ここまでの三段落のサジュウ (押韻技法) 語は下線順に；maqāmati-hi / ‘alāmati-hi、(‘afwi / ṣafwa ?)、ghayyarta-hā / ankarta-hā。

訳者解説

この第26話目には本来は al-Maqāma al-Shāmiyya「シリアのマカーマ」の一篇が入るはずであった。内容が不謹慎な性を描いているために、編者 M. ‘Abduh はこの一篇を外してしまったことが知られている。従ってアル・ハマザーニーのマカーマ全作品は52篇であったとされるのは、この所以である。

さて、本話は（外された本来の26話の不謹慎な内容を補完するかのように）表題の如く「訓戒」(wa‘az)で押し通される。それ故このマカーマの見せ場は、訓戒をどう訴えるかにある。そのためストーリーの展開としては、動きが見られず、劇としての興味は削がれる。しかしイスラム世界の訓戒の一端がさまざまに開示され、イスラム教を知る上では興味深いと言えよう。語り手はバスラにいます。後輩のアル・ハリリーの出身地である。アル・ハリリーは自著『マカーマート』の第48話、50話でバスラの情報を満載して、ストーリーの中に入れて込んで興味をそそっている。しかし先輩アル・ハマザーニーは単に地名として選んでいるだけで、何の現地情報もない。バスラで群集に割って入って行くと、主人公が滔々と訓戒を垂れている。これが本話のマカーマである。富と欲得に生きる低俗で穢れた現世に対しては、知識がまた知識人がいかに疎んじられているか、敬虔に生き遁世を勧め、死を、来世の用意をせよ、と。敬虔な人生を送って名高いアリー・ザイヌル・アービディーン（敬虔者たちの至宝であるアリー）の訓戒を長々と述べる。それも韻文散文を効果的に交互に用いて。主人公の説教の中では合計9篇の詩句が挿入されている。いずれもが①タウィール調、②三詩行、③ラーイッヤ（r脚韻詩）で統一されているから、「敬虔者たちの至宝」のアリーの同一の詩作品の中から引用したものであろう。

語り手には最後までこの訓戒者が誰か分からず、後舞台で語り手がこの説教師の問い質して、そこで初めて主人公アブ・ル・ファトフその人であることが分かる、という設定である。白髪と寄る年波とがそうと気づかせなかった、定型に近い大団円ではある。このマカーマの見せ場は、題名どうり訓戒(wa‘az)である、ということか。主人公にとってみれば、稼ぎのカモである聴衆も設定されてはいるものの、具体的描写は無く、ただ語り手が隣り合わせた人に説教者は誰かと尋ねるくらいである。主人公の方も長い訓戒を垂れた後、あっさりその場を去り、何の稼ぎもない。

このマカーマの主人公らしからぬ「騙らぬ」語りの本舞台からの不自然な「稼がぬまま」の去り方は、題名と＜26＞話の配列に何やら道理が求められそうである。題名が訓戒(wa‘az)である。他のマカーマートがそうであるように、「訓戒」を主題として銘打つ場合、多くは「遺訓」、即ち死を前にした父が子に、師が弟子に、己の体験談や、継承されてきた極意や秘伝を伝え、言い聞かす設定が多い。本話でもそうした場の設定が出来たはずであり、その前提に立てば「稼ぎ」の仕掛けも無かったことは正当化されよう。さらに「遺訓」を主題にした一篇は、巻末の方に配されるのも道理であろう。一世紀後のアル・ハリリーは50篇中第49話に配している。ここでは26話に設定されていることであるが、51ないし52話をアル・ハマザーニーの作品群と看做さず、20数話を彼の確実なマカーマの総数と観る見方もある。写本の異同で触れる Paris 写本には僅か19話収録されているだけである。この観点からすると一話として分量的にも十分さを備え、また「遺訓」的配慮からここに配した理由も領けよう。

後輩のアル・ハリリーは先人のこのマカーマ自体の「死および死後の世界を思いやる」作意に着想を、またこの訓戒詩に感銘をうけたのであろう。『マカーマート』第11話「サーワのマカーマ」で、「墓地での垂訓」を主題に一話にまとめた。場所を墓地に設定し、個人の葬儀に集まった人々に対して、死について、死後について、墓について、現世での脱俗を勧める長大な詩を主人公に語

らしめている。最後に施しの意義を説き、聴衆から金銭の恵みを受ける設定である。先人の不完全なストーリーを、マカーマとして完成させている。

内容はともかく、形式的には一話が短すぎて断片的の感が否めないアル・ハマザーニーのマカーマ群にあって、この第26話は分量的にも、文体においても、マカーマ形式にふさわしい体裁にはなっていない。主人公アブ・ル・ファトフの長々とした訓戒。しかしそれを飽かすことが無い中途から始まる3行詩を挟む緊迫感。全部で9か所の3行詩（第3番目のみ4詩行）、しかもいずれもラীয়ヤ（r脚韻）で押韻し、しかも律格はタウィール調で統一されている。あたかも長詩を細切れにして配列したごとく見事である。参考までにここで用いられているタウィール調もまた、長格と訳されるように、一詩行の律格が / 短長短 / 短長短長 / 短長短 / 短長短長 / が半詩行となって連続する、律格型の中でも最も長いものである。文体であるサジュウ（押韻散文）も本話では、三、四行にすぎない短い段落においても、その配慮のほどが観察される。詩の一篇の間に挟まれている数行の散文に至っても、見事といってよいほどに押韻脚語を配する技法を工夫しており、作者の本領の一端を垣間見させてくれている。

本マカーマの異同であるが、Fatih版では早い第12話に、Sofya版では第11話に配されている。Paris版では本話は欠如して収録されていない。

第 27 話 アル・アスワド¹⁾のマカーマ 遊牧民の豪族キナーン族の名士のテントに逃れて

(原文 M. ‘Abduh pp. 138-141)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて以下のような話をした：私はある偶然から資金を取得したのであるが、嫌疑がかかって（捕縛される危険を冒して）しまっていた。そこでその町を脱出することにした、何処に行くかも決めずにめくら減法²⁾。（町を出て遥かに遠く旅すると）バーディヤ(砂漠)の中に出た。そして私の放浪はようやくベドウィンのテント村の陰に辿り着いた。

あるテントのトゥヌブ³⁾(テント綱)の脇で一人の少年が目に残った。彼は(何やら描きながら)地面を相手に同年齢の仲間と一緒に遊んでいた。そして(驚くことに何やら)詩を口ずさんでいたのであったが、彼の身辺を叙した(なかなかと評価できる)ものであり、即席の詩作にしてはあの年頃では出来過ぎであった。この少年がその(詩の)織機を織るなどとは到底考えられないことであつた。そこで私は声を掛けた、「おおアラブの若者よ、その詩は学び覚えたものなのかな、それとも自分で作ったものなのかな?」。その少年が答えるに、「いいえ、僕が作詩したものです」。こう言うってから、次のように詠じたのである⁴⁾；

まこと我 年齢幼くはあれど

innī wa-in kuntu ṣaġira s-sinni

また衆目の我を訝しがるを感じおれど

wa-kāna fi l-‘ayni nubuwun ‘annī

我に憑くサタンはジン族の長ぞ⁵⁾

fa-inna shayṭānī amīru l-jinni

詩の世界のあらゆる技芸を伝授し給う

yadhabu bī fi sh-shi‘ri kulla fanni

ついには心中の危惧悉く払い除け給うなり

hattā yarudda ‘ārīḍa t-tazannī

されば(サタンよ)懸念すること無く我が許より去り給え

fa-mqī ‘alā risli-ka wa-grub ‘annī

(ラジャズ *rajaz* 調⁶⁾3 詩行 Nūniyya n 脚韻詩)

- 1) アル・アスワド al-Aswad ibn Qinān；キナーン族 (Banū Qinān) に属する、ベドウィンの長老で、その寛大さの名声は砂漠の中だけではなく、地域と時代を越えて不朽のものとなっている。
- 2) 何処に行くかも決めずにめくら減法 *himtu ‘alā wajhi*；原語 *hāma ‘alā wajhi-hi* とは「彼は彼の顔の上をさ迷った」が直訳で、「狂った恋人のようにほつき歩いた」、「自分でも分からない慌てふためいた行動に出る」様を言う。
- 3) トゥヌブ *tunub*；本文ではその複数形 *atnāb* が用いれている。テントを張り、支えるための綱 (*hibl*) のこと。屋根部の端に結び、引っ張って他の端の杭に結わえ付ける。この地中に突き刺す杭のことをワティド (*watid*, pl. *awtād*) という。トゥヌブ・テント綱に関する習俗の一つを紹介しておこう。旅人や見知らぬ人が、そこに援助や所用を求める場合は、テントの前で声を掛けるだけでなく、入り口近くのトゥヌブを掴んでいなければならない。それが即断を迫られるテントへの住人の、安全か危険かへの客人への対処となるためである。これはアラブの砂漠の民の不文律の一つである。語り手ハーリスもトゥヌブに触れて来て、その近くで遊んでいた利発な若者を目にしたのであろう。
- 4) ここまでの冒頭の二段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に；*haymatu / khaymatu, turābi / atrābi, hālu-hu / irtijālu-hu, ta‘zimu-hu / a‘jimu-hu*。
- 5) 我に憑くサタンはジン族の長ぞ *fa-inna shayṭānī amīru l-jinni*；詩人には天与の才能に加えてジン（精霊）の一種ライーが憑りつき、才能を伸ばしてくれた、と古来からアラブでは信じられていた。サタンはここでは悪魔としてではなくジンの、ライーの頭領と目されている。それがこの少年には乗り移っていると詠っている。
- 6) ラジャズ調 *rajaz*；アラブの詩の最初の律格形式で、短めで歩脚数は少なく一詩行の前半詩行にも押韻を行う。ここでは *-nni/* である。ローマナイズの半詩行ずつを目で確かめ音読されたい。

(その詩作に感嘆して) 私は(只者ではないと見込んで) 少年に向かって、「おおアラブの若者よ、わしには身の危険が迫ってそなたのところに導いてくれた。そなたのところでこの私を匿^{かくま}ってはくれまいか、客として受け入れてはくれまいか」と相談を持ち掛けてみた。するとこの若者はすぐに応じてくれた、「いいですとも、安全な家にあなたは避難^{ひなん}したことになるでしょう、客扱いの良いところへ滞在したことになるでしょう!」。こう言ってから彼は立ち上がると私の袖を掴むと、私を引っ張って一つのテントの方へ連れて行った。

テントの戸口には垂れ幕が降ろされたままであった⁷⁾。そこでこの少年は声を上げた、「おこの部族の女子^{おなご}よ、ジャール⁸⁾(隣人=客人・被保護者)をお連れしましたよ、故郷^{かのち}では受け入れを拒まれ、宣憲^{おかみ}の追われる⁹⁾身だという方ですが。我が部族の名声、それを聞き及んでのことでしょう、あるいは我らが評判、それがお耳に達したのでしょうか。ジャールとして引き受けてあげては如何でしょうか」。

テントの中から女性の声が聞こえた、「どうぞお留まり下さい、ハダル(定住=町)¹⁰⁾の方!」、(こう言い終えると、奥の女性は詩を詠じて答えを続けた)¹¹⁾;

ハダルの方よ、留まりなされ 危惧する恐れ無用なり

a-yā ḥaḍariyyu uskun wa-lā taksha khīfatan

汝留まるは誰あろうキナーンの息アスワド¹²⁾の家なるに

fā-anta bi-bayti l-Aswadi bni Qināni

マアッド¹³⁾とヤアラブ¹⁴⁾の血を引く女の偉大なる息子ぞ

a‘azzi bni unthā min Ma‘addin wa-Ya‘rubin

何処なれども一旦約束せばそれを果たすを至上とす

wa-awfā-humu ‘ahdan bi-kulli makāni

ジャールにことあれば、相手を剣で打ちのめさせましょうぞ

wa-aḍrabi-him bi-s-sayfi min dūni jāri-hi

身に危険及ばば槍^{しほ}で抜いて相手を退散させましょうぞ

wa-aṭ‘ani-him min dūni-hi bi-sināni

まさに彼にこそ生殺や与奪の権利¹⁵⁾その手中にあり

ka-anna l-manāyā wa-l-‘aṭāyā bi-kaffi-hi

7) 垂れ幕が降ろされたままであった; アラブは他人の家を訪れる時は、入る前に必ず許諾を得るため、外から中に声を掛ける風習があった。ここでは普段開け放たれていたテントの入り口の幕(sitr)、それが下りていた(isbāl)ので、女性が何か私的なことをしているために、身内の者でも中に声を掛けねばならなかった。

8) ジャール jāri; 直義は「隣人」であるが、「客人や保護を求めてきた人」に対してもそれを受け入れた場合も言う。ジャールと同語根のジワール jiwār とは抽象的な「隣人関係」の意味だが、「ジャールの保護・保証」という倫理概念が出来上がっていた。主人公もアスワド母子もこのジワールの擬制を前提としているわけである。

9) 追われる; 本書では動詞は ṣalama とあるが、別に ṭalaba(求める)とする説がある(M. ‘Abduh p. 139)。

10) ハダル ḥadar; 牧民思想の優勢なアラブの居住形態を二分する概念で、バダーワ(badāwa 砂漠)を家畜と共に移動する生活を送るベドウィン(badawī 遊牧民)、ハダル(定住=町)に農工商を営むハダリー(ḥadarī 定住民)。伝統的に、より好まれ理想とされたのはベドウィンの方であった。

11) ここまでの三段落のサジュウ(押韻技法)語は下線順に; nazalta / ḥalalta, awṭānu-hu / sulṭānu-hu。

12) キナーンの息アスワド Aswad ibn Qinān; 既出、注1を参照。

13) マアッド ma‘add; アラブ北族のアドナーン(‘Adnān)系の雄族。メッカを含むアラビア半島中央西よりのヒジャーズに勢力を張る。メッカ伝承と共にアブラハムやイスマールも祖先の一人として誇っている。

14) ヤアラブ Ya‘rub; イエメン=アラブ南族カフターン(Qaṭṭān)系の雄族。半島南部に文化を開花させシバの女王やマリブのダム理想郷を築いた後、北の方に拡散して遊牧生活に入った。

15) 生殺や与奪の権利 al-manāyā wa-l-‘aṭāyā; 相手に対して、生かすも殺すも、また気前よく与えるにせよ、与えるのを渋るにせよ、すべてその権利は、の意味。

その両の雲二つながらに彼の中に結びあわされてあり
 saḥābāni maqrūnāni mu'talifāni
 肌色白く高貴なる額の広さ 素性問われなば かく言うべし
 wa-abyaḍa waḍḍāḥi l-jabīni idha ntmā
 馬の白星の如 イエメン出自の際立つ者なりと
 talāqā ilā 'iṣin agharra yamāni
 されば我らが客間テントに赴くべし 7名のジャールの^{おわ}滞留します
 fa-dūna-ka-hu bayta l-jiwāri wa-sab'tun
 汝加わり給えば8名となり、奇数転じて偶数日出度きことなり¹⁶⁾
 yaḥullūna-hu shaffā'ta-hum bi-thamāni
 (タウィール ṭawīl 調6行詩、nūniyya n 脚韻詩)

(この女性の許諾を得て) 若者は私の手を取って、彼女がその方を指示したテントに案内してくれた。そこに着いて覗いてみると、驚いたことに、(言われた通り) テントの中には7人の客人が居るではないか! さらに私の眼を疑ったのはその7人衆の中に、あのアレクサンドリアのアブ・ル・ファトフ長老が居られたのである!

そこで長老に声を掛けた、「これはまた如何したこと、何であなたがこんなところに^{おい}御居でで?!」。
 長老が詩でもって答えるには¹⁷⁾：

我が留まりおるはあのアスワド氏の住居ぞ
 nazaltu b-l-aswadi fī dāri-hi
 氏の数ある果実の最良のものを選んで過ごす
 akhtāru min ṭayyibi athmāri-hā
 氏に頼みたり 我は^{おそれ}今脅迫多く抱えるもの
 fa-qultu innī rajulun khā'ifun
 付け狙う仇敵の恐怖に追い回される^{さま}近況なり
 hāmat bi l-khīfatu min thāri-hā
 我が採りたる策術は 他の類例に倣いしもの
 ḥīlatun amthālī 'alā mithli-hi
 術策様々あれど^{このたび}今度の緊急性に致し方無し
 fī hādhihi l-ḥāli wa-awṭāri-hā
 彼、我の衣服を取り替え取りあえずの品を取り揃えては
 ḥattā kisā'ī jābiran khallatī
 我が証拠となる明らかな痕跡消し去り給いぬ
 wa-māḥiyan bayna āthāri-hā
 されば時を稼ぐべし真心を多として受けるが良し
 fa-khudh mina d-dahri wa-nal mā ṣafā
 いずれはかくなる避難所から去るべき時が来るまでは
 min qabli an tunqala 'an dāri-hā

16) 奇数転じて偶数日出度きことなり；語 shaffā'a は「平らにする、対にする」から「偶数 shaf' にする」になる。「偶数」はシャフウ shaf' であり、対義語の「奇数」はワタル watar である。

17) ここまでの段落のサジュウ（押韻技法）語は下線順に；(ilay-hi / fī-hi ?) のみ。

心せよ 要望あるならば残さず申し出ること

ıyyā-ka an tubqiya umniyyatan

搾乳するに乳房に余乳¹⁸⁾残すような愚行あるべからず

aw taksa'a sh-shawla bi-aghbāri-hā

(サリーウ sarī' 調 rā'ıyya r 脚韻詩 -āri-hā)

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた:そこで私は長老に話し掛けた、「スプハーナ・ツラー (アッラーの何と恵み深きかな)! あなたにしてはいったいどんな逆境¹⁹⁾だったのでしょう、かつてドジを踏み込んだことの無かったような!」。こうして我々は身の安全が確実になるまで、この部族のゲストハウスで一時期を共に送ったのであった。その後、長老は東へと足を向け、私は西へと向かったのであった²⁰⁾。

第27話 アル・アスワドのマカーマ 完

訳者解説

「アスワドのマカーマ」との表題であったから、どんな人物で、どんな逸話が、そして語り手とどんな会話が、また主人公がどこで現れ、どんなストーリーが展開されるのか、楽しみであった。が、余りに短すぎて、いずれもが十分な展開も無く終わってしまった。落ち延びた語り手が砂漠の中のテントに匿われる。と、そこの客の中に主人公がいたので、そこでしばらく過ごした、といった粗雑な内容である。族長アスワドについて、少年とのやり取り、テント内の女性との対応、7人の客人たち、こうしたモチーフをもうすこし肉付けしていたら、マカーマとしても一篇として成り立つ体裁は整えたことであろう。

訳者も砂漠に出かけると、よくお世話になったものであるが、遊牧民のテント村には、やや大きめのマダーフ (maḍāf) あるいはマディーフ (maḍīf) と呼ばれるゲストハウスが設けられている。テント村の中心に、或いは各テント群の一角に、また族長格のテント脇に張られる。そして部族員の何かの集会や、コーヒータム、こうした来客に提供されるものであった。ゲストの到来を近々に伝えるのは、大きめの声の対話であったし、迎え入れの時に差し出すコーヒの煎り豆を潰すりズミカルな音であった。その音もそれぞれのテントで異なるものであった。トントントン・カタカタ (豆を潰すのがトン、側面を叩く音がカタ) など。本話では客間テントと訳した bayt al-jiwār は「隣人 = 保護を求めてきた人の家」である。家 bayt も本来はテントの意味であった。文脈からアスワド家に隣接して設営されているものと思われる。

少年の詩でのやり取りは、語り手の詩興を刺激して、それがこのテントに匿われて滞在させるきつ

18) 余乳 aghbār; 単数は ghubr. 搾乳する時、乳房に貯まる乳を搾り取るのであるが、それでも乳房に残った乳のこと。乳利用の家畜が対象であるが、主体は乳量も多く、生乳をそのまま飲むことも出来るラクダである。「彼女には乳の残りがあふ」bi-hā ghubrun min labanin とは、「まだ絞ることが出来る」、或いは搾乳 (= 搾取) する方が「搾り足りない」、搾乳される方は「まだ余力がある」の意味である。彼女はナーカ (nāqa 雌ラクダ)、ハループ (halūb 乳ラクダ) を指す。吸われて、あるいは絞られて乳房から外に出るべき乳が、再び乳房の奥の方に戻ってしまう、逆流してしまうことをタグビール taghbīr と言われ、その動詞はガッバラ ghabbara である。どう見ても搾り足りないかと判断した場合、こうした残尿を再び絞り取る作業も行われる。この搾乳行為をタグッブル taghabbur、動詞は taghabbara、といっている。

19) 逆境 karā'ih; 単数は karīha. 「忌むべきもの、不快」。異説があり kadya (詐術、策略) とする (M. 'Abduh p. 141)。ここは韻を揃える個所では無いので、異説もあろう。

20) ここまでの最終段落のサジュウ語は下線順に; (janābi / mugharriban ?) のみ。

かけとなった。それならば滞在中に、もっとそうした分野の逸話が展開されるのかと期待させた。ところがジンが乗り移って天才少年はゲストハウスに案内しただけでその後には顔を出さない。ゲストハウスの中に落ち着いた語り部は、その後のこの少年のことは何も述べていない。この少年がアスワドの年少時代のこととしたのか、その子として話を進めたのかも一つ定かではない。テント内に声を掛けると、中の女性（恐らくアスワドの母親であろう）が応対を詩でもって答えてくる。ところは、ベドウィンの豪族として名士として、この一家の教養の高さと、またアラブの詩自体の及ぶ領域が広く普通に日常生活にも及んでいたことを、異郷の我々にも示してくれている。著者ハマザーニーの後輩、ハリリーも同じ設定を彼の『マカーマート』の第5話「父子の哀れな巡り合い」の中で踏襲している。主人公が一夜の宿を求めるべく家の外から、内に向かって詩でもって無心を求める。すると内から少年（実は内外の問答で主人公の実子と分かる）が主人公をも驚かせる内容も立派な詩でもって答えるシーンの箇所である。（拙訳、I 176-179）

サジュウ技法に関しては、段落を追ってみていってもそう配慮されているとは思えない。が、それを相殺するかのように詩で補っている配慮が見られると言って良い。詩の挿入が3カ所ありアスワド母子と主人公の詠、すべて有効に配されている。最初の3詩行では年少のアスワドとの出会いで彼の詩才を見せつけ、盛り上がりとなるテントのなかからは母親の受け答えの6詩行が詠われる。後舞台の主人公との出会いでは申し開きの部分で彼の3詩行が披露される、といった具合である。

語り手が落ち延びた砂漠のテントに主人公もいたという設定。「保護を求めてきた人」でも、ここでの着想は単に一夜の宿りとしてのダイフ dayf としてではない。ジャール jāṛ としてである、庇護民としてである。語り手のみではない。主人公もジャールと既になっており、そこで過ごしていたということである。前者は本文のように本当のジャールではあったが、主人公の方は弁明詩でも分かるように、追われる身と騙って偽りのジャールとして安楽に砂漠の名士の保護を受けていたことが分かる。主人公も含めて7人のジャールが厄介になっていたはずである。それらのジャールそれぞれも事情を抱えていようから、その語りを展開できたはずである。しかも時間も生活の糧も気にする必要のない客人たちである。ジャールが集まっていれば、マカーマの場も十分展開できたはずである。ジャールの一人一人のこの避難所に来るまでの顛末を語らせたらもっと興味深い当時の事情の奥が知らされたことであろうに。そうすることで一定の質と量が保たれ、一篇のマカーマとしての体裁も整えられたことであろう。主人公のジャールに至った経緯すら記されていない。一工夫二工夫の才覚を注入すれば、「マディーラのマカーマ」や「ライオンのマカーマ」同様に、著者のマカーマの代表作となれたとも言えよう。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版ではもっと遅い第37話に、Sofya 版では第29話に配されている。Paris 版では本話は欠如して収録されていない。

第28話 イラクのマカーマ 謎あり訳あり技ありの16の詩芸

(原文 M. 'Abduh pp. 142-150)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のような話をした：私は（書を求めて）地の果てという果てを隈なく遡遠き回った末、イラクの地に辿り着いた。（そこで腰を落ち着けた私は）詩人たちの詩集という詩集のページを捲っては読み耽っていった。遂には私の琴線の弓を振るわすような勝利の矢¹⁾がもはや存在しないと確信するに至った。イラクの中でもバグダードが私を誘っていたのでそこに滞在していた折のことだった。

チグリス河の土手を歩いていると、一人の若者らしき人物が目にと留まった。彼は貧相らしい外装で人々に物乞いをしていたが、相手にはされていなかった。しかし私は彼の雄弁さに目を見張った。そこで彼の方に近付いて行き、彼の出自と家柄を聞いてみた。彼が答えるには、「私はアブス族²⁾の出です、故郷はアレクサンドリアです」。私は問いを重ねた、「あなたのその雄弁さには驚きました。一体その弁舌の達者さは何処から学んだのです？」と。すると彼は、「知識・学問の積み重ねによるものです、その難渋^{かたぶつ}さを何とか調教しようと思っておりますし、その海の深さに何とか潜り込もうとしていますが（とても……）」と答えるではないか。そこで「どんな分野をあなたは飾り（＝得意）としていますか？」と尋ねると、「どんな領域の矢筒であろうと私には矢がありますよ。あなたはどの領域をお望みですか？」と問い返してきた³⁾。

私が「では詩の領域で」と応じると、矢が次々と放たれた、「アラブはかつてこんな詩行を（謎々）作品としたことがございますが、ご存知でしょうか？ ①（その結び目を解いて）言い換えが許されない詩行がありますが、さて（どんな作品だったでしょうか）？ ②その部族のことをマドフ（madh 賞賛）しているのに、その人々は気づいていない詩行がありますが、さて？ ③叙述は不謹慎なものではあるが、末句法が見事にそれを帳消しにしている詩句がありますが、さて？ ④涙流れて止まずして成り立つ詩行がありますが、さて？ ⑤それが降り落ちてくると重くなる詩句がありますが、さて？ ⑥それを横に広げると傷つき、殴ると治る詩行とは、さて？ ⑦その脅しときたら強大なのに事態は些細なものに過ぎない詩行とは、さて？ ⑧砂の量たるや砂漠よりも多量の詩行とは、さて？ ⑨一方では真珠のような歯をしているのに、他方では刃毀れした鋸のような歯をしている詩行とは、さて？ ⑩初句はあなたを喜ばすのに、末句はあなたを悲しませる詩行とは、さて？

⑪裏ではあなたに平手打ちを食わしているのに、表ではあなたを騙してそうでは無く見せている詩行とは、さて？ ⑫聞く者に吟じられるのが最後まででなければ作者が判然としない詩行とは、さて？ ⑬それに手で触れることが出来ない詩行とは、さて？ ⑭反対から読んでも容易に理解出来る詩行とは、さて？ ⑮同僚より長く恰も身内ではないように装う詩行とは、さて？ ⑯一文字

1) 矢 minza' : 普通の矢はサフム sahm という。ここで用いられているミンザウ minza' という語は「遠くの目標に射られた矢、遠矢」のことで抽象的な意味合いが濃く、複数形も持たない。この意味から -ah を付したミンザア minza'ah とは「はるかかなたに目論んでいる目的、遠大な目標」の意味となるし、他の派生形ナザア naza'ah は「射て、射手」、即ち rāmī と同義になる。このナザアには有名な諺がある。「矢は射手に戻った」'āda ṣ-sahmu ila n-naza'ah とは権利、相続、財産などが「本来の落ち着くべき所・者に戻った」ことをいう。また「事態は射手の所に行った」sāra l-amru ila naza'ah とは行き詰まって解決できない「事態がそれに相応しい解決者、有能者の手に託された」の喩えとして用いられる。

2) アブス族 'Abs : 北アラブのアドナーン系マアッドのムダルに属する雄族。アブス族と言えば、プレ・イスラム期に「黒騎士」として有名な、騎士で詩人であり、恋人アブラとの恋愛で知られるアントラ・イブン・シャッダードが名高い。

3) 冒頭の二段落のサジュウ（押韻技法）の語は下線順に；al-āfāqa / al-'irāqa、zafarin / aṭmārin、al-lisānu / al-bayānu、ṣi'āba-hu / biḥāra-hu。

の読み方の違いである場合には軽蔑と受け取られ、その一文字を切り詰めた別読みにすると免罪される詩行とは、さて(どんな作品でございましょう?)⁴⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた:ワッラーヒ(神かけて)!彼の求める回答にはどんな賭け矢を混ぜ合わせたところで、当たり矢など引けそうにもなかった。正解へ導いてくれるのは、ただ「私には分かりません」と答えるだけであった。するとこの人物は、「あなたの知らないことはもっとあるでしょう」と問いかけてきた。私も問い返した、「如何したというんです、こんな教養を身に着けておきながら、現実^よにその身に着けるみすほらしで満足^よとしているのは?」。この問いに対して彼は詩でもって答えた⁵⁾;

時世々に移れども いずれの時も呪われてあれ

bu'san li-hādha z-zamāni min zamanin

事態の推移いずれを採ろうにも驚異^{おどろ}くことばかり

kullu taṣārīfi amri-hi 'ajabu

教養ある人士にとりては不利な状況の連続ぞ

aṣḥāḥa ḥarban li-kulli dhī adabin

恰も教養人の母である教養そのものが罪惡であるが如く

ka-annamā sā'a umma-hu l-adabu

(ムンサリフ munsariḥ 調 bā'iyya b 脚韻詩 -abu)

私はこの(吟じ終わった)人物に眼を据えた、彼の顔に視線を繰返し送った。するとどうだろう、(驚いたことに若くは無かったのだ)この人物はあのアレクサンドリアのアブ・ル・ファトフ長老ではないか!私は声を上げた、「ハッヤーカッラー(神があなたを繁栄させますよう)!あなたの躰^{つまづ}きに対して神が助け起こし給え!もし宜しければ、あなたが啓示下された謎の詩行の説明をして頂けませんか、縮約したものを拡大して解き明かして頂けませんか、そうして頂けますね」⁶⁾。

長老は(頷いて)答えて言った、「宜しい説明いたそう、第①問、(その結び目を解いて)言い換えが許されない詩行に関してだが、その事例は多くありますぞ。一例を示すと、詩人アアシャー⁷⁾は次のように詠じておる:

我等が銀貨そのすべて良質の物なれば

darāhimu-nā kullu-hā jayyidun

それを嚙んで試すに躊躇するなかれ

fa-lā taḥbisannā bi-tanqādi-hā

(ムタカーリブ mutaḥarib 調 dāliyya d 脚韻詩 -ādi-hā)

[訳者注:ここでは詩の内容では無く、形式である「律格と押韻」の方を問題として扱っている。両者、特に前者「律格」は散文では言い表せない。アラブ詩の律格は短長の調への歩脚との兼ね合わせ

4) この段落のサジュウは下線部の順に: ḥallu-hu / ahulu-hu, waḍ'u-hu / qaṭ'u-hu, dam'u-hu / waq'u-u, ḍarbu-hu / khaṭbu-hu, maḥlūmi / mathlūmi, ākhiru-hu / ḡāhiru-hu, sāmi'u-hu / jawāmi'u-hu, lamsu-hu / 'aksu-hu, mithli-hi / ahli-hi, ḥarfin / jadhfīn。

5) この段落のサジュウは下線部の順に: jawābi-hi / ṣawābi-hi, faḍli / radhli。

6) この段落のサジュウは下線部の順に: baṣārī / naẓarī, anzalta / fa'alta。

7) アアシャー al-A'shā: 軽度の盲目でアアシャーとは「夜盲症」という渾名であって、本名は Maymūn ibn Qays と言った。アラビア半島中央部ヤマーマの出身で、ムハンマドが預言者となってイスラムを唱導する前後の、7世紀初頭にハーブ片手に即妙な詩歌を詠じながら、半島を吟遊して回った。「アラブのハーブ引き」Ṣannājat al-'Arab として名高い。

で成り立つ。前半詩行を例にとると、その意味は「我らの銀貨、そのすべては良質なものである。同義で、語配列を異なせると *kullu darāhimi-nā jayyidun*（我らの銀貨すべては、良質のもの）との一文は可能であるし、また他の語順を取れば *jayyidun kullu darāhimi-nā*（良質なもの、我らのすべての銀貨は）とも倒置配列が可能となる。しかし歩脚が合致しないため韻文とは出来ない。こうして語配列や語彙を用いて同一律格にできる詩行が多い中で、この詩行はそれが不可能である。こうした律格に基づく修辞技巧は詩を主とした韻文のみに許容され、詩学の一つとして究められた。]

次に第②問であるが、その部族民の一人のことをマドフ (*madḥ* 賞賛) しているのに、当の本人達はそれが誰か判然としない詩行、これも多くありますぞ。フザリー⁸⁾からその例を引きましょう；

己の外套を肩にかけ給うた人物が誰かは知らぬ

wa-lam adri man alqā ‘alay-hi ridā’a-hu

されど彼その物腰から際立つ高貴な血筋明らか

‘alā anna-hu qad sulla ‘an mājidin maḥḍi

(タウィール *ṭawīl* 調 *qādiyya* *q* 脚韻詩 *-di*)

[訳者注：殺されるところを助けられた者の兄弟である詩人が、その助けた人物の美德を詠って賞賛する。も、相手の敵対部族であったため、また闇の中であったためか、その人物の名前が分からない。それが詠われた詩行を言う。詩人の兄弟の若者が、ある一団（恐らく復讐を付け狙う部族）から捕えられ報復殺害されるところであった。が、誰とも知らぬある高貴な人物が己の着ていた外套 (*ridā’a*) を脱ぎ、負傷した詩人の兄弟に掛けてやった。外套を着ていた人物、恐らく敵対部族の一員でリーダー格であったであろう人物が、己の着ていた外套を脱ぎそれを掛けてあげた相手に対して自分が保護する意思を無言で示す意味があった。こうして兄弟の助けられたことを知らされた詩人フザリーが、名前も不明なその高貴な人物を讃えてマドフ（賞賛詩）を公にしたのである。]

さて次の第③問、叙述内容は不謹慎なものではあるが、末句法が見事にそれを帳消しにしている詩句のことであるが、この事例はアブー・ヌワース⁹⁾から引くことにしましょう；

我等一夜過ごせり アッラーの見えるところ 最悪の徒党ならん

fa-bitnā yarā-na llāhu sharra ‘iṣābatin

邪悪な裾を高慢にも引き摺りながら されど何の誇りあろう

tujarriru adhyāla l-fuṣūqi wa-lā fakḥru

(タウィール *ṭawīl* 調 *rā’iyya* *r* 脚韻 *-ru*)

[訳者注：淫らなことを詠っており、最後の句で意味のどんでん返しを見せる末句技法の特徴の一例を示している。（この詩行に至るまで）神の名を妄りに出したり、（酒や女などの）破廉恥な行為に及んでいることを叙して、それを自慢げにこの詩行もまた終わらせるかと思わせる。ところが、

8) フザリー *al-Hudhalī*；詩人アブー・ヒラーシュ *Abū Khirāsh al-Hudhalī* のこと。フザル族出で、正統カリフ時代のウマル（在位 633-644）の頃、部族派砂漠詩人として活躍した。

9) アブー・ヌワース *Abū Nuwās*；渾名で「眠たげな父」。本名は *al-Hasan ibn Hānī’ al-Hakam*。アフワーズで生まれ、バグダードで 810 年ごろ没。アラブ文学史上最も知られる詩人の一人。アッバース朝の黄金時代、第 5 代カリフ・ハールーン・アッラシード（在位 786-809）の宮廷に出入りする。機知に富み才能豊かで詩想闊達、ジャンルはあらゆる領域に及ぶ。恋愛（同性愛を含む）や飲酒の領域で特に知られる。ここの飲用詩もさまざまに解釈されている。

末句 *wa-lā fakhru* (されど何の誇りあろう) で急転直下、今までの内容を全否定して悔悛の語句で詩行で終えている。]

次に第④問、涙流れて (*dam'u-hu*) 止まらずの詩行についてだが、この事例はズー・ルンマ¹⁰⁾から採ることにしよう；

何の慰めとなろう 涙流れて止まぬ汝の目に

mā bālu 'ayni-ka min-ha l-mā'u yansakibu

そは恰も腎臓か、裂かれて (血) 液が流れるままとする

ka-anna-hu min kulā mafriyyatin sarabu

(バスイート *basīṭ* 調 *bā'iyya* b 脚韻 -*abu*)

説明を加えますと詩行すべて (用いられている語句) は、「水」であり、「目」であり、「流れ出るもの」であり、「雲」であり、「水袋の底」であり、「峡谷・割れ目」であり、「洪水」であるからです。

[訳者注；このままでも十分なのであるが、少し説明を加えておく。涙を流すだけではない。主人公がわざわざ注釈しているように、涙を広く体内から流れ出す液体と捉える。腎臓を裂かれると、血液だけでなく下の水も流れ出したら止まらない。「涙」は比喩化された「液体」として、その包含する範囲の対象となる。それ故身体の中からの血液や体液などの水液もあれば目 (からの涙) もある。(排尿も含めた膀胱の) 流れ出すものもあれば、(雨を降らせる) 雲もまたそうである。水袋の底も対象となれば、(女性の割れ目も含めた) 峡谷や洪水の例もそう捉えられる。ここで用いられている語はすべて「液体」の縁語が用いられている。*bāl*= 血液の心臓、*bāl* → *būl* 尿、*'ayn*= 涙の目、*mā*'= 水、*yankasibu*= 水・尿が流れ出る、*kulā*= 尿を作り出す腎臓、単数は *kulya*。*kulya* は多義であり「雲」*nashī'a*、「水袋の底」*asfal al-muzāda*、「峡谷・割れ目」*shiqq*、「洪水 *sayalān* < *sayl*」、*mafriyyatin*= 流出する]。いずれも「腎臓」と入れ換えて意を汲みことができる。

さて次の第⑤問、それが降り落ちてくると重くなる詩句とは、この事例についてはイブン・ルーミー¹¹⁾から採ってみましょう；

彼 もの与えるに、与えた者に対して対価求めること非ず

idhā manna lam yamnun bi-mannin yamunnu-hu

心中言ひ聞かせるに「おお我が魂よ、踏ん張ることこそ肝要ぞ」と

wa-qāla li-nafsī ayyuha n-nafsu amhili

(タウィール *ṭawīl* 調 *lāmiyya* l 脚韻詩 -*ilī*)

[訳者注；字面に注視！前半詩行で *manna* (恩恵・贈り物を与える) 及びその派生形が4箇所用い

10) ズー・ルンマ *Dhū al-Rumma*：渾名で「ラクダの手綱持つ者」。本名は *Ghaylān ibn 'Uqba*、735 年死亡。ウマイヤ朝期、砂漠に生き、その砂漠のあらゆる事象の描写に優れ、ブレイスラム期の詩人の気風を残す最後の詩人と言われる。渾名の由来は砂漠行の折、あるテント前で水を所望したところ、出てきた娘に「どうぞズー・ルンマさん」と言われて水を差し出された。彼はその折、ラクダを降り、ルンマ (ラクダの手綱) を肩に垂らして待っていたのである。この娘マッヤに一目ぼれして、以降マッヤとの恋物語は「ズー・ルンマとマッヤ」物語として知られる。第7話は彼をテーマとしたマカーマになっている。

11) イブン・ルーミー *Ibn al-Rūmī*：[ローマ人の息子] との俗称。父がローマ人 (現在のアナトリア以西のギリシャ人も含めた地中海南岸の人々を指す)、母がペルシャ人であるところから、こう呼ばれた。本名は *Abū al-Hasan 'Alī ibn 'Abbās*。バグダードに生まれ、美意識やアングルの斬新さなどギリシャ人の特異な思考方も加味されて、多才ぶりを発揮し、長大なカスイダ (頌詩) を、さまざまな主題を盛り込んで作詞した。シーア派の傾向、及び奇行や妥協の無さ、偏屈さが災いして、政争に巻き込まれ毒殺されてしまう、897 年のことであった。

られており、しかも派生名詞マン *mann* とは重量単位である。1 マンは2 ラトル、1 ラトルは約 500 グラムであるから、約 1 キログラム、ないし 1000cc の重さ、別の尺度で 280 ミスカールと言われる。この両者を縁語として用いていることになる。贈り物にこのような重さがあり、それが4度も負荷をかけて(声及び書として)降り落ちてくるのであるから、詩句自体が重くなるわけである。]

次の第⑥問、それを横に広げると傷つき、殴ると治る詩行とは、これについてはこんな詩人のものが良い例となりましょう：

敵手に対し我 マシュラフィー¹²⁾産^{きらめ}の煌^{かざ}く剣を翳して前進せり

dalaftu la-hu bi-abyaḍa mashrafiyyin

恰も握手求める者 挨拶するために近づく如くに

ka-mā yadnu l-muṣāfiḥu li-s-salāmi

(ワーフィル *wāfir* 調 *mīmiyya* m 脚韻詩 -āmi)

[訳者注：問い方自体が共示となっており、まずそれが問われていることになる。「それを横に広げると傷つき」の「横に広げる」の原語 *arūd* には他に修辞用語「半詩行の脚韻単語」の意味がある。それを踏まえて、ここでは引用詩の *mashrafiyyin*、即ち「マシュラフィー剣」がそれに当たり「それ(=マシュラフィー剣)を横に広げる(=横に払う、切り裂く)と傷つき」となる。他方「殴ると治る」の「殴る」の原語 *darb* には、他に修辞用語「詩行末、即ち後半詩行末の脚韻単語」の意味がある。それを踏まえると、ここでは *salāmi* 「挨拶=和睦」がそれに当たる。即ち、殴る(=挨拶=和睦)と治ることになる。前半詩行末には「傷ついた」ものが、後半詩行末では「治る」ことになる。「一般義と詩語とが、内容と形式とがないまぜになった詩行があることをご存知か」と問うたのである。]

さて次の第⑦問だが、その状況の切羽詰った具合はおぞましい程なのに、実際の事態は些細なものに過ぎない詩行についてであるが、これについてはアムル・イブン・クルスーム¹³⁾の詩を持って来ましょう：

恰も切り合う刀剣 我らの剣襲い、敵方の剣襲い返す如

ka-anna suyūfa-nā minnā wa-min-kum

打ち下ろし叩き合う遊び仲間の手に握られている木刀

makhārīqun bi-aydī lā'ibī-nā

(ワーフィル *wāfir* 調 *bā'iyya* b 脚韻詩 -ibī-nā)

[訳者注：生死を賭けた戦闘描写と思いきや、後半部はチャンバラごっこであったことを明らかにする。この意味内容はアラブのチャンバラごっこの遊び風俗の知識を共有していなければならない。アラブのチャンバラごっこについては我が国と異なる部分がある。子供の遊びの中で、男

12) マシュラフィー *mashrafi*：イラクの一地域名で、集合した固有名 *mashārif* と呼ばれており、そこの冶金工、特に刀工は巧みの業で知られており、そこで製せられた武器類はマシュラフィーとして名品であった。なおこの詩の作者不明。その後、編集者の岡本多平氏が精査され、作詞者が *Abū Nukhayla Ya'mar* であることを突き止められた。また、前半詩行が同一の作者として *al-Rayb ibn Sharīq* があること (*M. al-Dabbī* 『諺言集』57頁)、さらに *al-shā'ir* (その詩人) として前半詩行が記載されているとして *Lisān al-'Arab* (語根は $\sqrt{w \cdot q \cdot '}$ の項)、及び *al-Ma'arri* 著 *al-Fuṣūl al-Ghāyah* の中にも引用されているとのコメントを頂いた。多謝する次第である。

13) アムル・イブン・クルスーム *'Amr ibn Kulthūm*：イスラム時代以前、6世紀末にユーフラテス河近くに本拠を置いたタグリブ族の指導者であり、『ムアッラカート』に選ばれた大詩人であった。誇り高くアラブの騎士道を謳いあげ、また地で行く英雄詩人であった。

の子達に特に好まれていたのは、わが国のかつてがそうであったように、アラブも太古の時代から「チャンバラごっこ」であったことがこのプレイスラム期の英雄詩人の記述から分かる。「叩き合う遊び仲間の手握られている木刀」とある。木材が豊富なわが国では桜や桐を木刀代わりに用いたが、アラブ世界では、木材ではなく、毛皮であるところが環境の違いとして面白い。ほろ (ziqq) となった毛布や絨毯、破れて使われなくなかった水袋などの皮製品などを、丸く振って木刀状にして敵味方に分かれて打ち合った。このアラブ版「チャンバラごっこ」はミフラーク mikhrāq と呼ばれた。「空気を切り裂くもの」が直訳であるが、勢いをつければそれだけ強打となり、空気を切り裂く音が聞こえることであろう。本話ではその複数形 makhāriq の用語が使われている。]

さて第⑧問、砂の量たるや砂漠よりも多量の詩行についてだが、これについては再びズー・ルンマに登場してもらいましょう；

騎乗にて当て所無く彷徨う 熱き砂礫蹴り上げながら

mu‘rūriyan ramaḍa r-raḍrāḍi yarkuḍu-hu

天空の太陽また行きつ戻りつ 猛暑に道踏み迷うたか

wa-sh-shamsu ḥayrā la-hā fī l-jawwi tadwīmu

(バスイート basīt 調 mīmiyya m 脚韻詩 -īmu)

[訳者注：「砂の量たるや砂漠よりも多量の詩行」の意味を解く鍵は、「砂や砂漠」を意味するラムル raml。それには、修辞学用語として、「詠じられた音韻がスムーズではなく、耳に聞きづらい詩品」がある。形式としては、この後者のラムルが前半詩行に集中している。アラビア文字の r (rā') と d (dād) のオンパレードなのだ。この文字の子音である巻き舌音 r (rā'), および d (dāl) の強勢子音である d (dād)、両者ともにそれ自体としての発音は難しくない。が、連続音や語中にあると、その巻き舌と強勢子音との故に、その子音の前後の、特に後ろに続く子音が影響を受け、強勢化されたり、引き連られて次の子音の発音が出しにくくなったり、気を取られたりしてしまうために、全体が滑らかに行かなくなる。また強勢子音であるために音調のバランスが崩れ、流麗さを失ってしまう。その r と d が前半詩行に 7 か所と 4 か所出てきてしまうのであるから、聴覚和音では詠ずる方も鑑賞する方も煩わしく感じさせられている。ペルシャ人はこの d を苦手としておりラマダーン（断食月）をラマザーンと言っている。ラムルとの語は、この用語と同時に一般義の砂漠の「砂に足を取られて歩き辛いことこの上ない」のイメージを重ねているのであろう。これら両者の意味を込めているわけであるから、「砂漠よりも多量のラムル（砂）」ということになる。内容では砂と礫だらけの暑熱砂漠を行進する熱射病状態になっている旅人が詠われている。]

次に第⑨問であるが、一方では真珠のような¹⁴⁾歯をしているのに他方では刃毀れした鋸のような歯をしている詩行とは、これについても再びアアシャー殿に登場してもらいましょう；

早朝に居酒屋へ我出かけたり あと追うて来る者あり

wa-qad ghadawtu ila l-ḥānūti yatba‘u-nī

14) 真珠のような mazlūm；第一義は「闇・悪 (zulm, zulma) に葬られる、不当に扱われる、害される」である。しかしここでの語はザルム zalm (艶やかさ、綺羅やかさ)、即ち「黒」から「白」が浮かび上がる、その対照から由来する。美女が微笑んだ時、その閉じられた口の中の闇が唇から前歯 (thaghr) を覗かせる。その前歯の白さは艶やかで、綺羅やかで、恰も真珠の粒々を思わせる。歯と真珠との白さの形容として用いられている。

追いつかんとして、軽快に、敏捷に、足早に、澁刺と、快活に

shā'in mishallun shulaylun shulshulun shawilu

（バスイート basīt 調 lāmiyya 1 脚韻詩 -ilu）

〔訳者注：この詩行も内容の方ではない。かと言って形式でもない。詠まれる響き、音声、吟じ方を問題としている点がユニークで面白い。吟ずるに前半詩行は「歯音」は影響なく、綺麗な音声で口ずさまれ、「真珠のような歯をしている」。一方後半詩行は、すべての語に歯音があり、しかも同一語内で繰り返し出てくるものもある。ここでは shīn の文字、音声で表せば /sh/ の子音に集中させて /sha/ と /shu/ の語を連続させている。この子音の響きは、「歯毀れ」音と言われ、連続されると醜い汚い音である。歯が抜けていたり、隙間だらけの歯並びだと、即ち「刃毀れした鋸のような歯」だと、こうした耳障りな発音が多くなるわけである。〕

さて次の第⑩問、最初はあなたを喜ばせ、後ではあなたを不安がらせる詩行¹⁵⁾については、イムルウ・ル・カイス¹⁶⁾の詩から引用してみましょう；

攻め立てては退いて見せ 自在に前進しては後退する

mikarrin mifarrin muqbilin mudbirin ma'an

恰も固き岩石 洪水により上流から流され下る如くに

ka-julmūdi šakhrin ḥaṭṭa-hu s-saylu min 'ali

（タウィール ṭawīl 調 lāmiyya 1 脚韻詩 -ali）

〔訳者注：騎馬軍団を叙したもの。前半詩行では、攻めるも退くも自在の戦勝気分で聞いている「あなたを喜ばせ」る。しかし後半詩行は岩石が洪水で流されたり留まったりする恐ろしい例えを持ってきて、友軍が敵軍に緩急をつけられ雪崩^{なだれ}を打って呑み込まれる描写で「あなたを不安がらせ」ている。〕

次に第⑪問、裏ではあなたに平手打ちを食わしているのに、表ではあなたを騙してそうでは無く見せている詩行については、こんな例はどうでしょう；

我彼女を責め立てたり 彼女泣いて訴えるに おお若者よ

'ātabtu-hā fa-bakat wa-qālat yā fatā

我が叱責より汝救うはただに玉座の主のみぞ

najjā-ka rabbu l-'arshi min 'atabī

（カーミル kāmīl 調 bā'iyya b 脚韻詩 -bi）

〔訳者注：あなたはそういう風に私を詰^{なじ}って私を泣かせているけれども、実際悪いのはどちらよ？ 私があなたを責める番になって見なさい。あなたを叱責し始めたら、そんなもんじゃないわ。私が怒りの感情を剥き出しにしたら、ヒステリーを起こして、留まることを知らないことになるわ。止められるのは玉座の主である神様だけよ！〕

15) 最初はあなたを喜ばせ、後ではあなたを不安がらせる詩行；第⑩問の問いかけの文は次の第⑪問の「裏ではあなたを平手打ちし表ではあなたを騙している詩行」とあった。原文は番号打ちはしていない。時折順序が入れ換わることもある。数字で順序を表すことの無い習慣はアラビア語著作法の欠陥でもある。本書の51篇のマカーマにも番号打ちはなされておらず、自分で入れ込むしかない。

16) イムルウ・ル・カイス Imru' al-Qays；第1話注7、第7話注16を参照。

次の第⑫問、聞く者に吟じられるのが最後まででなければ作者が判然としない詩行とは、詩人タラファ¹⁷⁾の詩句が相応しいですね；

同行者たち騎乗するラクダを我が傍らに留めて

wuqūfan bi-hā ṣaḥbī ‘alayya maṭiyya-hum

声掛ける、「悲嘆に身を減ぼすなかれ、耐えるべき時ぞ」と

yaqūlūna lā tahlik asan wa-tajalladi

(タウィール ṭawīl 調 dāliyya d 脚韻 -adi)

この詩句は、まことに聞く者にはイムルウ・ル・カイスの例の詩行¹⁸⁾を思い出させるはずでありましょうから。

〔訳者注：イムルウ・ル・カイスの例の詩行 qawl Imru’ al-Qays：「アラブの詩」と言えば誰もこの詩行を覚えていない者はない。qifā nabki min dhikurā ḥabībīn wa-manzīlī (駒止めて、暫し共に泣いてくれまいか、我が恋人とテント跡に思い馳せて) で始まるムアッラカートの出だしである。ここでの qifā (駒止めよ) は双数形であるので、詩人の同行者は二人であることが分かる。またここでの「駒」は馬ではなくラクダである。そしてイムルウ・ル・カイスの、その第5詩行目がここで採り上げられた詩行である。上のタラファの詩行と同じ内容であるが末語が異なるだけなのである。イムルウ・ル・カイスの方は wa-tajammali (忍耐力示す時ぞ) となっている。聞く方は当然どちらの方の作詩か最後まで耳をそばだてていなければならない。〕

次の第⑬番、それに手で触れることが出来ない詩行とは、以下のフブズルッジー¹⁹⁾の詩行がふさわしいと思われます；

別離の雲 愛の月から四散せり

taqashsha‘a ghaymu l-hajri ‘an qamri l-ḥubbi

伸直りの光明 非難の暗闇から昇り来たり

wa-ashraqa nūru ṣ-ṣulḥi min ḥulmātī l-‘atabi

(タウィール ṭawīl 調 bā’iyya b 脚韻 -bi)

〔訳者注：別れなければならない事態（別離の雲）は愛情の明るい絆（愛の月）が救った。陰悪な不仲から明るい仲直り（伸直りの光明）になったのも、闇雲の中でお互いに中傷して（非難の暗闇）いた間にも生まれたもの。「雲・月・光明・暗闇」いずれも「手で触れること」の出来ないものである。恋人の間の恋愛の機微を巧みに比喩化している。〕

17) タラファ：第1話注12を参照。

18) イムルウ・ル・カイス Imru’ al-Qays：上の注16を参照。

19) フブズルッジー Khubzuruzzī；本名はナスル Naṣr であったが、綽名のフブズルッジーの方で知られる。「フブズ（パン）ルッズ（米）の人」即ち「米粉パン屋」の意味で、彼の職業でもあった。ベルシャ湾に面したバスラ近郊のミルバド（Mirbad）にパン屋の店を持ち、そこで生涯を終える（317/929-30年没）。読み書きが出来たわけではなく無学であった。ましては詩の伝統や作詩法を学んだわけではない。ミルバドは古来メッカ近郊のウカーズ同様に年祭があり、そこでは特別の場が設けられ、詩人が自作を朗詠して競う伝統があった。フブズルッジーは毎年当地で行われる詩祭に出かけて詩人たちと交流し、耳学問の蓄積と記憶の所産を獲た。そして自分流の修練で詩作を重ね、彼自身遂にはそこで自作を詠って吟じ名声を得るに至った。

またアブー・ヌワース²⁰⁾のこんな詩行とも同類と言えましょう；

水の薄着まとったサフランの香り運ぶ^{そよ}微風か

nasīmu ‘abīrin fī ghilālāti mā’i

はたまた空気の皮衣まといし光の像か

wa-tamthālu nūrin fī adīmi hawā’i

(タウィール ṭawīl 調 hamziyya ‘(hamza)脚韻詩 -ā’i)

[訳者注:「芳香 ṭib」と「宝石 jawhar」とを伴った美女の立ち居振る舞いを詠っている。前半詩行の「薄衣」、後半詩行の「皮衣」は手で触れることが出来るはずである。しかし前者は「水の衣」として「^{そよ}微風=芳香」の、後者は「空気」の皮衣」として光線の結ぶ「光の像=指輪や宝石」のことをいっており、いずれも「手で触れること」は出来ない。]

次の第⑭問、反対から読んででも容易に理解出来る詩行についてであります(預言者の教友)ハッサーン²¹⁾の詩行から選んでみましょう；

^{かんばせ}顔の輝き 彼らの出自の高貴さを漂わせ

biyḍu l-wujūhi kariymatun aḥsābu-hum

鼻の優美な形 彼らの家系の優雅さ浮かばせる

shummu l-unūfī mina ṭ-ṭirāzi l-awwali

(カーミル kāmīl 調 lāmiyya lām 脚韻詩 -li)

[訳者注:恐らく預言者の家系クライシュ族、ないしハーシム家、ムハンマドとアリーの家系アフル・ル・バイト(Ahl al-Bait お家の人々)を叙したものであろう。前半・後半詩行は同じ内容と言ったものなので、順序を入れ替え、後半詩行を先に持ってきて、文意は変わるところがない。]

さて次の、第⑮問、同僚より長く恰も身内ではないように装う詩行については、ムタナッビー²²⁾の茶化した作品から選ぶことにしましょう；

生きよ 残^{のこ}存れ 高尚たれ 頭領^{かしら}たれ 寛大たれ 指導者たれ

命ぜよ 禁ぜよ 男らしくあれ 口達者たれ 相談を受けよ

‘ish ibqa smu sud jud qud muri nfa sru fuh tusal

怒れ 射よ 当てよ 守護せよ 襲え 召捕れ 怖がらせよ

阻止せよ 血の代金与えよ 支配せよ 逸^そらせ 獲得せよ

ghizu rumi šibi hmi ghzu sbi ru‘ za‘ di li thuni nal

(タウィール ṭawīl 調 lāmiyya l 脚韻詩 -li)

20) アブー・ヌワース Abū Nuwās; 本話注4参照。

21) ハッサーン Hassān; 預言者の詩人として知られる Hassān ibn Thābit のこと。もともとメディナ在住で、詩人の家系であった。預言者ムハンマドがヒジュラした後、メディナでイスラム及び預言者に対する誹謗中傷に対して、彼を代弁して韻文で擁護した。長命でイスラム暦54年死亡、120歳ぐらいまで生きたといわれる。

22) ムタナッビー al-Mutanabbī; アラブ文学を代表する大詩人の一人。本名は Aḥmad ibn al-Ḥusayn、915年ごろイラクのクーファで生まれる。シリアのダマスカスで学び、その後純粹のアラビア語の習得のため、砂漠に入り、遊牧民の中で習得に励む。砂漠環境ではよくあることであるが、修練するうち、自覚があつて自ら預言者と名乗って、活動に入るが捕えられ牢獄に入る。その後解放されて詩作活動で名声を博してゆくが、名はムタナッビー(自ら「預言者」を名乗ったもの)との綽名で知られるようになる。シリアのアレッポのハムダーン朝の宮廷に仕えていたが、詩人同士の中傷に引きずり込まれ、エジプトに難を逃れる。当地のイフシード朝に仕えるが長続きせず、イランのシーラーズに招かれて出かける途中、盗賊にあつて殺害される。その折もアラブの気風を失わず剣を交えて堂々と戦つて敗れた。詩風は雄大で益荒男ぶりを謳い上げたものが秀逸。中には遊び的な上のようなものもあった。

[訳者注：jussive（命令法）の事例を集めて、タウィール調の律格に合わせて構成したもの。3語根の規則動詞で jussive を作る場合、文字は4個必要であるから、半詩行はせいぜい4～5語で、前半・後半詩行合わせても8～10個の単語しか収容できない。こうした jussive の事例一覧詩行に関しての最長は14個であった。ここではムタナッビーは前半・後半詩行の23個の jussive の語根を集めている。断然多い数である。それ故「同僚より長く」とは、一つにはこのことを言っていると思われる。そして合計23個の内訳を半詩行で分けてみると、前半の事例が11、後半の事例が12となる。これ故後半詩行は前半詩行より長い（＝多い）、「同僚より長く」とは、二つにはこのことを言っていると思われる。この桁外れの多さは、4文字を要する強動詞をすべて外して、語根に弱文字を持つ弱動詞の jussive を集めたからで、多くを2文字のものに、後半詩行では di と li との1文字のみ（母音表記は欄外にするため文字数には入らない）の事例を加えている。di は wadā < wadaya（血の代金＝diyaを払う）という動詞の命令形である。即ち未完了形は yadī < yawdiyu となり、第1根素文字は弱文字 w であるため消去され、第3根素文字も弱文字であるため -yu となるとところが -i と前の強文字の音に引きずられている。命令形はこの未完了 tadī（あなたは血の代金を支払う）から作られる。人称指示の接頭辞 ta- は消去されるのは jussive の規則であり、最後の -i も弱文字であるため消去され、残った形は di だけとなる。この形が基本動詞 wadā < wadaya から派生したものであるとは一見では思えない。「恰も身内ではないように装う」とは語根動詞は3文字以上あるのに、派生形では1文字となる事例もあり「身内」とは考えられない、このことを言っているのであろう、他の弱動詞の変化形も含めて。主人公が述べているように読む者も聞く者も当惑させる「茶化した作品」である。]

最後の⑩問、一文字の読み方である場合には軽蔑と受け取られ、その一文字を切り詰めた別読みにすると免罪される詩行とは、に関してはやはりアブー・ヌワース²³⁾のものが相応しいと思います：

我が詩品 汝らが戸の上で損なわれり

laqaḍ ḡā'a shi'rī 'alā bābi-kum

真珠 ハーリサ²⁴⁾の上に損なわれるる如くに

kamā ḡā'a durru 'alā khālīshah

(ムタカーリブ mutaḡārib 調 ṣādiyya ṣ 脚韻詩 -iṣah)

他の言を借りると；

語一つなれど一見は称賛しているよう

inna kalāman tarā-hu madḡan

されど別読みを受取れば毀損^{そこな}わしめていることになるう

kāna kalāman 'alay-hi ḡā'a²⁵⁾

(バスイート basīt 調 hamziyya ' (hamza) 脚韻詩 -ā'a)

23) アブー・ヌワース Abū Nuwās：本話注9参照。

24) ハーリサ Khālīshah：カリフのハールーン・アッラシードが寵愛した仕え姫（jāriya）。容貌はどちらかと言うとブスの方であったが、それはそれでカリフの好みであった。ハーリサは自分をより綺麗に見せるために、外観を豪華な衣装や真珠などの高価な宝石で飾った。余りの華美さと乱費ぶりに、詩人 Abū Nuwās は詩で揶揄すると同時に警句を発した。それが上の詩行である。

25) 後半詩行は ḡā'a（輝く）であるが、下の主人公の説明や文脈から見て ḡā'a（損なう）とすべきであろう。従って脚韻文字も変わってくるはずである。

つまり dā'a (失せる、汚辱する) と (子音 'ain に) 読むと、それはヒジャーウ (hijā' 風刺詩) になりますが、dā'a と (子音 hamza に) 読むとマドフ (madh 頌詩) と変わることになります。

[訳者注：ここではアナグラム的一种「文字変換」が取り上げられている。「我が詩品 汝らが戸の上で損なえり…以下の本文」；カリフ・ハールーンの宮廷出入りのアブー・ヌワースは、上述の詩句の書付をハリサの部屋の扉に貼り付けた。ハリサは周りの者達が噂し合っているのを聞き、実際その書付を目にすると、彼女はカリフに泣きついた。カリフはアブー・ヌワースを呼び出した。会見の間に行き着くまえに宮廷内のハリサの部屋を通り過ぎた。扉の前でまだ貼られている自分の書付を目にすると、立ち止まって一工夫した。‘ayn の文字を、hamza の文字に変えてしまったのだ。dā'a の語の位置取りの中で、幸い ‘ayn の文字は語末に来ており、しかも前接文字アリフは後の文字とは非連続となる文字であったので、‘ayn の文字形は独立形であった。このままでは「一文字の読み方である場合には軽蔑と受け取られ」ることになる。そこで ‘ayn の文字形の下半分を削り取ることにより hamza となる。こう細工をして「その一文字を切り詰めた別読みにすると免罪される」言い訳を立てた。この ‘ayn から hamza への文字変更は前後の文字に連続する文字形では不可能であった。こうして意味内容を「dā'a (損なう、失せる、汚辱する) と読むと、それはヒジャーウ (hijā' 風刺詩) になりますが、dā'a (光る、輝く) と読むとマドフ (madh 頌詩) と変わることになります。」ことになる。こうして「我が詩品 汝らが戸の上で損ないたり」は「我が詩品 汝らが戸の上で輝けり」となり、「真珠 ハーリサの上に損なわれし如くに」は「真珠 ハーリサの上に輝ける如くに」となる。「つまり dā'a (損なう) と読むと、それはヒジャーウ (hijā' 風刺詩) になりますが、dā'a と読むとマドフ (madh 頌詩) と変わることになります。」と言うことになって、カリフからの詰問を受けずに済ませた、そういう逸話の中の一件である。]

語り手イーサー・イブン・ヒシャームは話を続けた：説明を聞き終わって私は、ワッラーヒ (参りましたな)！アブ・ル・ファトフ長老のその弁舌には全く恐れ入りました。そこで私は、生活の条件を改善できるよう、長老に役立つであろう当座の便宜なものを差し出したわけです。その後でお互いに分かれて行きました²⁶⁾。

第28話 イラクのマカーマ 完

第28話 訳者解説

7世紀に誕生したアラブ・イスラム世界の詩芸が、それから僅か三世紀の間に奈辺にあるかを、また一方では訳者の浅学ぶりを思い知らされた一篇であった。一行の内容はとまかく形式及びその修辭と用語まで詩の中に「ないませ」に提示されてしまうと、直訳では異文化の人間には理解不能となる詩行が多い。というより訳者の技量が問われる。その分訳注の方に説明不足が露呈して、本文より長くなる。その関係上、各詩芸の問いとその答えとの解説は本来ならば脚注で十分なはずであるが、本話では脚注の方が余りに長くなってしまふ。それ故本文の中に割り込ませる形を取った。

元来が話芸の達者なアラブである。その極たる詩の分野はブレイスラム期から、古くから開拓され、巷間に口遊くちずさまれた。そして多くは個人の詩才とそれが披露され批評し合うさまざまな機会と場

26) この段落のサジュウは一か所のみ、下線部の順に：maqāli-hi、hāli-hi。

が必要であった。個人の家やテントの前でのサマル（夜の閑談）やマディーフ（ゲストハウス）、庭園や水場での集い、邸宅のサロン、モスクでの礼拝後での一隅、こうした場は具体的事例を著者であるハマザーニーの、また後輩のハリリー『マカーマート』の中にも多く散見できる。出来上がった完成品に、口承であれ、また書き記されて蓄積されてきたものであれ、連綿と続きさらに詩芸の至芸への道が飛躍していった。ハマザーニーの言語芸術はこれに留まらない。第44話「詩のマカーマ 55の謎詩行」ではさらに他の詩芸が展開される。本話の「16の詩芸」、及び第44話「55の謎詩行」に啓発されてか、範を得てか、後輩のハリリーはさらに至芸に昇華させた。第24話「カティーアのマカーマ」では、「12の謎かけ」を主にアラビア語文法の特異点を挙げており、また第32話タイバのマカーマでは「100の法律問答」で、所謂イマーラート（ムスリムとしての儀礼、結婚や相続）の日常相談を展開しており、第36話マラティッヤのマカーマではアラビア語の語彙の両義性、共示性を、「言い換え謎」として追究し、第42話ナジュラーンのマカーマでは日常品を謎々にして、しかも詩の形式でやってのけている。

本話も「16の詩芸」がメインであることは瞭然としている。問われて語り手イーサーは答えられない。序に記されているように、彼にしたところで詩の研鑽に励み、極めたかと言う程度に達していたはずであるのに、である。各問いに関して、例を一つづつにしているが、第⑬問には、もう一つ加えているし、最後の第⑯問には詩の語句の説明を補う別の詩が挿入されている。それ以外に見るべきもの、筋書きも展開も見られるわけではない。詩芸の驚異を語る余りに、マカーマ形式も打ち負かされてしまった。主人公像も徹底していない。アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフとしている点は良いとしても、若者としての顔出しである。問いと解とを急ぐあまり、後舞台を早く出し過ぎたきらいはある。主人公の正体が早くに暴かれてしまった。

舞台設定を人の集まる往来としている点、語り手イーサーの二度の顔出し、サジュウ文体が配慮できる部分はしている点は評価できよう。特に、「16の詩芸」の各設問などサジュウを編み出すことなど困難と思われるが、殆どの設問にサジュウを配している。注4に記しておいたように、⑧問には欠けるものの第③、⑨、⑫、⑭、⑮には二つづつを配して補って余りある。

本マカーマの異同であるが、Fatih版では前話に続く第38話に、Sofya版でも前話の第29話に続く第30話に配されている。Paris版では本話は欠如して収録されていない。

第29話 ハムダーン¹⁾のマカーマ アラブ馬讃歌 馬の観方54相

(原文 M. 'Abduh pp. 151-156)

語り手イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のような話をした：

ハムダーン朝を興したハムダーンの息子サイフッダウラ²⁾殿の集いにある時出席した折のことであった。領主の前に一頭の馬が引き出されていた。この馬を見遣る誰の視線も(その見事さに馬の)下まで行くと、また戻るといふ風であった。集まった一同がこのように呆気に捕られていると、サイフッダウラ閣下から声がかかった、「諸君の中で、この馬をうまく叙景する者はいますまいか？ 最上のものには褒美として取らせましょうぞ」と。そこで並み居る者達は詩作に傾注し、己の能力を精一杯引き出そうと努めた³⁾。

そうした中、臣下の一人が提案を進言した、「神がアミール⁴⁾殿を繁栄させますよう！私は昨日のことですが、それはもう弁舌を履物で踏み付けている(=弁舌を自由に操る)人物を見ております。その人物は弁舌で人々の注目を集めてはいました。が、聴衆に布施を求めたところ、(叶えられず)絶望に癒されただけでありました。もしアミール閣下が彼に召喚をお命じになれば、きっと彼の持ち物(=秘めた才能)は皆様の益するところ大であります」⁵⁾。

サイフッダウラ殿は早速命令を下した、「その人物を(身形なぞ構わず)そのままの姿でよいから、即刻連れてまいれ」、と。アミールの命令を実行すべく何人もの廷吏が飛んで去って行った。やがてそれほど時が経つことも無く、その当人を連れて戻ってきた。廷吏たちは何故呼び出したのか、その事情は知らせてはなかった。この人物はアミールのそばに、さらに近くに呼び寄せられた。二重を着込んでいたが、長い時がそれらを食べ、また飲んでいた(=古びて雨風にさらされて、ぼろになっていた)。上座に導かれると、彼は敷物の絨毯に口づけをし、そして立ち上がって(下知を待った)。

サイフッダウラ殿は声を掛けた、「そなたの弁舌の広大さ(=巧みさ)は余等も聞き及んでおるぞ。そこでこの馬についてであるが、その一端を開陳してくれまいか、叙景を詠んでほしいのだが」と。するとこの人物が言うには、「アッラーがアミール殿を祝福しますよう！この馬について乗ることも無く、跳躍ぶりも確かめずにどのように叙することが出来ましょうや？ それ無くしてどのようにこの馬の欠点や内部に秘められたものを記せましょうや？」⁶⁾(尤もと解した)サイフッダウラ殿は命じた、「ならば乗って試なされ！」。こう命じられたので彼は馬に乗り、馬を走らせて診た⁶⁾。

(しばらく歩態の感触を見てから馬から降りて)申し述べるには、「アッラーがアミール殿を繁栄させますように！この馬は両耳が長うございます⁷⁾。2つのものが少なく御座います。直腸(marāth)

1) ハムダーン Hamdān; 10-11 世紀、ほぼ 100 年間、シリア・イラクの北方を支配したハムダーン家シーア派の王朝。905 年イラクのモスルに政権を確立した後、ハムダーンの息子サイフッダウラがシリアのアレッポに拠って自立して王朝を立てた。

2) サイフッダウラ Sayf al-Dawla (915-67); ハムダーン朝アレッポ政権の樹立者。945 年にハムダーン朝より独立。西のキリスト教勢力が圧力を増す中で、イスラム側の拠点としての役割を果たした。文武の両道に通じ、彼の文芸への愛好心は、当時一流の学者や詩人、文人を厚遇して、首都アレッポ知的活動の一大中心地となさした。

3) ここまでの冒頭段落のサジュウ(押韻技法)の語は下線部の順に: šifata-hu / šilata-hu, jahda-hu / 'inda-hu。

4) アミール amīr; 支配者の敬称の一つで、元々は「王子」の意味であるが、地方王朝の君主などが、スルターン(権力持つ者)とか、このアミールを用いた。ここではサイフッダウラを敬称している。

5) ここまでの段落のサジュウの語は下線部の順に: na'lay-hi / 'alay-hi, nāsa / yāsa, ihdāri-hi / hīdāri-hi。

6) ここまでの二段落のサジュウの語は下線部の順に: simāta / bisāta, rukūbi-hi / wuthūbi-hi, 'uyūbi-hi / ghuyūbi-hi。

7) この馬は両耳が長うございます；馬の耳は両方とも長く、普段は内側に向いてピンと鋭く立っているのが良い。物音に即応出来る動きが敏捷のもの(muḥaddid 鋭く研ぎ澄まされたもの)が良い。ペドウィンは仔馬が生まれ

が広くて⁸⁾、3点柔軟に御座います。脛(akru' < kirā')の部分は厚く、4か所窪んでおります。鼻息が荒く(て宜しく)、5点が優美であります。臀部の窪み⁹⁾が狭く、6か所繊細な個所があります。耳先は鋭く(=聞き耳が立ち)¹⁰⁾、7か所に厚太さがあります。舌は繊細ではありますが¹¹⁾、8か所幅広の箇所が見られます。肋骨は伸びており¹²⁾、9か所短い所が御座います。顎の部分は広い¹³⁾のですが、10点遠い所があります¹⁴⁾。

走らせれば前足は(疾走もスムーズな)泳ぎをみせますし、後脚は槍投げの(ように踏ん張った)蹴り上げを見せています。(最前部の額で)光明を馬身に顕わにし(=額の白星 ghurra が闇の暗さの中、馬身の先頭にあってヘッドライトの役をし)、犬歯¹⁵⁾で笑いもを見せます(=口を開いて走ると深く犬歯まで露見させます)。大地の顔を鉄の蹄でもって引掻きます¹⁶⁾(=力強く蹴り上げた脚は地表に蹄(hawāfir)の跡をくっきり残します)。疾駆させれば荒れ狂う大海の如く、襲歩で駆れば怒涛の洪水の如し、と叙すことが出来ましょう¹⁷⁾。

(聞き終わって感服した)サイフッダウ殿が声を掛けるには、「そなたはまこと馬を叙するに、聞きしに勝るものであった。褒美としてこの馬を進呈しようぞ」と。するとこの人物は(遠慮しながらも)「アミール殿には貴重なものの一つでありましように、(大事な)馬を手放すなどは惜しいことでございまいしょうに」と答えて、(馬を連れて別れの挨拶をして)その場を辞して行った。

私としては(聞きたいこともあり)彼の後をついて行き、ややあって彼に声を掛けた、「(相談ですがね)この馬の装備に関わるこれからの経費を私に任せてもらえませんか、但しあなたが指摘したことを私に説明してくれたら、のことですけど?」。彼が答えるには、「好きなだけ質問なさって下さい」¹⁸⁾。

そこで私は尋ねた、「あなたが“先ず10点遠い所があります”と指摘したその意味を伺わせてくださいますか?」。彼が答えるには、「遠いという指摘は、先ず(第1は)視力です(=遠視が利く)、次に(第2は)歩幅です(一完歩が長い)、それから(第3は)両顎の高さです(口幅が広く高い)、(第4は)両ワクバ(馬の眼の上の窪み harmatān とも)の間隔(=眼窩の間が遠い=収まる眼球の

たらその直後に二つすることがある。一つは尾を高く見せるために尾骨の付け根を上押し上げること、他は両耳の先端に糸を通して頭越しに結わえて、耳を長くさせることである(Burck. I 209, M. Alii II 5-7, Tweedie 251, Brown 60)。以下の数字の馬相については、後半に説明がある。

- 8) 直腸 marāth: 欧語では rectum。馬では 30cm 余りあり、肛門 khawrān に直結する。両者とも広い方が良いとされる。馬糞は丸く大きい。
- 9) 臀部の窪み qalt: qalt とは有力なのは「臀部 warak の窪み huqq または nuqra」とされる。馬体の推進力を産み出す強大な臀筋肉の筋間のこと。他にも臀部の外陰部、目の上の「眼窩」とする説など。
- 10) 耳先は鋭く ḥadīd al-sam': 「聞くことの鋭く」。sam' は udhun (耳) の代名。顎の關係で用いられた。注7参照。
- 11) 舌は繊細ではありますが daqīqu l-lisāni: 馬は草食動物でありながら、反芻作用が欠如する。その舌(lisān)は、他の反芻動物と異なり、重要な働きを担っている。唾液を多量に産み出し歯で噛み入れた食草を、口内で塊にして噛み砕かせ、時間をかけて唾液と混ぜて咀嚼した流動体にして食道に流し込む。アラブ圏では他の主畜の牛や羊あるいはラクダなど反芻胃の役割をアラブ馬ではその舌がそれを担っていることになる。
- 12) 肋骨は伸びており madīd al-dil': 所謂「肋張りが良い」ことになり、胸郭が深く広いことになる。アラブは「肋張り馬」を特殊用語でジャルシャウ(al-jarsha')と言っている(M. 'Abduh の注釈 p. 153)
- 13) 顎の部分は広い wāsi' al-shajr: 「口の両端が広い、口幅の広い」こと。アラブはこうした「大口馬、口角幅広馬」のことをハリート harīt と言って、馬の描写にも欠かせない観相点となっている(同上書)。
- 14) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に: udhnyani / ithnyani, marāthi / thālāthi, akru'i / arba'i, nafasi / khamsi, qalti / sitti, sam'i / sab'i, lisāni / thamāni, dil'i / tis'i, shajri / 'ashri。
- 15) 犬歯 qārīh: カーリフとは「歯茎・歯肉を突き出てくるもの」の意味で、これが生え揃うと、成長段階での「成馬」に達することになる。ラクダでは、その犬歯バージル bāzil に相当する。アラブの概念では、成長段階がほぼ等しいことと、乗用・駄用に広く供用されるところから、馬とラクダとは諸相に亘って平衡関係で捉えられている。
- 16) 引掻きます yahuzzu: 「切り裂く、切り取る」。他の読みでは yajuzzu 「割る、砕く」、yakhuddu 「切り目や刻み目をつける」。
- 17) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に: sābihi / rāmihi, lā'ihin / qārīhin, jadīd / ḥadīd, māja / hāja。
- 18) ここまでの二段落のサジュウの語は下線の順に: anfāsa / afrāsa, (waṣafta / aḥbabta ?)。

大きさ及び視角の広さを生む)。(第5は) 両臀部の間隔 (= 臀筋群が真ん中に固まらず、広く両脚に跨っている、走力をつける)。(第6は) 両腿の間隔 (= 両脚が開いて、広くしっかりとしている)。(第7は) 両鼻孔間 (= 鼻穴を大きく取れ、息を大きく深くするのが容易)。(第8は) 後脚の間隔¹⁹⁾。(第9は) 臍と腹膜の間。(第10は) 競馬レースにおいてゴールを遠くにおいていること、以上です²⁰⁾。

私は感心して声を上げた、「あなたの歯が壊れるようなことはありませんように²¹⁾！次にあなたは9か所短い所があると指摘されましたが、それについて説明願えませんか？」。彼が答えるに、「短い、の(第1)は体毛²²⁾、(第2)は距毛(utrā) (「繫 rusgh わが国では「あく」とも、= 蹄 hāfir と踝 hawshab との繋ぎ部分」の毛)、(第3)は尾骨(‘asīb)、(第4)は上腕部、(第5)は繫(rusgh)、(第6)は坐骨²³⁾、(第7)は背中²⁴⁾、(第8)は脛²⁵⁾ということになります」²⁶⁾。

私は彼の応答に讃嘆して、「リッラーヒ・アンタ(あなたはアッラーに属します=あなた(の返答)はなんと素晴らしいものでしょう)！次のあなたの発言「“8か所幅広の箇所が見られます”との説明をお願いします」と質問を向けた。彼が答えるに、「幅広とは、先ず(第1)は額の広きこと(頭部を楔型の美形にする)、次に(第2)は臀部(足腰な逞しさ)、次に(第3)は鞍部²⁷⁾です。次に(第4)は肩甲骨、次に(第5)は脇腹、そして(第6)は脛(特に関節、ジャンプ力・力強さに関与)、次に(第7)は胸部、そして(第8)は首頸部のことです」。

(彼の答に納得して)私は、「素晴らしい回答です。ならば“7か所に厚太さがあります”とのことですが、その説明を願えませんか」と声を掛けると、彼は答えて、「厚太とは、先ず(第1)は肘、次に(第2)は胴回り(mahzam = hizām「腹帯」の当たる部分)であります。次に(第3)は尾根(アラブ馬の尻尾の高さと優美さはこれに起因する)、次に(第4)は頭部の厚皮です。次に(第5)は繫(rusgh 脚では唯一細いところであるがそれを筋力や皮で厚くしている)、次に(第6)は大腿骨であります。最後(第7)は背中中の頸部²⁸⁾です」。

私は納得して声を掛けた、「リッラーヒ・ダッル・カ(あなたの乳の出の大量さは神に属するもの=あなたの知識量の何と豊かなことか)！それではあなたの指摘なさった“6つの繊細な点”をご説明願えませんか？」。彼は答えた、「繊細な点といえは、まず先ず(第1)は脛、次に(第2)は首の前面²⁹⁾であります。次に(第3)は口唇、次に(第4)は皮膚(馬の皮、特にアラブ馬の皮

19) 後脚の間隔 mā bayna r-rijlayn; 後脚の間隔が広い特徴を持つ馬は、前脚や後脚のもう片方の脚を気にせずに思い切りジャンプと蹴り上げを可能にして力強く、かつ走力をつける。こうした「後脚の間隔が広い馬」は特称を持ち、ムジャンナブ mujannab= 並び立つ者無し、と呼ばれて、評価が高い。

20) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に: ‘ashri / nazari, (lahyayni / waqbayni / jā’irataini / ghurābayn / minkharayn / rijlayn ?), šifāq / sibāq。

21) あなたの歯が壊れるようなことはありませんように lā fuḍḍa fū-ka!; 弁論の巧みさが失われませんように！の意味。アル・ハリリーアの『マカーマート』第46話の中に授業風景が叙され、質問によく答えた生徒に対して教師が次のように声を掛けている、「でかしたぞ！願わくばお前の口が(fū-ka) 傷つきませんように、お前に悪口をはたらく(yajfū-ka) 者に益がありませんように！」と。(拙訳、平凡社 III 283)

22) 体毛 sha’ra; 馬にも毛長のもの、短毛のものがおり、「短毛馬」のことはアジュラド ajrad (裸の、削がれた)、雌は jarda、複数は jurd といっている。

23) 坐骨 nasā; nasā には幾つかの説があるが、ここでは「坐骨」と採っておく。この尻の奥の骨が長い(尻長)と、力がでない(da’if)し、弛み緩み勝ち(mustarkhan)になってしまう。

24) 背中 zahr; 背中が短い方が良馬とされる。俗信に「アラブ馬は背骨が一本足りない」などとよく言われる。背中の部分の中で、次の「8か所幅広の箇所」で記される、鞍を置く「鞍部」はサフワ šahwa (pl. šihā) という。

25) (第8)は脛 wazif; 第9番目が欠如している。なお強さ、体格の良さを指してダバーラ ḍabāra という用語がある。

26) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に: sha’rati / utrati, (‘aḍḍayni / rusghayni ?)

27) 鞍部 šahwa; 注24で触れた如く、鞍を据える部分であるが、ここは幅広くヒラール(三日月)形になっているのが良いとされる。

28) 背中の頸部 hādh; 背中(zahr)全体とも、き甲部(hārik)から首にかけての部分とも、鬣の部分(libda)だとも諸説ある。

29) 首の前面 shālifa; この shālifa は希語で普通の辞典類には見当たらない。この語は M. ‘Abduh の注釈によれば、

は薄く繊細である、といわれサラブレッドにも受け継がれている)であります。次に(第5は)耳の先端、であります。最後に(第6は)側頭部であります」。

私は言った、「立派な答えです!それでは“5点が優美であります”と述べられたことについて説明してくれませんか?」。彼が答えるには、「優美ということに関しては、先ず(第1は)首の最上端(zawrと呼ばれる)、次に(第2は)蹄叉^{ていき}(nasr: ḥāfir (=蹄)の底の後方にある三角状の角質部)であります。次に(第3は)額³⁰⁾、次に(第4は)膝であります。最後(第5)は前脚の筋肉(‘ujāyaと呼ばれる)であります」。

私は声を上げた、「アッラーがあなたの命を永らえますよう!それではあなたの仰った“4か所窪んでおります”との説明をお願いいたします」。彼が答えるには、「窪んでいることに関しては、先ず(第1は)肩の頂部(a‘āla l-katīfayn 頸僧帽筋=M. trapezius cervicisと胸僧帽筋=M. trapezius thoracisとの間の窪み)、次に(第2は)肘関節であります。次に(第3は)眉毛の部分(眼窩に当たる)、それに(第4は)脛骨であります」。

私が「分かりました、それでは“3点柔軟に御座います”とのご説明を」をお願いすると、彼は「柔軟さと言えば、先ず(第1は)肩甲骨上部の両マルダガ(mardaghatayn 肩甲骨軟骨)、次に(第2は)鬣^{たてがみ}(ウルフ‘urfという)、そして(第3は)(手綱捌きに應える)口唇(inān)に御座います」、と答えた。

それでは「あなたが仰った“2つのものが少なく(薄く)御座います”についてお願いします」と私が言うと、彼は、「少ないものとは、1つは顔面の筋肉(laḥm l-wajh)、他は背面筋(laḥm l-mattayn)のことであります」と応対した³¹⁾。

(ほとほと感心した)私は、「あなたのこうした才能の出所は何処から発しているのでしょうか」と(出身地を)尋ねると、彼は、「ウマイヤ朝の前線基地、アレクサンドリアを祖国とする者だからじゃよ」と答えるではないか。(思い当たって例の長老だとハタと気付いた)私が「こんな優れた技芸をお持ちなのに、これ程までに苦勞して(矜持も無く)身を崩し曝け出しますとは!」と嘆いた。すると長老は詩を詠じて答えた³²⁾：

汝が時と大いに愚かさを競うが良い

sākhif zamāna-ka jiddā

まこと時ほど愚かなもの無ければ

inna z-zamāna sakhīf

自尊心など忘却の中にうち遣りなされ

da‘i l-ḥamiyyata nisyā

安楽に贅沢に生きられれば生きるが一番

wa-‘ish bi-khayrin warīf

と、かく言うべし汝の召使いに対して

wa-qul li-‘abdi-ka hādhā

hādī (pl. hawādī) に相当するとする (p. 155)。「指導者、案内人、先端」などを意味し、馬全体の機動性、機敏性となるからこう呼ばれるのであろう。

30) 額 jabha: 額の優美さ、それは横から見て羊頭型ではなく、サメ型にある。西洋種や和種は額が前方に膨らんで鈍重に見せているのに対して、アラブ馬は額がヒラール(三日月)状に沿っており、それが気品と優美さを生んで、サラブレッドにも引継がれている。

31) ここまでの7段落のサジュウの語は下線の順に: janbi / ‘aṣabi, (baldati / ṣafḥati?), (udhnayni / ‘urudayni?), (katīfayni / marfīqayni / hijājayni?)。

32) この段落のサジュウの語は一對のみで下線の順に: faḍli / badhli。

そして我らが許にパンを持参するよう命じなされ

yajī'u-nā bi-raghīf³³⁾

(ムジュタッス mujtathth 調 fā'iyya f 脚韻詩 -īf)

第29話 ハムダーンのマカーマ 完

第29話 訳者解説

本話は歴史上の人物を舞台の引き回し役に用いている。ハムダーン朝アレppoのアミール・サイフッダウラである。このアミールは実際馬への関心が強かった。多くのアラビア種の名馬を飼育していた。宮廷に出入りする文人などの著書の中にもその言及がある。例えば詩人及び説教師として著名なイブン・ヌバータ (Ibn Nubāta 'Abdurrahīm 946-84) は、サイフッダウラの黒馬を叙し、タフジール (taḥzīl 足の白徴) 及びグッラ (ghurra 額の白星) などを黒毛と対比して絶品の詩句をものし、本話と同じように褒賞として与えられていることが知られている。こうしたサイフッダウラの名声、著者ハマザーニーをして、このマカーマの一篇を書かした一因と思われる。本話で引き出してきた馬に対して、品評させた2~10点の数だけの指摘に対しても、余りにもその抽象的指摘であったにも拘らず、サイフッダウラはその共通理解があった如く、何の問い合わせや問い質し^{ただ}をすることなく、褒美としてその馬を与えてしまっている。文脈から観ても短絡的な、あつけない場面想定ではあった。しかしそうした点も好意的に捕えれば、このアミールも馬好きで観相眼を備えていたから、問い質すことも無くそれを良しとして馬を褒賞として与えたのだ。その具体的解答は、後舞台で語り手との間で説明がなされる設定であったのだ、と是認する見方も一方にはあろう。

それにしても馬の観方を主題に、このようなマカーマを編んだのである。聞き手の方に、読者の方に視点を移して、どのくらいがこのマカーマを鑑賞の対象に出来たかとなると、古今のアラブ読者層だとて、疑問点が残る。とはいえ著者ハマザーニーもまた間違いなく、馬への一方ならぬ関心が強かったのであろう。実際彼が旅した地域はアラビア半島以西ではなく、イランや中央アジアの東方や北方地域が中心であり、騎乗した旅の足となったのは、ラクダではなく、主として馬だったろうから、知的関心がひととき強い著者のことである。重層的に馬学の知識のみか経験・体験が蓄積されていったことだろう。通り一遍の齧った知識程度ではこれ程の深層に分け入る馬の品評が出来るわけではない。

このアミール、サイフッダウラが死亡したのが967年、そして著者ハマザーニーが生まれたのが968~9の頃であった。即ち生きた時代は近かったが、一足違いの二人であった。もし同時代人として生きたならば、世界を股に旅してまわったハマザーニーのことである。サイフッダウラの宮廷にも出かけたことであろうし、想像の域を脱してどんな歴史の一端の展開を見せたことであろうか。サイフッダウラの人物なり、状況がもっと鮮明に生かされたことであろう。

文体の面で一言しておく、サジュウ (押韻散文) が、後半の2~10点の数の説明においては全く見られなくなってしまっている。抽象的な文意ならば押韻も可能であろうが、さすがに具体的指摘になると、換言も難しく、サジュウが取れなくなってしまっている。また詩の導入も大団円でなされているだけである。詩才があればもう少し馬の叙景の自作を入れて聞かせどころも創意でき

33) 上の三詩行には、興味深いことに前半詩行にも押韻が工夫されている。alif 脚韻 -ā の技法が見出される。

たことであろう。馬の情景を詠う趣向は、馬好きのアラブであってみれば、古くプレイスラム期の大詩人イムルウ・ル・カイスの時代から存在したし、『馬の書』の類書には数知れず記載されているのであるから。

今回の主人公の年齢は判然としない。馬相を読み取る前提に乗馬を巧みに遣って退けていたわけであるから、よばよばの老人とは受け取れない。正体暴露の詩で読み取れるのは、運に見放され世に絶望した中年の男とみておきたい。出身地を「ウマイヤ朝の前線基地、アレクサンドリアを祖国とする者だからじゃよ」と言っている。ウマイヤ朝下(7～8世紀)の設定では明らかにない。ハムダーン朝のサイフッダウラの(10世紀)の時代としているのであるから。著者は故郷より東であるアラブ世界へは足を踏み入れてはいない。ましてやさらに西のマグリブ世界のことなど見聞も曖昧となろう。この辺りの事情は疎いための一つの結果がアレクサンドリアをウマイヤ朝の前線基地として、そこを出自とする主人公設定になってしまった、と言えまいか。

語り手は今回は裏舞台での名乗りは欠如している。著者はその点気が付けば、合計54問の質問が終わった後で、「イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた」ぐらいは付け加えることが出来たはずである。

本マカーマの異同であるが、Fatih版では第22話に、Sofya版では第15話に配されている。Paris版では本話は冒頭の第1話に収録されている。

第30話 ルサーファのマカーマ 73にわたる詐欺・物盗りの手口

(原文 M. 'Abduh pp. 157-163)

(本話は注釈の方が長くなってしまうので、本文の中に〔 〕カッコを用いて注記の体裁をとって入れ込んだ)。

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のような話をした：私はルサーファ¹⁾から外出すると、カリフの館 (= 首都バグダードの中心部にある宮廷) の方を目指して進むことにした。折しもカイズ (qayz 真夏) の暑さときたら不快の胸をさらに煮えたぎらせた。道のりの半ばに差し掛かった頃には、炎暑がいつそう激しさを増した。我慢は私の限界を超えていた。しょうがなく近くのモスクに難を求めたのであった²⁾。

モスクにはあらゆる美の奥義が内蔵されているものだ。寺院内には一団の人々がいた、彼らは顔を上げ天上 (装飾) に見惚れて、またそれを支える列柱³⁾について何か話している風であった。(聞き耳を立てていると) やがて話題はいろいろな四方山に広がって、話の最後⁴⁾は盗人 (luṣūṣ) とその手口⁵⁾に及んでいた。

まず①「掬り」(ṭarārīn)とそのやり口⁵⁾が挙がった。〔「掬り」ṭarārīn: 単数は ṭarār. 原語 ṭarār は「掬り」の中でも「巾着切」の訳がより相応しかろう。というのも語根 $\sqrt{\text{ṭ r r}}$ は「切る、切り取る、切り裂く」であり、グッラ (ghurra = カモ) 相手に気づかせないまま、金銭の入った財布のみを盗み取る。瞬時に相手の懐から巾着紐を切って抜きとる盗人ということになる。〕

(掬りの次に) ② 指輪抜きの連中が、盗人・誤魔化す連中の中では挙げられた。〔指輪抜き fuṣūṣ とはグッラ (= カモ) のなる相手に気付かれずに、指からファッス (faṣṣ 銘入りの指輪) を抜き取る盗人。指輪抜きは単に盗み取るだけでなく、「銘入り」であるから、それを利用して、状況によって本人に成り済ますことも、代理になることも出来、危険は伴うが、莫大な儲けも可能となった。〕

(続いてこの種の詐欺物盗りが次々と挙げられていた)⁵⁾

③ 掠め取りの連中：〔掠め取り ahl al-kaff とは、原語は「掌の連中」が直義。レキシコンの類では何の資料にも当たれないが、唯一本話の注釈者 M. 'Abduh によれば、戦いや勝負事、喧嘩などで、勝者と敗者の間に割って入り、勝者に代わって敗者を取り仕切る者。こうした敗者の処置のどさくさの間に金目のものを掠め取る。何の特殊技能もいらず、掌一つでできるところからの隠語であるらしい。〕

次に④ コインくすねの連中、〔コインくすね qaff とは：つり銭、両替などで、コインを手渡しする時、指先や指の間に挟んで誤魔化す。こうしたコインくすねの特殊技能を持つ者には大量の貨幣を扱う両替商が多く、悪名が立つ両替商は、皮肉を込めて「上手なコインくすね」の意味でカフファーフ qaffāf と囃かれる。語根義は「縮こませる」。〕

次は⑤ 量目誤魔化しを仕出かす連中、〔量目誤魔化し ṭaff とは枡の大きさや秤の量目を標準以下にして、少なめに仕出して誤魔化すこと。枡目の場合もテンコ盛りにして、上の縁に沿って払って均すわけであるが、

1) ルサーファ al-Ruṣāfa: テグリス河が貫流する大バグダードの中の東地区。バグダード建設当時は、この地区は軍の野営地であった。アッバース朝第3代カリフ・マフディーの治世、町が大きく拡大し、郊外にあったこのルサーファ地区もその首都市内に組み込まれて発展した。ここには歴代アッバース朝の墓廟が収まっている。

2) ここまでの冒頭部のサジュウ (押韻技法) の語は下線部順に: ruṣāfati / khalāfati, qayzi / ghayzi, ḥarru / ṣabru。

3) 支柱 wuqūf: wuqūf は複数形で、単数形は wāqif. 抽象的には「立っている、立ち止まっている」の意味だが、具象的には「柱、支柱」すなわち 'imād pl. a'mida と同義で用いられる。ここでは韻の関与もある。

4) 最後 'ajuz: 話の最後。アジュズ 'ajuz とは「物事の後半部、尻」の意味で用いられる。「前半部」はサドゥル ṣadr という。このサドゥルとアジュズとは対の語であり、詩学でもサドゥルは「前半詩行」、アジュズは「後半詩行」として用語となっている。

5) ここまでのサジュウの語は下線の順に: ḥiyālī-him / 'amālī-him, fuṣūṣ / luṣūṣ。

中心を抉るようにして、余分に払い去る。こうした「量目誤魔化し」の達人をタッフーフ *taffāf* と、そしてこうした「量ののを誤魔化す」動詞はタッフアファ *taffafa* といっている。]

次は⑥ 礼拝列 コソ泥、[勤行や礼拝の念行所作の間に悪事を働く連中。ムスリムが集団礼拝して、列 (*ṣaff*) ごとに横並びして、一斉に礼拝所作を行う、ルクウ (*rukū* 屈む所作)。スジュード (*sujūd* 額付行) など。神に祈りを捧げ、無念無想の際、こうした隙を窺って周囲の礼拝者達から金目のものを掠め取る者。礼拝所作に関しては第 10 話注 7 を参照されたい。]

次は⑦ ダッフ (タンバリン) を使っての喉締め**の強盗連中**、[ダッフ *daff* とは楽器の「タンバリン」のこと。喉を締める (*yakhnuqu*) とは、押し入り強盗をする際、二人以上で民家に押し入り、盗みを働くのだが、発見された場合、相手に大声を出させないため、一人が咽喉を締める。相棒が声を出してもその音消しのため、ダッフを甲高い楽音らしく叩いてみせる。]

次に⑧ 納戸に侵入し隠れて、包みにして逃げ出す連中[家人がいなか気付かない隙に、家の納戸や物置、板戸 (*raff*) の隅に入り込んで潜んでおり、金目なものを物色し、かき集めて包み込んで (*laft*) おいて、隙を伺って逃亡を図る空き巣狙い。]⁶⁾

次に⑨ 金貨真贋すり替えの連中、[ディーナール金貨を主に扱う両替商などが、本物かどうか試すために、口に含んで金貨を噛んでみる。口の中には予め贋金貨を含んでおき、客にこれは偽物だと言って突き返す。贋金貨をザーフ *zā'if* (pl. *zuyyaf, zuyūf*) と言う。これを動詞化したのが「贋金貨かどうか噛んで見分ける」ことをタズイーフ (*tazyīf*) というのである。ここで用いられているマスフ *mash* は元来が「拭く、ぬぐう」から発し、金貨が本物かどうか拭いて確かめる、ことから「噛んで確かめる」に転用されている。]

次に⑩ 冗談誤魔化しの連中、[カモを見つけると、一人か数人で言い寄って、冗談を言い (*mazaḥa*) 合いながら茶化すなどして笑っている相手に油断させて、誤魔化しながら金目のものをカモる。]

次に⑪ 忠告 (*nuṣḥ*) しながら盗みを働く輩、[二人で全く無関係を装って行う。往来で金の入った手提げ (*kīs nuqūd*) などを持つカモをみつけると、カモに一人が忠告するように話し掛ける。そして「誰それも盗まれたのはこのような手提げでしたよ」と手に取って見させてもらう。その瞬間を狙って相棒がその手提げを掠め取って走り去る。]

次は⑫ 仲裁 (*ṣulḥ*) 呼びかけ人、[これも二人で行う。一人は法官など威厳ある外装をする。いざこざ、言い争い、喧嘩、トラブルなどがあるところを捜し歩いては、仲裁解決に割り込み、折よく通りかかったふりを見せる法官を呼び寄せる。そこでこの偽法官が権威ぶって両者を納得させて仲裁する。法官の礼ないし報酬は、後になって山分けにする。]

次に⑬ 小銭 (*ṣarf*) ^{きん} 攫いの輩、[現金を扱う行商や両替商などに行き、金貨をくずして欲しいのだからと言って、金貨を見せびらかせて板台の横に来る。目の前でくずしてくれた小銭が並びきったところで、素早く掻っ攫って行く。前の客の小銭を攫い取って行く場合もある。]

次に⑭ 眠たい視線を送り相手を眠らす連中、[旅行や遠出の外出で休息に入り、眠そうな視線を相手に送り眠たいから寝ましよう誘う。相手が眠ったところで彼等の金目な荷物や貴重品を盗み取ってドロンを決める。シアスタ文化圏ではよくあることで、昼寝が当たり前の慣行を巧みに突いたもの。それを防ぐために所持金や貴重品は布地に包んで、枕代わりにしているのもよく見かけられる。]

次に⑮ 博打に連れ込まれた連中、[空き巣の一種で、忍び込む家に予めナルド⁷⁾一式 (バックギャモン) を潜かに持ち込んでおく。寝静まった時、留守の時を狙って、コソ泥に入る。もし見つかったら、「博

6) ここまでの下線部サジュウは; *kaffi* / *qaffi* / *taffi* / *ṣaffi* / *daffi* / *raffi* / *laffi*。

7) 訳註中の註になってしまうが、ナルド *nard*; ナルド(バックギャモン)は著者の在世の頃(10世紀前後)、あるいは厳しい法学派の地域では非合法であったのであろう。我が国の博打と同じで、人目を避けての賭け事としての前提に立っている。

打に連れ込まれたんだ!」と囁^{うそぶ}いて、潜^{ひそ}ませておいたそのナルド一式をみせて言い逃れに使う。]

次に⑯ 猿ごかしの連中、[猿に錠や鍵の開け方を教え込んでおく。猿回しの門付けのふりをして、物色して回る。門の緩い家や留守を狙って、猿を手足の代わりに用いる。家戸の錠や錠を開けさせて、中に侵入して盗みを働く。]⁸⁾

次に⑰ 外套裏コソ泥、針と糸を必携⁹⁾、[rayta (pl. rayt 上物の外套)を羽織っている相手を見つけたら、気づかれないように背後から外套の中に手を忍び込ませて、巾着他金目のものを手探りで奪う。もし気づかれたら、携帯している針と糸を見せて外套の縫^{はこ}ひを点検しているの、繕^{つくろ}って差し上げましようと言い逃れる。]

次に⑱ 錠前荒らしの連中、[予め開けやすいものや合鍵のある錠前 (qufl) を客に渡し、買った先を着き留めて置き、人のいない時にその錠前の掛かった蔵や倉庫に入って盗みを働く。]

次に⑲ 地下壕掘りの連中¹⁰⁾、[直義は「大地をそこから割る」者。押し入る邸の外から外壁を突き抜けた地下壕を掘り、その穴を用いて好適な時間に盗みに入る。]

次に⑳ 麻酔薬で眠らせる連中、[麻酔薬はここではバンジュ banj という。バンジュとはナス科ヒヨスの一種、クロロホルムが製せられる。外科手術などの催眠や鎮痛剤に用いられる。食べ物などに入れて相手を眠らせ、その間に仕事を行い逃亡する。本話末の訳者解説参照。]

次に㉑ 奇術を操る連中、[奇術 nīranj とは手品に多少の魔法が加わったもの。手品は普通シャアバザ sha'badha と、手品師はムシュイビズ mush'ibidh といっている。この奇術と訳したニーランジュは語形態からしてペルシャ起源で外来のものであり、もう少し手の込んだもので、素朴な者や思考力が弱い者などから、視覚や音を効果的に用いて新奇なトリックで引っかかせて、拘りや替え玉を用いて詐術を行う。]

次に㉒ 履物すり換えの連中、[モスクや集会場で帰り際に、自分のものより良いサンダル (na'l) などの履物にすり替えて履いて行く者。ハンマーム = 公衆浴場でもよくある話で、わが国でもお風呂屋でよく生じ、「板の間かせぎ」の一種として、色々な笑い話のネタにもなっている。]

次に㉓ 両綱使いの連中、[直訳は「彼の両綱をきつく結ぶ者」である。何種類かの綱 (habla) を用意し、豪邸の屋上やベランダによじ登り、せしめた金品や衣類をそれぞれ分けて結わえ、自分が先に降りて、2種の綱を巧みに操って獲物を後から手許に下ろしてずらかる。]

次に㉔ 武器をちらつかせる連中¹¹⁾、[「恐喝」、「押し売り」。短刀や剣をちらつかせ、金をせびる。わが国の「胡麻の蠅」に刃物を持たせた物であり、カッターウ・タリーク「道の切断者」と呼ばれる。「武器」はここではサイフ sayf (刀剣) が代表している。]

次に㉕ 井戸昇りの連中、[直訳は「井戸の中を昇る人」。わが国では「井戸を降りる」と言うだろうがアラブは「井戸を昇る」と言い表す。あるいは水汲みに来たなど察知した時、逃亡するため井戸の汲み上げ口近くまで「昇って来る」ためか。何か不味いこと、危ないことがあると、井戸に逃げ込み、身を潜める。アラブの井戸は、石や岩の積み重ねでできており、ごつごつしているため上り下りは比較的容易である。折悪しく、水を汲みに来た者に出くわした場合、相手は井戸の中に人がいるとは思わないため、驚きのあまり気が動転する。ジンがいると思い込んで、慌ててその場を離れる。その隙にサイド (sā'id 井戸昇り人) は逃げ延びる。]

8) ここまでの段落のサジュウの語は下線部順に; mashi / mazhi / naṣhi / salhi, ṣarfi / ṭarfi, nardi / qirdi.

9) rayt (外套) とは、ライト rayta の複数形であり、韻を合わす必要から複数形を持って来たのであろう。ライトとはブルヌス burnus やアバー 'aba' のように、厚手のものではなく、絹製のような繊細な薄手の外套であり、それだけに縫ひも目立つ。

10) 「地下壕掘りの連中」は独立文では無く、形式は重文の後節になっている。錠前荒らしの連中、「大地をそこから割って」としては意味をなさない。本文には後節の文頭に man を補って然るべきであろう。

11) 「武器をちらつかせる連中」にはサジュウに技法が出来なかった。初めての例外であり、こんな特殊な領域を内容とするのに、形式としてよくこれまでよくサジュウ体を続けられたものだと感心しながら注を施している。

次に②⑥ キャラバン同行者を装う連中、〔直訳は「ラクダ隊 (ṭir) と共に長旅をする者」。キャラバン隊 (qāfila) に紛れ込み、恰も同行者の一人として振る舞い、ハーミル (運搬ラクダ) の群れの中から、積荷 (mīra pl. miyar 運搬品、食料品、所蔵品) に目当ての物件が見つかったならば、折を見つけ持ち逃げをする。多くの場合、ラクダごと奪い去る。〕¹²⁾

次に②⑦ 修道者振る連中、〔直訳「印持つ者 (例えば外着) の仲間」。著者の時代、10 世紀後半、既にこの頃イスラム神秘主義運動が盛んであった。各教団はそれぞれ独自のアズヤーウ (azyā' 単数は zayy= 目安、飾り) の旗印と紋を持ち、それを修道着にも付けていたり、染めていた。禁欲、世捨て、慈善から喜捨や施しをする者が多く、「修道者振る連中」はそうした機会を稼ぎに利用する。〕

次に②⑧ 分限者の寄り合いに^{なか}集る連中、〔直訳は「マカーマートに^{なか}集る連中」。ここでのマカーマ maqāma の意味は単なる人が集うところではなく、一種メンバー制になっており、「富裕者、地位や名誉ある者、名士、上流社会に属する限られたものの集会所やサロン」であり、そうした寄り合いに出かけ、立派な服装と高雅な振る舞いで閑談を交える。そうした間にも暇を見つけて物品を掠め取る。〕

次に②⑨ 夜逃げの連中、〔直訳は「夜回り (ṭawf) から逃げる者」。夜間民家に侵入して物色中、家人に見つかったなら、「少し^{からま}匿^{かくま}ってほしい。自分は今夜警 (ṭawwāf) から追われているんです、全く無実なのに!」と言い訳して同情を買い、その後逃げ去る。〕

次に③⑩ 恐怖からの避難民の連中、〔man lādha mina l-khawf 「恐怖から避難所を探すひと」。夜間、人気がない所で、急に声や像を出して驚かし恐ろしがらせる。ギッル (ghirr カモ) は恐怖のあまり、持ち物を置き去りにして逃げ去る。それを頂戴する。ジン (精霊) がごく普通に信じられているところでは、ゲール (食人鬼) の存在もあり、この効果がある。〕

次に③⑪ 鳥飛ばしの連中、〔鳥 (ṭayr) は伝書鳩用の鳩が多いが、鷹狩り用の隼や大鷹などもある。また飼育しているカナリヤなど小鳥の場合もある。この場合昼間の空き巣である。ギッル (カモ) として物色しておいた留守宅を狙って鳥を飛ばしておき、その後忍び込んで盗みをはたらく。家人に見つかってしまった場合、飼っていた鳥が逃げ出し、あそこに留まっているので回収に来たんだと言い訳をしながら、回収にかかる。〕

次に③⑫ 革紐打ち遊びで、「座れ痛くはないぞ」と^{うそぶ}囁く輩、〔これは盗人の類では無く、遊びの一種の騙しの手口を言っている。二人以上で遊ぶ。親が両手のどちらかに物を隠し、子がどちらか当てさせる。相手が間違った場合、座らせて手か足をサイル (sayr 使い捨てたばろを結び合わせた革紐、アラブ版チャンバラでも用いる) で打つ。勝ち負けが等しくなく、また力の入れ方次第でどうしても最後にはどちらかが泣き出すか、喧嘩でお終いになる。〕

次に③⑬ 小便する振りしてちよろまかす連中、〔店のすぐ傍らの空き地で小便 (bawl) するふりをする。それを見たくない店主は顔をそむけたり、その近くにのを避ける。その隙に店の手近の商品を盗み取って行く。時には己の逸物をこれ見よがしに見せて小便を行うこともある。〕

次に③⑭ パニック場泥棒の連中、〔直訳は「恐怖を好機と捕える者」。内乱、騒動、火事などで一帯が如何したらよいのか分からず騒々しくなって恐怖に陥っている時、稼ぎの好機とばかり盗みを働く。わが国の「火事場泥棒」〕¹³⁾

次に③⑮ 尻をこきながらスークで乞食する連中、〔直訳は「トランペット (būq) を吹きながら、スーク (sūq 市場) で食べ物乞う者。何回も尻をこくのは己の意思では出来ないことなので、自分には内臓の

12) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に: rayṭi / khayṭi, qufli / sufli, banji / nīranji, na'lay-hi / ḥablay-hi, bīri / 'īri.

13) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に: 'alāmāt / maqāmāt, ṭawfi / khawfi, ṭayri / sayri / dayri (最後者では dayrun となっており逸脱をしている)、bawl / hawl (実際は bawli / hawla であって母音が不統一である)。

病気があります、病気持ちです、と無言で周りに告げる意味合いがある。他の説は「尻をこく」とは「くだらない話をして時を過ごす」意味合いであって、食事の相伴に与かるトゥフファイル(食客)の一種とみなす。]

次に③⑥ 水壺持ち歩く連中¹⁴⁾、[口が大きく開いた水壺を手を持って、水を汲みに行く風を見せ、途次にある出店を通り過ぎる時、何食わぬ風で店先の商品を掠めて取って、素早く水壺に入れてさっさと先に向かう。]

次に③⑦ 庭師装う連中、[雇われてその家の庭の手入れ(hadhq)をしている風に見せかけ、隙を見つけて、家の中の金目のものを失敬する。我が国でも「流れの庭師には気をつけろ」と言われている。]

次に③⑧ 窓拭き¹⁵⁾装う連中、[窓拭きを頼まれた風をして、家人がその場を離れた隙に、手近の在り合わせのものを失敬する。]

次に③⑨ 高壁飛び越える連中、[直訳「高層住宅に馬を跳躍させる者」。ジャンプ力の強い馬を駆使して、高い壁(ṣarḥ)を乗り越えて、邸内に入り込み、盗みを働く。家人に気付かれたら、馬の跳躍を試していただけだと言ひ繕う。]

次に④⑩ 屋根登りの連中、[留め金付きロープ(hibl ma'kūf)や縄梯子を用いて、屋根の上に登り、物色して部屋に降りて金品を略奪する。]¹⁶⁾

次に④⑪ ナイフを持って土壁を這い登る連中、[ナイフ(sikkīn)を様々に用途立てて盗みに入る。中の人に気付かれないよう、のっぺりした厚い土壁をナイフで手の掴み場、足場を作りながら登り、中に入ったらナイフで包みや行李を切り裂いて金品を奪う。時には人間にも斬りつける凶器として用いる。]

次に④⑫ 花束持って不意の来客を装う連中、[直訳「香ばしい物を持って挨拶しに突然あなたの所にやって来る者」。「突然に香ばしい贈り物をもって押し入ってくる連中」。「香ばしい物」とは「花束」とされている。アラブの習慣では、他人を訪問する際には何かの贈り物を持参することになっていた。贈り物でもライハーン(rayhān シソ科のメボウキ)とかワルド(薔薇)などの薫り高い花が好まれた。こうしたごく普通の習慣を利用して押し入るので、花束を持った来客が現れたら、誰しも油断をする。こうして家の中に入り込んだならば、「押し入り強盗」の正体を現し強奪に入る。「香ばしい物」とは「焚かれて香煙を上げている振り香炉」との説もある。]

次に④⑬ 斧を持ち官憲装う連中、[当時の警官は「警棒」に当たるような、特別の小型の「斧」ṭabarazīn(ペルシャ語 ṭabar 斧、zīn 打て)を持っており、衆人にはそれで警官と分からせた。こうした出で立ちで空き巣に入り込み、見つかると「巡回中である、この辺りに怪しいものが入り込んだ」とか言い訳して、その場を去る。]

次に④⑭ 呻きながら狂人を装って家にふらつくように入りこみ、盗みを働く者、[気が触れた者(majnūn pl. majānīn)は大目に見られるイスラム社会のことである。この狂人が、呻きながらふらついて他人の家に入ってくると、如何にも重度の気違いと見せかけることが出来る。その振りをしながら、家内の金目の物品をちょろまかしたりして物盗りを謀ったりする。別説ではふつうの盗人がギッル(ghirr カモ)の邸に押し入り、見つかったら急に呻きながら狂人を装う。]¹⁷⁾

次に④⑮ よろず鍵開けの連中、[沢山の鍵(mafātīḥ)を持ち歩く。家の扉、部屋の戸の錠(qufl pl. aqfāl)ばかりを開けてしまうだけではでない。より嚴重な倉庫やさらに貴重品の入った小箱の錠までを開けてしまい、金品を奪う。決じ開けられない場合、それが熱心さのあまりプロ根性丸出しにして我を忘れ往々にして捕まってしまう。]

14) バストワークは普通の水壺のように口が狭くなっておらず広いまの容器。ペルシャ語 bastū または pastū の借用語。

15) 窓拭き rawāz; 語根の rawzan はペルシャ語起源で厳密には「明り取り、屋根窓、天窗」である。

16) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に: sūq / būq / bastūq, basātīn / rawāzīn, ṣarḥi / saṭḥi。

17) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に: (sikkīn / ṭīn?), ḥīn / rayāhīn, (ṭabarazīn / dawāwīn?), anīn / majānīn。

次に④⑥ 風での綿飛ばし連中、〔風がある日、風に乗って飛ばされやすい綿の実、一塊の綿毛 (qutn)¹⁸⁾ を利用する。風向きによって綿をギッル (ghirr カモ) となる家の空に飛ばす。それを中に入って取り返す振りをして、盗みを働く。〕

次に④⑦ 招かれた者の風を装って玄関から堂々とする連中、〔集まりや祝宴の折などに多人数で見ず知らずの客が多い豪邸などを狙う。トゥファイル (食客) の如く入り込み、堂々と飲食し、隙あらば盗みを働く。〕

次に④⑧ 邸の中にいかにも訪問者である如く入り込む連中、〔上の 47 と似ているが、こちらは全く見ず知らずの単なる訪問者 (zā'ir) として邸を訪れ、応答があればすぐに立ち去り、応答が無ければ家の中に潜り込んでゆく。〕

次に④⑨ 身を低くして貧窮者の如く家に押し入る連中、〔一見は敬虔さを信条のダルウィーシュや修行者の如く平身低頭して謙遜を示しながら、ミスキーン (miskīn pl. masākīn 物乞いや托鉢) をするよう見せかけて戸口に近寄る。中を伺いコソ泥に変身する。〕

次に⑤⑩ 水壕で一稼ぎする水中を泳ぐことが出来る連中、〔泳ぎ (khawḍ) が得意の技能を生かして水壕 (hawḍ) を掘ったり、利用して壕が掘り巡らされた豪邸などに入り込む。泳ぎの原語 khawḍ は「水中を泳ぐ」と言うより「水中を徒歩で渡る」方に主眼が置かれた語である。〕¹⁹⁾

次に⑤⑪ 両杖使いの連中、〔両刀使いならぬ両杖使い。先が鉤状になっている長短 2 本の杖 ('ūd) を携帯する。往来の通りの曲がり角の家に居を構え、その屋根に屯する。キャラバン ('ir) などが通りかかると、ギッル (= カモ) を見定めてその曲がり角を曲がる前で、何を獲るかどちらの杖を用いるかの按配を決め、そのギッルが角を曲がった後でラクダの荷袋の中から見定めた獲物を引っ掛けて盗み取る。咎められたら、偶然引っ掛かったんで、と言い訳をする。〕

次に⑤⑫ 借金返済代行を装う連中、〔富裕の商人などに頼まれて代行仕事を引き受ける。それが借金 (dayn) の返済や強制取り立ても含まれる。信用を得て額が巨大になった時点でドロンを決め込む。〕

次に⑤⑬ 担保騙しの連中、〔金銭や貴重品を借り受ける。担保 (rahn) として大事そうに持って来たケース入りの封のされた (mughlaq) 担保を預ける。預かった方には、高価そうなケースであるから、封のされた中身も大したものだろうと、封を切って中を子細に調べるとみると、偽物や安物を掴まされる結果となる。〕

次に⑤⑭ 信用貸しの小切手騙しの連中、〔大金を持ち運んでいる旅人や商人をギッル (カモ) に、巨額の現金を直接旅先に届けるのは大変だからと持ち掛けて、旅先の地にも当店の支店がありますから、と申し出て説き伏せ小切手を渡す代行業を行う。実際は無効の紙片。小切手はスフタジャ (suftaja pl. safātij) と言われ、動詞 saftaja は「小切手、手形を振り出す」である。小切手はイスラム黄金時代に発達し、信用あるものは、遠くアンダルシア (スペイン) まで支店を出していたことが知られる。現在でもブーリサ būliṣa と言えば「小切手、為替手形」の意味で用いられ、古来から変わることが無い。この時代、こうした口で騙されるぐらいであるから、いかに為替制度がアラブ・イスラム世界で発達していたかの一つの証左となろう。〕

次に⑤⑮ 財布すり替えの連中、〔予め全く同じ財布 (kiys) を二つ用意し、一方はディーナール金貨やデイルハム銀貨取り混ぜた額を入れておき、他方はフルース銅貨を同じ重さの分を入れて置く。商店へ行き、相当額の高価な品を買う。支払いをその財布の上で行い、財布ともども差し上げる。渡した後、次の買い物を思いつき、もう一度支払額の確認を求める。今度の確認は自分で行う。確認後その財布を再度手渡す時、

18) 綿毛 qutn: この語も実際の綿栽培と共に、アラブ・イスラム世界が西欧にもたらした文化のひとつ。英語の cotton の原語。エジプト綿は世界的に有名である。アラブ世界では「綿花栽培」のことをマクタナ maqtana と、「綿糸レース、綿糸紐」のことを qiyātān pl. qayāfīn と言っている。

19) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に: mafātīhi / rīhi, bāba / antāba, dār / zār (しかし母音が不統一で実際は dāri / zāra), līni / masākīni, hawḍi / khawḍi。

予め用意された別の財布を手渡すのである。こうしたすり換えで高額の商品はタダで、支払金は一割以下で済ませたことになる。]

次に⑤⑥ 贋金掴ませ人の連中、[予め金貨、銀貨の贋金 (zayf pl. zuyūf) を用意しておき、相手に気付かれない様に現金の両替や交換、支払い時に実行する。その際細心の注意を払い、ここは大丈夫だと確信したところで、本物 (jāyyid pl. jiyād 良貨) に贋金を混ぜて相手に渡す。手品師の仕業でも出来る。]

次に⑤⑦ 破産お助け人の連中、[商人や貸し手の信用を得て置き、彼らの名義でその資金をつぎつぎに信用貸しを行う。何人かの信用借りの相手も内通しており、殆ど貸出出来る貸し手の手持ちの資本を使い果たしたところで、信用借りの共謀の相手は行方をくらます。資金の無くなった信用貸しの持ち主は破産者 (muflis pl. mafālis) に追い込まれる。し掛けた本人も知らん振りして過ごすか、ドロンを決め込む。後の別の機会に、共謀者の仲間と山分けする。]²⁰⁾

次に⑤⑧ 袖切りをしておき、現場で「ご覧あれ、裁いて下され」と言う連中、[自分の袖 (kumm) を予め切り裂いておく。商店や両替屋などの脇で、ギッル (カモ) となる客が金を収める財布の形状と色、それに両替した額を見据えておく。店を離れたギッルの後を追って行き、通行人の多い所へ来たら、ギッルを捕えて大声を出す、「この人に財布を盗まれた、泥棒だ！袖を引き裂かれて財布を盗まれた！皆さん裁きをお願いします！」と。袖を見せて、財布の形状や中身を言い当てて、集まった野次馬に納得させる。ギッルが形状から同一の財布を取り出したところで、有無を言わせず皆の前で取り上げる。相棒や複数の仲間がいればさらに解決が早い。]

次に⑤⑨ 「胸前も縫いますよ」の連中、[「外套裏荒らし」の異曲版。針 (ibra) と糸 (khayt) を携帯して、外套を着用している風雅な人士を見つけたら、ギッル (カモ) としてその後ろから近づき、縫う真似をしながら中の金目のものを弄り失敬する。気付かれたら縫っている部分を示し、「胸前も縫いますよ」と言い逃れをする。独特な外套タルビール talbīb (pl. talābīb) を着用する。胸の上部まで隠れるもので、露出した手が見えない様になっている。敬虔さや慇懃さを示す衣類である。]

次に⑥⑩ 「ご存じですか？」の声掛け人の連中、[ギッル=カモを見つけたならば、気安く接する。親しく話し掛け、握手を求め、また肩に手を掛け、「これこれのことをご存じですか？」、とか「どこそこで、今日こんなことがありましたがご存じですか？」と話を持ちかける。その間、手を移動させて体のあちこちを気づかれないように触り、金目のものを盗み取る。]

次に⑥⑪ 噛みつき出しと引き吊り出しの連中、[巾着切りの一種。「噛みつき出し」とは懐が豊かで体が弱そうなギッルを見つけ、無理やり喧嘩を吹っ掛ける。カモと殴り合いの最中、財布の在りそうな場所を手探りし、見つけたら歯で財布の付紐部分に噛みつき、切り離してそれを手にしたら、遁走する。「引き吊り出し」とは引っ掛け紐や細棒を予め用意しておき、ギッルの横に座り、面白い話題を提供しながら、気を逸らせて懐やポケットの中のを引っ掛け棒や紐で引き吊って、拘り抜き奪い去る。相手か自分が立ち去る時に行くことが多い。]

次に⑥⑫ 勘定する時に誤魔化す連中、[量目誤魔化しや金貨真贋すり替えの手口に似ており、勘定を数える時わざわざ間違ったり、気を逸らせて数を誤魔化す、また贋金を混ぜ込んだりする。デイルハム銀貨が例に出されるように、銀の細工がやりやすいか。わが国の落語「時蕎麦」の一文の方が、まだ可愛いかな？]

次に⑥⑬ グルになって「眠っちゃいない」と言葉を掛けながら盗人を働く連中、[木陰などでギッル (カモ) となる午睡中の者にグルで近寄り、「眠っちゃいない」、「否、眠ってる」などと小さな声を掛け合いながら、対話を行う。こうした対話で、ギッルを眠っている風に誘導する。すぐ近くでは、自分たちの

20) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に：‘ūdāyini / dayni、(rahni / dayni?)、kīsi / tadlīs / mafālis (子音後の母音がすべて異なる：kīsi / tadlīsini / mafālisā)。

宝物袋を隠して埋める素振りを見せる。一方ギッルが眠っているか確かめに来る者は、わざわざ宝物のことを聞こえよがしに口にしながら、こっそりギッルの持ち物を奪い去る。何か不信を感じてもギッルは眠っている素振りを続けざるを得ない。グルが去った後、その気にさせられていたギッルは、自分の持ち物の在り処そっちのけで、飛び起きて埋めた宝物を掘り出す。中は貝殻や器の破片ガラクタだらけであった。〕²¹⁾

次に⑥4 千両箱中身すり替えの連中、〔取引先から半ば信用を得た詐欺師は、中に金貨千ディーナールの入った金庫を預かってもらう。その後の取引においても、信用先のその金庫から引き出して金貨の代金を渡す。上の方に本物を重ねて置き、それらを渡して、ますます取引先からの信任を勝ち得る。そうしたところで大きな取引を行い、十分な支払金があることには両者は承知なので、取引は容易に成立する。そうして大量の商品を持ち出した後、行方をくらます。後になって商人が不審の思っ、預かっていた金庫をこじ開けたところ、中は銅貨(fulūs 小銭)だけであった。〕

次に⑥5 後ろ回し持ち逃げの連中、〔逃げ足の速い相棒と組んで、商店や宝石商、両替屋の所に出かける。いくつも高価な商品を次々と出して見せてもらう。その中のいくつかを袖の間から取りやすいように、或いは後ろに押しやって相棒に回す。気づかれた時点で相棒は遁走する。残った方は、一緒にいたのは誰だか知らない、と言い張って店を後にする。〕

次に⑥6 枷され強盗の連中、〔ギッルとする人物に枷(qayd)がされたまま近づいて、訴える、無実で投獄され如何に牢獄でひどい目にあってきたか、家がいかに貧窮であるかを訴え、相手の同情を誘って、枷を開いてもらう。その瞬間、豹変して強盗を働く。恩を仇で返すことになる。〕

次に⑥7 俄か病で痛みを装う連中、〔街道などでギッルを見つけると、刺し込みや疝痛などの俄か病を装って座り込み、親切そうに相手が気を許したところを伺って、強奪を行う。昔の我が国の胡麻の蠅もこの一種。〕

次に⑥8 靴引^{ばた}叩きの連中、〔履物(na'l)換えの一種。古びた自分の履き物を捨て、新品の物と取り替えるため、新品で上物を履いたギッルを見つけると、自分の履き物を脱いで相手を引叩く。喧嘩を売られた相手も仕返すために己の履き物を脱いでやり返す。そこで相手の両方の履き物を強奪する。〕²²⁾

次に⑥9 確認を吹っ掛ける連中、〔金持ちの通行人にギッルの見当をつける。近づいて高価な宝石とか貴重品を見せて、これこれの額で買いませんかと持ち掛ける。乗り気にさせたところで、相当額の現金を所持しているかの確認を求める。これぐら^いいふか^いなものですが、あなたは持ち合わせておりますか？ 確かですか？ 確認のため、勘定をして頂けますか？と訝^{いふか}って見せる。ギッルが財布を出したところで強奪する。〕

次に⑦0 裂け目^{いふか}を巧みに利用する連中、〔盗みに入るに、建物の繋ぎ目や裂け目(shaqq)を足場として巧みに利用して、空き巣に入る。あるいは建物などの内外の隙間を利用して、窃盗品や財布を安全になるまで秘匿しておく。後者の例は非常に多い。廉価な物や必需品のちょろまかしのこの手のやり方は裕福な家庭に入り込む貧しい女中、使用人などに多い。〕

次に⑦1 地下壕掘って出入りする連中、〔既に述べた「水中を泳ぐことが出来、水壕で一稼ぎする連中」と類似。水中か地中かの違い。目指す邸まで地下トンネルを掘り、そこから押し入る。「地下壕」は原文では sirb になっているが、sarab の方が一般語。〕

次に⑦2 穴開け盗賊の連中、〔直訳は「壁の穴(naqb)であら捜しする者」。壁の破れや穴を利用して、或いは強引に穴開けを行い、そこを出入り口の突破口にして空き巣に押し入る。〕

次に⑦3 引^{いかり}掛け具と共に繊維で製したロープを利用する連中、〔錨のように四ツ目の鉤を持った引掛け具(khaṭāṭīf)にロープの一方の先端を結び、ベランダや陸屋根に投げ上げる。留守かどうかはそ

21) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に：kumm<kummi / uḥkum、ṣadri / tadri、shadda / 'adda、qawmi / nawmi<nawmin。

22) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に：alfi / khalfi<khalfin、qaydi / kaydi。

の物音で分かり、人が出て来たら地上なので簡単に退散出来る。塩梅を確かめてから、そのロープを頼りに昇って行き、家の中に押し入る。「繊維」if は厳密に言えば「ナツメヤシの繊維」であって、その特製ロープと言っているのであるが、ロープの材料はそれに限らない、韻を踏むためと思われる。〕²³⁾

さてこうした話題であったから興味ある人の間では、尽きること無くつぎつぎに引き摺られることになった。そして遂に話はアレクサンドリア出のアブ・ル・ファトフに及んで行ったのである。しかしそうした彼の話の中には世間体が憚れるものもあるのでここでは省くことにする。今日の教養世界では消えかかった彼の言葉の素晴らしさが存在しているとはいえ。それに言及する価値があるものと言えば、ただ「月輝く晩」の叙景の素晴らしさで、「夜、その己自身の衣装だけで何の飾りも不要」と夜を詠んだ（秀句）のことである。

アブ・ル・ファトゥフは詠っている²⁴⁾；

幻影我を訪れたり 夜その常なる外装違えてあり

wa-ṭayfun sarā wa-l-laylu fī ghayri ziyyi-hi

望月^{もちづき}完全なる姿で夜と出会う 夜髪^{よがみ}の分け目を明るく照らしつつ

wa-wāfā-hu badru t-timmi fa-byaḍḍa mafriqū-hu

（タウィール *ṭawīl* 調 *qāfiyya* q 脚韻詩 -qu-hu）

第30話 ルサーファのマカーマ 完

第30話 訳者解説

29話同様、専門的知識をひけらかすだけのマカーマで終わっている。否マカーマの形式からして、マカーマとの体裁を採りえずに終わっている未完成品と言えるであろう。あるいはマカーマ以外のリサーラ（書簡集）から採られたものか。我々も経験済みであるが、訴えたいところだけでもかく書き込んでおきたい、後で体裁を作って行けばよい、としてここで留め置いたものと思える。ともかくも、よくもこれだけ並べたてたものだ。願わくば単なる羅列に終わらず、何かを指標として括って欲しかった。恐らくサジュウの重縛がそれをも妨げたのかもしれない。脚韻の合致するものをペアに並べた感が強い。サーサーンの語彙一覧としてはそれほど難しいものでは無かろう。語り手イーサー・イブン・ヒシャームの進行役が最初その場、即ち暑さを避けて入って行ったモスクの中での集まりのはずが、話題が盗人に及んだ途端、その類型を並べるだけ並べて、並べ終わったら息が切れて体裁だけ取り繕った、と言ってもよい一篇となってしまった。マカーマ作品としての意識があったかどうか。全体をまとめきつてはいないし、我々が師アレクサンドリア出のアブ・ル・ファトフ長老殿に関しては唐突に名前が登場してきて、取って付けたように、主人公役として名が挙がり、登場もないまま句わせておわっている。話題が詐欺・ペテン師、物盗りをめぐってではなく、その事例を上げる中で息切れして、御終いにしたい状況下で初めて出てきており、唐突感はやむを得ない。

また Antilla の研究 (*Maqama A History of a Genre* p. 44, 57, 109) によると我々のテキストである M. ‘Abduh 版はモラルに反するような記述は省く傾向にあり、第26話が欠如するためのものであり、本話もこの後主人公によってハンサムな青年が嵌められて、ホモの対象になってしまうと言うエピソード

23) ここまでの段落のサジュウの語は下線の順に；ḥaqqi / shaqqi, sirb<sirbi / naqb<naqba, khaṭāʾifī / līfī。

24) ここまでの最後の段落のサジュウについてその技巧的配慮はない。急に活字も小さくなっており、文体も明らかに異なる。最後の詩を除いて、校訂者 M. ‘Abduh が要点をかいつまんで述べた体裁である。解説参照。

ソードが綴られているそうである。ペテン・物盗り、門付けの羅列一覧では本文は短い。ところが異文化に住む我々にはその3～10倍の説明を要するものばかりで、訳者も呻吟させられた。矢張りこの後に物語がさらに続くのも腑に落ちる。本文で「そして遂にアレクサンドリア出のアブ・ル・ファトフに及んで行ったのである。しかしそうした彼の話の中には世間体が^{はばか}憚れるものもあるのでここでは省くことにする」とあるのもこうした事情を反映したものであった。

さて、主題とするのは、サーサーンと括られる詐欺・物盗り・門付け・遊行集団の一覧である。異文化研究を追う学徒には好古の材料を提供してくれていて、興味深いものであった。一覧なので、原書は文字通りで説明は何もない。短くて2語、長くて6語くらいで、一つの職種が終わり、次に移っている。韻を踏むために、強引に対句のセットを作って纏めた風のものも目立ち、訳出での困難さが加わった。サジュウ文体を取りながら、内容を濃くしてゆくのは至難の業である。脚注でサジュウの綻びているところは指摘しておいた。注釈書を頼りにせねばならない。とはいえ注釈書であっても、原書よりも幾らか状況把握できるくらいであって、訳し込めるにレクシコン類を頼りにしたし、アル・ハリリー『マカーマート』を訳した経験と、訳者の現地体験からの類推を生かして、説明せざるを得なかった。としてもそれが正確なものか自信は持てるものではない。

本話で出てくるカモと訳した原語は、その多くはギッル ghirr (pl. aghrār) と言っている。直訳すれば「不注意な、軽率な、経験の無い(者)」であり、加害者側の視点ではなく、被害者側の視点に立っているところが面白い。一口で言えば「騙されやすい」である。ギッルの語根動詞 gharra には「無邪気・未熟・未経験である、」が一方に、「人を欺く、誘惑する」が他方にあり、相関している。他のカモの用語はそのものずばりマフドゥーウ makhdū‘ 「騙された者」である。

こうした詐欺・物盗りのなかでもバンジュ(banj)を利用しての手口が紹介されており、それを利用しての盗みが紹介されている。バンジュとはナス科ヒヨスの一種であり、古くから催眠や鎮痛剤、外科医の手術などに用いられる。食べ物などに入れて相手を眠らせ、その間にひと仕事を行い、逃亡する。この麻酔薬が登場する記述は、訳者にはすぐに後輩アル・ハリリーがその『マカーマート』で利用されているのを想起させた。その29話「ワースイトのマカーマ 隊商宿で麻薬を用いる」であり、婚約式の場における稼ぎの方法でこれを利用している。麻薬バンジュを用いて参会者すべてを催眠させてしまう。バンジュを入れた甘菓子を作って置いてそれを参会者に食べさせ眠らせてしまい、隊商宿であるから全員の身体からだけではない、彼らの宿泊する部屋からあらゆる目ばしい所持品や貴重品、金品すべてを巻き上げ、夜中を幸い闇に隠れて逃げおおせる算段の設定である。そうした設定に生かされている。他にもサーサーンを扱ったマカーマが、第49話「サーサーンのマカーマ アブー・ザイドの遺訓」他あるので、比較対照したら、この世界を相当明るみに出すことが出来よう。

「㊥ 財布すり替えの連中」で思い出すことがある。我々の留学の時代、1960～70年代はドルを現地で両替する時、闇市では公の倍額で売れた。そこで闇のドル売りを土産物屋などで行うのであるが、往来にも声を掛けて来て行う者がいた。こうした場合細かいドルでは無く大きな額の100ドル札が普通である。相手を隅につれて行き、ドルを所持しているのかその場で実物を見せろと言う。実物をみせると、それらを手で確かめて売り手に戻す。そしてどこそこの店に入って行って両替えしなさいと指示を出す。売り手がその指示に従って店に入っていざ両替の段になると、一番上のはそのままであるが二枚目からは一ドル札になっており、交換も出来ずに泣き面となる。ドル札は大きさとデザインが全く同じで、額だけ異なるからこんな目に合う。更にはこんな手口もある。往來の呼びかけ人は手渡されたドルが本物と分かると、それらを手に持って、後に従ってくるように

先に歩き出す。人通りの多いところに出ると急に速度を増し、あっという間に逃げ足早く雑踏に紛れて見失なわせてしまうのだ。こんな体験を留学生仲間から聞いて驚いたものである。

本話の中で「マカーマ」の語が用いられている。「分限者の寄り集まりの連中」の記述中である。少し注釈を挟んでおくと、その直訳は「マカーマ^{たか}に集る連中」である。ここでのマカーマの意味は単なる人が集うところではなく、一種メンバー制になっており、富裕者、地位や名誉ある者、名士、上流社会に属する限られたものの集会所やサロンであり、そうした寄合をさしてマカーマ maqāma を用いている。

更に興味が惹かれるのは、「小切手」の仕様が述べられ、この頃すでにそれを使用する社会制度があったことである。「小切手騙しの連中」の箇所である。訳注でも「巨額の現金を直接届けるのは大変だからと言って、信用がある小切手を渡して代行業を行う」としておいた。実はアル・ハリリーも『マカーマート』を著作するにあたって、これに着想を得たか、第49話「サーサーンのマカーマ」の中で老師アブー・ザイドの息子への遺訓として、以下のように論している件がある、「旅するを厄介なことと思ってはならん、移動するを嫌ってはならん。まこと我らが集団の指導者達、我らが仲間の長老達は誰もが言っておる、「ハラカ（行動を起こすこと）にはバラカ（ご利益^{やく}）あり、タラーワ（稼ぎ場の移動）にはスフタジャ（約束された小切手）あり」と。また一方誰もが非難しておる、「異郷さすらうを面倒と考える者であってはならんし、移動するを苦痛と看做している者であつてもならん」と。「一所に留まっていることは」師達の教えるに、「泡銭^{あぶくぜに}で足れりとする者の言い訳になっているに過ぎん、出来の悪いデーツを渡され、不正な升目で誤魔化されても満足顔の連中と同じだ」と。（第3巻 355-356）

サーサーンとは「物乞い、門付け」などの集団で、本稿の主題はルスース（物盗り、詐欺集団）であるから近いし、重なる職業分野であるが、より暴行や悪行の程度が激しい。アル・ハリリーの方が具体的な説明があるので分かり易いし、比較もできよう。当時小切手はスフタジャ suftaja と呼ばれていた。イスラーム世界の安定とネットワークの充実は商業世界では信用貸しのみか小切手のような現金を携帯せず紙一枚で遠隔の地でも現金を交換できるシステムを作り上げていた。少なくともアル・ハリリーの時代、即ち1世紀後の（12世紀前半）にはさらに発展していたように見受けられる。

現在でもブーリサ būliṣa と言えば「小切手、為替手形」の意味で用いられ、技法などは現代化されているが考え方は古来から変わることが無い。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では第26話に、Sofya 版では第24話に配されている。Paris 版では収録されていない。

第31話 紡錘 (mighzal) のマカーマ 例えて妙の紡錘と櫛

(原文 M. 'Abduh pp. 164-166)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のような話をした：かつてバスラの町¹⁾に入って行ったことがあった。その頃の私は名声が知れ渡っていたし、あちこちでその名が頻繁に聞かれる程の身であった。ある時二人の若者が私の宿泊先に訪ねてきた。そのうちの一人が相談話を切り出すには：

「あなた様にアッラーが力を与えますように！実はこの相手の若者のことですが、私の家に入ってきて、子猫²⁾を持って行ってしまったんですよ。その猫って頭に眩暈^{めまい}を起こしており、真ん中に腰帯巻いて、中に回る空洞³⁾があって、鳴き声を立てると優しい声で鳴き、逃げ回るとなれば、その回転の素早いこと、引っ張ればその尾の長いこと、腰⁴⁾の何と繊細なこと、胸⁴⁾の何と貧弱なこと、大きさは人參⁵⁾程。町に居ついて、旅をしないでもありません。何かものを与えますと、お返しをします。旅を始めるように命じられますと、精力的に動きます。ロープを引っ張らせますと伸ばしてゆきます。ほらここに骨と板があります。これの中には資金も財産も、過去も未来も詰め込まれています」⁶⁾。

するともう一人が反論して言った：

「そうですとも、あなた様に神のお助けがありますように！彼の方こそ私のものを強引に奪っていったのですよ；

槍の穂先の如く細く研がれ その歯の削られ鋭く

murahhafin sinānu-hu mudhallaqin asnānu-hu

その子供たち互いに助け合い 縄^{もつ}れ取り除くが仕事

awlādu-hu a'wānu-hu tafrīqu shamlin shānu-hu

主人だろうとお構いなく急襲し その髭にもぶら下がる

muwāthibun li-ṣāḥibi-hi mu'allaqun bi-shāribi-hi

その鋭い牙を剥く 老いも若きも関係なく

mushtabiku l-anyābi fi-sh-shībi wa-sh-shabābi

- 1) バスラの町 Baṣra: ペルシャ湾に面する港町。シンドバードの故郷。既出、特に第13話「バスラのマカーマ公園の開談の場に窮状を訴えられて」を参照。そして著者アル・ハマザーニーを師として仰ぎ、尊敬してやまない『マカーマート』の大成者アル・ハリリーリーの故郷でもある。従ってバスラについてはその通りの名前まで登場させているアル・ハリリーリーの第48話「ハラーム寺院でのマカーマ バスラで懺悔者に説教し浄罪を得る」、そして第50話「バスラのマカーマ 最後の一働きと最晩年の勤行生活」の渾身のバスラ賛歌を参照されたい。
- 2) 子猫 qabaj sunnār: ここは問題点である。qabaj、qabj とはやや大型の鳥である「hajal (ヤマウズラ)」とか「karawān (ノガン)」と言った意味しかなく、それもペルシャ語からの借用語である。語根も欠いている。注釈者 M. 'Abduh はスクタ (子音点) に誤りがあって、語頭子音はスクター一つの /t/ であり、第2子音はスクタが上につく /n/ で、fanaj であって、jarw (野獣の仔) の意味であろう。あるいは更に語末子音は /k/ の転写ミスで、fanak 「フェネク」であろう、と注記している (p. 164)。フェネクと言えば、耳が大きく、狐科に属し、猫より小さく可愛い野生の夜行性動物である。猫のフェネク = 子猫となるのであろう。話題のものが太く巻かれると、この様に……？以下は謎掛けであるのでこれ以上の説明は避けたい。
- 3) 腰 munatṭaq: 「腰」は第2義であり、語根は「帯 (niṭāq)」の方であり、「帯を締めた」、というより、「帯が締められた (部分)」が正確な訳である。
- 4) 胸 muqartaq: 「胸」と訳したが、正確には若い女性が胸に着用する「チュニック (qurtaq) が着けられた (場所)」である。腰も胸も女性の象徴であること。
- 5) 人參 ḥarar: 注釈者 M. 'Abduh も述べている如く、ḥarar には何の意味も無く、第1・2語根は /h/ および /r/ ではなく、両者にスクタの付いた jazar であって、意味的にも「人參」が妥当しよう、と述べている。この見解でも明らかであるが、ペルシャ語圏で渡り歩いている著者アル・ハマザーニーにはこうしたペルシャ語の引用 (及び混用) が多い。
- 6) ここまでの冒頭段落のサジュウ (脚韻技法) の語は下線順に: sunnār<sunnārin / duwwār<duwwārun / zunnār<zunnārun / dawwār<dawwārun、ṣarra / farra / jarra、munatṭaqi / muqartaqi、ḥarari / ḥadāri / safari、radda / jadda / madda、khashabun / nashabun。

手に馴れた姿また良し 瘦せ形で食また細し

hulwun malīḥu sh-shakli dāwin zahīdu l-akli

多くの穂先持つ射手 口髭顎鬚の周りを撃つ

rāmin kathīru n-nabli ḥawfa l-lihā w-s-sabli

(律格はラジャズ *rajaz* 調、2 詩行ずつ脚韻が異なる変形)

これを聞いて私は前の若者に言った、「分かりました、あなたはこちらへ櫛 (*masht*) を返してあげなさい。こちらの方は紡錘 (*mighzal*) を返してあげなされ」⁷⁾。

第31話 紡錘 (*mighzal*) のマカーマ 完

第31話 解説

今回のマカーマも短すぎて批評に耐えるものではない。主題は、語り手イーサー・イブン・ヒシャームのもとにバスラ人二人が告訴にやって来る。告訴人と被告とが裁き人(多くは法官)の前で論争を展開する「裁きもの」の一つと言える。相手が自分のものを借用して取り上げてしまった、返してくれない、と言うわけだ。その借用物たるや、櫛 (*masht*) と紡錘 (*mighzal*) という極めて取るに足らない日常品なのだが、それを巧みに言い繕って、語り手の知性を試そうとする。このモチーフはアル・ハリリーによって全面的に、また申し分なきまで「マカーマ」仕立てされた。『マカーマート』の第8話「マアッラのマカーマ」では、アイシャドーの用具コホル筆と針とを巧みに縁語・類語でそれと匂わせながら、直接には言及しないで、しかも性的表現も巧みに織り交ぜながら叙述する。

今回は主人公が登場していない。語り手イーサー・イブン・ヒシャームだけで対応し、マカーマの見せ場を済ませている。これも両者を登場させて、マカーマの筋を通すにはそう難しいことではない。恐らく手を加える前の試作品として留め置いたものと受け止めておきたい。詩の挿入も唐突である。二人目には初めから韻文で訴えさせている。櫛の本作もそうであるが、作者がペルシャ人であるだけに、ペルシャ語から直接、或いはペルシャ語起源の借用語が目立っている。注2の子猫 *qabaj* 及び注8人參 *ḥarar* のところでも触れたように、問題点 *qabaj*、*qabj* はペルシャ語からの借用語であり、「*ḥajal* (ヤマウヅラ)、*karawān* (ノガン)」と言った意味しかなく、それも語根も欠いている。結局のところ書き写しミスか転写ミスで、*fānak* 「フェネク」であろう、と結論付けざるを得ない。このフェネクもペルシャ語からの借用語とされている。もう一つの問題点、*ḥarar* にはアラビア語では何の意味も無い。こちらも注釈者の一致するところで、ヌクタの付け方が異なり *jazar* 「人參」が妥当しよう、と言うのが結論であるようだ。この見解でも明らかであるが、ペルシャ語圏で渡り歩いている著者アル・ハマダーニーには、くり返すことになるがこうしたペルシャ語の引用及び混用が多い。

二人目は「櫛」のことを婉曲的に詩で叙している。律格はラジャズ *rajaz* であって、詩作にそれほど難しいことはないが、2 詩行ずつに別の脚韻が取らせる、変形の奇抜さを披露していることにはなるであろう。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版及び Sofya 版では収録されてはいない。Paris 版では第2話として登場している。

7) 注6以降ここまでサジュウの技法の配慮はない。

第 32 話 シーラーズ¹⁾のマカーマ 敬慕していたかつての道連れの成れの果て

(原文 M. 'Abduh pp. 167-170)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、以下のような話しをした：私はイエメン²⁾へ出かけその帰途について、故郷に向かっていた時であった。一人の同伴者(rafīq 道連れ)がそのラフラ(rahla 積荷)と共に旅を私と一緒にしてくれた。こうして三日間を道連れとして旅を続けたわけであるが、遂に(目的地が異なるので)別れることになり、(行く手の)高地が私を惹きつけていたし、低地がわが同僚を飲み込まんと待ち受けていた。私は(分かれ道を)登って行き、彼は降って行った。私は東へと、彼は西へと道を辿った³⁾。行く先々山がちの箇所、荒地に気を遣いながらも、あの道連れと別れたのが残念でならなかった。彼も窪地や峽腹に配慮しながら(同じ思いであったろう)⁴⁾。

ワッラーヒ(全くのところ!)あの同伴者との別離は、私に再会の気持ちを植え付けた。彼は別れた後でも、その寂しさに悩む私を置き去りにしたままであった。そして思い出させた、彼の裕福さを、立派な風貌を、気品高さを、(何を例に取っても)ほぼ完璧であったことを。しかし時は我々に(旅の行く先々)さまざまな出来事を生じさせ、紛れて忘れさせることもあった。そうはいってもちょっとした折には、心に彼の像が結ばれるのだ。何か似ているものそれを目にした途端、彼のことを連想してしまうのだ。よく言われるように、時の経過が彼のことを忘れさせるのを手伝うはずだとか、時が過ぎゆく中で紛れさせてくれるはずだ、と言う風にはとても思えなかった。こうした思いを抱いたまま故郷のシーラーズに安着したのだ⁵⁾。

(シーラーズに滞在してから大分経ってのことだが、)ある日のこと私が部屋⁶⁾にいと、一人の老人が訪ねてきた。その顔には貧窮にその垢の溜まらせている表情がそのまま顕わとなっていた。時が彼の水(=若さの血気)を干上がらせていた。病気が彼の脛(=まっすぐ伸びた背筋)を曲げていた。欠乏が彼の(生業の)爪を鈍らせていた。(よく見ると)顔は見た目より更に悲惨であった。相貌は現状より(見れば見るほど)さらに醜悪に見せているのだ。肉付きは痩せこけ、唇はひび割れていた。足はとみると泥だらけ、手はとみると水疱だらけ。犬歯はといえば悲惨さが、過酷な生活がそれを失わせていたのである⁷⁾。

1) シーラーズ Shirāz: イラン西南部の主邑、ファールス州の中心都市。7世紀後期イスラム征服後建設された。ザンド朝(1751～1794)時代には首都とされる。庭園、農園が発達し、「バラと詩」の町として知られる。詩人サアディー、ハーフィズの生誕地として知られ、両廟はいつも参拝者で賑わう。

2) イエメン Yaman: アラビア半島南西部にあり、アラブ民族にとっては源郷と看做されており、シバ(サバ)の女王、マアリブのダム、ヒムヤル王国、アデン、モカ、ハドラマウトなど民族性をよくあらわしている文化の宝庫である。イエメンに行くことを「上る」と、そこから帰ってくることを「下る」という言い回しもそうした観念が反映されている。

3) この辺りの類似表現をアル・ハリリーから引用してみよう「私たちはラクダの乗り鞍をしっかり締め、私が出かけ彼も出かけた。メディナへの道中ずっと、長老は己に纏わる四方山話を聞かせてくれた。彼の話は旅の難儀を忘れさせてくれたものだ。旅の道のりの遠さも長老と一緒にならば好ましくも思えた。そして遂に預言者の町に辿り着き、預言者(の墓)に詣でること望みを果たした。その後長老はシリア方面へ、私はイラク道へと、長老は西の道へ、私は東の道へそれぞれ別れて行った。」(同じ32話である、偶然と言えるであろうか。拙訳Ⅱ427)

4) 最初の段落のここまでのサジュウ(脚韻技法)の語は下線の順に: yamani / waṭāni, najdun / wahdun, ṣawwaba / gharraba, ḥaznu-hu / baṭnu-hu。

5) この段落のサジュウの語は下線の順に: firāqu-hu / ashtāqu-hu, ba'da-hu / bu'da-hu, jamālin / kamālin, waqtin / lamḥatin, bi-hi / fi-hi。

6) 部屋: ここではフジュラ ḥujra が用いられている。原義は「ラクダや家畜を収容するところ、囲い場所」の意味でハジラ ḥazira と同義である。やがて人間の居住空間にも流用されて「部屋」、即ちグルファ ghurfā と同義に用いられるようになった。しかし原義的に「お籠り所、避難所」的な意味合いが強い。

7) この節のサジュウの語は下線の順に: faqrū / dahru, saqamu / 'adamu, bāli-hi / ḥāli-hi, nashifatin / qashifatin, waḥilatin / majilatin, ḍurru / murru。

老人は私に挨拶を送ってきた。私は目では軽蔑しながらも、彼に挨拶を返した。老人が言うには、「アッラーフンマ（おお主よ）、我ら二人の間が訝られる今のこのような状態から、より良きものと成させ給え！」。そこで私は己の顔の険しい皺を伸ばし（＝厳しい見方を緩め）て、彼に対して聞く耳を開くことにした。そして促して声を掛けた、「イーヒ（ihī 事情をお聞かせください）⁸⁾！」。

彼は語り始めた、「私はあなたと共に（一宿一飯の）契りの乳房の乳を飲んだ者です。（共に護り合うという）聖約の手綱を分かち合った者です。高潔な人々の間では常識になっていることなのですが、知り合うということは神聖なことであって、友の誼^{よしみ}というものは血縁より近し、とも申しております」というではないか！ そこで私は口を挟んだ、「あなたは同郷の方ですか、それとも同族の方でしょうか？」と。すると彼は「いえ、我々が共にしたのは異郷の地でしたよ、他でもない隣人の縁が二人を結びつけたのですよ」との返事。「ラクダの繋ぎ綱を強めたのは何処の街道だったんでしょうか？」と私が尋ねると、「イエメン街道でございました」と答えが返ってきた⁹⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：私には合点がいった、「それではあなたはアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師なのですか？」と声を掛けた。彼は、「そうです、この私です」と答えるではないか。「あれ以来あなたは何とお痩せになられたことでしょう。以前のイメージとはすっかり変わられてしまいましたね。さあそれでは、あれ以降のあなたの事の仔細すべてを、何故そんなに零落されてしまった¹⁰⁾のかを打ち明けて頂けませんか？」¹¹⁾。

アブ・ル・ファトフ師が話し出すには、「私はあれから「糞で緑の女」¹²⁾（＝出自は卑しいが美人の女）を娶ってしまったんですわ。彼女との間に娘一人が授かりました。しかしこの妻の手が焼けることときたら！私の財産を食い潰してしまっただけではないのです。私の精魂の水を舐め取ってしまったのですわ」。私は口を挟んだ、「そんな女だったら何故離婚して、あなた自身の安息を得ようと思えなかったんですか？」¹³⁾

（通常ならば主人公の帰結の詩が挿入されて終わる手筈であろうが、本マカーマはここで終わっている。）

第32話 シーラーズのマカーマ 完

第32話 訳者解説

冒頭のラフィーク（旅の道連れ）について言及しておこう。アラブ・イスラーム世界は交易、商用、（学問的・宗教的）修養・修業の旅の世界であった。砂漠を渡るに足となるラクダの備えと、同行

8) イーヒ ihī；イーヒン ihīn とも。相手に催促を促すアラビア語に多用な間投詞で、「もっともっと！続けて！」のような使い方である。この対義語が mah! とか mahīn! 「やめて！諦めろ！」。ハリリー『マカーマート』にも次のような用例がある：（若者に褒め上げられた）ファキーフ（法学者）の方は恥らう風に俯いて、言葉に詰まったかのように沈黙した。しかしややあってファキーフである我々がアブー・ザイド長老はこの若者に声を掛けた、「イーヒン！おお若者よ！何時まで、何時までお黙るか（質問を続けたらどうか）」と。（第32話「タイバ（メディナ）のマカーマ ハルブ族集会所での100の法律問答」、拙訳）

9) この段落のサジュウの語は下線の順に：(wajhī / sam'ī?), ḥurmatin / 'iṣmatin, ḥurmatun / luḥmatun, ghubrati / qurbati, (qaranin / yamani ?)。

10) 零落されてしまった ikhtilāl；美味なブドー酒が酸っぱい「酢」khal に変わってしまうこと。良い状況が悪い状況になること。

11) この段落のサジュウの語は下線の順に：ba'dī / 'ahdī, ḥālī-ka / ikhtilālī-ka。

12) 糞で緑の女 khadrā' dimna；緑草 (khadrā') が一面に広がっている。見た目には綺麗である。しかし緑草の下は動物や人間の糞尿の溜め場であった。それ故に他の地面より緑草が繁茂するわけである。一見綺麗でも一皮むけば下は汚泥だらけの地である。外部は良くても内部は悪い。こうしたことから転用されて「糞で緑の女」とは「外見・見た目は美人だが、出自または中身は卑しい女性」の意味で用いられる。

13) この最終段落のサジュウの語は下線の順に：dimnatīn / ibnatīn / miḥnatīn, ḥarībātī / shabībātī, sarraḥṭa / staraḥṭa。

者の選定が必須であった。ラフイーク *rafiq* と言えば現代では「仲間、同僚、友人」などの意味で用いられるが、かつては「旅の道連れ」が第一義であった。本話でも「一人の同伴者 (*rafiq* 道連れ) がその旅を私と一緒にしてくれた。こうして三日間を道連れとして旅を続け……」とあるように、長旅やお互いに助け合うのに、良い道連れに巡り合えるかどうかで旅も良好となったり、大変な目に合うことにもなった。

旅は長旅および砂漠越えのような場合は、ラフイーク (道連れ) が大事を占めた。こうしたごく普通の例をハリリーの『マカーマート』から引いておこう：

事例1 そして言うには、「あんたが異邦人の兄弟 (= 旅人の一人) であり、同行の士を求めているのかと思ったよ。実際あんたは連れを求めているのか、あんたを気遣ってくれ援助してくれるような、あんたの^{きま}気儘を許し、費用を分け合ってくれるような?」。そこで私は答えた、「そのような連れが (*rafiq*) 私の所に来てくれたら、我が願望叶えり、と言ったところでしょう」。即応して老人は、「既にあんたは見出しておる。だから喜びなされ! 求める寛大な人物も見つかっておる、だからしっかりと捕まえておくことだ!」と言うではないか…… (33 話 II 445)。

事例2 ……こう吟じ終えと (私を誘って) 言った、「この土地にはわしには (稼ぐべき) 牧草地はもはや残されてはいないし、当地の人々に求めるべきものは無くなった。もしあんたが道中を共にして (*rafiq*) くれるなら、道に道を重ねて (楽しいものになることだろう) !」。こうして私ら二人はタフリースから急ぎ旅立った。師との道行きは何と丸々二年も続くことになった。私としては生きている限り師と行動を共にしたかった。しかし離散させる者である時がそれを拒んだのであった。(33 話 II 446-47)

事例3 老師は普通の口調に戻って、「さてわしの方じゃが、出かけることにしよう、朝に朝酒、夕べに寝酒する所に。あんたと一緒に来ないなら、遊興^{すさび}の仲間となりたくないならば、私に同行する (*rafiq*) 必要もない。あんたの道はあんたのもの、わしの道はわしのものだからな。さあわしの道を空けてくれ、脇^{わき}に退いてくれ! わしを探そうとしたり、跡を付けたりはしないでくれ」。こう言い置くと、私に背を向けて立ち去っていった、二度と振り返りもせずと。アル・ハーリス・イブン・ハンマームは話を締めくくった：アブー・ザイド師に去られた後になってみると、私の心は悲しみの炎で焼けるようであった。かと思うと一方では今度の再会は無かった方が良かったのではとも…… (41 話 III 157)

事例4 遺訓話の中にも「かようであるからお前も不案内な土地に稼ぎに出かけようと決め、そのための杖と旅用袋^{ととの}を調えたならば、出立する前に助け合いの出来そうな連れ合いを選び出すことが肝心だ。というのも「家 (選ぶ) の前に隣人、道中 (行く) の前に連れ合い (*rafiq*)」と言うからな……」。 (49 話 III 356)

さて、結末の方であるが、何とも尾切れトンボである。語り手イーサー・イブン・ヒシャームの憤慨で終わりを迎える、このマカーマの結末は如何なのであろうか。最後に用意される詩句も欠如している。これを埋める算段として、恐らく著者アル・ハマザーニーはこの後、主人公アブ・ル・ファトフに韻文で終幕に至るプロセスを語らせたかったのであろう、それから後の妻との事情と落ちぶれ果ててここまで辿り着いた事情とが説明され、さらに人生は変転常無し、などと語って終わるのが最も妥当な延長であろう。恐らく性生活なども描かれていたのであろう。編者の M. 'Abduh の裁量がマカーマ自体を歪めた可能性を指摘しておこう。

ともかくもマカーマ一篇としてみると、短すぎるし、筋立ても上に述べたように上出来とは言え

ない。何よりも訴えるものが無い。マカーマを仕上げるには、先ず一篇として著作動機が何か読者や聴衆に訴え、賛同を得る知的新奇さが要求される。それも見当たらないのは、どこかそれを埋め込む前提で大まかに全体を描いて、そのまましまい忘れてしまった未完成品とも一面では考えられる。これ以前にもいくつか例があったように。

語り手イーサーが前段の出だしと後段の中途に顔を出し、物語の進行を務めているところはマカーマの設定としての形式を踏まえている。しかしながら、主人公アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフの名乗りの場面も唐突である。イエメンでの同行者であったならば、その折アブ・ル・ファトフ師の名をそこで出しておいた方が、後段での訪問者の登場でそれらしく辻褄を合わせることが出来たはずである。主人公の定型がまだ定まてはいない段階のものと言える。

形式としてみるとサジュウの配慮は全体的にしてある。しかし詩句の挿入は全く欠いてしまった。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では最後の 40 番目に、Sofya 版では最後から 2 番目の第 32 話に収録されており、Paris 版では欠如している。

第33話 フルワーンのマカーマ アラブ版浮世風呂・浮き世床 さんざんな被害

(原文 M. 'Abduh pp. 171-175)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、以下のような話をした：私はハッジ（メッカ巡礼）を終えて帰途に就いた、同じく巡礼行を終えて帰路に着く人々と一緒にであった。そしてフルワーン¹⁾に至った時、留まることにした、同行してそこで滞在する人たちと共に。私は召使いに命じた、「髪の毛が大分伸びてしまったし、体も少々汚れてきたようだ。私たちのためにひとつ、そこに入浴できるようなハンマーム（公衆浴場）と、散髪してもらえる床屋（hajjām）を探して来なさい！但しハンマームは場所がたっぷりと広く、窪みも清潔に保たれていて、空気も（淀んでおらず）爽やかで、湯加減が宜しい所をな！また床屋だが、手の動きが軽やかで、髭剃り刃は鋭く、作業着は清潔で、言葉少なな男が宜しい！」²⁾。

召使いは出て行ったが長い時間がかかった、そして遅くに帰ってきた。そして言うには、「主人様が指示されました通りの所を漸くのこと選んで来ました」。そこで我々はハンマームの方へと道を取った。さてハンマームに着いてはみたが、番台に誰も人影がないではないか。私はかまわず中へ入った³⁾。（裸になり、湯船に向かうと）三助がすぐ後から入ってきた。三助はティーン（泥石鹸）の一部を私の額に塗り付け、それからそのティーンを頭の上に置いたのだ。そうしておいてから席を立てて出て行った。すると入れ替わりに、別の三助がやって来て、私の体を擦り始めた、その荒さと言ったら肌が裂けて骨が剥き出るほどの荒っぽさであった。次に私の体を揉み始めたのだが、その無骨さと言ったら、あらゆる関節を砕くほどの粗雑さであった。それも口笛を吹きながらやっているために唾液を辺りに振り撒いている有様であった。それから私の頭を起こして洗いにかけた。水口に頭を持って行った時であった⁴⁾。

最初の三助が間髪をいれずに飛び込んできたのである。あろうことか挨拶代わりに相手の三助の首筋をいきなり拳で殴りかかった。相手の男の犬歯^{がくがく}が譁々となった⁵⁾。そして叫ぶには、「このごろつきめ、何をしようってんだ。この頭は俺のもんだ！」。すると二番目が一番目に結んだ指（=拳）でやり返した。その顔の覆い^{ヒジャブ}を裂いた（=その面目を吹っ飛ばした）。そして言うには、「何を言うか、見てしろ、この頭は現に俺のものだし、俺が扱っており、俺の手の中にあるじゃねーか！」⁶⁾。

こうして後に続くは（殴り合いの）喧嘩であって、とことんやり合ってへとへとになった。で、結局喧嘩の始末の仲裁を求めてハンマームの店主にまで訴え出たのである。主人を前に最初の三助が訴え出るには、「俺はこの人の頭の所有者だがね、この人の額に泥を塗り付け、頭の上に土を載せといはずでっせ」。すると二番目の三助が「てやんでえ、俺がこの頭の所有者だ、何故かと言

1) フルワーン Hulwān：エジプトのカイロ郊外にも古く避暑地とされた同名の地域があるが、此処ではイラクのバグダードを越えた、東方サワード地方の境、ジバル（山岳地帯）に入る所にある。

2) 最初の段落のサジュウ（脚韻技法）の語は2句連続で下線の順に：qafala / nazala, tawīlan / qalīlan, nadkhulu-hu / nasta'milu-hu, ruq'ati / buq'ati, hawā'i / mā'i。

3) ここから一人称複数形から単数形に代わる。「我々」から「私」に代わる。一緒に来ていた仲間のことは以降言及されない。以下の事件の内容から帰ってしまったか、別のハンマーム店に行ったか、定かでない。

4) この段落のサジュウ（脚韻技法）の語は2句連続で下線の順に：maliyyan / baṭiyyan, rasamta / samta, yaghṣilu-hu / yursilu-hu。2番目と3番目の間には10行近く、サジュウは観られないが、形容詞（fa'īl）+名詞の見事な同形語の連続がある。

5) 譁々となった qa'qa'a：擬音動詞で、元来はカアカアに近いのであろうが、民族によりその響き方の理解は異なる。揺する音・揺れる音及び擦れる音・震える音というから、わが国ではガタガタ、ガラガラ、ガチャガチャなどに相当しよう。

6) この段落のサジュウの語は2句連続で下線の順に：② anyāba-hu / ④ hijāba-hu、① maḍmūmatin / ③ majmū'atin。（順入れ替え、○数字順）。

うにこの人の垢擦りの痛い目に合わせたのも自分だし、関節を痛めつけたのもこの俺様だ！」。こう聞いたハンマームの店主がおもむろに言い渡すには、「ならばその頭の所有者を連れて来なさい。その人に直接問ひ質^{たづね}したいから。こっちかそれともそっちか、頭の所有者はどちらかな？」。そこで二人して私の所にやって来て懇願するには、「お願いでござーやす、あんたの証言が必要でござんす、是非その役を引き受けなすって！」。そこで私は仕方なく立ち上がって、ハンマームの持ち主の所まで歩み出た、そうせずと拒んでもどちらでも良かったのであるが⁷⁾。

主人が尋ねてくるには、「お客さん本当の所以外のことは仰らないでください、真実以外のことは証言されないのでください。その御頭はこの二人のどちらが所有者なのでござりましょう？」。出番が回ってきたので私は、「ヤー・アーファーカ・ッラー（アッラーがあなたを癒しますように）！これは私の頭であり、道中ずっと一緒でしたし、私と一緒に「太古のお家」⁸⁾を巡って来ましたよ。ですからこの頭は私のものに間違いは御座いません」と言った。すると主人は（諦めた口調で）、「お黙りなさい、無駄口を叩く者よ」。そう言うってから喧嘩相手の一人の方を向いて、「これお前、何時から相手と諍いをやっておったんだ、この頭を巡って？こんな些細な一件で煩わされることはわしゃ適^{かな}わん、（責め苦は）アッラーの呪いとその地獄の業火に任せることとしようぞ。この頭は無かつたものと思いなさい。我々はこの雄山羊（tays=手入れの無い髭むじゃな男）を一切見たことも無かつたことにしようではないか」と結論付けた⁹⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：私は恥をかかせられた状態でその場をすぐすと引き下がりざるを得なかった、（この後どんなことをされるかとの）恐怖の衣を身に付けながら。このハンマームを即刻立ち退かねばとの念に駆られて。こうして（滞在先に戻ると）例の召使いを呼びつけ怒鳴りつけ喚き散らした¹⁰⁾。頭ごなしにギブス（石膏）¹¹⁾を付き捏ねるように小突き回して（鬱憤を晴らし）たのだ¹²⁾。

憂さを晴らしたところで別の召使いを呼び出して、言い渡した、「良いか、お前は行って床屋を連れて来るのだぞ。この（モジャモジャとした伸び放題の髭の）重苦しさを取り除いてくれる床屋をな！」。命ぜられた召使いは（早速出掛け）一人の男を連れてきた、体つきがなかなか柔軟^{やわらか}そう、体裁も惚れ惚れする、石像¹³⁾を想わせるような優男^{やさおとこ}であった。すぐに彼に頼むことにした。この男は入ってくると、挨拶をして言った、「アッサラーム・アライカ（あなたに平安ありますよう）！どちらのご出身でありましょう、あなた様は？」。私が「クम्म¹⁴⁾の出身ですよ」と答え、彼は、「ハッヤーカッラ（神があなたを栄え増しますよう）！豊かさと安らぎの地のご出身なんですね。

7) この段落のサジュウは2句連続で下線の順に：‘ayyā / baqiyā, jabīna-hu / fīna-hu, hāmīla-hu / mafāšīla-hu, as’alu-hu / am la-hu, ataytu / abaytu。

8) 「太古のお家」 al-Bayt al-‘Atīq；「カーバ正殿」のこと。人間の祖アダムのため天から下ろされた最初の建造物で、神を礼拝するために建てられたとムスリムは信じている。『クルアーン』第22章29節に「そして「太古のお家 al-Bayt al-‘Atīq」を巡周せしめよ」とある。

9) この段落のサジュウの語は下線部順に：šidqi / haqqi, tarīqi / ‘atīqi, (lī / fuḍūlī ?), nāsi / ra’si, khaṭari-hi / saqari-hi, laysa / taysa。

10) 怒鳴りつけ喚き散らした ‘aḍḍi wa-maṣṣi；直訳は「彼の父の悪口を言い、彼の母の悪口を言って罵った」。どこの世界も同じだが、罵りの対象は両親であり、特に母親を罵ることは、相手にとって最大の侮辱であった。わが国でも「お前の父さん出鱈目、お前の母さん…」と言うのと同じ。

11) ギブス jiss；西欧語 gypsum（石膏）は類義語 jibs に由来する。古来アラブはギブスを主として建築の外装に用いていた。水に溶いてすぐ固まるところから、医療用の石膏として用いられ、西欧に入って行った。ギブスの多量に産する所はジャッバーサ jabbāsa と言われ、工場があって、白一色に染まり、遠望からも目立った。訳者も南イエメンの東方にあるジャッバーサで何だろうと思って訪ねて行き、髪の毛まで真っ白になった経験がある。

12) この段落のサジュウの語は下線の順に：khajilan / wajilan / ‘ajilan, maṣṣi / jiṣṣi。

13) 石像 dumya；複数形は dumā。主として女性の人型を模った偶像または人形。以下説明を要するので、解説に回す。

14) クम्म Qumm；Qim と綴られる方が一般である。ハマダーンの東方、交通の要衝。シーア派の信徒にとっては、メシエッドに次ぐ聖地となっている。

スンニーと学徒¹⁵⁾の町ですね。私もラマダーンの断食月に町を代表するジャーミウ（金曜モスク）に参列したことが御座います。中は多くのランプが輝いておりました。タラーウィーフ（tarāwīḥ 夜の勤行）に加わったのです¹⁶⁾。ところがナイル川の氾濫があって、気づくのが遅れたのですよ。水がランプ類の所まで達してしまっ（て真っ暗になりました）た。だけれど有難いことにアッラーが私のために一足の靴を用意してくださいましてね。まだ緑（＝新鮮）の中に着用に及びました。その袖（＝側面）には刺繍が凝らしてはありませんでした。幼子とその母親の許に戻った（気分でした）、もっともそれはアタマ（宵）の礼拝¹⁷⁾をした後のことでありましたが。日影が等身大の時でした¹⁸⁾。

お客様は巡礼を果たされたそうですが、決められた通りの儀礼行為をなさいましたか？（私の時は）巡礼団の中から「奇跡だ、奇跡が起きたぞ！」との叫びが上がりました。その声にマナーラ（モスクの尖塔）の方を見遣ると、だれもその光景を目にした者は、そのものすごい光は戦さを物語っているものだということが容易に理解出来ました。また食べ物ハリーサ¹⁹⁾（肉入りバター粥）もまた同様な展開を見せていました。その時悟ったものです、すべて世のことはアッラーの予め決定され、その定めに従うものなのだ、と²⁰⁾。

ところでお客様のその（髪）むさ苦しさは何時まで耐えられますか、今日にしますか、明日にしますか、土曜日、それとも日曜まで？私の方は延ばさなくても宜しいんですが、さて、この無茶苦茶な無駄話はどうしたことでしょうね？でもお分かりですね、（剃刀といえば）学者ムバッラド²¹⁾は文法学においては鋭い剃刀であったことは。でもお客様は大衆の贅言に構う必要はありません。「私の能力が実行する前にある」²²⁾とお認め戴ければ、お客様の頭（の髪）を刈って差し上げたいと思いますが。今から始めたいと思いますが如何ですか？」²³⁾。

15) スンニーと学徒 *sunna wa-l-jamā'a*: クツムの町の住民はすべてシーア派の信奉者であるから、わざわざ「スンニー」派と言って相手の注意を引く。またシーア派学者だけでなく、哲学者、ムウタジラ神学者などのセクトが拠点となっているところから「学徒」の町といったのであろう。これから「スンニーと学徒」、逆に言えばそれに異を唱えるシーア派と正統派に異を唱える諸学派を皮肉っての大混乱が、この床屋によって引き起こされてゆく。

16) この辺りから床屋の気が触れていることが如実になる。文意が繋がらない冗長な話が続く。滑稽さ、気取り、誤用などを生かした多弁な技法。道化などがよく採る表現法で、修辭学ではマラブロピズム *malapropism* と言われている。アラブではハザヤーン *hadhayān*（妄言）技法と言われている。

17) アタマ（‘atama 宵）の礼拝：日に5回の礼拝のうち、日没の礼拝後、おおよそ2時間後の「夜の礼拝」、これを現代ではイシャー‘ishā’の礼拝と言って、固定化した。しかしアラブ世界、特に遊牧民の間では、アタマ‘atama は、我が国では夜を「五更」と分けていたように、三分してその最初の名称「夜の最初の三分の一」の意味であったし、その頃の礼拝を「アタマの礼拝」と呼んでいた。そしてその「アタマの礼拝」と呼ぶ風が残存していたことは、この著者にまで至っていたことがこの記述によって明らかになった。アタマ‘atama について詳しくは拙稿「夜 そのアラブの表象（中）第4節「夜の最初の三分の一」の概念」、『アッサラーム』誌第22号（1981年6月）75頁以降を参照されたい。

18) この段落のサジュウは下線の順に：binyati / hilyati / dumiati、(ni‘mati / rafāhati / jamā‘ati)、maṣābīḥu / tarāwīḥu、nīli / qanādīli、kummi-hi / ummi-hi。

19) ハリーサ *harīsa*：「煮肉入りシチュー」のこと。「つき砕いたもの」が直義で、精練小麦粉と煮炊きした肉と肉汁とでよく「つき砕き」、混ぜ合わせシチューにしたもの。栄養満点で病人や疲れた旅人の jābir（活力蘇生、体力回復）に最適なものと言われた。それ故愛称や符牒でハリーサのことをアブー・ジャービル *Abū Jābir* と言われる。「活力蘇生の父」と親しまれている。この愛称は「小麦」自体が「治力の素」と言われることから *khubz*（パン）のこととする説もある。以降の37話、42話にも登場。

20) この段落のサジュウは2句連続で下線の順に：wajaba / ‘ajaba、manārati / nuzzārati、(qadari / ḍajari ? ḍajari は次段落冒頭文中に)。

21) ムバッラド *Mubarrad*；*Abū al-‘Abbās Muḥammad ibn al-Mubarrad* (286/899 頃没)。文法家、言語学者、バスラで生まれ、その地の指導的学者であった。生地を出て首都バグダードでバスラ派言語学の大家として、一方のクーファ学派と論争して言語学の水準を引き上げた。特にサアラブ *Tha‘lab* との論争が有名。著書の中でアル・カーミル *al-Kāmil*（完書）は文法、言辭、詩集、散文・韻文までの用語用法を集めた全書で、それ以降の知的世界に影響力を強めた。

22) 「私の能力が実行する前にある」：イスラム神学派の論争で「人間の自由意思」の決定能力 (*istiṭā’a*) は何時存在するのか、議論が分かれた。決定能力について、正統派はそれ以前であるとした。一方自由意思を尊重するアシュアリー派は、その決定能力は常に現存する、と主張して対立した。気違い床屋は、この神学上の論争点の正統派の主張をひょんな時に言葉とした。

23) この段落のサジュウの語は下線の順に：ghadu / aḥadu、uṭīlu / qīlu。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：私は彼の戯言の中にも論の立つのを見て当惑していた。彼と同席するのが長引くのを恐れた。そこで答えた、「明日にしてもらいましょう、イン・シャア・ッラー（神が望みますれば）！」。（こうして床屋に引き下がって貰ったわけであったが、）居合わせた人々にこの床屋について尋ねてみた。すると「あの床屋はアレクサンドリア出身で、この土地の水が合わないようで、時々狂気に侵されるのですよ。そしてこうして昼日中じゅう御覧のように戯言を言い散らかしているのですよ、もっとも良い点も一杯あるのですがね」との返事。私も「そういえば以前にその人のことを聞いたことがあります。あの人の狂気については残念ですね」と相槌を打った²⁴⁾。そして次のように詠って締めくくった：

我アッラーに一つの捧げたき義あり

anā u‘tī llāha ‘ahdan

それ誓いにして決して結び目解かぬもの

muhkaman fī n-nadhri ‘aqdan

我金輪際頭髪の手入れ他人にさせることはすまい、と

lā hālaqtu r-ra’sa mā

喩え如何なる面倒や不自由が立ちはだかるうとも

‘ishtu wa-law lāqaytu jahdan

(ラマル ramal 調 dāliyya d 脚韻詩 -dan < -dā)

第33話 フルワーンのマカーマ 完

第33話 訳者解説

我が国の浮世風呂と浮世床を扱った断章と捉えたい。いずれも髪の手入れであり、浮世風呂では洗髪が、浮世床では散髪が扱われる。浮世風呂であるハンマーム（公衆浴場）を扱った前段はまことに滑稽で小気味よく展開してゆく、これは発想も面白くマカーマ篇としては相当のところまで行けるのかな、と期待させた。ところが後半の浮世床においては、饒舌な床屋を招いての段になり床屋の話自体が支離滅裂で、何でこの文脈の中にナイル河が出てきたり、少年が出てきたりするの、夜の礼拝なのに日影が等分になったり……、後で気付くことであるが、それまでは気違いぶりに振り回される。この床屋が誰でどんな人物なのか、最後まで読み通さないと分からない。床屋が立ち去った後、周りの人から、「この土地に来て水と風土が合わず気が触れた、アレキサンドリア出身の人ですよ」と説明される。語り手イーサーは思い当たって、アブー・ファトフ師であったことに気付くことになる。単なる「水と風土が合わず気が触れた」のではなく、クムのあまりのシア派的な思想風土の「水と風土が合わず気が触れた」とも解し得る。床屋のハザヤーン（戯言＝マラプロピズム）のなかにも、宗教的で、神学的な「私の能力が実行する前にある」と心情的な吐露もあれば（第20話を参照）、鋭利な刃物であった学者ムバッラドなどを例に出すなど教養人の一面が浮き出て、気が触れた者とはいえ只者ではない、と語り手も当惑顔をして聞いていた様か思いやられる。しかしなんせ凶持持ちが凶器を持っているのであるから。

そうはいっても、前段と比して後段の浮世床の筋の出来は見劣りする。余りの牽強附会をせずと、アル・ハマザーニーぐらいだったらストーリー化は出来たはずだ。唐突にナイル河を「ナイル

24) この段落のサジュウの語は下線の順に：bayāni-hi / hadhayāni-hi、mā’u / sawdā’u。

川の氾濫があって、気づくのが遅れたのですよ。水がランプ類の所まで達してしまっ（て真っ暗になりまし）た」との記述を出したのも、単に下線の *nīli*、*qanādīli* のサジュウの韻合わせのためか、また子供にしても「幼子がその母親の許に戻った」と不明な文章を加えているのも、*kummi-hi*、*ummi-hi* の韻合わせのためであったのか。

年齢的に少なくとも初老であるはずのアブ・ル・ファトフ主人公像であるが、饒舌な床屋に想定させているのは良いとして、「体つきがなかなか柔軟^{やわ}そうで、体裁も惚れ惚れする、石像を想わせる程の優男^{やさおとこ}であった」と言うのには、変装などとは異なり、地が出るものなので領けない設定である。一方語り手イーサーは場面や状況が変わる時、3度顔を出して、筋の展開を引き締めて把握している構成が読み取れる。詩は盛り上がりと締めくくりの2か所に挿入されるのがスタイルであるが、本話では最後にお愛想程度に2詩行が記せられる。語り手イーサーの決意のほどを述べたものである。但しマカーマの筋書としては、主人公アブ・ル・ファトフが詠じて終わるのが普通である。

注13で触れた「石像」について述べておこう。原語は単数形 *dumya*、複数形 *dumā* である。主として女性の人型を模った^{かたど}偶像または人形。大理石、輝石、高価なものは象牙製で、色は白色、黄色、多くは√*d m m*（血）から由来するので赤色であった。主として女の子や女性の人形として用いられたが、また彫像としても精巧に製せられた。一方では偶像神としてひそかに崇められてもいた。ワイン飲用と同様、イスラムの規制が緩い時代には広い範囲で半ば公然化していた。さらには、ベドウィンはある特定の女が好きになると街中に出かけ、石像も作っている石屋でその女性の面影の似た彫像を買い求め、これを持つことによって慰められたと言う。以下は夫が妻の求めに応じない性生活を法廷に訴えられ、夫の弁明である。石像 *dumya* はここでは代理物^{しろもの}と訳しておいた：

かくなる我も以前には恋や人生観において

あのおズラ族の恋に生きる者達と共有せし者 (‘*udhra*)

されど時運利^{とき}あらずして代理物^{しろもの}に逃れる

貞節誓^{まこと}いし恋人同士が避け逃れる術^{すべ}の如くに (*ḥidhra*)

我が畑を避けんとするはそを望まぬに非ず

貧しき故の種の発芽 恐れる窮余の策のためなり (*badhra*)

1行目のウズラ族 *Banū ‘Udhra* とは、イエメンにいた遊牧部族で、感情に繊細で知られ、一旦恋に落ちるとそれが果たされるまで続ける。純粹に独りの女性を愛するプラトニックラブの典型と目される。3行目の畑 *harth* とは、夫婦間においては「妻は夫の畑である。大いに耕しなさい」とする性生活も大事であるとするイスラムの教え。「あなた達の女性達はあなた達にとっては畑であります。ですから望むままにあなた達の畑に赴きなさい」(『クルアーン』第2章223節)。同じく3行目の「種の発芽」*badhra* とは、「畑」の文脈で言うと、そのまま畑に種を蒔いてしまうと発芽して、子種となってしまう。余りの貧しさゆえに子供を作れない。それ故畑に種を蒔けず、畑以外の所で種まきをせざるを得ない。そういう状況を言っている。(ハリリー第45話拙訳) なおこの *dumya* について注釈者 *Sharīshī* (iv 174) によれば、ここでは代理物^{しろもの}と訳した石像 *dumya* は「それで自慰行為に及んだこともあった」、と述べている。

本マカーマの異同であるが、*Fatih* 版では第29話に、*Sofya* 版では第7話に収録されている。*Paris* 版では欠如する。

第34話 ナヒーダ（フレッシュバター）のマカーマ 上等なバターとパン、焼き肉で持て成しを受けるといきや

(原文 M. 'Abduh pp. 176-180)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、以下のような話しをした：私はキャラバンの中にあって、旅の途中ではあったが、何人かの仲間とかたまって一団から逸れて、とある遊牧民のテントの前庭に邪魔したことがあった。テントの住人からキラー¹⁾(qirā 歓待・持て成し)を受けようと思って。テントの外の我々を出迎えたのは太っちょの小柄な男であった。彼が誰何するには、「何方でしょう、あなた方は？」。我々は答えた、「お客です、この三日間ろくな食物を食べておりませんので」²⁾。

主人は咳払いを一つしてから³⁾、次のように声を掛けてきた、「如何です御若い衆、ナヒーダ⁴⁾(nahīda 取り立てのフレッシュバター)などは、一群の羊(の乳)から攪拌した禿げ頭⁵⁾ほどもある大きなやつですが？それを広い浅鉢に載せて。鉢の周りにはアジュワ(‘ajwa 熟れデーツ)をテンコ盛りにして飾ったやつなどは、ハイバル産⁶⁾の一本の大きな巨木の枝にぶら下がっていた一房のデーツですよ。(粒、も大きくて、)一粒で口の中が一杯になり、ヒムス⁶⁾(khims 五日毎給水)の空腹者の一団を満足させるでしょう、粒の中の歯(dīrs = 種)は抜いてありますよ、その種は小鳥の舌のような形なんです、それをナヒーダ(フレッシュバター)の中に浸けて掬って食べるのですよ。ハルムとラブル⁷⁾を食草としているジラード⁸⁾(jilād 乳用ラクダ)から搾ったばかりのミルクを湛えた大鉢といっしょにですね。如何です御若い衆、食欲が湧きませんか？」。そこで我々一同は「そうですともワッラーヒ(神に誓って)、食欲が湧いておりますとも！」と答えた⁹⁾。

- 1) キラー qirā:「歓待・持て成し」。アラブのベドウィンは、寛大な者ほど好んでキラーを行った。砂漠の民の一つのモラルであった。夜間になるとテント前、本話で言うフィナーウ(finā' 前庭)で、nār al-qirā(持て成しの火)を焚いて、旅人にどうぞ、と誘いかける印でもあった。語り手たちは、その美風に頼ったのである。しかしキャラバンのような大所帯では無理なので、内々に何人かで示し合わせて出かけたわけである。
- 2) 冒頭段落のここまではサジュウへの配慮は厳密には見受けられない。以下は緩く受け取ればの例であり、下線部順に: (khaymat / huzuqqat ?), (adyāf / 'adūf ?)
- 3) 咳払いを一つしてから fa-tanahnaha: 咳払い (nahīh, tanahnah) はわざわざするものであり、人を軽蔑する・見下げる場合や何かの合図として用いられる。ここでは後者であって、テントの奥の者への合図である。普通の咳は咽喉の渇き(hirra)などより生ずるが、kahḥa とか sa'ala とか言う。この「咳払い」の咳はそれよりも声を大きく出して、わざとらしくさも加わる。
- 4) ナヒーダ nahīda:「取り立てのフレッシュバター」。アラブは牧畜民らしく、家畜利用にも長けていた。ここでは「乳」利用の一端が開示される。バターは普通にはズブダ zubda と言われるが、搾りたての新鮮な乳を皮袋に入れ、攪拌して浮き出たフレッシュバター、本話で言う「禿げ頭ほどもあるやつ」のことをナヒーダと言うのである。語根√n h d からして「丸く膨らんだ」であり、<雌の、女性の乳房>からの連想から由来する。
- 5) ハイバル産 khaybar: アラビア半島のメディナの北方54マイル、ラクダの足で4日行程にある城塞村落で、ユダヤ人が開拓したが、628年イスラム化された。7つの城塞と農園、それにデーツ果樹園があった。気候風土に合ったのか、半島西北部はヒジャーズと呼ばれ、どこも美味なデーツを産出したが、とりわけこのハイバル産のデーツは中東全域に知れ渡った銘柄であった。
- 6) ヒムス khims: 数字 khamṣa (5) の変化形で、順番、回転、繰り返しなどを表す語形態で、「五日毎給水」を表す。ラクダの給水周期、これをジムウ zim' と言うのであるが、水の渇れの強いラクダは毎日水を飲む必要はなく、その分水場から遠くまで牧場を広げることが出来る。ヒムスは水場で給水した当日を一日目、水場に帰ってきて次の給水する日を、別の一日と算定するので、中三日において「五日目」とするわけである。このラクダの給水周期については、拙著『砂漠の文化』第2章遊牧民の日常生活、2節日常生活のサイクル、一日をはみ出すサイクル、給水周期、給水周期の変更の項などを参照。
- 7) ハルムとラブル harm, rabl: 共に塩辛く固い葉の植物で、他の動物は見向きもしないが、ラクダは食草のハムド(hamd ラクダの肉・パン)として好物とする。ラブルの方は、炎暑が終わり、夜が冷涼となる晩夏、水も降るわけではないのに、幹や枝を割って葉が出てくると言われている。多肉植物 Euphorbia ammak, または E. cactus の仲間といわれる。
- 8) ジラード jilād:「乳用ラクダ」。乳用ラクダの総称はハループ halūb。ジラードとは元来ジルド jild (皮)を原義として、「皮のように強靱な者」の意味であり、転じて牧草が少ない逆境にも拘らず強靱に「乳を余るほどに出すラクダ」の意味を獲得した。牧民観の反映を観ることが出来る。以下にミルク、及び乳食の料理が展開される。
- 9) ここまでの段落のサジュウへの配慮は一か所のみ、それも不十分。下線の順に: khims / dīrs。

テントの主は高笑いをした。そして「あなた方の叔父(=自分)だとて、これは好みですからな」と言ってから、「それでは如何です御若い衆、ダルマク¹⁰⁾(darmak 小麦粉料理)などは、白く製鍊され溶けた銀の塊のようなやつを、ミモザ¹¹⁾の風味漂う丸型革盆¹²⁾に載せた。その白い製粉に飛びつくのはあなた方の中の、しなやかな体をした若者、身のこなしが器用で軽やかな。彼は力むことも急ぎ過ぎもせず粉を捏ね回すのです。練り粉をよく捏ねた後しばらく寝かせておきます。暫くしてからサマル¹³⁾(samār 薄乳)を入れるか、マズク¹⁴⁾(madhq 脱脂乳)を入れて、十分に掻き混ぜます。程よい力で、その粉を小刻みに揉んだり、混ぜ合わせたり、散らしたちしながら、捏ね回すのです。その後仕上げに入って仕上がったところで止めて、サイダーウ¹⁵⁾(ṣaydā' 釜戸)の一角に持って行き、そこにそっと置きます¹⁶⁾。

パン生地が乾く前に膨らんで来たところを見計らって、ガダー¹⁷⁾(al-ghaḍā)の枯れ枝を集めて、火を燃やします。火の勢いが収まったならば、パン生地が焼けるに十分な火床を広げて伸ばします。そうしてからパン生地のところへ戻ってもう一度よく捏ねてから、平たくして行きます。そして熱い灰床の上に伸ばして、囲うようにします。パン生地が乾いて膨れてきたならば、その上にラドフ(radf 熱せられた小石)を適宜載せて、パンの裏表の温度が均等になるように配慮します。表裏のパンの表面が丸盆のようになるようマツラ(malla 熱い灰)で周りから覆います。そして膨れてきて破裂することになります。その破裂したパン皮はまるでリカーク(riqāq 薄皮パン)のよう、その赤い色はヒジャーズ地方¹⁸⁾のナツメヤシのブスル¹⁹⁾(若熟れデーツ)のよう、そうあの名で有名な品種ウンム・ジルザーン²⁰⁾(umm jirdhān)、或いはイズク・イブン・ターブ²¹⁾(idhq bni ṭāb)を思い起こさせますよね²²⁾。

- 10) ダルマク darmak:「小麦粉料理」女性形扱い。ペルシャから伝播したもので、ペルシャ語に関連した語彙に詳しいF. Steingassの亜英辞典によれば、darmaq とも言い、「白く製鍊された小麦粉。およびそれから製せられるパンなどの料理」とある(p. 360)。
- 11) ミモザ qaraz: ミモザ類のサント al-sant 種。花の香りがよく、その実や葉は好んで皮類の鞆に用いられる。これで鞆された皮は獣類の臭さは無くなり、代わりにそのミモザの芳香が漂う、一方では本話のように食欲を増す。
- 12) 革盆 sufra: 食事時、その上に料理が載せられる皮製の盆。盆と言っても平たい敷物で、ここでも hartiyya とわざわざ「丸型の、円形の」とある如く、丸い形に製せられており、直径30センチ大から1.5メートルほどの物まで、その場に応じて敷かれる。
- 13) サマル samār:「薄乳」。「乳を水で薄めたもの」、三分の一、半分、三分の二水で薄めたミルク、いろいろな用途に用いられる。「乳を水で薄める」動作のことはサマラ samara、とかサツマラ sammara とか言い表す。
- 14) マズク madhq:「脱脂乳」。M. 'Abduh の脚注ではマヒード makhiyd (脱脂乳)とされているが、「純粹乳」に対するもので、語根義からして「何か混ぜ物がある乳」、「混乳」であって混ぜ物の中には水も含まれる、そうした概念である。madhūq とも。
- 15) サイダーウ ṣaydā':「釜戸」。岩地や石の多い所、起伏にある土の大地の窪みや穴を利用して、その上に鍋 qidr など置き、煮炊きをする釜戸代わりにする。大きな石を三つ鼎立させて釜戸代わりにするものをウスフィッヤ uthfiyya といって、テント生活など、より平坦な大地ではよりポピュラーである。
- 16) ここまではサジュウの語への技法は2か所に配慮が見受けられる。下線の順に: raffun / khaffun、yarjufa-hu / yakhshifa-hu。
- 17) ガダー al-ghaḍā: 日本の檜の木に相当する固い材質で、炭用に適した木材で、^{燃やす}燐として火力が強く火持ちも良い。アル・ハリリー『マカーマート』5話では老師との別れの未練がいつまでも冷めやらず語り手が「私の心にガダーの木の燐を焚きつけながら」(拙訳I第5話186およびn. 47参照)。また第47話では本物のルビーかどうか試すために火にくべられる。その強力な火の材料としてガダーが選ばれている。そのガダーの火にくべてもルビーが本物ならば一切変わらないと言われる。
- 18) ヒジャーズ地方 al-Hijāz: アラビア半島西北部、メッカやメディナを擁するイスラム教徒にとっては重要な地域。イラクと並んでナツメヤシの名産地。先ほどのハイバルもヒジャーズ地方の一角を占める。
- 19) ブスル busr:「若熟れデーツ」。ナツメヤシの実の成長段階によって、様々な呼称を持っていた。ブスルは実が大きくなり、赤くなった段階、噛んだ当初は渋柿のような渋みを感じるが、その後はリンゴのような歯ざわりと食感がしてくる。黒く熟れてくると甘味が益すルタブ(ruṭab)と呼ばれる。
- 20) ウンム・ジルザーン(Umm Jirdhān):「砂ネズミの母」。甘い実は大きく、晩生種である。砂ネズミはこの実が好物で、実が熟して収穫される前に、木に登ったり、落したりして食にありつく。それ故この名がある。時期が来るとネズミ返しを設けねばならない。
- 21) イズク・イブン・ターブ 'Idhq ibn Ṭāb:「美味しい物の息子の房」。メディナ特産のナツメヤシとして有名。
- 22) ここまでに段落ではサジュウへの配慮は1か所のみ。下線の順に: shiqāqan / riqāqan。

それでダルマクが仕上がったらその上からですね、雪のように白い蜂蜜を降り掛けるのです、それも赤皮(dihān = 焦げたパン皮)の内部までも沁みこみ、このダルマクの髓が上にかかった蜂蜜をたっぷり吞み込むまでにね。そうした後であなたの方のところに運ばれて来るのです。そうすると皆さんはそれを一口ずつにしてゴクリと吞み込みなさる、ジュワイン²³⁾のように、またザンカル²⁴⁾のように。それを皆さんお望みでしょうな、御若い衆?」。我々誰もこの主人の食べ物の描写に首を伸ばして(=のめり込んで)いた、口中唾液を溢れさせては、舌舐めずりをして、それをゴクッと吞み込む^{てい}態であった。それだから一同言ったものである、「えーえ、ワッラーヒ(是非とも)頂きたいものです!」²⁵⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けて言った: テントの主人はまたも高笑いをしてから、「あなたの方の叔父だとしてワッラーヒ(誓って言うが)嫌いなわけはありませんね、こう相槌を打ってから次のように言うのであった、「如何です御若い衆、ナジュド²⁶⁾産の雌羊などは? 野生の高地²⁷⁾で、バラム草やナジュド・シーフ草、それにカイスーム草やハシーム²⁸⁾などを^は食み、ハミームを齧りとり、柔草カシース²⁸⁾で腹を満たしたやつなどは? 脳が多量にありましてな、また膜組織には(=首から尾にかけては)脂がよく乗っております。それを屠ります、イスラム法に則って何一つ非難されることも無く。そして大釜戸(waṭīs)の中に吊りさげます。それから焼き上げる訳です、焦げ過ぎてはいけないし、かといって火が十分通っていない生のままでもいいけないと按配しながら。そうしてから皆さんの許に運ばれてくるのです。表皮は裂け、中の脂肪が顕われ出ている羊肉が、周囲に薄パン²⁹⁾が配されたフワーン³⁰⁾(khuwān 円卓)に乗せられて。その薄パンたるや、広げられたエジプトリネン(qabāṭiyy<qubṭiyya) 或いは赤土で染色されたクーヒスターン³¹⁾の布地をおもわせる見事なもの! その食卓を囲むのはスィナーブ・ソース³²⁾と様々な季節の調味料の入った小瓶類。こうしてあなたの方の前に運ばれてくる、油分が滲み出て、脂肪分が溶け出している焼肉³³⁾が。こいつは如何ですか、お若い衆?」³⁴⁾。

23) ジュワイン Juwayn: 大食漢として、食客として、相手の財産を食いつぶすほど悪名が高かった。実在であったか不明。ジュワインはジュワーン(Juwān)の指小辞。この場合は軽蔑を表す。

24) ザンカル Zankal: この人物も実在であったか不明。ジュワインと共に連名で、「二大大食漢」の意味でアクーラーン(al-akūlān)と言われている。

25) ここまでの段落のサジュウへの配慮は欠如する。

26) ナジュド Najd: アラビア半島中央高原、現在の首都リヤドもその一部。

27) 高地 'ulwiyy: 注釈者 M. 'Abduh は地名と解し、'Aāliya 地方のニスバ(形容詞形)とする。アーリヤとはナジュドの西側ティハーマ地方に続く地方で、ナジュドでは牧草地として良好なところとして知られる」と述べている(p. 179)。

28) 今までの食草について: バラム草 baram、シーフ草 shīh、及びカイスーム草 qaysūm はいずれもヨモギ属。カイスーム草は芳香を放つ種とされる。ハシーム hashīm は干乾びて脆い植物、ハミーム hamīm は(jamīm とする説あり) 高木となる種で、枝の高い所の葉を羊は背伸びして、ヤギはよじ登って食草とする。カシース qasīs はホーキ草の一種で、柔地に生育し、その下にはカマエ(トリフ)茸を結実させる。

29) 薄パン ṣalā'iq: 単数形は ṣaliqa。薄く大きく円形のパン。今でも田舎では普通であるが、都会では焼肉カパーブなどの下に敷かれている。適量な大きさに千切って親指と人差指とで料理を挟んだり包んだりして口に入れる。

30) フワーン khuwān: 「円卓」。地面に直接座って食べる円卓。脚があれば真鍮などの鉤物製、床にそのまま敷く場合はナツメヤシや葎などの植物繊維製。

31) クーヒスターン Qūhistān: イラン東部アフガニスタンに接する地方。現在は南ホラーサーン州。首都ビルジャンドはクーヒスターンの都としても古くから交通の要衝であって、多くの異民族が混在している。中には7-8世紀の遠征の参加、及びアッバース朝の支配を逃れたアラブの末裔も存在する。クーヒスターンの土質である黄色味を帯びた赤色染色の布製品、絨毯は繊細さと高級感があって有名であった。著者アル・ハマザーニーもヘラートに落ち着く前に訪れているはずである。

32) スィナーブ・ソース ṣināb: 辛子(khārdal アブラナ属)液と干しブドウ(zabīb)液あるいはオリーブ液とを混合して製したソース。これを降りかけると味が深まり食欲が増す。

33) 焼肉 tahādur: 原義は「報復することなく血を流すこと」であり、意識しても「屠ったもの」ぐらいにしかならない。これを「焼肉」の意味にまでもって行くのは困難である。注釈者 M. 'Abduh (p. 180) もそれを言っており、どんな資料を参照してもこの意味には辿り着かないとしている。この例に限らないが、アル・ハマザーニーには造語的な誤用も、ペルシャ語からのか定かではない引用も、多い所が目立つ。

34) この長い段落もまたサジュウへの配慮は僅か下線部の3か所である。下線の順に: hashīma / ḥamīma、munashsharu / mumassaru、'araqan / maraqan。

我々一同口をそろえて言ったものである、「えーえ、ワッラーヒ（是非とも）頂きたいものです！」と。テントの主が言うには「あなた方の叔父だとしてこれには小躍りしますわい」。(我慢できなくなつて) 我々の一人が剣を持って彼に飛び掛かって、叫んだ、「我々が空き^す腹だということを好い気になって物笑いにする気だな？」と。しかし、折良く主人の娘が料理盆を我々の前に持って入って来た、その上には干乾びたパン屑(jilfa)と上等でもない油脂バター(huthāla)、それに有り合わせの食べ物(lawiyya)が乗っていた。この娘はそれでも我々を丁重に持て成してくれた。こうして(空腹を満たした後) このテントを後にした、娘には感謝しながら、主人には毒づきながら³⁵⁾。

第34話 ナヒーダ（フレッシュバター）のマカーマ 完

第34話 訳者解説

食欲をそそるテーマは誰もお気に入り。形式はいまだ完成品には程遠いが、内容に関しては第25話とマカーマ作風が同工異曲である。しかし著者の非凡振りが随所に見られる。当時の料理にどんなものであり、どのように作られるのか、どこが名産地なのかなど、料理法など具体的に指摘されていて、民俗資料として有益となろう。しかも設定は砂漠のベドウィンの設定である。都市民との違いなど、焼き肉法、釜戸やパンの焼き方などで察しが付くところもある。著者がベドウィンにどれほど想定しての記述であったのか、興味が惹かれる。

持て成しの美風を持つ砂漠のベドウィンを頼って、空き^す腹をかかえてあるテントに転がり込む。テントの主人はこういう料理は如何かなと、ナヒーダ（フレッシュバター）と上等な蜂蜜入りパンであるダルマク、雌羊一頭の焼き肉を、またそれらに添える食べ物などは、と説明してゆく。一品ずつの微に入った具体的描写と語りのうまさに、客は食欲は増すばかり、この辺りの描写は巧みである、「我々誰もこの主人の食べ物の描写に首を伸ばしていた、口中唾液を溢れさせては、それをゴクツと呑み込む^{てい}態であった。それだから一同言ったものである、「えーえ、ワッラーヒ（是非とも）頂きたいものです！」。それらで持て成しを受けると期待して待っていたが、あい変わらず何ももたらされずに、主人は楽しむ風に次の料理の説明に入っていくとする。さらに続けるとしたら、順序としては肉料理がメインなので、デザートであるハラーワ（甘い物、菓子、果物）ということになろう。

空腹は怒りをさらに激しくするのは、イスラム世界にあってラマダーン（断食月）中の午後の断食者を観察すれば分かる。ここでもいやがうえにも増された空き^す腹に、堪りかねた客人仲間の一人が、斬りつけんばかりに押取り刀で主人に近寄る。とそこにタイミングよく娘が食べ物の有り合わせ、残り物を盆に載せて、中に割って入る。こうした展開にはなにやら奥で聞き耳を立てて、客と父親との対話を聞いていた娘もその経過を楽しんでいた風が窺える。

歴史が新しくなるほど、都市民が文明を作り新たな文化の創造に向かったために、旧態然としたベドウィン及び彼等の価値観は、相対的に低く、劣悪に見られてゆく。都市の中で育まれた民話や言い伝えなどでは、単なる悪党や盗賊と描かれることが多くなる。『千一夜物語』の中の物語に見られるベドウィンはそのような連中ばかりである。むしろ蔑視観すら存在する。ペルシャ人である著者は「持て成しの美風」で知られるアラブのベドウィンを逆手にとって揶揄している風にも見られる。ベドウィンは、物質に恵まれないだけに、無形の言葉だけの話芸には都会人よりは長けてい

35) 最終段落にはサジュウの語は下線部順に：(hāmīdīna / dhāmmīna?)。

た。そんな点も皮肉なモチーフに入っているのであろう。

さんざん美味しそうな料理を聞かされて、料理そのものが出てこないで客を焦らすモチーフは、傑作とされる第22話「マディーラのマカーマ」にも見られる。ぜひ自宅にと食事に招かれ、主人と同伴して行くのだが、家に至るまでの住宅街の、家に着いてからの家具調度品の、奥方の、食器などのいかに優れているかをうんざり聞かされる。本話では、食事メニューの一品ずつ三品でまだ出されない見せかけの饗宴が終わり、最後に体裁だけの食事が出てくる設定である。こうしたモチーフは大きく「見せかけの持て成し」のジャンルに入ろう。『アラビアン・ナイト』には、後に世界的に知られ「バルマク家の饗宴」*Barmecide feast* として、そのモチーフの名称になっているほど、アラブ・イスラーム世界の問題をさらっていた話芸でもあったわけである。平凡社の東洋文庫版では第33夜、筆者のペイルート版では第42夜になっている。空腹な床屋がある邸に入り込み、その主人（バルマク家の主人）に接待を受ける。着座した二人の前に食卓があり、その上に料理が運ばれてくると、主人が客に勧めながらその料理の説明をしてゆく。すべて主人がリードし、客は促されて口へ運び、相槌を打つ形で進行する。驚くことにその展開は実際には料理の現物は運ばれてきているわけではない。主客が食べ合うジェスチャーで進行する「見せかけの持て成し」が展開されている。この件については筆者は既に扱ったエッセイがあるので参照されたい。「アラブ・イスラーム世界の饗宴3 デザートとカタール（前篇）」*VESTA* 66号（2007年5月）pp. 56-61。

マカーマの形式の方は、いまだ定型の様式は取れていない。主人公が不在である。最後の別れ際辺りで暗示にせよ、テントの主人が実はアブ・ル・ファトフ師であった、と正体を明かす言及をしておけば、幾らかは救われよう。主人公がこの「見せかけの持て成し」を仕掛けたことになり、まさに騙りを語ることになり、筋の集中性は増すことになる。また注で記したように文体とされる押韻散文サジュウ体がほとんど忘れ去られており、時折思い出した程度にしか技法の労を取っていない。さらに盛り上がりと締めくくりに設定されるはずの詩行の挿入への配慮も全く欠いている。

本マカーマの異同であるが、*Fatih* 版では第39話に、*Sofya* 版では第31話に収録されている。*Paris* 版では欠如する。

第 35 話 イブリース（悪魔）のマカーマ 詩人に憑くジンとは、創作なのか剽窃なのか

(原文 M. 'Abduh pp. 181-185)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、以下のような話しをした：私は自分の所有になる何頭かのラクダを迷わせてしまった。仕方なく探しに出かけた。すると緑豊かなワーディー（涸れ河）に出くわした。そこには驚くことに、水が流れる川もあれば、高い樹木もあり、果樹の熟れて実を露わにして、花々も咲き乱れ、開けて伸びる平野もあるではないか。視線を移すと一人の老人が座っているのが見えた。このような状況下で、そのような人物が一人ボツンといること自体に私は驚きの目を見張った。しかし老人が話しかけてくるには、「怖がらなくても宜しい」と機先を制した。私も彼にサラーム（平安を）の挨拶を返した。すると老人は私に座るよう命じたので、それに従った¹⁾。

老人は私の事情を尋ねてきたので、経緯^{いきさつ}を話した。老人が言うには、「あなたは導き人を探し当てましたよ、迷いラクダ²⁾を見つけたも同然じゃ。そこで何かアラブの詩を詠じて貰えまいか?」。私は「いいですとも!」と答えて、イムルウ・ル・カイス³⁾、ウバイド⁴⁾、ラビード⁵⁾、そしてタラファ⁶⁾の詩を朗詠したものである。しかしそのどれも彼を喜ばせた風には見えなかった。そして彼が申し出るには、「わしの自作の詩を詠って聞かせようか?」。「イーヒ (ihī ええ是非とも)!」⁷⁾と答えると、老人は詩を朗誦し始めた⁸⁾：

仲間たち離れ去りぬ もし強制せば去ること無かりしものを

bāna l-khalītu wa-law ṭawwa‘tu mā bānā

されどラクダの繋ぎ綱断ち切られたり 心繋ぐ^{きずな}絆もまた

wa-qaṭṭa‘ū min ḥibālī l-waṣli aqrānā

(バスイート basīt 調 nūniyya n 脚韻詩 -nā)

この調子でカスィーダ（長詩）すべてを詠い終わった。すかさず私は声を荒げて言った、「ご老人、そのカスィーダ詩はジャリール⁹⁾の物ではありませんか? 小さな子供でも暗記していますし、女性達でも知っていますよ。テントの中にも入っていますし、集会でも行き交っていますよ」。老人は遮って言った。「ではこの詩は止めにしよう。アブー・ヌワース¹⁰⁾の詩を知っているのならば、わしに

- 1) 冒頭段落のサジュウ技法への配慮は見られない。代わりに二語の対韻を作り、前接語に af‘alun 形で統一した工夫が見られる。
- 2) 迷いラクダ dālla: 冒頭「ラクダ」を迷わせてしまったのラクダは ibil (複数ラクダの総称) が用いられている。ここの「迷いラクダ」は単数形であり、複数は dawāllin である。齟齬が見られる。ラクダの単数は雄ならば jamal、雌ならば nāqa、性を問わない単数のラクダならば ba‘īr と言い、数の一致を顧みなければならない。後でわかるように迷いラクダは複数である。
- 3) イムルウ・ル・カイス Imru‘ al-Qays: アラビア文学史における最古の詩人、キンダ族の王子で、父王から勘当されてならず者集団に混じって気ままにバガボンド生活を送っていた。しかし父が殺された報に接し、有名な言「今日は酒、明日は再興」と宣言して、翌日から父の仇討とキンダ王国の再興を謀ってその協力者を求める。はるばるビザンチンまで出かけるが、帰路死亡。詩は奔放な性格そのまま女性との愛を詠い、自然現象や動物描写が巧みであった。
- 4) ウバイド ‘Ubayd: アビード ‘Abīd と読まれる方が多い。ジャーヒリヤの時代の大詩人アビード・イブン・アブラスのこと。その詩行の一節が黒地に金糸で刺繍されてカアバ神殿の外壁から吊るされた大詩人である。
- 5) ラビード Labīd ibn Rabī‘a: 同じくジャーヒリヤの時代の大詩人であった。宗教や倫理観を盛り込んだこの詩人はムハンマドの説くイスラム教に賛同して、以降詩作を断念。
- 6) タラファ Ṭarafa ibn al-‘Abd: 第 1 話注 15 を参照。
- 7) イーヒ (ihī ええ是非とも): 促し言葉、催促言葉のイーヒの表現法については第 32 話注 8 を参照。
- 8) この段落のサジュウの語の配慮は下線部一か所のみ、順に: dāllata-ka / dāllata-ka。
- 9) ジャリール Jarīr: 既出。第 1 話注 19、第 7 話注 3 を参照。
- 10) アブー・ヌワース Abū Nuwās: 既出。第 28 話注 4 を参照。

詠んで下さらんか?」。承知して私は彼のために詠じて聞かせた¹¹⁾;

私は決して嘆きはしまい 人住まぬキャンプ跡地などを¹²⁾

laa andubu d-dahra rab'an ghayra ma'nuusi

また憧れたりはしまい 白ラクダ達¹³⁾導くラクダ使い¹⁴⁾などに

wa-lastu ašbū ila l-ḥādīna bi-l-'ṭsi

まこと見捨てられるに最もふさわしき住居^{すまい}とは

aḥaqqu manzilatīn bi-l-hajri manzilatun

恋人との逢瀬が長続きはしない仮居^{かりい}のキャンプ地

wašlu l-ḥabībī 'alay-hā ghayru malbuusi

お過ぎ去りし夜よ あの夜こそ最も楽しき時なれや

yā laylatan ghabarat mā kāna atyaba-hā

酒杯傾けるはその場に集える 誇り高き我が兄弟^{はらから}達

wa-l-kuusu¹⁵⁾ ta'malu fī ikhwāni-na sh-shūsi

若きガゼル¹⁶⁾ その黒き瞳 魅惑もて語り掛ける

wa-shādinin naṭaqaṭ bi-s-saḥri muqlatu-hu

ズンナル腰帯巻き¹⁷⁾ 数珠¹⁸⁾を離さず 聖句唱えながら

muzannarin ḥilfī tasbīḥin wa-taqdīsī

お互いキスしてはキスされながら¹⁹⁾ 注がれる酒も極上^{きのもの}の純粹種

nāza'tu-hu r-rīqa wa-ṣ-ṣaḥbā'a sāfiyatan

11) この段のサジュウ文体は下線部二か所、順に: ṣibyānu / niswānu, akhbiyata / andiyata。

12) 詩のジャンルの中、カスィーダ(長詩)は古来かつて恋人と過ごしたキャンプ地を、同行の者と再び訪れて、嘆くプレリュードから始まることになっていた。この序の部分ナスィーブと言う。都市・王朝文化が華やかになってくると、このナスィーブを疎んじるようになる。その最初の詩人がこのアブー・ヌワースであり、この詩篇であった。

13) 白ラクダ達 'ṭs; 単数形は雄がアアヤス a'yās、雌がアイサーウ 'aysā。ラクダの体毛色分類では白→黒系統と、白→赤系統とがあり、このイースは後者に属し、白毛の少し赤みが入る、薄桃色のラクダの意味で、優秀で高貴な性格を持つとされる。

14) 導くラクダ使い ḥādīn; ラクダを群れで率いて行くキャラバンや移動の道行きで、それらのラクダを統率するのがハーディー ḥādī(複数は ḥādūn、その斜格が ḥādīn)であった。

15) kūsu; ka's(盃、酒杯)。この複数は ku'ūs である。ここでは律格(wazn)を合わせるため kūsu と takhfiḥ(軽便化)されている。

16) 若きガゼル shādin; ガゼルの成長段階別名称の一つで「一人立ちできる段階になった若きガゼル」。語根√sh/d/nは、「強く逞しくなる」の意味である。それまで母親に頼っていた子ガゼルが強く逞しくなって、もはや母親の世話を受けずに済む段階になった若きガゼル。ここでは「酌人」サーキー sāqī のことで、我が国の小姓制度の習慣と同じく、ハンサムで女性的な若者が務めた。次詩行でも分かる如く同性愛の対象でもあった。

17) ズンナル腰帯巻き muzannar; ズンナル腰帯 zunnār とは腰帯のことであるが、ムスリムの日常生活でも用いられていたが、(恐らく色を変えて)キリスト教徒、特に修道士が着ける特殊な帯をも指してもいた。イスラーム化の強制が厳しかった時期、ジンミー(dhimmī)税を払って公認されていた異教徒。キリスト教、ユダヤ教、ゾロアスター教などの一神教徒でなければならなかった)の印として強制的な着用が義務つけられる時期、地域も長いイスラーム史の中ではあった。

18) 数珠 tasbīḥ; 数珠はイスラーム世界にはインドから伝来し、あまねく行き渡った。常に手の中にあつて、暇さえあれば聖句を唱えて、その度に数珠玉を一つずつ動かしている。それ故、数珠を手を持って放さない者は「数珠との盟約者」との意味合いでヒルフ・タスビーフ ḥilf al-tasbīḥ と言われている。ここでもその用語が用いられている。なおズンナル腰帯でキリスト教徒、数珠でムスリム、聖句唱えることでユダヤ教徒を暗示させている、とよく説がある。最後者の「聖句唱えること」、即ちタクディース taqdīs とは、ユダヤ教徒の誦句で、「quddūs, quddūs(聖なるかな、聖なるかな!と唱えること)」の意味合いもあるからである。サーキー(酌人)は日常では、飲酒がハラーム(法度)では無いキリスト教徒やユダヤ教徒が相手であったから、また尋問逃れの意味合いもあって、このような説も成り立つわけである。

19) お互いキスしてはキスされながら nāza'tu-hu r-rīqa; 直義は「お互いに相手の唾を争(って吸り合)いながら」。ホモ的傾向はアラブ社会一般に見られたが、特にこの詩作者アブー・ヌワースのそれは有名であった。

我もまた法官の装い宜しく イブリース²⁰⁾の長老の敬虔さ真似る
 fī zayyi qādin wa-niski sh-shaykhi iblīsī
 我ら二人酔いが^さ回る頃すべての同席者すでに酩酊
 lammā thamīlnā wa-kullu n-nāsi qad thamīlū
 この我のみを酒杯もて攻め立てる彼を恐れたり
 wa-khifū shar‘ata-hu iyyā-ya bi-l-qūsi
 されば偽^{にせ}賢かきたり 眠りこけた振りして 彼眠らさんため
 ghaṭaṭtu mustan‘isan nawman li-un‘isa-hu
 彼両の眼が眠りの衣に包まれたり 我が懐^{ふところ}に安堵して
 fa-stash‘arat muqlatā-hu n-nawma min kīsi
 彼ソファーに寝そべりたり、その心地の 我にとり更に良し
 wa-mtadda fawqa sarīrin kāna arfaqa bī
 多少の乱れあれどビルキースの玉座²¹⁾に劣らぬほどぞ
 ‘alā tasha‘uthi-hi min ‘arshi bilqīsi
 未だ朝明けやらぬ頃見計りて彼の寝室訪れたり
 wa-zurtu maḍja‘a-hu qabla ṣ-ṣabāḥi wa-qad
 時既に教会の時鐘²²⁾は朝明けるを告げけれど
 dallat ‘ala ṣ-ṣubḥi aṣwātu n-nawāqīsi
 眠気^{まなこ}眼で彼誰^{すいか}何するに「何方^{どなた}で？」我応^い答えて「訪れしは修道士²³⁾！」
 fa-qāla man dhā fa-qultu l-qassu zāra wa-lā
 汝^なが庵^{いおり}疑いなく修道会の経営する所に非ざるや？」
 buddun li-dayri-ka min yashmīsi qissīsi
 彼呆れて言い放つに「我が命にかけて！汝^{なれ}は冗談が過ぎた人かな」
 fa-qāla bi’sa la-‘amrī anta min rajulin
 「さに非ず、悪い冗談とは当たらぬぞ」と我も混ぜ返す
 fa-qultu kallā fa-innī lastu bi-l-bīsi
 (バスイート basīt 調 sīniyya s 脚韻詩 -īsi)

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：この（詩の朗詠中）老人は喜んだり、涙を流したり、また賛嘆の声を上げたりしていた。私は（呆れて我慢ならず）声を掛けた。「ご老人、アッラーがあなたを醜くしますように！あなたのことが分かりかねます、ジャリールの詩を自作の物と言ったりして、気が触れたのですか？そうかと思うとアブー・ヌワースの詩に感動したりして、彼はふ

20) イブリース Iblīs: 悪魔、サタン Shayṭān と同義。別名「辛らつな者の父」Abū Murra のクンヤを持つ。「長老の敬虔さ」とは、アダム誕生以前は、天使たちの「長老」であり、「敬虔」であった。アダム誕生に対してその「長老」として異議を唱えた。そのため神の怒りを買ひ、以降人間を誘惑して悪逆・淫猥な邪道に導き、破滅させる悪魔・墮天使となる。悪いことと知りながら、それに負けて不法行為を続けることを「アブー・ムッラの思いのままになる」と言う。この後半詩行は戯譚表現。

21) ビルキースの玉座 ‘arshi Bilqīsi: ビルキース (Balqīs との読み方もあり) とは半ば伝説上のイエメンの古王朝サバアの国の「シバの女王」。その玉座は大きく、金銀その他の宝石類で製せられていたという。『クルアーン』27章23節参照。

22) 教会の時鐘 nawāqīs: 単数形はナークース nāqūs。元来は木板を垂らしてそれを打ち鳴らす「木鐸」のこと。それを打ち鳴らす木槌のことをラビール rabil と書いた。nāqūs とはシリア語 naqusha からの借用語。

23) 修道士 qassu: キリスト教修道士のこと。「修道師」は qass よりも quss の読まれ方が一般的。シリア語 qashā 「司祭」からの借用語。詩人が飲んだくれた所も形態は殆ど修道院 (dayr) と変わらなかった。本詩行「庵」と訳した原文は dayr である。この dayr もシリア語 dairā またはカルディア語 √d/y/r からの借用語。

しだらな男で、道楽人ですよ」。老人は(思慮足らずめと言わんばかりに)声を荒げた、「そんな言い方は止めてくれ!(もう良い)それでは(迷いラクダのことだが、こうしなさい)そなたの顔の方角に真っ直ぐ道を取りなされ。道の途上で、(そなたの迷いラクダのことを知っている)ある男に会うじゃろう、(訳者注:以下は共示・暗示の謎めいた句が続く)彼は小さな皮柄を携えて、家々の、鍋釜の、周りを歩き回っておる²⁴⁾。姿形の良いのを誇り、髭の立派なのを自慢する男じゃ²⁵⁾。その男にこう言いなされ、「私にその道を示してください、繋がれているフート(大魚)がどこぞの海の中にいるその場所へ²⁶⁾。そのフートは中程が縊れており、スズメバチのように刺し、光のターバンを巻いております²⁷⁾」と。(そなたにだけ判じ物として続けて言うておこう、さて)彼の父は石であり、彼の母は雄なのじゃ²⁸⁾。その頭は黄金であり、炎がその名前、そして身体に残りは尾となろう。衣類ででも覆られると、(飛んで入る)蛾よりも悪さを仕掛けることになる。家の中にあっては油喰らいであり、底無しの飲ん衛え、満足知らぬ大食漢、誰も止められぬ暴食家。上へ上へと昇って行き、寛大さの性格から資産減らすことも厭わない²⁹⁾。彼を喜ばせるものは逆にそなたを悲しませることになり、彼に不利となるものが逆にそなたに有利となろう³⁰⁾。

わしはこれまで自分の話はしないで、寛いでそなたと楽しい時間を過ごさせて貰った。あの(ジャリールの)詩にしてもそなたが拒んで(中断して)しまった。今は真剣に聞きなさい。詩人と称する誰一人として、我らの仲間からの助け手の無い者など居らんのだ。ジャリールのあの詩だとわし自ら伝授したものにすぎん。このわしこそは(そなたも耳にしたことがあろうが)誰あろう長老アブー・ムッラ³¹⁾なのじゃ³²⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは話を続けた:こう言い終えると老人は姿を消し、私には視認できなくなった。そこで(言われたように)前方に向けひたすら歩みを進めた。やがて一人の男に出会った、その手には蠅払い(midhabba)があった。(言われた通りであったので)内心に言い聞かせた、

24) この行から既に例えや暗喩入り乱れた謎かけは始まっている。「皮柄」niḥyの原義はjiqqと同義の「壺」のこと。実は注釈者M. 'Abduhによれば「蠅払い」midhabbaのことであり、従ってその「壺」とは、放射状に先端の垂れ下がった長い植物繊維や筋、細皮紐や羽や毛の根元を束ねた「取っ手」(miqbād)のことを言っており、便宜上「皮柄」と意識した。従ってこの行の解釈は「彼は小さな蠅払いを携えておる。その蠅払いは家々の、(蠅を追い払うために)鍋釜の周りを歩き回っておる」ということになる。

25) 上の注に従えば「姿形の良い」とは「取っ手の柄(miqbād)の細身のスマートさ」のことであり、立派な髭とは「束ねられた柄から先端に伸びる放射状の繊維筋・細皮(khūṣ)」とされている。英訳者のPrendergastには、元々注釈は少ないのであるが、何の言及もない。

26) どこぞの海ba'dī l-buḥūr; どこぞの海とは、石油を海に比しており、普通のランプ(sirāj, masraja)とか吊りランプ(qandīl)とかの油の収容器をさしている。「フート(大魚)」とはその海を唯一占拠している「燈心(dhubāla)」のこと。

27) 「中程が縊れており」(mukhtaṭī l-khuṣūr)とは燈心が長いので中程がオイルの中に折りたたまれている。「スズメバチのように刺し」(yaldaghu ka-z-zunbūri)とは灯火そのものは熱い。その上に手をかざそうものなら火傷して、大蜂に刺されたような痛みを伴う。「光のターバンを巻いて」(ya'tammu bi-n-nūri)とは灯火の形状、下部の燃え上がる中心を顔に見立て、炎の周囲をターバン('amāma)に見立てている。

28) 彼の父は石であり、彼の母は雄abū-hu ḥajarun, ummu-hu dhakarun; 油の元は「石油」であり、彼を産み育て見守るのはランプ、ここではカンディールqandīl、またはsirājが選ばれ、その性は<男性>だからである。同じランプの語でもmasrajaが選ばれるとその性は<女性>になってしまう。既に「ランプ」が例えられていることを述べてしまっているので、以下の記述は、類推が容易であろう。

29) 資産減らすyanqūṣu mālu-hu; 容器に貯めている油が資産。次の内容も火を灯し、油を消費することに対しての人とランプを相対化している。

30) この段落のサジュウは下線部の順に: shahaqa / za'aqa, 'ayyārūn / ṣaghīrūn, dūri / quḍūri, ḥilyati-hi / liḥiyati-hi, masrūrī / buḥūrī, khuṣūrī / zunbūrī / nūri, ḥajarun / dhakarun, dhahabun / lahabun / dhanabun, malbūsi / sūsi, bayti / zayti, yanqa'u / yashba'u / yamna'u, ṣu'ūdi / jūdi, yasurru-hu / yaḍurru-hu。

31) 長老アブー・ムッラ Abū Murra; 詩人に砂漠の中で靈感を与えと言われるジン。そのジンの中でも、頭領がイブリースであった。詩人の中には自分に憑りつくジンの固有名を知っている者すらいた。ジャリールに憑いていたのはイブリースと言うことになる、勿論ここまでの具体化は著者アル・ハマザーニーによるもので、世間に認められている訳ではない。注17を参照。

32) この段落でのサジュウへの配慮はない。

「この人がワッラーヒ（間違いなく）我がお目当てだ！」。そしてその人物に声を掛けて、(イブリースから) 耳にしたことを打ち明けた。すると彼は私にランプを手渡して、山中の暗い洞窟の方を指差して、「あなたの前方に洞窟がある。あなたは火をお持ちです」と言ってくれた³³⁾。

語り手はさらに続けた:そこで私はその洞窟に(登り、中に) 入って行った。するとどうだろう、そこには私の探していた迷いラクダ達 (ibil) がいるではないか! ラクダ達は反対側に向かおうとするところであった。そこで私はラクダ達の顔をこちら側に向けさせ、追い立てたのである。こうして先導しながら茂みの中に分け入ったのであるが、他人に気付かれぬようこっそりとラクダ群を進めた。進めている間に鉢合わせしたのは誰だろうアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師であったのだ。師の方からサラーム (挨拶) を送ってきた。私も (挨拶を返した後) 尋ねた、「ワイハ・ク (何としたこと) ! あなたがこんな場所に居られるなんてまた如何して?」。師が答えるには、「日々の変転が思わしくなくて、やることなすこと上手くゆかない、それに寛大さが今の人士の間には欠如している、こういう有り様でな」。(状況を察知した) 私は師に言葉を掛けた、「我がアブ・ル・ファトフ師よ、今は何をお望みか仰って下さい」。「カウード (qa'ūd 若ラクダ)³⁴⁾を一頭分けてくれまいか、それに枯れ木に水を少々振り撒いて (= 金欠の枯れた身に幾らかの資金の潤いが) 欲しいのじゃが」と願い出た。そこで私は「いいですとも、あの一頭をあなたの所有物としましょう」と答え (て幾らかの資金も与え) た。(受け取った) 師は謝辞を述べてから、次のように詠んだ³⁵⁾;

我が意^{のぞみ}向叶えた人物にわが身を捧げます

nafsī fidā'u muḥakkimin

随分の出費を強いられど彼^{ひろ}寛大く受け入れたり

kallaftu-hu shatātan fa-sjah

彼惜しみに^{むし}駆られ髭搔き^{むし}筆ることも

mā ḥakka liḥyata-hu wa-lā

鼻拭うことも、空咳^{からせき}することも無かりけり

masakha l-makhāṭa wa-lā tanahnah

(カーミル kāmīl 調 hā'iyya ḥ 脚韻詩)

(彼が詠じ終えた後) 私はあの長老イブリースの一件について師に打ち明けた。すると師は自分のターバンの方を指差しながら、こう言ったのである、「あれはここの善意の我が所産なのじゃよ」。魂^{たまげ}消した私は「何とアブ・ル・ファトフ殿、あなたはイブリースにまで成り済ましていたとは。騙りの騙り大騙りと言うことになるじゃありませんか!」³⁶⁾。

第 35 話 イブリース (悪魔) のマカーマ 完

第 35 話 訳者解説

砂漠のあなたの空遠く ジンの棲むと人の言う ああ我迷いラクダ求め行けば……。今回のテー

33) この段落のサジュウは最後の文章の下線部一対のみ; ghāra / nāra。

34) カウード qa'ūd; 若ラクダ。3歳以降、＜乗用＞ラクダに適するようになった若い雄のラクダ。雌はカルース qalūš という。『ラクダの文化誌』117～118頁参照。

35) この段落のサジュウは下線部の順に; salāmi / maqāmi / ayyāmi / aḥkāmi / kirāmi / anāmi, qa'ūdin / 'ūdin。

36) この最終段落にはサジュウへの配慮は見られない。

マは砂漠の彼方にある異郷観、あなたのジンの棲家らしきところ、詩人に乗り移り憑依するジン観、ジンの表現法（大分補足しているがカッコ無しで読んでほしい）と言うアラブの民間信仰を具現している興味深い作品に仕上げられている。迷いラクダを求めて砂漠深く行くと緑豊かな桃源郷が展開する。そこは精霊ジンの棲家であった。入り口にいた老人、これがイブリースであり、またそれに変身したアブ・ル・ファトフ師であった。この設定も人間の到達可能の場として無理がある。また見渡す限りのところで一瞬にして姿を隠すのもまた。

詩作に関する詩人とジンとの関係が全的に扱われ、興味深い内容となっている。さらにそれが主人公によって二重の意味を持たせることになる。詩人に砂漠の中で靈感を与えと言われるジン。ギリシャ神話のミューズ、アラブでは詩人に憑依するジンはライー *ra'ī* として知られる。（拙著『砂漠の文化』第5章2節「砂の精信仰」pp. 133-42を参照）。そうしたミューズであるライーの類のジンの中でも、頭領がイブリースであった。詩人の中には自分に憑りつくジンの固有名を知っている者すらいた。ジャリールに憑いていたのはイブリースと言うことになる、勿論ここまでの具体化は著者アル・ハマザーニーによるもので、世間に認められている訳ではない。「辛らつな者の父」Abū Murra のクンヤを持つイブリース *Iblīs*、彼とサタン *Shayṭān* とは同義とされている。そしてそのイブリースの言、「詩人と称する誰一人として、我らの仲間からの助け手の無い者など居らんのだよ。ジャリールのあの詩だとてわし自ら伝授したものなのじゃ」。詩人に憑依するライーが出現してしまう。こうなると既に世に出ている詩作品が創作なのか、盗作なのか、剽窃なのか、詩作に関しての様々な側面が浮かび上がってくる。

「あなたのことが分かりかねます、ジャリールの詩を自作の物と言ったりして、気が触れたのですか？ そうかと思うとアブー・ヌワースの詩に感動したりして、彼はふしだらな男で、道楽人ですよ。老人は（思慮足らずめと言わんばかりに）声を荒げた、「そんな言い方は止めてくれ！……」。確かに自作の詩が他人に詠じられたら、良い気持ちにもなろう。さらには：

「お互いキスしてはキスされながら 注がれる酒も極上の純粋種^{まのものの}

我もまた法官の装い宜しく イブリースの長老の敬虔さ真似る」

次に詠ぜられるアブー・ヌワースの詩の中では、注文通りイブリースそのものが叙されているのだから。

この詩の自作の物か否かは、後輩アル・ハリリーの『マカーマート』の第23話では、盗作、剽窃がテーマとなり親子で仕組まれた論争が展開される。アラブ詩でのインティハール (*intihāl*) 即ち盗作、剽窃の問題であるが、それには借用 (*iqtibās*) や、挿入 (*taḍmīn*) もその中に入る。。大きく3つに分けられる。①ある詩人の作品の意味、内容、発想を盗んだものは、皮はぎ (*salkh*) という用語で呼ばれる。皮をはいで、別のものを被せているが、意味内容は明らかな盗作と分かるものを言う。②次が変化物 (*maskh*) であり、別物が表面上は同一物に成り済ますマスフ (変化) の様に、主張や訴え、意味内容は異なっているのに、詩の形式・表現を他人の詩の作品の中から取り入れる技法を言う。③最後が複写 (*naskh*) といって、文字通りの「複」写することであり、内容も形式も全くの盗作を言う。（拙訳平凡社版第2巻23話を参照）

アブー・ヌワースの詩の内容は、酒を詠い、同性愛を楽しむ風である。場所は修道院の中か近くであり、相手のサーキー (酌人) もムスリムか何信者かはっきりさせず、ただハンサムな若者だということが分かる。アブー・ヌワースの詩作品の中には、酒ほが詩や同性愛を詠った詩品は多い。

本話の内容は迷いラクダを求めて行き、それをイブリースの助けで見つけ出し、戻してくることで全体はまとまりを見せている。また本舞台と裏舞台とも仕分けられ、そのどちらにも詩の挿入が

なされている。イブリースを主人公アブ・ル・ファトフ師とすることで、主役が明確になり、最後の稼ぎの場面もそれなりの成果と言えるだろう。稼ぎの相手は語り手一人だけではあったが。なお「迷いラクダを求めて」のテーマは、内容を全く別にして後輩アル・ハリリー『マカーマート』第27話に変奏せられている。そこでは砂漠中、迷いラクダを求める語り手、それを見つけて自分のものとする拾い主、助太刀に入る主人公のたった三人で舞台が切り回される。主人公は相変わらずで助太刀に入ったと見せかけて、迷いラクダを語り手に戻すが、乗っている馬の方は語り手をも騙らって、奪い取って行ってしまう巧妙な出来のマカーマである。

本話の文体サジュウについての配慮であるが、導入部にはその配慮が欠けており、注27で明らかになるように、ようやく終盤に来て気づいたように多くなる。マカーマの全体の文章への配慮が必要である。この関連でもあろうか、文章として解せない部分がある。初歩的文法の逸脱がある。後半部「山中の暗い洞窟の方を指差して」の原文は *awma'a ilā ghārin fi l-jabali muḏlimin* となっている。明らかに最後の *muḏlimin* (暗い) は、*ghārin* (洞窟) にかかる形容詞であるからその直後に、すなわち *ghārin muḏlimin fi l-jabali* とせねばならない。この文法から逸脱した語法は恐らくサジュウの意識があり、押韻語として、後置して、同韻語を作ろうとしてその過程で残されたままになったと解釈したい。この件に関しては、注釈者 M. 'Abduh も英訳者の Prendergast も何の言及も行っていない。

同じく文法的ミスをもう一つ上げておくと、「ランプ」についての謎かけの部分で、「彼の母は雄なのじゃ *ummu-hu dhakarun*」として、注28でも言及しているように彼を産み育て見守るのは母即ちランプとして、多くの同義語の中でここではカンディール *qandīl*、または *sirāj* が選ばれている想定に立っている。いずれもその性は＜男性＞だからである。しかし本話後半の、「すると彼は私にランプを手渡して」の部分、原文は *fa-nāwala-nī masrajatan* となっている。同じランプの語でも、このように *masraja* が選ばれるとその性は＜女性＞になってしまう。なぜ *qandīlan* と男性形のランプの語を選ばなかったのか。不注意である。

本マカーマの異同であるが、Fatih 版では第36話に、Sofya 版では第28話に収録されている。Paris 版では欠如する。